



# 災害の記憶・記録に関する調査報告

## — 災害ミュージアム研究塾 —

Survey Report about Records and Memories of Disaster  
— Disaster Museum Research Study Group —

---

## はじめに

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センターの使命は、「阪神・淡路大震災の経験を語り継ぎ、その教訓を活かすことを通じて、災害文化の形成、地域防災力の向上、防災政策の開発支援を図り、安全・安心な市民協働・減災社会の実現に貢献する」ことである。二度と再びあのような不幸な災害を起こしてはならない。しかしながら、相変わらず大災害は世界中で毎年のように発生しており、わが国においても、東日本大震災により約1万9千人の犠牲者をだした。被害軽減は容易ではないが、何とか被災者を少なくする努力が必要である。私たちは時間が経てば不幸な出来事を忘れてと言われるが、被災者の受けた心の深い傷は生きている間癒されない。このような不幸は何としても避けなければならない。このため、減災につながるあらゆる努力を行う覚悟で、当センターでは災害調査や実践的な防災研究を行っているところである。

「災害の記憶・記録の継承」に関する調査研究は、センターの使命でもある災害文化構築の基礎となるものである。阪神・淡路大震災からこの18年の間に私たちはどのような知見を培ってきたのか。そして、未来にどのような記憶を伝えなければならないのか。このような問題意識のもと、人と防災未来センターのこれまでの取り組みを伝えるとともに、国内で災害ミュージアムを通じた被災経験の語り継ぎに取り組んでいる人びとの話を聞き、語り継ぎのあり方を学び議論する場として「災害ミュージアム研究塾2012」を開催した。災害ミュージアム研究塾には、地域住民、ボランティア、学生、研究者、行政関係者など幅広いステークホルダーにご参加いただいた。議論を通し、災害文化とは、行政や研究者が創り出すものではなく、災害をとりまく多様な人びとの議論のうえで、時間をかけて醸成されるものであることを認識した。

この報告書は、災害の記憶・記録の調査研究活動、災害ミュージアム研究塾などを通して得られた暗黙知と形式知を、さまざまな人と共有し、防災・減災社会を拡大することを目指している。これにより、調査結果や研究成果が実際の減災対策に示唆を与え適用されることを期待するものである。この報告書が多くの人目に触れ、今後の防災・減災対策の推進と災害現象の理解の深化と防災文化の構築に資し、それを通じて、被災者を少なくすることにつながることに貢献できれば幸いである。

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター  
センター長 河田 恵昭

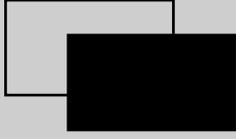
---



# 目次

|  |     |
|--|-----|
| 第1章 「災害の記憶・記録の保存と継承に関する研究」の概要  | 1   |
| 第2章 災害ミュージアム研究塾 2012 の報告   | 5   |
| 第1回 「阪神・淡路大震災 震災資料の17年」  | 7   |
| 第2回 「被災経験継承のために一複数の展示拠点とネットワークづくり」   | 17  |
| 第3回 「東日本大震災の文化財とレスキュー活動」   | 29  |
| 第4回 「地域を拠点とした被災経験の継承」  | 43  |
| 第5回 「長田区役所職員による阪神・淡路大震災の記憶継承の取り組み」   | 63  |
| 第6回 「災害記念館からジオミュージアムへ」   | 75  |
| 災害ミュージアム研究塾 2012 の参加者の動向と評価  | 89  |
| 第3章 災害の記憶・記録の保存と継承に関する論考   | 99  |
| 記憶のメディアとしての災害ミュージアム (阪本真由美)  | 101 |
| 地域における災害・防災情報拠点としての災害ミュージアム<br>(宇田川真之・阪本真由美・定池祐季)                              | 111 |
| Recent of Disaster Museums and Monuments in the United States (Elizabeth Maly) | 115 |
| 阪神・淡路大震災の経験を伝える語り部活動とコミュニティ (高野尚子)   | 119 |
| 地域に暮らす人々を主体とした「災害ミュージアム」のあり方 (高森順子)  | 125 |
| 記憶の継承に向けた災害遺構の保存と維持管理に関する研究 (石原凌河)   | 133 |
| 付録   | 141 |
| 災害ミュージアム研究塾 2012 前期シリーズフライヤー   | 143 |
| 災害ミュージアム研究塾 2012 後期シリーズフライヤー   | 145 |





# 第 1 章

「災害の記憶・記録の保存と継承に関する研究」の概要



## 1. 本研究の背景と目的

本研究は、災害を主題とした資料集・保存・展示・教育普及活動を行う災害ミュージアムを中心に、自然災害の記憶・記録の収集・保存・展示・意識啓発のあり方を検討するとともに、その研究成果を幅広く市民に発信することを目的としている。

人と防災未来センターは、1995年1月17日に起こった阪神・淡路大震災の経験を語り継ぎ、その教訓を未来に活かすことを通じて、災害文化の形成、地域防災力の向上、防災政策の開発支援を図り、安全・安心な市民協働・減災社会を実現することに貢献することをミッションとして2002年4月に開館した。展示は、人と防災未来センターの柱となる機能であり、約18万点にのぼる一次資料が収蔵されており、そのうちの約800点が常設展において展示されている。これらの展示を視察するために開館以来年間約50万人の人が人と防災未来センターを訪れている。

人と防災未来センターのような災害ミュージアムは、近年、大規模な災害を経験した被災地に多く開設されており、国内には40近くの災害ミュージアムがある。その一方で、展示を通して災害というできごとをどのように伝えるのがよいのか、災害に関する一次資料をどのように保存・収集すればよいのかという、展示・保存・収集活動に関する調査研究には、これまであまり目が向けられていなかった。

本研究を始めるにあたっての第一の問題意識としては、災害ミュージアムそのものが果たすべき機能である。その地域でおこった災害という出来事を伝えること、追悼すること、今後の防災・減災に資することなどが目的であるならば、歴史を主題とした博物館とは異なる災害ミュージアム特有の展示手法が求められる。災害ミュージアムが主題としているのは、災害という、つらい、ネガティブな記憶であり、しばしばその保存をめぐる記憶を忘れた人との葛藤がみられる。このような、ネガティブな記憶の収集・保存については、戦争や環境被害などの記憶の継承と類似した点があるだろう。つまり、災害ミュージアム特有の展示方法論、記憶の継承の仕方があるのではなかろうか。また、2011年3月11日の東日本大震災で大きな被害を受けた東北地方の太平洋沿岸地域では災害に関する資料の収集が少しずつ始められている。それらの地域に対して、われわれはどのような知見を共有できるのであろうか。

第二の問題意識としては、災害ミュージアムである人と防災未来センター内部の組織運営をめぐる課題である。展示は人と防災未来センターの柱となるべき機能である。展示施設の運営管理を行う部門はあるものの、要となる展示資料に関する調査研究、保存、展示、教育普及を行う部門が不在である。学芸員というポストそのものがなく、収蔵資料の調査管理を行う震災資料専門員は非常勤、防災の研究を行う研究員も任期付という勤務体制である。また、関係部局の連携も決して良くなく、これらの状況改善の一助となればと考えている。

以上の、問題意識に基づき、本研究では、災害ミュージアムを中心に、多様なメディアを通じた災害の記憶・記録の保存と継承について研究をすすめる。

## 2. 研究体制

- 研究参画者により共通の分析フレームワークを構築したうえで、それぞれの研究フィールドにて調査・分析を進める。
- 研究部と震災資料室が連携し、人と防災未来センターの展示のあり方についてともに研究することにより、人と防災未来センターの資料展示内容・方策の質を高める。
- 災害の記憶・資料収集について類似した取り組みを行っている関係機関と連携して研究会を開催する。
- 災害の記憶・記録継承に関する研究の成果とその実践を市民の人にわかりやすく伝えるとともに、市民との交流を通して、研究の見直しを図る。

## 3. 調査・分析手法

### (1) 災害ミュージアムに関する調査研究

研究員・震災資料専門員の専門的な視点より、災害のかたりつぎにつき分析・知見を深める。具体的には、災害ミュージアム・手記・語り部・アーカイブ・資料・記念碑・災害遺構などを通じた語り継ぎの特徴と、効果/課題を検討する。

### (2) 災害ミュージアム研究塾の開催

災害ミュージアムを通じた被災経験語り継ぎのための取り組みについて、地域住民、研究者、ボランティア、学生などに伝えるとともに、地域住民との議論を通しよりよい展示方法について検討する場として「災害ミュージアム研究塾」を開催する。

10月20日：第1回「阪神・淡路大震災と震災資料室の17年」

11月8日：第2回「被災経験継承のために—複数の展示拠点とネットワークづくり」

12月16日：第3回「東日本大震災の文化財レスキューと展示活動」

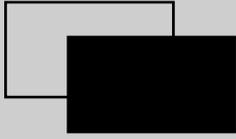
1月26日：第4回「地域を拠点とした被災経験の継承—阪神・淡路大震災と東日本大震災」

2月10日：第5回「長田区役所職員による阪神・淡路大震災の記憶継承の取り組み—人・街・ながた震災資料室の事例—」

3月9日：第6回「災害記念館からジオミュージアムへ」

### (3) 他の地域における災害ミュージアムの活動調査

他の地域における災害ミュージアムの活動調査、東日本大震災の被災地において記録の収集・展示などを始めている関係機関へのヒアリング調査などを行い、それを踏まえた資料展示のあり方を検討する。2012年度は、北海道南西沖地震の被災地である奥尻島、雲仙岳の噴火災害の被災地である島原、中越地震の被災地である長岡を中心とした地域における災害ミュージアムの活動状況を調査する。



## 第2章

災害ミュージアム研究塾 2012 の報告



## 第1回「阪神・淡路大震災 震災資料の17年」

日時：平成24年10月20日（土）

場所：人と防災未来センター西館1階ガイダンスルーム1

### 1. はじめに

○司会 本日はお忙しい中、災害ミュージアム研究塾2012にお越しいただきまことにありがとうございます。

それでは、第1回災害ミュージアム研究塾2012を始めさせていただきます。

本日の司会進行は震災資料専門員の石原凌河が務めさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。（拍手）

では、まず初めに本日のスケジュールについて簡単に御説明させていただきます。まず、初めに災害ミュージアム研究塾2012の趣旨説明を阪本真由美主任研究員から報告させていただきます。

続きまして、「阪神・淡路大震災震災資料の17年」ということで震災資料専門員の高野尚子から御報告させていただきます。その後、質疑応答が終わりましたら、5階の資料室を見学してもらいます。そして、お時間が許す方につきましては、7階の収蔵庫の見学をしてもらいます。さらに懇親会といたしまして、4時から向かいの建物1階の「新上海」で軽くこの場で質疑応答の続きですとか、震災資料の議論についてより深めていけたらと思っております。

では、災害ミュージアム研究塾2012の趣旨説明を阪本真由美主任研究員より説明させていただきます。

### 2. 災害ミュージアム研究塾2012趣旨説明

○阪本真由美（人と防災未来センター主任研究員） 皆さん、こんにちは。今日は非常にお天気の良いところ災害ミュージアム研究塾のほうへお越しいただきましてまことにありがとうございます。今やっているフェルメールの展示会の説明会ならもっと人が入るんじゃないかと思っていて、逆にこちらには人が来ないんじゃないかなって心配していたのですが大勢の人に集まっていたのでさすが神戸、ほんとにうれしく思っています。この人と防災未来センターですが2002年の4月に開館いたしました。ことしで設立から10周年を迎えております。で、この間500万人の人がセンターを訪れています。センターの核となっているのが阪神・淡路大震災を経験された市民の皆さんから提供していただきました資料約17万点です。資料の規模では世界最大のものとなっています。この資料の展示を通して、私たちは阪神・淡路大震災を伝える、そして防災を伝えるということに取り組んできました。私自身は防災の研究をしておりまして、災害について伝える最も有効な方法というの

は災害を忘れないことにあると思います。ただ、忘れないというのは実は非常に難しいことです。なぜなら災害の記憶というのは怖い記憶でもありつらい記憶でもあります。また、人間の記憶というのは時間の経過とともに次第に曖昧になっていってしまいます。そういう記憶をとどめてどのようにして伝えていくのかというのは、私どもを含めて多くの災害ミュージアム共通の悩みでもあります。で、今回の災害ミュージアム研究塾では、我々人と防災未来センターの資料収集、展示の取り組み、そして人と防災未来センターだけではなく中越地震ですとか、雲仙普賢岳の火山災害、ほかの地域で起こった災害の記憶を保存し、それを伝えようと取り組んでいる施設の方々をお招きして研究塾のほうを進めてまいりたいと思います。これから3月にかけて6回開講予定ですので、ぜひまたお時間がありましたらお越しください。

それでは、ただいまより本日の講義のほうを始めていただきたいと思います。

### 3. 報告

○高野尚子（人と防災未来センター震災資料専門員） では、ここからは私、震災資料専門員の高野が「阪神・淡路大震災震災資料の17年」と題しまして御報告させていただきます。よろしく願いいたします。（拍手）

私はもともと大学院時代に阪神・淡路大震災の語り部さんの研究をしておりました。その後、2006年からここ、人と防災未来センターの資料室で震災資料専門員として勤め、2008年まで勤め、一回やめて、また2010年度から勤めております。トータルでこの人と防災未来センターが開館している10年間の間で6年間震災資料に携わっておりまして、生き字引のような立場から震災資料の収集・保存活用について御報告させていただきます。

今日の話の流れですが、震災資料17年を語ろうと思うと何時間でも語るができると思うんですが、そうすると皆さんももう、お時間がなくなっちゃうと思いますので、できるだけポイントを絞ってセンター開設までの震災資料収集について、どのような資料が収集され、どのような目的で集められてきたのかという点についてまずお話をしまして、次にセンター開設後の活動についてということで、その集められた震災資料がどのように活用されてきたのかという点を御報告したいと思います。

最後に震災資料の活用に向けて現時点で課題となっていること、私が個人的に感じていることも含めまして最後に御報告したいと思っております。

今日、阪神・淡路大震災を経験されていない方っていうのはどれぐらいいらっしゃいますでしょうか。7人ぐらいおられますね。ちょっと阪神・淡路大震災の概要について簡単ではありますが、まとめておきたいと思います。ここに書かれてありますように阪神・淡路大震災は17年前1995年の1月17日の早朝5時46分に起こっています。震源は淡路島。この下にあります地図は兵庫県の南部を拡大したのですが、このぎざぎざの部分の部分が震源で、この紫の帯状の部分が震度7を記録した地域になっています。死者は6,434人、死因の8割が建物の倒壊による圧死や外傷、去年ありました東日本大震災の死因の9割は溺死と言われておりますので、こういった点でその大きな違いがあるんですが、17年前、都市直下型のこういう阪神・淡路大震災が起こりました。災害の記録である資料を保存しようという機運は阪神・淡路大震災の発生からさほど年月を経ることなく高まってきました。ボランティアや図書館関係者、資料保存団体、行政などによって資料保存の活動が進められていくことになります。そうした資料保存のさまざまな動き、さまざまな団体による活動があったわけですが、ここではこのセンターに所蔵されることになる行政主導で行われた震災資料の収集活動に焦点を当てて、その経緯を御説明していきたいと思えます。

被災地での資料保存の動きのうち、震災の起こった年1995年の10月に兵庫県の委託を受けた財団法人21世紀ひょうご創造協会によって資料収集保存事業が開始されました。この事業では、避難所やボランティアなどの名簿、メモやチラシ、手紙など、特に図書や刊行物になる前の素材を収集することに重点をおいておまして、神戸市・尼崎市・芦屋市・伊丹市などの避難所や仮設住宅、ボランティア団体に関する資料を収集しました。そして、3年後の1998年からは財団法人阪神・淡路大震災記念協会がこの収集保存事業を引き継ぎまして、それと同時に資料の調査収集を継続しながら資料の公開基準の検討を始めました。その後、2000年には緊急地域雇用特別交付金事業によってさらに大規模に資料収集調査を実施していきました。この事業では、半年間の任期の調査員がまちづくり協議会やNPO、ボランティア団体・復興公営住宅・事業所・個人宅などを訪問しまして資料の所在調査を行いました。調査員は30代から60代の男女でほとんどが資料調査の経験はなかったものの震災を体験した方々でした。延べ450人の調査員によって大規模に収集されていくことになります。ここで調査員という言葉が使われておりますのは、ただ資料を集めるというだけではなくて、被災地のどこに、どのような資料があるのかを把握するという震災資料の所在調査に主眼を置いているために調査員というふうはこの資料を集めている方々を呼んでいました。そうして収集された資料は2002年に人と防災未来センターが開館した際に、この人と防災未来センターの資料室に引き継がれました。

では、この震災資料収集事業の特徴を主に3つのポイントに

まとめて御説明していきたいと思えます。

まず1つ目ですが、一次資料の収集とありますが、メモやチラシ、手紙や会議資料などの図書や刊行物になる前の生の素材、つまり一次資料の収集に重点を置いて収集をしていきました。これらは震災後の日常生活の中で生まれ実際に使われていたものです。つまり個々の被害、復興状況がよくわかる資料なのですが、本のように公開を前提として1つにまとめられた資料というわけではないので、関連する一連の資料を資料群として収集する必要がありました。バラバラ、ポツポツと集めて後世に残しても利用価値が下がってしまいます。そういうわけで、1つの資料提供先から資料群として提供をしていただき目録を作成していきました。公開するためにまとめられたような本などの刊行物はエッセンスが凝縮されているんですが、一次資料には後世へ語り継がれていかないような、こぼれ落ちていってしまうようなさまざまな個人の生活が記されています。

また、2点目に移りますが、こういった一次資料は市民生活が生きていきとわかるものですが、そもそも残すことを前提につくられたものでないのが多いため、震災から復興に至るまでの間に散逸してしまったり、破棄されてしまう可能性がありました。資料を所蔵されている本人もそれが後世のための貴重な資料になるとは思っていない方が多かったです。そこで資料の散逸を防ぐために震災が起こってから9カ月後という早い時期から資料の収集を開始しました。資料の収集保存を優先したために提供者との公開に関する話し合いや取り決めが十分に行われず収集後に行われるということにもなりました。

3つ目ですが、この事業は資料収集活動とは呼ばず資料所在調査と呼んでいました。先ほどの経緯のところでも少しお話ししましたが、調査員は被災地のさまざまな団体や個人のお宅に赴いてどこにどのような震災資料があるのかということ把握し、被災者御自身の体験や資料にまつわるエピソードを丁寧に聞き取っていきました。そういったエピソードをお聞きすることで、その資料がもともとどのような方々のもとにあってどのようにして生まれたのかということがわかりますし、さらに、その集めた震災資料を生かすやすくなります。こうして集められた震災資料ですが、大きく一次資料と二次資料に分かれています。一次資料とは、被災者の日記や仮設住宅でのボランティア活動の記録、被災者の手記や手紙などや、ゆがんだ側溝のふたや、地震が起こった5時46分ととまったままの時計ですとか、被災地の記録写真など、震災や復興の過程で生まれ、実際に使用されていた原資料です。二次資料は、震災や防災に関する図書や雑誌などの刊行物です。二次資料のほうは図書館なんかにある資料というふうイメージしていただければわかりやすいかなと思います。一次資料についてはよく生の資料とも言われるんですが、具体的に写真やこういった実物を交えて幾つかの紹介をしていきたいと思えます。

こちらのスライドにありますのは、紙資料の一例です。これは大阪府八尾市に設置された仮設住宅におけるボランティアの訪問活動日誌です。ちょっと明るくて見えにくいかもしれませんが、この紙資料はこの1枚ですが阪神大震災当時の日誌、資料には手書きの部分も多くあります。こちらは実際の資料を

拡大したもので、1人の被災者と訪問ボランティアの関係の変化が読み取れる部分に私が赤線を引いたものになっています。例えばちょっと赤線のところを読んでみますと、9月24日の火曜日ですが、「Tさん、おられるようだが出て来てくださらない。ほとんど話されることもなくなかなか難しい。」と書かれています。10月8日の火曜日になると「Tさん、20日に引越される。きょう丁寧に挨拶とお礼を述べられる。週1回訪問するだけでまた御高齢の方の気持ちをわかって話していないのではと不安に思っていたので本当にうれしかった。」さらに1週間後の10月15日になりますと、「Tさん来週引越されるので挨拶少し話す。震災に遭われてから今回で4回も転々と引越しをされるとのこと。Tさんとはいろいろお話しし、私の勉強になることが多かった。」というふうに書かれてあります。この記録を見ていると仮設住宅の住民の方の、生活の孤独感ですとか、精神的・肉体的な疲労が見えるんですが、ボランティアの方が通い続けるうちに会話が生まれるようになったという様子も見てとれます。これは記録の中のごく一部分を取り上げたわけですが、一連の資料を読み通す中で仮設住宅居住者の精神状況やボランティア活動の課題などが浮かび上がってきます。こういった記録資料以外には、地震の被害や破壊力を伝えるものの資料も多くあります。この前のスライドにあるこの2枚の写真は、机の前に置いている資料と同じものです。こちらは、火災被害で溶けた硬貨とガラス食器の塊になっています。寄贈者の御家族の方が神戸市長田区の菅原市場で中華料理店を営まれていたそうで、その料理店の床下収納庫に入られていたガラス食器12枚が火災の力で溶けて一つのガラスの塊になっています。横にありますこのコインも同じ場所に置いてあったものです。これを見ると火災の勢いですとか熱の強さっていうものがよくわかると思います。寄贈者の方のお話によると、火災発生後48時間後に鎮火したそうなんですが、その沈下した後そのまま固まりとなって割れずに残っているということです。ほかにも地震の力で変形した鉄製の側溝のふたですとか救援物資で届けられたマスクや下着なんかも震災資料としてありまして、それらのものはこの3階の常設展示で見えています。

また、一次資料にはこのような写真資料も多くあります。写真資料にはこの地震で倒壊した家屋や、地震後の火災で焼けてしまった町の様子のような被害写真もありますし、避難所や仮設住宅の写真、ボランティアや救援活動などのさまざまな活動記録写真もあります。また、復興後の町の様子を写した写真もあります。そして音声テープやVHSテープのような映像資料も収集しました。被災された方が家庭用のビデオカメラで撮影された御近所の様子もありますし、地元のコミュニティーFMが実際に放送していた番組や、番組が入った放送テープやボランティア活動の記録映像などもあります。このような震災資料ですが、センター開設までに収集された震災資料の点数は、一次資料で映像・音声資料が845点、紙資料は15万点以上です。モノ資料が844点、写真が4,788点となっています。これは、一つのアルバムを1点と数えた場合です。その他を合わせて総数で15万9,922点およそ約、およそ16万

点の一次資料が収集されました。

また、二次資料図書や雑誌などの刊行物も図書7,674点、雑誌1万2,487点など合わせまして2万3,084点の二次資料が収集されました。それらの震災資料を引き継いで2002年4月にオープンしたのが今、皆さんに来ていただいています人と防災未来センターです。今後の災害対策に生かすために都市直下型地震である阪神淡路大震災の経験を後世に残す展示施設をつくらうということを目指した阪神淡路大震災メモリアルセンター構想が形となってできたのが、この人と防災未来センターです。震災から4年後の1999年2月に震災資料収集事業と並行しながらメモリアルセンター基本構想検討委員会が立ち上がりました。この委員会は有識者や民間団体、行政などで構成されていて具体的な展示内容や調査研究活動、人材育成のあり方などについては、さらにそれぞれの検討委員会を立ち上げて具体的に検討を重ねてまいりました。2002年1月にはメモリアルセンターの正式名称が阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターに決定しまして、その同じ年の4月に開館することになりました。その後、館内は展示リニューアルを2回経まして現在に至っています。

検討委員会の議論をもとに人と防災未来センターは6つの機能を目指す施設となりました。ここに図がありますが、ちょっと簡単にポイントを御説明していきますと、まず1つ目は展示。阪神・淡路大震災に関する資料を通じて震災の経験を伝える展示部門です。2つ目は、震災資料の収集保存と公開を進める資料収集保存部門。3つ目が阪神・淡路大震災の経験を踏まえ、自治体の防災担当職員などに防災に関する実践的な知識を伝える災害対策研修部門。4つ目が阪神・淡路以降、積み上げられてきた防災研究に基づき、自治体や企業や地域の防災対策に役立つような実践的な研究を進めていく、実践的な防災研究と若手防災研究者の育成という部門。5つ目に大規模災害などの際に現地に向かい、災害対応に必要な知識や情報を伝える災害者の現地支援。最後の6つ目に、阪神・淡路大震災にかかわる市民・企業・研究者などとのネットワークを形成したり、このセンター自体がネットワークをつなぐ場として機能するということを目指した交流ネットワークという役割です。そして私たち震災資料専門員が主に担っているセクションというのが、この資料収集・保存という部門になってます。ただ、資料には収集して保存して展示などに活用するところまでがひとまとまりだと思んですが、この絵を見ていただくとおわかりのように資料収集・保存と資料の活用の一つの形である展示部門が事実上別のセクションになっています。ここが分断されてしまって資料収集や保存部門の知識が展示に生かされないのではないかとというのが懸念材料だったんですが、ここ数年で資料収集・保存部門の私たちと展示部門の職員や展示に携わる業者とで展示資料に関する問題を共有するような場を持つこともできるようになってきました。よりよい方法で資料を活用していくために、展示されている資料の状態や展示方法について、こちらから意見をお伝えしたり展示部門のほうからふだんお客様からお聞きした意見をこちらに伝えていただいたりという連携がとれるようになってきています。当たり前のことかと思われるかと思う

んですが、ふだん仕事をしていますとどうしても自分の課で完結してしまいがちになっていたんですが、こういう連携がとれるようになってさらに震災資料の活用が進む第一歩となってきました。

では、震災資料専門員が携わっている収集保存・活用に関して、実際の活動をお話ししていきたいと思えます。現在、震災資料専門員4名と資料整理推進員3名という非常勤の嘱託職員7名で一次資料と二次資料の整理公開に関する業務を進めております。収集した一次資料は、ふだんはセンターの収蔵庫に保存されています。収蔵資料は館内の検索用パソコンやインターネット検索で目録や画像を見てどのような資料があるかを調べることができますし、また公開可能な資料に関しては閲覧申請をしていただくと私たちが収蔵庫から資料を取り出してきて実際にごらんいただくということができます。収蔵庫では集めた資料が傷まないように資料保管環境を保つ取り組みをしています。例えば、温湿度管理を行い湿度が高い季節には資料にカビが生えたりしないように除湿器を導入しておりますし、また資料保管環境調査を年1回行いまして害虫やカビの胞子がふえていないかということを確認してそういう対策も図っております。

また、資料の劣化をおくらせる処置も進めています。このスライドの右の写真ですが、こちらは1995年当時の新聞資料ですが、当時の新聞紙は酸性紙でできているために幾ら湿度を管理してよい環境に保存していてもだんだんと紙が黄ばんでぱりぱりになって読めなくなってしまうという問題があります。そこで、紙の中に発生した酸を中和して長期間アルカリ性に維持する脱酸処理を計画的に進めています。酸化マグネシウムの液剤に浸すとその粉末が紙の内部に浸透してアルカリ性を維持するという仕組みですが、この実際に処置したものがこちらで、もちろんちょっとこのセンターでそういう処置はできないので専門の業者に出して処置をしてもらっています。表面がちょっとざらざら、その粉がついているのでざらざらしているんですが、これがだんだんと日がたつにつれて紙の内部に浸透して手ざわりもちょっとしっとりしてくる、別に触っても毒とかはないので、ちょっと見ていただければと思います。

センター開館後の、一次資料の所蔵資料点数の推移をこのグラフにあらわしています。開館前に集められた一次資料の点数は約16万点と先ほどお話ししましたが、その後も震災資料専門員による資料所在調査や資料寄贈者からのお申し出などによって一次資料は収集されておりまして、この開館からの10年間で1万8,000点以上もの一次資料がふえております。ここ最近で言いますとボランティア団体などからボランティア活動の記録や復興まちづくり関連の資料をたくさん御寄贈いただきました。また、今日も来ていただいているのですが被災マンションの住民の方々からマンション再建までの一連の記録を御寄贈いただきました。こういった資料は長い復興過程で被災住民や被災地でどのような問題が挙がってきたかということを知る手がかりになりますし、今後災害が起きたときに実際に起こり得る問題として防災対策に役立てていただくことができます。また、個人の方では最近では写真資料を御寄贈くださる方も比較的多いです。被害直後の写真と、それと同じ場所で撮った最近

の写真と一緒に寄贈してくださるといった方や、当時被災地の写真を撮ったものの余り思い出したくなくってしばらくしまったままになっていたのだけど、改めて整理してやっぱり後世のために伝えていきたい、寄贈したいというふうに言って持って来てくださる方もいらっしゃいます。資料収集には早い時期にできるだけ網羅的に収集する方法も必要ですが、時がたつたからこそ寄贈したいという気持ちになって持って来られる方もおられますので、資料収集は息の長い活動と捉えて取り組んでおります。

また、図書や雑誌などの刊行物である二次資料は、基本的にここの5階の資料室で開架しています。阪神・淡路大震災や防災に関する図書や雑誌・ビデオやDVDなどが開架されていて資料室内で自由に閲覧をしていただけます。

一般の公共図書館と大きく違いますのは資料の分類基準です。日本の公共図書館は日本十進分類法という基準で本を分類しているところがほとんどだと思うのですが、ここの資料室に置いてあります二次資料は一般の図書館と違って災害や震災に関するものばかりですので、独自の分類基準で整理し開架しております。大きく分けると、行政・総合・自然科学・社会科学・市民生活という5分類を基本として、さらにそれを細分化して整理しています。

二次資料もセンター開館後にさらに増えています。これら二次資料では開館前は約2万3,000点だったものが、この10年間で1万3,000点以上増えております。収集している資料は主に阪神・淡路大震災に関する記述があるものや阪神・淡路の教訓を取り上げたDVDなどですが、その後の最新の防災対策に関する資料や他の災害に関する資料も一部収集しております。特に東日本大震災後は、東日本の復興に向けて阪神・淡路の経験や復旧過程で浮かび上がった問題などについて改めて書かれた刊行物が多く出ておりますので、そういった資料も順次収集しているところです。また、東日本の震災直後はさまざまな週刊誌類で、さまざまな角度から刻一刻と変化する被災地の状況が伝えられていましたが、週刊誌類というのは後から入手しようと思っても在庫切れになったりして入手できなくなることがありますので、後に被災地の図書館さんに寄贈することも見据えた上で発生から3カ月間の週刊誌類を収集しました。

ここまで震災資料の収集・保存の状況についてお話ししてきましたが、次にその集めた震災資料の効果や活用について、センター開館後に取り組まれてきたことをお話ししたいと思います。こちらも10年間なのでちょっとポイントを絞って震災資料の公開基準の策定について、写真・ビデオ・DVDなどの震災資料の活用について、そして震災資料を用いた企画展の開催についてポイントを絞って順番にお話ししていきたいと思えます。

まずは、震災資料の公開基準の検討についてです。一番最初の、震災資料収集の経緯のところで少しお話をしましたが、センター開館前の1998年から震災資料を収集しながら資料の収集整理の公開基準について3年間検討してきました、そのときに基準を定めましたが、センターが開館して資料を一般展示するに当たってはその基準では不十分なものがありました。そ

ここで、公開がまだ保留となっていた震災資料の公開をさらに進めていくために、2004年の3月に研究者の方や新聞記者の方、法律家の方にも御協力いただいて、震災資料の公開等に関する検討委員会を設置しました。このスライドにあります、左の写真がその時の様子です。これだけまとまった数の災害資料、しかも原資料を公開する施設というのは、他にあまり例がありませんので、研究会で議論を重ねた結果、この資料を今後の災害に役立てていくためには、原則的に公開していくという方針を確認しました。とはいえ、ここで扱っている震災資料は同時代の資料であるため、資料の中に出てくる人物のプライバシー権や肖像権にも配慮していかなくてはなりません。そこで、館内での公開とインターネットでの公開についてそれぞれ基準を設け、「公開可」、プライバシーに関する情報のみ伏せる「条件つき公開可」などの基準を定めました。また、資料収集事業で集め、後に公開については別途協議するという条件になっていった資料820件については、2005年度から協議を開始していきまして、まずは小中学校のような教育機関と話し合いを持ち、公開について許可を得られたものは公開していき、条件がある資料については提供者の条件に基づいて公開させていただくことができました。現在では、未協議の資料が270件となっています。

資料の公開が進むとともに、活用も進んでいきました。特に写真資料は貸出を当センターに一任していただいているものを中心に館外への貸出を行っています。写真資料は全てスキャンして電子データになっていますので、写真を貸し出す際はデータを貸し出す形になっています。主に行政や出版社・マスコミなどの方から震災直後の様子を写した写真を貸してもらえませんかといった相談がよくあります。この写真はその一例で、行政の広報誌の自主防災特集に当センター所蔵の写真が掲載された様子です。去年の東日本大震災の後には、特に阪神・淡路ではどのような状況だったかとか、復旧復興過程はどのような様子だったのかわかる写真資料を提供してほしいということで申請が相次ぎました。また、東北の被災地にボランティアに行かれるという若い男性が「復興後の神戸の写真を東北の方にお見せして、あちらの方に希望を持っていただきたいのです。」とおっしゃって写真資料を借りていかれたということもありました。それ以外には、学校の卒業論文やレポートなどの研究目的ですとか、卒業制作に使用するなどの目的でも写真の貸出を行っています。

また、二次資料のビデオやDVDなどの映像の貸出も進めてきました。この3つのグラフは昨年度のビデオ・DVDの貸出し地域、貸出先、ここ7年間のビデオ・DVDの貸出し件数、本数の推移となっています。映像の貸出先は、地域別で見るとやはり近畿地方が多いのですが、将来的に大きな地震が予想されている東海地方の貸出希望が毎年多く、よく貸し出されています。貸出先は小中学校などの教育機関が一番多くて、修学旅行でこちらに震災学習に来られる前の事前学習で使用される学校が多いようです。他には、地域の自主防災会や自治会などの団体が防災学習をする際に活用していただいたり、企業内部の防災研修などでも活用していただいています。貸出件

数・本数とも毎年ちょっとずつ増えているのですが、特に2009年度は震災15年を迎える年度でしたので、例年よりも行政関係や地域の団体からの貸出希望が増えましたため、件数・本数が他の年よりも多くなっています。

常設展示の資料以外に収蔵庫に保存している、モノ資料や紙資料を見ていただくために企画展を企画してきました。ほぼ毎年、震災資料専門員がテーマを決めて、震災資料を選び展示を行っています。この左の写真ですが、こちらは震災や震災からの復興に対する思いを表現した作品というものをテーマに展示した、2004年度の企画展です。油絵など表現方法がさまざまな7点の作品をこのガラスの向こう側ですね。そのものを売ってらっしゃるあたりですね、あのあたりに展示し、これから常設展をごらんになる方などの待ち合いの時間に見ただくようにしていました。右側のこの写真2枚ですが、こちらは2006年度の企画展の様子です。震災後の町並みがどのように移り変わってきたかというのを知っていただくために同じ地点で撮影した写真を並べています。こちらと同じ場所、1階のフロアに展示していました。この企画展を開催した2006年当時では、阪神・淡路の被災地は町並みがきれいになっていくところがほとんどだったのですが、この写真を展示することでそれまで乗り越えて来た道のりに思いをはせていただければということで企画しました。

あと2つ、最近の企画展を御紹介しておきたいと思います。左側2枚の写真は戦後神戸の歩みと阪神・淡路大震災というテーマで企画した2010年度の企画展です。センターの常設展では、阪神・淡路大震災が起こってからのこと、つまり95年の1月17日以降のことを展示しているのですが、この2010年度の企画展では阪神・淡路地域の地域性や文化的な背景を押さえ、これまで築かれてきた歴史の中で起こった阪神・淡路大震災という視点で展示を行いました。2011年度の企画展のほうは、震災ではなく水害に焦点を当てた企画展だったのですが、こちらも2010年度と同じ問題意識のもと、阪神間の都市の発展の歴史と水害の被害の関係を振り返るという企画でした。こちらは県内の水害資料所蔵機関にも御協力いただきまして、阪神大水害についての当時の手記ですとか、文学に描かれた水害の様子などを紹介し、今後の水害への備えについても考えていただけるような企画にしてみました。そして、今年度の企画ですが今年度は12月からの開催予定で現在準備中です。写真集「3.11記憶の記録、市民が撮った3.11大震災記憶の記録」を出版したNPO法人20世紀アーカイブ仙台さんに御協力いただきまして、東北の市民が撮影した被災地の写真と、神戸から支援に行った方が撮影した写真と、神戸から支援に行かれた方々の思いというものを一緒に展示する予定になっています。

ここまで震災資料の収集・保存と活用についてお話ししてきましたが、さらに資料を活用してどういうふうな情報発信をしてきたかということに最後、ちょっと触れておきたいと思います。こちらポイントを絞って震災や防災に関する相談業務について、震災資料を活用したワークシート・資料室ニュースの作成について、二次資料の防災ゲームを活用したイベント、そ

して外部機関との連携についてもお話ししたいと思います。

まず情報発信の1つ目として、来館や電話での震災や防災に関する相談について御紹介したいと思います。資料室では、阪神・淡路大震災に関する質問や、今後起こり得る東南海・南海地震に関する質問、活断層に関する質問など震災や防災に関する質問や相談を受け付けております。こちらに書かれているものは、昨年度2011年度の主な相談内容トップ3です。相談内容で最も多いのは被害状況、復興状況と言ったような阪神・淡路大震災関連の質問です。中でも昨年度は、東日本大震災と比べて阪神・淡路はどうだったのかという視点での質問がやはりほとんどでした。特に阪神・淡路大震災時の復旧や復興に関する行政対応ですとか、当時の様子を知ることで東北の復旧や復興に役立てたいという行政や団体さんが電話や実際に来館されて御質問をしていられました。2番目に多いのが防災教育や防災訓練などの防災関連全般となっています。こちら東日本の震災後に会社の防災対策を見直したいということで資料を探しておられる方など東日本後に改めて防災意識が高まったことによる相談がふえました。3番目には、台風や阪神・淡路以外の地震など、その他災害に関する質問です。特に津波のメカニズムや過去の津波災害の被害状況や、今後予想される津波災害に関する質問が増えております。やはり御自身が住んでいる地域は過去に何メートルの津波が来たのかですとか、御自身がお住まいの地域の津波ハザードマップを見たい、そういった御相談がありました。こういった御相談には、収集しています二次資料の中から参考資料を御紹介するなどして情報発信をしております。

また、防災学習に役立ててもらうために震災資料を活用した防災学習ワークシートを私たちが作成し配布もしています。現在のところ地震に関する基本的知識について学べるシート、避難所での生活について学べるシート、津波に関する知識について学べるシートとトルコ地震に関するシートの4種類を配布しています。現在は、気象災害に関する新しいシートを考案しております、日常生活でも身近な気象災害から身を守るための知識をわかりやすく学べるように制作中です。ワークシートは、こちらのセンターで配布しているほかにもホームページからもダウンロードできるようになっておりますので、よろしければ一度ごらんいただければと思います。

また、資料室ニュースを年3回作成し地域の図書館や行政やマスコミなどにも送付しております。今日、皆様にもお配りしているのですが、昨年度発行された資料室ニュースと今年度1回分の資料室ニュースをお渡ししておりますので、よろしければご覧ください。こちらの資料室ニュースでは、震災資料や寄贈者の思いを紹介したり、センターに関する広報や震災に関する特集記事などを掲載しています。これまでに48号発行済みで、他の号はホームページでもごらんいただけますので、よろしければ一度ごらんください。

震災資料をワークシートや資料室ニュースで活用する以外に、実際に自分たちで二次資料を使用しながら参加者の皆様に防災を学んでいただくようなイベントも開催してきました。この下の1枚の写真が、夏休みに当センターで開かれた「夏休み防災未

来学校2007」の1イベントの様子です。こちらで所蔵しています、ナマズの学校やレッツ防災すごろく、みすがカルタという二次資料の防災ゲームの開発者に来ていただきまして一緒にゲームをしていただいた後に防災ゲームづくりの課題などについてお話を伺うセッションも持つことができました。この時は、親子連れの参加の方が多く来てくださりまして、全部で53名の方が参加して下さって防災ゲームを体験していただきました。

また上の写真2枚については、こちらは今年の防災未来学校の様子です。新しく収集した防災ゲームをこのように展示するとともに震災資料専門員が現在開発中の防災ゲームを、参加者の皆さんで体験していただきました。

では、情報発信に関連して、最後に外部機関との連携事業についても少しお話しておきたいと思います。震災資料の活用をさらに進めていくためには、ほかの震災資料の保存期間や専門家にも御協力いただいて取り組みを進めています。例えば、震災15年に当たる2009年度には神戸大学附属図書館と合同で震災資料展示を行いました。また関連企画として、講演会も開催しました。そして同じ年には、NHK神戸放送局・神戸新聞社・兵庫県・兵庫県立美術館との共催で「震災の絵展」を開催しました。また、展示会の共催以外にも専門家や他の機関の方々と一緒に震災資料の保存や活用をテーマに研究する会に参加し意見交換も行っています。研究会の中では震災資料専門員も、このセンター所蔵の震災資料の保存や活用について、現在課題となっていることを発表して参加者の方々から御意見をいただいたりして情報交換をしています。このような会で得た情報や知恵をさらに震災資料の活用に生かしております。

そして外部との連携のもう一つの例ですが、他機関との震災資料横断検索システムを構築しています。2009年1月16日から神戸大学附属図書館震災文庫が所蔵する資料と、センターが所蔵する二次資料を一括して検索することができる「横断検索システム」を開始しています。今日は震災文庫さんにも来ていただいています。震災文庫でいつもいろいろと検索システムの構築などには尽力していただいているのですが、こちらのセンターの資料も一緒に見ていただけるようになってきました。このシステムによって調べたいキーワードを入力すると、どちらの施設に該当する資料があるのかがわかるようになってきました。そして、今年の3月には兵庫県立図書館の震災関連資料も一緒に横断検索できるようになりました。現在3つの機関の震災資料をインターネットで一度に検索していただくことができます。ただ、こちらのセンターの一次資料については、データベースの項目や登録方法に違いがありまして、現段階では検索対象にはなっていません。今後どのような形で一次資料の情報を横断検索に反映していくかというのが課題になっています。

最後に、より今後の防災や災害対応に生かすために震災資料をどのように活用していくべきか、また今後どのような活動をしていくべきかということ、私なりに考えていることを報告してお話を終わりたいと思います。

まず1つ目の別途協議資料の公開についてですが、別途協議資料は当初800件余りありましたが、センター開館後に協議

を進めて270件までになっております。ですが、未協議の提供者というのは避難所や復興公営住宅などに住んでおられた方や引っ越しをされて現在連絡がとれなくなってしまった方など協議が難航する方が残っております。この270件分の資料の目録というものは公開しているのですが、実際に中身を閲覧したいという方がおられても寄贈者に連絡がとれなければ現段階では私たちの判断では公開できないということになっています。でも、寄贈された方も活用を望んで寄贈された方が多いはずですので、連絡がつかない方には広報か何らかの方法で呼びかける、あるいは専門家にも御協力いただいて検討委員会を立ち上げてこれらの資料の扱いについて議論するなど、これらの資料が死蔵にならないように方策を考えていくことが課題となっています。

次に、既に公開を一任されている資料については、資料室ニュースやその他広報紙での所蔵資料紹介を継続してさらに行っていく必要があります。一次資料は17万点以上もありまして、全てを見ていただくということは実際には難しいことですが、企画展を続けてふだん眠っている資料をお見せするというのも必要ですし、展示以外にも発行物などの媒体で少しずつでも資料とその寄贈者の思いを伝え続けるという姿勢が必要だと感じています。寄贈者の数だけ防災・被災体験にまつわるエピソードがありますので、資料を通じてそういった経験や後世の防災や減災につながるメッセージを発信し続けたいと思っています。そして、資料を紹介する役割だけにとどまらず、震災や防災について学びたい方のために、私たちみずから震災資料を活用して成果物を生み出していくことも必要だと感じています。

こちらは、昨年度の震災資料専門員が企画して発行しました、震災資料を活用してまとめた資料集です。住まいにかかわる問題についてという切り口でまとめています。特に紙資料については体系的に読み込まないと活用しづらいという面がありますので、震災資料専門員が率先して成果別をまとめるなどして活用を進めていければと考えています。

3番目ですが、他の震災資料収集機関とのさらなる連携が模索できたらとも考えています。阪神・淡路の被災地域には、ここ以外にも震災資料を収集している図書館や民間の資料保存団体があり活動を続けているのですが、それぞれの団体の個性を生かしつつ、ともに伝えていくという姿勢も大事だと考えています。現在でも年に1回、他の機関と一緒に研究会と開いてそれぞれの課題や取り組みなどを報告するという情報交換を行っているのですが、研究会等で、関係者内部で連携するという以外にも一般向けにもそれぞれの所蔵資料を持ち寄って巡回展をするなどの活動がもっとできたらなあと思っています。震災15年のときみたいに大きいものを1回というのではなくて小さな会でもいいので継続的にできるような関係を構築できたらよいと感じています。既に震災から17年たっていますので、震災後にこの地域に移り住んで来た方もふえていますし、小中学生は既に震災後に生まれた世代で実際に震災のことをここでどのような被害があつてどのように乗り越えてきたのか、そこからどのような知恵が生まれたのか、ということを知らない人も多くなっていますので、地域の機関で協力して地域で震災を伝

えていく、生活の中に防災を根づかせていくという取り組みをすべきではないかと感じています。

4つ目、最後ですが、他の被災地との連携です。阪神・淡路以降、国内でも大きな災害が幾つも起こり、来月の災害ミュージアム研究塾に来てくださる「長岡震災アーカイブセンターきおくみらい」のように、災害を伝える展示施設が他でもできています。また東北の被災地からも、これから震災資料の収集を考えているということで、こちらのセンターに視察に来てくださる専門家の方々もおられます。阪神・淡路は都市型の災害で、中越は中山間地域の災害という地域性の違いがあったり、震災が起こってからたっている年月の違いなんかもありますが、それぞれがどのように震災を伝えていこうとしているのかという取り組みや課題を知って防災文化を構築し、継承していくために協力していくこともこれから大事になってくるのではないかと感じています。

ちょっと声がかれてしまって済みませんでした。御清聴ありがとうございました。（拍手）

#### 4. 質疑応答

○司会 はい、ありがとうございます。では、ここで質疑応答に入らせていただきます。何か今の発表のほうで御質問などございませんでしょうか。もしありましたら挙手の方をお願いいたします。

○山名氏（京都大学） 山名と申します。貴重な情報をどうもありがとうございました。私は教育学が専門で、特にミュージアム・エデュケーションに興味があるのですけれども、戦争のミュージアムと比較したときに、これはちょっと資料というより展示のほうにかかわると思うんですけれども、1つだけ追悼にかかわるような展示や空間というか防災のミュージアムにはどちらかと言うと少ないような気がするのですが、それに関して何かお考えのことがありましたら伺いたいと思います。

○高野 ありがとうございます。おっしゃるように、このセンターを建てる時、メモリアルセンター構想の話し合いの段階ではそういった追悼の気持ちを大事にすべきだというような意見も上がっていたのですが、その話し合いの中でやはり「悲しむ、追悼だけの面ではなくこれからそれを生かしていくんだ、前向きにいくんだ。」という面を強く出そうという話が大きくなってきて、それでこの施設は震災をメモリアルするというよりは、どちらかという防災を前面に出すというコンセプトにはなっているのですが、おっしゃるように私も語り部さんの研究を以前はしてきまして、被災された方の思いを聞き取るということはずっとしてまいりましたので、被災資料から語り部さんの想いからそういう亡くなった方を悼む気持ちというものやはりちょっと同時に伝えていきたいとは思っておりまして、この常設展示に今からそれを入れるということはなかなかできないので、資料室ニュースや企画展などでそういった思いもこれから伝えていければとは、個人的には思っております。

○山名氏 展示をするというのではなくて、例えば展示をしない分の空間をつくることで追悼に人々を向けるという、そういうような、ある意味空間の戦略が戦争ミュージアムには幾つか

つくられているのですが、そういうことが例えば議論されるかということ、それからもしそういう何かアーキテクチャーなレベルで資料提供のことが議論されるとしたら先ほどの6つのセクションのどこになるかだけちょっと教えていただけませんか。

○高野 どのセクション。そうですね。広島なんかではその国立の追悼センターが近年でできまして、私もそれは存じ上げていますが、ここのセンターでは、この外に出たところに鐘がありまして、あそこがちょっと死者に思いを馳せる場所には一応なっております、ちょっと館内ではないですが、その話し合いを検討する中で、結局展示の中ではそういう場所というのはないですけど、あそこに一応そういうところを設けるということにはなります。6つの場所のどこになるかという、またそれも難しい御質問で、基本的にその震災の記憶を大事にしているのですが、そこから得られる教訓や知恵、防災に関する知恵を発信していくというところが、どちらかというこのセンターは前面に出しておりますので、このどこの機能がかかわるかという難しいところなのですが、展示か交流ネットワークかが、ちょっとそういったところにかかわってはきます。はい。済みません。

○阪本 あの今の御質問にちょっと補足説明をさせていただきます、追悼の思いというのはセンター設立時のときにすごく議論になったことでして、センターの外周には水盤が張られているのですが、これについては阪神・淡路大震災のときに火災が非常に大きくて水が必要だったという思いと、火災で亡くなられた方もおまして、その水の重要性を伝えるために張ってあるんですね。センターの外を出て右側に慰霊のモニュメントというのがありまして、これは5時46分を指しているのですが、この慰霊のモニュメントの中にも亡くなった方の名簿がおさめられておまして、毎年1月17日の日はそこで慰霊祭という追悼の行事は、きょうは安全の日の行事と名前を変えているのですが、そういうのも構成しています。また、水盤の水は5階の資料室の前の噴水があるのですが、そこにつながるようになっていましてそこでも亡くなった方を悼む空間として活用していただければという思いで当初はつくられたものです。ただ、そのことについては余りうまく伝えられていない面というのも多くありまして、市民の皆さんの中には御存じない方も多くいらっしゃるのかなという気がします。

○聴衆者 今の追悼のことについては、三ノ宮あたりですね、神戸市役所に向かってフラワーロードがありまして、三ノ宮のその神戸市役所の南のところに東遊園地があります。そこに追悼施設がありますね。だからそういうことで1カ所に全てないですけども、いろんなところにある。それから伊丹ではそういうのは仮設所を使ってですね、追悼を、お祈りをささげる日を決めてあったり、そういうこともしております。ちょっと関連して。

○司会 はい、よろしいでしょうか。続きまして、ほかに御質問のある方。

はい。お願いいたします。あっ、どうぞ。

○男性 資料の収集に集まってくる権利関係書、例えばちよ

と思い出したのが資料室のお仕事ではないでしょうけど、その外にあります高速道路の壊れた柱、あれなんか設置するときには道路公団の御厚意でいただきましたというお話があったときに、僕はかみついた記憶があったんですね。後世まで残し、後世まで教訓を伝えるとしたら、これは工事に問題があったんじゃないかというような、向こうも痛みがあるような資料をこちらが発掘する必要があるのではないかと御意見を申し上げたことがあるのです。そういう価値判断ということを資料室はどう考えておるのか。もう一つ、後世に残すというのは何年くらいのこと、例えば、高野さんの個人的見解でもいいです。どれぐらいを想定しているのかということに、私は請け負った介護の食料品を団地でこの食料品をつくらせてるんですね。組合ができて120年。そしてその前の明治に直撃した反省がこの明治維新でお父さんの保護が亡くなったときの大変な痛い体験を伝えて今ということで、どれくらいのスパンで考えてらっしゃるのかなってちょっと気になりました。以上2点、ちょっとお願いします。

○高野 はい、ありがとうございます。どれぐらいのスパンでという話ですが、今は震災からまだ17年で震災を体験した方もまだたくさんいらっしゃるって体験した方がそのまま伝えるということもできますし、その被災資料も実際にまだ生きている方が持っていたらあったものってということなのですが、でも広島のようにだんだんと時がたつてくるとそれを体験した方もいっしょになくなっていて、資料は残るんですかなかなかその実際に体験した方が伝える、実感をもって伝えるということは難しくなってくると思います。で、でもその伝え方といいますか、それがこう直接誰かが伝えるっていうだけではなくて、それがだんだんと地域に根づいていくっていう形ですね、その防災文化としてその生活の中に根づかせていく、そういうところまで浸透させていくとなるとその50年伝える、100年伝えるというスタンスではなくてそれがだんだんと文化の中に浸透していく、そういうところを目指していくべきなんじゃないかなと私は感じています。です、で、ちょっと100年が目標ですとかまあそういう言い方はちょっとできないんですけど、まあ徐々に徐々に私たちが伝えるとともに、そういうふうにならなければならぬように、そういうことを目指していけたらと思っています。で、何でしたっけ。

○男性 価値判断はどうしますか。資料の。

○高野 資料の価値判断、私たち、ここの震災資料は震災で被害を受けたもの、被害から復興の過程で生まれたものを震災資料とみなして受け入れているわけなのですが、何といいますか、ひとつひとつの資料にあるエピソードがありまして、それを持っていた方の震災にまつわる体験があると私は思っていますので、これは資料として価値があるとか、これはあんまり要らないのじゃないとか、私がかみしたら個人的にそう思うかもしれないんですけど、もしかしたらまた別の方にとってはそれがびんとくるものである可能性もありますし、それによって防災に向けた備えを進めようとか対策してみようかなって思う方がいらっしゃる可能性がありますので、その価値判断っていうのはちょっとなかなか、私たちがすべきものかといったらちょっと

難しいと考えています。ありがとうございました。

○男性 ありがとうございます。

○司会 では、少し時間がありません。最後のひと方だけ。はい、お願いいたします。

○女性 今日は、ありがとうございました。今、回っています震災の再建の手書きの資料とか、また私も被災したマンションで、いろいろな資料をこちらに提供させていただいて、その成果だと思っています。ほんとにありがとうございました。一つ、6つの機能というのが出ていますけど、その中に検証というのがね、ちょっと言葉が出てきてないんですけどね。今、東日本大震災でも原発問題事故調とか素早い報告をされておりますけど、やはり教訓の1つとしてやっぱり施策がどうだったとかです。復興施策が本当に市民や県民のためであったのかとか、今だって来年の1月で18年になるんですけど、アスベスト問題や公営借り上げ住宅問題とかです。また新長田のまちづくりは箱物だけで大変苦しんでいるという報道も、今年に入って何回も出てきていますので、そういうやはり私たちが被災してやっぱり残ったかというやっぱり財産をなくして、本当の生活に戻れなくて、次々災害が起こって残っていくのはやっぱりそういう検証であって、政府のほうに訴えていく市民の力だと思うのです。それはひとりではどうにもできないのです。高野さんみたいな若い世代の人たちが、実は私のマンションのことも今回っている本にも書いていただいて本当にありがたくて、それをまた東北の方に都合があつて行ったときにお伝えしたりしているんですけど、その検証ということがそのセンターの機能の中にどういう位置づけされているかということをお尋ねしたいのです。

○高野 はい、ありがとうございます。おっしゃるように阪神・淡路は17年たっているから過去のものだと言ったらそういうわけではなく、まだ20年借り上げ問題、借り上げ復興住宅に住んでいる方が20年たったら出ていかないといけないかもしれないという問題がありました。アスベストの問題が後から出てまいりました。震災障がい者の問題がやっと最近明らかになってきたりといったところから、やっと検証が進んできたものもありますし、まだまだ検討していかないといけない問題があるってというのは本当におっしゃるとおりで、こちらのセンターでそれがどの6つの中でどこが機能しているかということですが、実践的な防災研究というところが阪神・淡路の経験に基づいて研究を進めていく、発信していくということなので一番かかわるところになってはいるのですが、現在の研究員はちょっと、研究員は任期があつてそれぞれの専門の方が在籍しているんですけど、現在はちょっとそういう検証、住宅問題を検証していくという専門の方がちょっといらっしやらないので、実際にはちょっとそういうところを進められていないのが現状となっております。村田研究部長、お願いします。

○村田昌彦（人と防災未来センター研究部長） ちょっと補足させていただきますと、阪神・淡路大震災の検証につきまして、人と防災未来センターがやると言うよりも、兵庫県として5年目におきましては20のテーマで海外の検証委員も含めたような形で総括検証というものをしております。10年目の節

目におきましても別の角度から10年間でできたこと、できなかったこと、そういったことについての検証を行いましたし、15年目にはそういったことを含めて、「伝える」という本の形で取り上げております。それが5年検証、10年検証、15年目のまとめ、それが全て人と防災センターの研究員、事務局。そういった我々も一緒になって作業を進めさせていただければと思います。また機会があれば、20年目のも近々やってきますのでそこでも何らかの形で20年目の振り返りをやる必要があると思います。震災だけではなくて兵庫県、大きな災害、台風災害、佐用もそうですし、新型インフルエンザもありましたし、そういった大きな節目がありますと、必ず検証をきっちりやるという一つの文化のようなものを兵庫県としては持っております。それを維持して次の世代に伝えることによって同じ間違いを繰り返さないということに……。

○女性 お言葉なのですが、兵庫県の検証した資料を見ましてもね、住まいの再建のような事実が書いてないのです。被災マンションひとつ捉えましてもね、事実が書かれているのは、この4つのマンションが裁判をしたんですけど、そういうのもこれにはきちっと書かれていますし、私もすばらしい本を残していただいたなというのもあつて、ちょっと県のほうに感想というのは書かれたものは私が知らないかもしれませんが、残しておられないのでちょっと県民としては残念だなと思っているので、またあつたら教えていただきたい。

○司会 まだまだ恐らく議論をし尽くすことだと思うんですけど、最後に。

○女性 最後ではないのですが、もう1つだけちょっと今のお話の中でお願いというか、希望というか、あればいいなということをおっしゃっていただきたいのですが、高野さんの報告の中で展示課と資料が結びつくようになりましてというお話がありました。当初の資料と展示資料をうまく連携していた中でもそれが連携していった中で今、震災資料専門員の方と連携しながら展示を考えられるようになったというお話がありました。であれば、先ほどの話の流れなんですけども、検証といいますか展示にもぜひ、これからこのセンターがずっと発信していくのであれば資料部門と展示部門だけではなくてそういった検証なり、そういう阪神・淡路そのものの研究成果が生きて、そしてそれを展示に反映されていく、そういうような連携ができていく場が設けられれば、それこそここで集められた資料の活用が上手くいくのではないかなというふうには先ほどのお話をお聞きしながら考えました。

○司会 恐らくこの震災資料17年ってということになるとまだまだ議論ができない、この場ではまだまだ議論できないというか、まとまらないと思うんです。続きは4時からの懇親会の場で、皆さんとざっくばらんに議論していけたらと思っております。またこの後、収蔵庫の見学とあと資料室の見学がございますので、一旦はここで質疑・応答の時間は終了させていただきたいと思います。

最後になりましたが、大木健一副センター長より本日の御講評をお願いいたします。

○大木健一（人と防災未来センター副センター長） 副センタ

一長の大木でございます。昨年の7月からこちらに参りました。資料室、実は私も資料室は余り深くタッチしておりませんでしてといいますか、資料室はよく使っているのですけれども、その倉庫の中とかですね、についてはあんまり知らない、勉強不足なのですがこれから深く勉強できると思います。資料の収集・保存っていうのは、この人防の、6つの機能のうちの重要な一つでありまして、特に初期の段階で非常に重要だったと思います。これからはこれを保存するという道になることも必要だと思えますし、さらに活用すると。今、検証という話もできましたけれども、そういったことに役立つようにあるいは東日本との比較などにも参考になるような、そういったような活用の視野と考えることが重要であると思います。また、インターネットなどを通じた情報発信とかそういったことも検討していただければと思っております。また、今いろいろ御質問が出て高野さんの所掌範囲を超えたような質問もありましたが、それだけこの場所にはですね、強い思いを持っている人がいるということで、それは非常にうれしいことだと思っております。また、今後ともそういった御意見を取り入れながらこの資料を含めまして人防の機能充実、情報発信に努めていければいいと思っております。

どうも今日はありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。ここで一旦第1部のほうを終了させていただきまして、3時35分に5階の資料室にお集まりいただき、そこで資料室の見学と、あと7階の収納庫の見学に移りたいと思います。もしここで帰られる方はお手数をおかけしますが、アンケートの御記入をいただき、そしてスタッフのほうまでお渡しいただければ幸いです。それでは一旦お開きにさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。（拍手）

## 第2回「被災経験継承のために－複数の展示拠点とネットワークづくり－」

日時：平成24年11月18日（日）

場所：人と防災未来センター 東館3階GTS大会議室

### 1. はじめに

#### 〇司会

では、14時となりましたので、災害ミュージアム研究塾第2回「被災経験継承のために 複数の展示拠点とネットワークづくり」を開始いたします。本日の進行を担当させていただきます当センターの震災資料専門員の高森順子と申します。

10月から全6回で災害ミュージアム研究塾というのを開始しております。第1回は当センターの高野尚子震災資料専門員より、資料室の10年間の活動内容の発表をしております。

本日は、同じ「震災」でも、阪神・淡路大震災ではなく、中越大震災に関するミュージアムの方を講師としてお招きしております。長岡震災アーカイブセンターの山崎麻里子研究員から、「中越メモリアル回廊」について、詳しいお話を伺えたらと思います。

では簡単にですが、本日の進行について説明させていただきます。

最初に約90分ほど、山崎さんから発表していただきます。その後、代表的な質問を、センターを代表しまして高森が、二つほどさせていただきます。その後、会場の方々にマイクを回しまして、10分から15分ほどですが、御意見など頂戴したいと思います。

早速始めたいと思います。

### 2. 報告

#### 〇山崎麻里子氏（中越防災安全推進機構）

皆様、こんにちは。初めまして。

新潟県の長岡市からまいりました長岡震災アーカイブセンターの山崎と申します。今日は、このような機会をいただきましてどうもありがとうございます。これから、8年前に発生しました中越地震のアーカイブをしております「中越メモリアル回廊」につきまして、1時間半ほど御時間いただいて御紹介させていただきますので、よろしく願いいたします。

ではこちらのスライドを見ながら、御紹介させていただきます。この「中越メモリアル回廊」は、昨年10月22日そして23日、2日間に分けてオープンいたしました。4つの施設、そして3つの公園の全てをめぐること、中越地震を見ていただくということで、「中越メモリアル回廊」として整備しているところでございます。

この中越地震の教訓ですとか、知見、そして私たちが体験したことを、これから子どもたち、そして世界へ、未来へ伝えていきたいということで、こういった「中越メモリアル回廊」が考案されました。

4つの施設として挙げられておりますのが、まず私が所属しておりますこの「長岡震災アーカイブセンター」なんですが、一番左端、ちょっと文字が小さくて見えにくいと思いますが、これから「長岡震災アーカイブセンター」の紹介さらに詳しくさせていただきます。そして、お隣の小千谷市というところにも「小千谷震災ミュージアムそなえ館」というものがオープンしております。そして一番右端なんですが、こちら震源地があります当時川口町、現在は合併され長岡市にあります、「川口きずな館」というものがオープンいたしました。そしてこの山古志、皆さんも名前を聞いたことがあると思いますが、全村避難しました山古志には、現在この「やまこし復興交流館」というものを来年の10月にオープンするために現在準備段階に入っております。

次に、3つのメモリアルパークを整備いたしました。「妙見メモリアルパーク」、こちらが92時間後に、当時2歳の男の子が救出された現場なんですが、こちら、その写真ですね。こちらを追悼の場、そして祈りの公園として整備しました。真ん中にありますのが「木籠メモリアルパーク」。こちらは皆さん御存じかと思いますが。水没してしまった集落を、そのままの状態でも保存、保存といえますか、残されていますので、そこを「木籠メモリアルパーク」として整備しています。そして一番右端ですね、こちらが震源地になります。震源地、唯一無二の存在になりますので、そこを中越地震を伝承していく場所として「メモリアルパーク」として整備しています。

この3つの現在オープンしている3つの施設と、3つの公園、そして準備中のこの「やまこし復興交流館」、これをこの中越全体に点在させています。一カ所の施設で中越地震の全てを見ていただくという形は今回はとっていません。この中越全体で見ていただくということになっています。それぞれの場所に、皆さんに行ってください、中越とはどういうところなのか、そしてその中越地震が起こった場所とはどういうところなのか。8年たった今、その地域がどこまで復興したのかということ、実際皆さんの目や耳で肌で感じていただきたいということで、現地を回っていただくということになっています。このように、この「中越メモリアル回廊」は整備されました。

こちら「中越メモリアル回廊」のシンボルマークなんですが、最初ちょっとこちらに来た時に、小さいマークを見た方が、雪の結晶ですねって言われたんですが、こうやって大きくして見ていただくと、人が6人スクラムを組んでいるような形になっています。これは、中越の人たちが、力を合わせて震災からの復興をやっている、進んでいこうという形を意味しております。さらには、一筆書きで描けるようなデザインになっておりますので、「中越メモリアル回廊」のイメージとも合っているかなと思います。私個人としましては、雪国新潟を思わせるこの雪のマークのように見えるシンボルマークですので、とても自慢のシンボルマークとなっています。

こちらが、長岡市内にあります長岡造形大学というデザインの大学なんですが、そちらの元学長ですね、鎌田豊成先生に考案していただいた3つのデザインの中から、全国公募をかけた上で、こちらのマークが選ばれたということです。

ではこれから、簡単に中越地震がどういった地震だったのかということと、まず皆さんに思い出していただきたいと思ひまして、簡単なんですが中越地震の説明をさせていただきます。

今から8年前ですね、10月23日に中越地震が発生いたしました。新潟県は、これ全体は写ってないんですが、この辺に佐渡島があります。で、京都に近いほうから、上越、中越、下越地方というふうになっています。県でもそうですね。福井が越前で、富山が越中で、新潟が越後というように、新潟県の中も、南のほうから上越、中越、下越というふうになっています。この中越地方に震源を持つ地震ということで、気象庁から中越地震というふうに命名されています。

平成16年10月23日午後5時56分、この日は土曜日でした。マグニチュードが6.8。今お話ししたように震源地は新潟県の中越地方。震源地が地下13キロと非常に浅い地震だったんですね。ですので、マグニチュード6.8という地震のエネルギー自体はそれほど大きなものではないんですが、震源地が浅かったということもありまして、最大震度7を観測しています。中越地震の大きな特徴として、余震が非常に多かったということが挙げられます。こちらに1年間の余震の回数ですね、震度5弱以上のものに関して回数を出しています。全部で18回。で、10月23日の本震、震度7が発生しましたその3分後には震度5強の余震が発生しています。さらにその4分後にも震度5強の余震、さらに本震の15分後には震度6強の余震ということで、もう最初の10分、20分、30分の間に、これでもかというぐらい大きな余震がこの中越地域を襲っているんですね。で一番下にちょっと書きましたが、震度1以上の余震、地震で観測されるものに関しましては、最初の1年間に960回、この中越地域を襲っています。

また、この中越地震が発生する2日前には、新潟県、台風が上陸していました。非常にたくさん雨が降っていたんですね。地盤が雨のために非常に緩んでいた。そして新潟県は全国でも有数の地すべり地帯と言われています。もともと、地すべり、山が崩れやすかったり、地すべりが起こりやすかったり、そういう地質な

んですね。信濃川の堆積した土砂で成り立っている地域ですので、非常にもろい地質でした。ですので、今ここでお話ししたように、たび重なる余震がこの中越地域を襲いましたので、非常に地盤災害が多く発生しています。こちらに4枚ほど写真を出しているんですが、こちらのまず左上の写真、この茶色くなっているあたりから、こう左下のほうに向かっているこの山の斜面が、崩れ落ちているのが何となくおわかりいただけるかと思ひます。本当はこの辺の杉の木は、このあたりに生えていたものなんですね。それがこう滑り落ちました。ここ、川が流れていたんですけども、この川の流れをこの崩れ落ちた土砂がせきとめてしまいました。そのため、皆さん先ほどもちょっと「メモリアルパーク」のお話をしましたが、「木籠」という地域、これ水没してしまった写真ですね。こちらと同じ家です。2階の屋根が辛うじて見えるぐらいまで、この山古志、水位が上がって水没してしまいました。こういった土砂の地盤災害がいろんなところで起こっています。

こちらの写真もそれをもうちょっとわかりやすいと思うんですが、この山の斜面が下のほうに滑り落ちているんですね。ここに道路が走っているのがわかると思ひますが、ここの道路と、ここが本当はつながります。こちらもここの道路とここの道路が本当はつながるんですね。5m以上かな、ここに車がありますので、10m以上ですね、この山の斜面が一気に滑り落ちています。その斜面を通過していた道が、もうぼろぼろに寸断されているのがおわかりいただけると思ひます。

こちらが全村避難しました山古志村の様子、道路が寸断された様子なんですが、皆さんこの道路を通過して仕事に行ったり、学校に行ったり、買い物にいったりしている道路。そしてこの地震の時には、本来はこの道路を通過して非難する道路だったんですが、それがもうこのようにぼろぼろに寸断されています。この山古志村に通じる道路、ほとんどがこのように寸断されましたので、集落が孤立しました。そういった集落の孤立というのは、中越地震では至るところで寸断された道路のために起こっているんですが、こちらは、その震源地のある川口町ですね。そちらで孤立してしまった集落の様子です。これ、もう見ておわかりのとおり、この写真一つとっても、いろいろな情報がこの写真の中からわかる1枚になっているかと思ひます。おむつ、ミルク、この2つの言葉だけで、小さい子どもがいるんだなっていうのがわかりますし、薬の一言で、体調を崩した方がいるんだということがよくわかります。

こちら、SOSでしたか、そういった文字ですね。地域の方、農業に従事している方がたくさんいらっしゃる場所ですので、畑にまく消石灰を水で溶いて、洗車ブラシでこう書いたものなんですね。当時の焦っている様子もこの写真でわかりまして、このSですね、最初、こう逆に書いてしまったんですね。こっちはわの小さいほう見てもらうと、Sが反対なんです。こっち側を消しまして、こっち側を後から書き足している、というのがこの写真からもわかるかと思ひます。

こちらの様子、見ていただきまして、次こちら。錦鯉が養鯉池、越冬施設の池の中で浮いて、残念ながら死んでしまっている様子

なんですが、地震の影響で、電気・ガス・水道全て、ライフラインは全て途絶えてしまいました。この養鯉池、錦鯉を養殖する池なんですが、これだけ大量の鯉を池の中に放っていますと、酸素を吸入してあげないと、あっという間に錦鯉は酸欠で死んでしまうんですね。こちらはその停電してしまいましたので、酸素を吸入してあげることができずに、どんどんどん、この貴重な山古志発祥の錦鯉が死んでしまった。文化の崩壊の危機とも言われましたが、当時こういった錦鯉の被害というのが大変多くありました。

ただ、やはり養鯉業、鯉を育てる業者の方ですね、この大事な鯉をここで途絶えさせてはいけないということで、親鯉、卵をとる鯉、そういった一番大事な鯉だけは、何とか生き延びさせようということで、こういった大量の鯉がいる池ではなくて、安全ないけすに移すなどして、何とかこの文化を継承していくために努力されています。現在は、昔のように毎年10月には品評会が行われまして、世界中からこの鯉のバイヤーが山古志に訪れていただくにぎわいを取り戻しています。

ちょっと話が前後して申しわけないんですが、こちらの孤立集落ですね。孤立してしまった集落の避難している様子なんですが、この左下の写真、これ集落の皆さんが鍋、釜、食べ物や毛布、持ち寄って生活している様子なんですが、震源地から一番近い「木沢集落」というところですね、その避難所の様子です。こちらの集落は、このあと皆さんにちょっとDVDを見ていただく中で出てくるんですが、この集落は孤立してしましまして、道路、隣の集落に通じる道路が全て寸断されましたので、どこにも逃げ出すことができなくなりました。で、その地域の方が具合が悪くなっていて、早く病院に連れて行かなくてはいけないということもありましたので、自分たちで道路を復旧したんですね。ショベルカーやダンプ運転できる方が集落の中にいましたし、そこに停めてあるダンプ、どこかの業者さんの車なんだけれど鍵は足元のシートの下にあるというのがわかっていましたので、それを取り出して、勝手に使って、崩れた道路を自分たちで修復して隣の集落に避難した、病院に連れて行ったということなんです。それくらい、あの人は、ショベルカーを運転できる、この人はダンプカーを運転できる、あそこに行けば、あの車がある、あそこに行けば、砂利が積んであるということが、普段の生活の中でわかっている、密な関係を保っているところでしたので、こういった共助ですね、自分たちで助け合って、避難生活なり避難することができた集落と言われています。

今の、自分たちで道路をつくり避難できたところはよかったです。山古志村ですね、当時はもう道路を直すことすらできませんでした。そのため地震の翌日、朝6時から、自衛隊のヘリコプターでの避難活動、避難が始まっています。もう山合いですので、大きな自衛隊のヘリコプターは離着陸できるような場合は、小学校のグラウンドしかありません。で、そこに行くための道路さえない集落の方は、小型の新潟県のヘリコプターですとか、警察のヘリコプターにまず1回乗せてもらって、そのヘリコプターで学校のグラウンドに避難し、そこから今度大きな自衛隊のヘリコ

プターに乗って、長岡市内の避難所のほうへ避難されています。

こちら避難所の様子なんですが、左側、こちら体育館に避難している様子。もう雑然と、騒然と皆さん避難されている様子わかります。避難所に入りきれなかった方ですとか、体育館の避難所はプライバシーが守れなくて嫌だわとか、そういった方は、こちらの右ですね、ビニールハウスなんですが、農家の方の御好意でこういったビニールハウスを借りて、この中で生活された方もいますし、また自家用車に乗って、避難生活をされた方もいます。

皆さん多分聞いたことがあると思いますが、「エコノミークラス症候群」というものが、この中越地震の時、かなり問題になりました。避難所の仮設トイレに行きたくないわとか、やっぱり私もちょっと思うんですが、余り清潔、衛生的ではないなと思うと、トイレに行かないようにしようと思って、だんだん水分の摂取を控えてしまいますよね。さらに避難所の生活なので、動き回ることもなく、さらに車の中に避難されている方は、狭いところでもじっとしているわけですから、だんだん血がどろどろになってしまって、足元で血栓ができて、心臓や肺に回って、脳卒中ですとか心筋梗塞、脳梗塞、そういった病状を引き起こしてしまうケースがたくさんありました。

中越地震で亡くなった方というのが68名なんですね。阪神淡路ですとか、東日本大震災、そういったところと余り比べるとよくないですが、非常に少ないんです。直接死、地震の被害によって倒壊した家屋の下敷きになったですとか、崩れた土砂に巻き込まれたということで直接死で亡くなった方というのは、この中で15人なんです。残りの53名の方というのは、せっかく助かった命も避難所に入って、避難所の生活の中で先ほど言った「エコノミークラス症候群」ですとか、持病の悪化で亡くなった方というのが半分以上なんですね。そういったところで、中越地震ではこのあと、「エコノミークラス症候群」を何とか解消しようということで、新潟県内では、大学の先生方の中でも、「エコノミークラス症候群」何とかしようという研究も一生懸命行われています。

狭い避難所から早く出してあげたい。さらには、10月23日に発生した地震ですので、2カ月もすれば新潟は雪が降ります。その2カ月、雪が降るまでに何とかこの避難者を仮設住宅に移してあげたいということで、急ピッチで仮設住宅の建設が行われています。最終的には、3,460戸の仮設住宅がこの中越地域につくられています。

そして、やはり雪が降りました。この年ですね、新潟県、豪雪に見舞われています。こちらの中学生在が除雪をしてくれたり、自衛隊の方が除雪に来てくれたりと、いろんな方の支援をいただいて、仮設住宅での生活が進んで行ったわけですが、一斉除雪をしています。この仮設の上に積もった雪を、家と家の間に一回落としますと、それをまた取り除く作業というのが必要になってきますので、仮設住宅の人同士皆が一気にその作業をしないと、あそここの家が落としたら通路が通れなくなった。でもうちはまだ落とさないなんていうことがあると、なかなか生活しにくいところも

ありましたので、この新潟県では、一斉除雪をするというところが、仮設住宅だけではなくて、平時でもそういったことが行われています。

こちら、合い言葉は孤独死を出さない、ということで、上に書かせていただきました。新潟県のこの中越地震は、非難するときに、皆さんばらばらに一度避難所に入ってるんですね。家族でまとまって避難所には入っておられますが、隣近所は全く知らない避難所に入ってしまったというところがありまして、だんだん皆さん元気がなくなっていくんです。そういった中で、まずは避難所の体育館の中で、集落同士皆集まって避難所の生活をしようということで、体育館の間を、こう行き来するバスが走りました。これ山古志村の話なんですけど、例えば山古志の「木籠」という集落があります。「木籠集落」の人は、あそこの高校の体育館を避難所にしようというふうにしたら、あっちの小学校、こっちの中学校に避難している人はみんなバスに乗って、一つの体育館に引っ越しました。同じように、じゃ「檜木集落」の人は、小学校の体育館を避難所にしようと決めたら、その小学校の体育館に皆さんバスに乗って引越しをしました。避難所同士の引越がまず行われたんですね。で、そのあと、仮設住宅に移る時も、こちら皆さんのほうがよく御存じだと思いますが、仮設住宅に入る時の皆さん、ばらばらに入られたという話を伺っています。隣近所なかなか誰がいるのかわからない、お友達もできないという寂しい中での避難生活、避難所、仮設住宅での生活の中で、ひきこもりですとか、孤独死といったことが問題になったというふう聞いておりましたので、この中越ではそういった教訓を生かしてですね、できるだけ集落の人たちを固めて、御近所同士、できるだけ近くに仮設住宅に入ってもらって生活をしてもらおうということで集落の人がいつでも顔が見えるような入居の方法が考えられました。

同じように市民ですとかボランティア、民生委員の方によるそういった避難者の見守りの支援ですとか、ボランティアが集落ごとにできた集会場ですね、仮設住宅の中に集会場がつくられましたので、その集会場を使ってこういった、これも阪神発祥の足湯、新潟にも伝わってきておりますが、そういった活動が行われています。

こちらも集会場の様子ですね。子どもが楽しく遊んだり、お母さんたちがお茶会を開いたりということで、できるだけ生きがいを持って生活してほしいということで、さまざまな支援が行われてきました。

だんだん、仮設住宅での生活が落ちついてきますと、そのあとの地域をどういうふうにして行こうかということで、話し合いが始められます。ふる里に戻る、もしくはもうふる里の再建を断念して町に出る、ですとか、自立再建できるのか、もしくは公営住宅に入れるのか、そういった話し合いがこの仮設住宅の集会場で行われています。こちら、新潟県の方ですね、一緒になって膝をつき合わせて、丁寧な話し合いが行われました。

集団移転がこの中越地震の時には行われています。10集落97世帯ですね、の方が、集団移転をしているんですが、そのうちですね、全集落、全世帯で今までであったところから新しい場所へ

移転したというのは、10集落のうちの2つの集落でその新しいところに集落ごと移転されました。

こちらはまたちょっと違う形です。山古志の「木籠集落」なんですけど、今までこのあった土地のすぐ脇に新たな宅地をつくりまして、皆さんここに移転しています。で、こちらはそのお隣の「檜木集落」というんですが、こちら雪深い谷間にあった集落から、ちょっと上のほうに上がった場所に移転されています。今現在、東日本のほうでも、高台に移転するかどうかというふうに見られている集落がたくさんありまして、こういった中越の経験をぜひ教えてほしいということで、来ていただいています。私たちはそういった中越の経験を多くの方に伝えていこうということで、今活動を続けています。

駆け足になりますが、現在は中越、地域も元気になりまして、集落では県内外からイベントにお越しいただいた方との交流を続けつつ、現在も地域、元気にしていこうということで、住民の方たちが、一生懸命活動をされています。

これまでお話しした内容、これを15分ほどのドキュメンタリー映像にまとめたものがありまして、こちらをこれから御紹介する「長岡震災アーカイブセンター」でも上映しているガイドンス映像になっているのですが、そちらを皆さんにごらんいただきたいと思えます。

ちょっと準備をさせていただきます。DVDを皆さんに15分ほどなんですが、ご覧いただきます。

(DVD鑑賞)

○山崎氏 今ごらんいただいたのが「中越メモリアル回廊」のガイドンス映像として、「長岡震災アーカイブセンター」にお越しいただいた時に、まず一番最初に皆さんに見ていただいている映像なんです。

では、これからその「中越メモリアル回廊」の説明をちょっとさせていただきます。

「中越メモリアル回廊」の施設の紹介をしたいと思います。この「中越メモリアル回廊」は、先ほど一番最初もお話しましたが、その中越全体をめぐっていただくことで、どういったところで起こった地震で、どういうふうにか地域が復興してきたのか見ていただくということ、つくられたものになっています。

これがその全体図なんですけど、大体半径15キロメートルほどのところに4つの施設と3つの公園を点在させる予定になっています。「やまこし復興交流館」が来年の10月にオープンしますと、全部の施設と全ての公園がオープンすることになります。半径15キロほどで、一番上の「長岡震災アーカイブセンター」から、一番下の「きずな館」まで直線距離で25キロほどなんですけど、これを1日で回っていただこうと思うとなかなかちょっと駆け足になってしまいます。私たち今考えているのが、もう中越で1泊2日の旅行しながら「中越メモリアル回廊」を回ってもらえるといいんじゃないかなということで御提案していますが、もちろん一つの施設を見るだけでも、さまざまな情報を皆さんに得

ていただくことができるのではないかと思います。

まず「長岡震災アーカイブセンター」の御紹介なのですが、こちら“震災の記憶を未来の希望に”ということで、長岡駅前、徒歩5分ぐらいのところですね、非常に便利なところにつくられました。関越自動車道の長岡インターチェンジからも車で15分ほどということで、公共交通の便もとてもいいところになっています。「中越メモリアル回廊」のゲートウェイとしての役割を果たしていきたいというところなのですが、「きおくみらい」という愛称は、全国公募をしまして、福岡県の会社員の男性がつけてくれました。選ばれましたこの「きおくみらい」という愛称は、“私たちの記憶を未来の希望に”ということで命名されています。

一番最初ですね、こちら正面玄関、エントランスなのですが、入った足元に、すぐ先ほどもちょっと御紹介しました、SOS、ここ、間違えた消したところも忠実に再現された、SOS、の文字、実物大で描かれています。まず皆さんにこの「きおくみらい」に入っていたいただいて、その当時の臨場感ですとか、緊迫した地域の様子、それをまず視覚で訴えて、これから中越地震のことを知ってもらおうということで、この正面玄関エントランスの足元に描かれています。

こちら多目的ホールですね。こちらが、このお部屋よりは、この半分ぐらいの大きさになりますかね、大体80人規模の会議ができるような大きさになっています。こちらの写真は、イスとテーブルが並んでいますが、企画展ですとかシンポジウム、ワークショップなどに使えるようになっていまして、現在は企画展を開催しております。東日本の復興していく様子を撮りためたパネル展示を現在は行っているお部屋です。

こちらがシアタールーム。今皆さんにごらんいただいた映像を見ていただくお部屋なのですが、17人の方にお座りいただけるようなイスと、また補助席を御用意しまして大体25、6名の方が一度に見ていただけるようなお部屋になっています。こちらで見えていただくのは、今ほど見ていただいた15分の映像と、あと5分間の回廊紹介VTR、こちらも見えていただけるようになっています。今日、そちらのDVDもお持ちしましたので、もしこのあと御時間があればそちらも皆さんに御紹介したいと思います。

こちら、一番大きなお部屋になるのですが、足元には、中越地震の被災地を写した航空写真が足元に貼ってあります。8年前の地震が起こった半年から1年後にかけて撮影された航空写真をつなぎ合わせて、足元に敷いてあります。この部屋全体が航空写真になっています。サイズは、2500分の1という縮尺になっていますので、大分大きく写されています。道路を走っている車も見えますし、こちらに写っている方のおうちはもう全部わかりますので、地域の方が来られると、まず自分の家を探すんですね。ああ、あったあった、と安心して、それから展示を見始める。ただ7年ほど前の写真ですので、この5、6年で建てた家の方は、自分の家がないと言って、最初は慌てるんですね。私のうちはこの辺のはずなだけじゃないんですって、どうしてでしょうか。って言うと、いやこれは8年前の地震の後なんですよってお話をすると、ああ、じゃうちはまだ写ってないのね、ああよかったって

言って、安心されるんですね。やっぱり皆さん自分の家とか自分のわかる自分の通っている学校や会社、そういったものをまず見つけるということで、何かこう、ここに私も存在しているんだなって、ちょっと安心されるのかなと、いつもそんなふうに思っています。

こちらは図書コーナー。現在千冊ぐらいですね、震災関係の書籍ですとか長岡市史、中越地域の市町村の市史を所蔵していただいて、自由に閲覧できるようになっております。貸し出しも可能になっていますし、あと、施設をiPadを使いながら他の情報を見るんですが、そのiPadの検索機能を使うことで、どういった本がここに所蔵されているのかということも検索できるようになっています。

ちょっと戻りますと、こちらですね、今子どもたちが一生懸命、こう見えています。これiPadですね。今日、デモ機を2台ほどお持ちしまして、この後、1階で、4時から5時ぐらいまで、御時間いただけるということでしたので、実際にこれを皆さんにもどういうふうに中越の情報を見られるのかということのを体験していただきたいと思いますので、もしお時間ありましたら、この後も引き続きこちらを体験していただきたいと思います。

このiPadの中で、被災、避難・救助、復旧、復興の4つの段階で、この中越地震の情報を見ていただければいいような仕組みになっていまして、ごらんとおり、このビルの2階の1フロアしかないんですね。ここにパネルですとか、実物、たくさんの書籍、そういったものを所蔵することが、とても難しいところです。ただ、こういったiPadで電子データとして保管、情報公開するというので、この2階の1フロアの中でも、たくさんの情報を皆さんに見ていただくことができるような仕組みになっています。電子データですので、情報の更新、追加、そういったものもすぐできるようになっています。なかなか先ほどもちょっとこちらの方とお話していたんですが、パネルで展示するとするとその情報を更新するというのはなかなか難しく、フットワーク軽くぱっとできる場合とできない場合があります。「きおくみらい」はそういった電子データで管理することで、情報をどんどん蓄積することもできますし、公開する情報も随時更新することができます、そういった仕組みをとっています。

続きまして、「小千谷震災ミュージアムそなえ館」ですね、こちら長岡市のお隣、小千谷市にできたミュージアムになります。こちらも関越自動車道小千谷インターから車で5分ぐらいのところ、とても交通の便のいいところになっていまして、新潟県内外から自主防災会ですとか区長さんの集まりですとか、消防団といった方々にも御利用いただいています。

こちらですね、「そなえ館」と言う愛称がついている通り、防災に備えるための知識を皆さんに身につけていただくというコンセプトでできています。「そなえ館」という愛称、こちらも全国公募をしまして、東京の会社員の方がつけていただいた名前ですね。こちらのロゴマーク、ここ、ヘルメットになっていたりして、子どもが楽しんで学習できるような、そういった施設になっています。

こちらの展示は、3時間後、3日後、3カ月後というふうに分けてあります。3時間後、被災直後の様子ですね、皆さんの避難所の様子、地震直後皆さんがどういうふう被害を受けたか、そしてどういうふう避難したのか、そういった臨場感がある3時間後までの様子を展示するコーナー。そして3日後以降避難所に入ってから生活、どういった生活をされていたのか、実際の避難所の様子をそのまま再現して、展示しています。さらに3カ月後、仮設住宅に入居されたのが、2カ月後、3カ月後になります。その仮設住宅の中の様子をこちらに再現しています。

こちらちょっと小さな写真で見えにくくて申しわけないんですが、小千谷市にありましたあるマンションの一室をそのまま忠実に再現したお部屋をつくりました。こちらのちょっとプレハブ小屋の中なんです、震度6強の揺れを観測しました小千谷市のマンションの台所の中を、このように十字のマス目でまず写真を撮りまして、それを重なり方や置く位置、その一つ一つ忠実に再現したものをこちらの小さな小屋の中に展示しています。で、見ていただくと、冷蔵庫のドアが開いたまま、食器棚は45度に傾いたまま、そういった当時の被害の様子がそのままわかるような展示になっています。これを始めて見る方は、こんなになるのか、信じられない。やっぱり実際体験した私たちは、ああこうだったよね、ってわかる人もいらっしゃるし、やはりこういったことを体験した経験のない人は、こんなになるはずないじゃない、ってやっぱりこう、驚きながらこの展示をみていらっしゃる。

この小千谷には、この地震シミュレーター、震度7の揺れを体験できるシミュレーターがございます。常設されているのがこの小千谷だけなんです。で、このシミュレーターでは、震度6強を観測した小千谷市の市役所に置いてある地震計が観測した震度6強の揺れを正確に再現しています。右斜め45度に何メートル動いて、左に何ミリ動いてというような揺れを、この子どもが乗っているイスが正確に再現しているんですね。ただ、平面に置かれたイスですので、上下に揺れる動きというのは残念ながらこのイスでは再現しきれないんですが、前後左右方向の揺れに関しては、正確に再現されています。こちらで9種類の揺れを体験することができまして、例えば、中越地震ですとか、こちらの阪神・淡路大震災の揺れですとか、あと、想定東南海地震が起こったときの東京新宿の30階ビルの30階の揺れ方と、1階の揺れ方がどう違うのか、ということもこのシミュレーターで体験することができるようになっています。

続きまして、「川口きずな館」。こちらは震源地があります川口にできました。こちら川口インターから車で10分ほどのところですね。そこに整備されているんですが、昔、こちらにはゴルフ場がありまして、そのゴルフ場のレストハウスが使われなくなりましたので、そこを改装してつくられたものになります。

この川口には、被災地、どこもそうなんですが、とてもたくさんのボランティアの方が来ていただきました。で、この川口地域は特にそのボランティアの方との震災後のつながりがとても大切にされてきている地域です。人と人とのきずな、そういったものをこの川口では大切に今後も伝えていきたいということで、「川

口きずな館」という名前になっています。

こちらの壁面ですね、これは地震のあったその日から昨年のオープンした日までの川口地域の歴史、中越地震の歴史、復興の歴史、を記した壁になります。奥のこの2、3メートル空白のままになっています。こちらは、今後のこの川口の復興の歴史をこの後もここに残していこうということで、あえて空白にされているんですね。もうこの状態で展示が完了ではなくて、これから先もこの川口で起こる出来事、歴史、生まれる歴史をこの「きずな館」に残していこうということで、あえて空白の場所が残されています。

ここで見ていただくのは、ボランティアの方が地域の方に宛てた手紙、地域の方が外部の支援者の方に宛てた手紙、そういった往復書簡をiPadの中で見ていただいたり、この「きずなポスト」ですね、ここで川口で地域の方と新たなきずなを生み出し、そしてそのきずなを手紙に書き残して、このポストに投函してもらおうということで、こういった「きずなポスト」が設置されています。外部から来られた方、全く川口と関係のない、だけど川口に行ってみたいという方、そして川口地域の住民の方がこの「きずな館」で出会い、ここできずなをつくって、そして当時のことを学んで、そしてもしも何かあったらじゃあの時行った川口に避難してみようかな、川口の人困っていたら、助けてあげようかな、そういうふうな人と人とのきずなを生み出す場所として、この「川口きずな館」は整備されています。

続いてメモリアルパークの説明に入ります。

こちら先ほども何度かご紹介いただいている「木籠メモリアルパーク」ですね。川の流れがせきとめられまして、その上流が天然のダムとなってしまったために、水没した集落になっています。

こちらですね、本当はこの川の中に取り残された家というのは、河川管理者である国としては、この川の流れを妨げてしまう家は、ちょっと言い方は悪いですが、川の中に取り残されたゴミと同じ存在になってしまいますので、本来ならば早急に撤去しなくてはいけないということになっていました。ただ、地域の方ですとか、私たちもそうなんですが、震災のつめ跡を、後世に語り継いでいくためには残しておいてもらえないだろうかということで、国のほうにお願いしまして、現在は、「ぞんち」という形でこの川の中に残されています。存在の「存」ですね、に「置く」と書いて、「存置」というんですが、置いとくだけなんです。そこに残すではなくて置いておくんです。積極的に修復作業して、ずーっと恒久的に残すということをしてはいけないけれども、自然に朽ちてなくなるまではそのままにしてあります。現在もこの、今のこれ土砂の中に半分浸かったような家になっていますが、この家を見ることができます。ただもう8年もたちましたので、この家、大分朽ちてきてしまいました。ご存知のとおり、豪雪地帯です。冬になれば2メートル、3メートル雪が降り積もる地域でありますし、大変湿った雪が降りますので、1立方メートルあたり1トンの重さがあるんですね、雪というのは。その雪が、もう屋根の上にこれだけ積もっていきますと、もう年々この屋根のかわらわら、こう落ちていって、外壁がこう木でできていますので、

腐り始め、大分傷んだ家になってしまいましたが、今現在も見ることが出来ます。ただ先日お越しいただいたその東北の方がですね、やはりこのだんだん朽ちていくそういった取り残された家を見て、この家を見ると何だかこうむなしくなると言われたんですね。やはり自分の故郷のことを思うと、こういった寂しい取り残された家を見るのは、ちょっとやはり心情的に辛いものがあったんだと思うんですが、中越の方も、最初は残しておくということに対して余りこう前向きではなかったんです。ですが時間をかけて丁寧に、取り壊すことはいつでもできる、だけど元に戻すことはできない。元に戻すというか、その被害のあった状態を元に戻すことはできないというやりとりをする中で、地域の方もやはり自分たちの場所であった被害を、子どもや孫、そして外部の支援者の方に見てもらおうことが、たくさん支援をいただいた自分たちの恩返しなんではないかというふうに少しずつ考えが変わっていきまして、現在では、この「木籠メモリアルパーク」を一生懸命守って、語り継いで、外部から来た方を案内するというのは、私たちは公園を整備させていただきましたが、その案内はもう自主的に地域の方がされてるんですね。「山古志木籠ふるさと会」というのも自分たちで立ち上げてまして、今現在、全国から150人の方が、その応援隊に登録されて、全国からの応援をもらいながら、この「木籠」という集落、そしてこの実物を皆で守ってこうと活動されているところです。

続きまして、「妙見メモリアルパーク」。こちらは、92時間後に、当時2歳の男の子が救出された現場になっています。長岡市と小千谷市のちょうど境目にありまして、信濃川の右岸ですね、下流に向かって右側になるんですが、山が崩れました。ちょっと見えにくいと思うんですけど、ここに道路が走っていて、ここに道路があります。本当はこうつながっているんですね。こちら側の山が崩れまして、この信濃川の中に、ここにガードレールが飛び出しているんです。山が崩れて道が川のほうに押し出されました。当時4台の車がここを走っていたんですが、3台の車の方は自力で脱出できました。残る1台の車に乗っていた皆川さん親子、お母さんと女の子と男の子、3人が乗っていたんですが、残念ながらそのお母さんとお姉ちゃんは亡くなってしまいました。ただ当時2歳の皆川優太君が、ここで92時間後に奇跡的にこの東京消防庁ハイパーレスキュー隊の手によって救出されたところになります。ここをですね、私たちは、「妙見メモリアルパーク」として整備しまして、祈りをささげる場所として、献花台を整備しました。どなたでもこちらで花を手向けることができますし、この中越地震の犠牲者の方に、追悼の思いを寄せることができるような場所となっています。

現在は新しく道路が通りました。こちらですね、ここが本当は全部崩れていたところなんですが、土砂を一部取り除いて、再び道路が通っています。この左側の部分が、崩れた岩がそのままの状態に残されているところです。ここも先ほどの木籠と同じように、川の中に飛び出しているアスファルトですとかガードレール、岩、そういったものが川の流れを妨げて、洪水の時には洪水を引き起こしてしまうのではないかということで、本来は撤去するべ

きところを丁寧な話し合いをした中で、河川管理者のほうにお許しをいただきまして、そのままの状態でも今現在も見ることが出来ます。こちら8年たちましたので、大分こう草木が生い茂って、岩が所々隠れているような状態になってはおりますが、当時の状態そのままを見ることができるような場所になっています。

最後に、「震央メモリアルパーク」の紹介です。こちらは震源地なんですが、長岡にあります長岡技術科学大学の准教授の先生が、気象庁が発表した震源地の緯度・経度を、GPSを使って山の中を歩かまして見つけ出したのがこの震源地になっています。田んぼです。中越の棚田の3枚並んでいる棚田の真ん中の田んぼなんですが、ここに白い柱が立っています。これ、震源地の標柱ですね。一番最初はこんな真っ白い標柱が建てられました。このあとですね、こちらにこの「震央の碑」というものを建てています。こちらは全国からいただいたボランティア、支援に感謝の思いを込めて、この川口地域の小学生、中学生がメッセージを書きまして、その「震央の碑」というものを田んぼの真ん中に建てさせていただいたんですね。ただやはり、お米をつくっていますので、田んぼの持ち主の方も、うーんそろそろじゃちょっとこっこのあぜ道のほうに移してくれないかな、ということで、若干今は田んぼの真ん中ではなくて、田んぼを出たあぜ道のところに建てられていますが、この「震央の碑」というのが、そこに建てられています。

こちらですね、近くに遊歩道が整備されまして、またそのあぜまやも建てられました。で、現地に行きますと、ここで本当に地震があったんだろうかというぐらい、もう見た目には大きな被害は出ていないところなんですね。もう静かな本当に山の中、景色のいいきれいなところなんです。で、そんな静かな山の中で、あの震度7の揺れが引き起こされたんだという、なんかこうギャップのあるところなんです。ここから全てが始まった、その中心でありますし、震度7を引き起こした震源地、唯一無二の場所になりますので、中越地震を継承して行く場所ということで、この「震央メモリアルパーク」というものを整備させていただきました。

ここまでが、施設と公園の御紹介なんですが、この「中越メモリアル回廊」の入館者数ですね、ちょっと見ていただきますと、この青いのがその月々の入館者数、そしてオレンジ色の棒線が、棒グラフが累計になります。恥ずかしながらこのやはり12月、1月、2月、大分落ちてしまうんですね。新潟の雪深いところになりまして、なかなか冬期間の人の出足が伸び悩むところなんです。去年も豪雪がありまして、「川口さずな館」では、雪おろし、除雪が間に合わないということもあり、1月、2月、一時休館することがありまして、そのぐらい雪深いところなんです。今後、私たちがその冬期間でも中越地震のことを見ていただけるような、何かしらこう手だてを講じていかなければいけないと思わせるグラフになっています。

こちら各館の累計の数字になります。今年の10月ですね、こちらの棒グラフと各館の入館者数出ているんですが、やはり、10月といえますとこの中越地震の発生月にもなりまして、10

月19、20日、21、22、23、この1週間ぐらいですね、いろんなところで周年記念の事業が行われましたので、そういった面で、この入館者数は10月は大変非常に多くなっています。特に「川口きずな館」というのは、赤い棒があるんですが、これ「川口きずな館」のあります川口運動公園というところで、ソング・オブ・ジ・アースという一大イベントが行われるんですね。これはキャンドル・ジュンさんという方がやっているイベントなんですけど、皆さん広末涼子さんの旦那さんなんですけど、この方。そういった方が中越地震の後、この川口のほうの支援をしたいということで、川口のほうへ足しげく訪れていただいています、毎年この川口運動公園でそのソング・オブ・ジ・アースというイベントをされています。そういったイベントもありますので、この10月の「川口きずな館」も毎月1,000人のところが、一気に5,000人まで上がるということがちょっと納得いただけるのではないかと思います。

特に私が「きおくみらい」に勤めておりますので、そこを中心にお話させていただきますと、「きおくみらい」の見学者の内訳なんですけど、大体は、行政の見学・視察の方が大半を占めています。この中には、現在東日本の被災地の、宮城、岩手、福島そういったところからの行政視察も大変多くなっています。こういったメモリアルを整備するというを既に東北の方は検討されていて、そういった中で、昨年オープンした「中越メモリアル回廊」とはどのような展示をして、どのようなところなのかということで、私どものほうに見学に来ていただいているんですね。そういった視察がこの32%の中に含まれます。

次に多いのが、小学生、中学生、高校生も入りますが、総合学習の時間で、「きおくみらい」に見学に来てくれる子どもたちが多くですね。やはり、自分たちの地域で起こった中越地震をまずは学習しよう、自分たちの地域を知ろう、ということで「きおくみらい」に来てくれます。さらにその自分たちの経験を学習した中で、では東日本の被災地の人たちに、私たちだったら何ができるのか、ということを考えていきたいということで、中越地震を学ぶためにこの「きおくみらい」ですとか、ほかの「中越メモリアル回廊」の施設を見ていただいています。

そのほかですね、町内会、自主防災会、といったふだん、平時は家にいて、昼間の地域の防災を一番担う人たちですね。そういった方たちが研修の会場としてこの「きおくみらい」に来ていただいています。

右側の円グラフを見ていただきますと、45%の方が復興ですとか、防災関係者の視察、そして研修ですね、そういったことで、この「きおくみらい」を活用してもらっています。また、長岡市さんが一生涯懸命ですね、「きおくみらい」を全国、そしていろんなところに広めていきたいということで、長岡市役所が今年4月1日に新しくなったんですが、その市役所を見に来た行政視察の方を、この「きおくみらい」も見てください、ということで、たくさん案内していただいているんですね。そういったことで、この33%、大変多い割合を占めていますが、町中視察ということで、「きおくみらい」に見学に来ていただいています。

そういった中で、こういった施設があることを知って、じゃ自分たちの市町村の防災研修をするなら、この「きおくみらい」を見学しに来ようかということで、改めて他の職員の方を連れて来ていただくという入り口にもなっています。

見学者によって、やはりこの「きおくみらい」で見たい内容というのは、それぞれ違って来るんですね。自主防災会ですとか自治会、区長会など、そういった方たちは、やはり、その平時の対応について、長岡市内の自主防災会の活動はどういったものが行われているのか、そして中越地震の時には、どういう活動が行われたのか、そういった具体例を知りたいということで「きおくみらい」に来られる方がいます。小学生、中学生の総合学習になりますと、中越地震、子どもたちは小さかったので余り覚えていないんですね。そういった中越地震をまずは一から学習したい、そしてその中で、先ほども言いました東日本に向けて自分たちができる支援を考えていきたいということで、「きおくみらい」に見学に来る場合もあります。そして、今もお話しました行政の町中の視察の一環として「きおくみらい」に来る場合も、大体大きくこの3つに分けられるんですね。

目的にもよりますし、年代にもよります。そして、許される滞在時間にも違いが出てきます。そういった中で、いかにその人たちが求める情報を決められた時間の中で、私たちが伝えていくことができるか、ということで、見学の対応もいろいろ変わってきます。

滞在時間が町中視察の方だと、10分ぐらいなんですね。あっここにこういう建物があるんだな、ここではこういうことが見られるんだな、じゃいついつ来れば、こういう案内をしてもらえるんだな、というところまでを知って帰って行かれる方。逆に、小学生の総合学習では、10単元の時間が10時間あるので、そこを「きおくみらい」で中越地震を勉強して、東日本の支援を考えていきたいということで、御相談に来られる学校の先生もいらっしやいます。また、自主防災会の方ですと、大体1時間半から2時間ぐらい、今回研修で行きたいんですけど、何かいい勉強方法はないですか、ということで来られますので、そうすると「きおくみらい」の施設の見学をした後に、実際長岡の自主防災会で活躍している方を語り部としてお招きして、1時間、1時間半の講演をしてもらおう。そういったセットで御案内するというやりかたもしています。

こちらがその事例なんですけど、これは小学生の防災学習でお手伝した時の事例になります。まずは「きおくみらい」で中越地震の概要を学んでもらうんですね。iPad を使いまして、各地域の被害から復興の様子を勉強してもらおう。そのあと、会議室、ホールを使いまして、講義形式で、さらに詳しくお話をします。そのあとは、実際今度は現地を御案内して、子どもたちの目で、実際地域の様子を見てもらうんですね。これは小学生を題材にして御説明していますが、こういった視察をしたいということで、一般の方も同じような見学、御案内をさせていただくこともあるんです。その後は、地域の方、実際体験された方のお話を耳で聞いてもらいます。やはり私たち、私やほかのスタッフ、大きな被害

をこうむっていない他のスタッフが、あの時こうだったんだって話をしてもやはり実感がないんですね。やはり実際その場で苦しい思いをして、大変な思いをしたけど、でもここまでやってきたという地域の方の生の話を聞くことで、子どもたちはさらにその見聞を深めるといいますか、ああそうなんだ、心にしみる話を聞いて学校に帰って、あああの時こうだったんだねっていうことを、心にしみると思いますか、印象に残った話が聞けるのではないかなというところで、語り部の方を御紹介してお話していただいています。

そのあとですね、学校でのまとめの学習ですとか、さらに詳しい実験、そういったことも「きおくみらい」でお手伝いしまして、そのまとめた情報を「きおくみらい」で発表してもらう、もしくは、地域の方に見てもらおうということで、コーディネートもさせてもらっています。

例えば、この左下ですね、これは東北の被災地、南三陸町の方に向けた大漁旗を子どもたちが作りました。自分たちは何ができるかと、子どもたちなりに考えた時に、船を失った、大漁旗を失った、そういった漁師の方たちをじゃ元気づけようということで、子どもたちがイラストを考えてそしてここにメッセージを書いて、被災地に送っているんですね。これは、「きおくみらい」の窓ガラスのところに貼らせていただきました、来館者の方にも一緒に寄せ書きをしていただきました。その時の写真です。

お隣、こちらは、小学生が被災地応援ソングを作詞しました。その作詞をした歌に先生が曲をつけまして、実際この新潟に避難されている被災者の方の前でコンサートを開催したんですね。そういった様子をこの「きおくみらい」では映像におさめまして、展示するようにしています。子どもたちのそういった活動も私たちの大切なアーカイブになりますし、「きおくみらい」を訪れる方に向けたメッセージともなっていくと思います。そういった中で、先生方からも、防災だけではなくて、地域を考えるきっかけになった、とか、今回この学習の中で、いろいろヒントがつかめたので、また今後もちょっと手伝ってもらえないかというお話、お言葉をいただいていますので、少しずつ地域の学校に受け入れられているのではないかなと思います。

さらに子どもたちが、学習で訪れたこの「きおくみらい」に興味関心を持ってくれまして、放課後や休日ですね、来たことがない友達ですとか、家族を連れて来てくれるようになりました。そういったところから少しずつこの「きおくみらい」の活動が長岡市、そして中越、新潟県そして全国に広がってくるというふうに感じています。

こちらの表は、東日本の被災地からどういった方が来ているかということを中心にまとめた表なんですが、昨年の10月にこの「きおくみらい」はオープンしまして、それからの累計になっています。「中越メモリアル回廊」全体としましては、91団体、1,278名の方がこの「中越メモリアル回廊」に来ていただいています。最初は避難所で生活されている方を中越がお招きするんですね、避難者の方を、同じ被災をした中越で何かできることはないかということで、「川口のきずな館」の近くには温泉があ

りますので、そちらに御招待するとか、山古志のほうに御招待するとか、そういうことでまず来ていただきました。その後は、今度は、現在ですと復興住宅が少しずつ被災地で立ち上がってきていますが、そういった復興住宅のつくり方ですとか、入居の方法、そして運営の方法、そういったものを中越のことを参考にしたいので、ちょっと話を聞かせてくれないかということで、来られる方もいます。そして、中越では、地域復興支援員というものが立ち上がりまして、被災地に地域の活動をお手伝いする支援員が張りついているんですね。そういった活動が、今、東北でも立ち上がっているんですが、そういった方たちが、中越での活動を参考にしたいのでちょっと話を聞かせてくれないかということで、視察に来られたり、ということで、いろんな局面で行政の方、住民の方もいます。支援員の方もいます。学校の関係者の方や、メモリアル関係の方、そういったさまざまな立場の方が、この中越を参考にしたいので話を聞かせてくれないかということで、いらっしゃいます。そういった時にこの「きおくみらい」がゲートウェイとしての役割を果たしておりますので、窓口となって、こういう話ならば、この地域のこの人を御紹介します、こういう話ならば、何々市のこの窓口を御紹介します、というふうに、御案内させていただきます。

視察プログラムは、こちらの今お話ししましたように、生活再建ですとか、被災地、人的支援にかかる内容をちょっと細かい文字書いてありますが、実際その被災地、中越の被災者の方と東北の被災者の方をつなぎ合わせる、人と人を結びつけるというのが、「中越メモリアル回廊」の役割の一つではないかなというふうに思っています。

中越はたくさんの方の支援があつて、ここまで復興してきましたので、これからの被災地の支援をお手伝いするのが、私たちの責任だというふうに常々皆で話し合っていて、東北の方が中越のことを知りたい、こんな話が聞きたいということもまずは「きおくみらい」が頭脳の役割を果たしますので、「きおくみらい」で一度話を伺って、そして地域の方と結びつける人と人とを結びつけるハブの役割をしていけるのではないかということで、「きおくみらい」そして「中越メモリアル回廊」では活動をしているところです。

ちょっと駆け足になってお聞き苦しい点もありましたが、以上「中越メモリアル回廊」の御紹介をさせていただきます。多分お聞きになっていて何を言ってるのかわからなかったところがいっぱいあると思いますので、この後ちょっと質問を受けたいと思いますので、よろしく願いいたします。(拍手)

### 3. 質疑応答

○司会 中越地震について、そして4施設3公園の回廊についての説明をしていただきました。

まず、後15、6分なんですけど、ちょっとその中でも、中越地震や「回廊」についてお伺いしたい内容がいっぱいあると思うんですけれども、センターを代表いたしまして、大きく「回廊」のほうについての質問をさせていただきますと思います。

2点あるんですけど、1点ずつお伺いしてもよろしいでしょうか。

○山崎氏 はい。

○司会 ではまず1点なんですけれども、この「回廊」の話をお伺いしてまして、中越地震をテーマにした「回廊」ではあるんですが、それを通して地域の文化ですとか生活を見せるというようなそんな「回廊」なんではないのかなというのを感じ取ったんですけれども、この「回廊」を回られている方というのが、地域を巡礼するようなニュアンスを持っているような印象を受けまして、その行為そのものが「追悼」するような部分もあるのかなと思ったんですけれども、実際にこの全4施設、現在3施設ですけども、3施設3公園を全部回られる方というのは、どういった方が多いのかということと、後、その方から感想など頂戴しましたら、その内容についてお伺いしたいんですけども。

○山崎氏 そうですね、全施設を回られる方は、どういった方が多いかと言いますと、ばらばらと言いますか、やはり防災について考えていられる方が多いかなというふうに思います。

例えば、自主防災会の方で、大分熱心に自分の地域の防災について考えていられるような地域の方は、全部見たいんですけどもいいコースはないか、ということで御相談に来られるんですね。そうしますと、ちょっと中越全体を片道25キロぐらいのところ、各施設1時間ぐらい見て、途中でお昼御飯を食べてとなると、遠方から来られる方は、1日では回り切れないということもありますので、できるだけ1泊していただきながらゆっくり各施設を見ただけのようなコースを御提案しています。

で、やはりその地域それぞれ施設それぞれで見ていただく内容が違いますので、自主防災会で例を挙げますと、一番参考にしていただけるのではないかとというのが、「そなえ館」。小千谷のほかにあります「そなえ館」で、実際の生活の様子を目で見ていただく、そして地域の方の語り部を聞いていただくということで、まずそこを中心にコースを組み立てるんですね。位置関係がありますので、川口のほうから上がってきていただく方とか、長岡のほうからおりてきていただく方、そういったコースを考えながら皆さんに御提案していますので、長岡から見始めて川口で終わる、川口から見始めて長岡で終わる、というふうにできるだけコースを御案内しております。

感想としましては、大変好評をいただいています、特に実際体験された方の話ですとか、自主防災会の活動の話、そういったものを聞いたことがよかったと。ただ、そういった方というのは、自分で聞きたいと思ってもなかなか個人での顔見知りでしたらすぐ話を聞かせてくれってことはできますが、遠方から来られる方は難しい。全く知らない土地に来るわけなので、こういった施設で、そういう人を紹介してもらい、話が聞けてよかったと。中越地震の概要を見ることでよかったというふうに、感想をいただいています。

今ちょっといいことしか言いませんでしたが。

○司会 どうもありがとうございます。

では、もう1点ですが、この「回廊」について、ちょっと抽象

的な質問になってしまうんですが、これらのものを回る中で一番これを見てほしいというようなものがあれば教えていただければと思います。

○山崎氏 そうですね、これって言うと、物かなとちょっと今思ったんですが、一番見てほしいのは、物ではなくて、そこに住んでいる人たちですね。中越はもう過疎高齢化がとても進んでいるところで、中越地震のためにその過疎高齢化が一気に加速したとも言われているところなんです。なんです、外部からの支援をたくさんいただきまして、今とてもこの地域は元気になりました。どんどん人口も減っていますし、若手も町場に出てしまって山手の集落にはまだまだ過疎高齢化という問題が残っているんですが、とても元気なんです。今まで誰も来なかったような山の中に、観光バスが来てくれたや、お昼ご飯を食べるところがないということでお母さんたちはレストランをつくったんですね。山の幸を食べさせてくれるレストランをつくりました。さらに、山古志に来て、お土産が何もない、せっかく山古志に来てくれたのに、記念に残るものが何もない。じゃ自分たちでつくってしまえばいい、ということで、手芸作品を作り始めたグループもあります。また、おそば屋さんを始めた人もいますし、ピザ屋さんを始めた人もいます。

そうやって地域がどんどん元気になっていってる。人が元気になって、そして、とても受け入れられるようになりました。今までは知らない人が道を通っていたら、あの人どこの人だ、と言って、こう見ているだけだったのが、今では声を掛けられれば、ああここはこうでね、ああでね、誰にでも話せるようなそんな地域になったんですね。なので、もちろんその施設の展示ですとか、「中越メモリアル回廊」の現地の被害のあった家だとか道路も見ただきたいんですが、そこに住んでいる人たちとのふれあいというのをぜひ体験していただきたいというふうに思います。

○司会 では、これからなんですけれども、会場の方々から、御意見ですとか頂戴したいと思ってるんですが、数人になってしまうかもしれませんが、順番に手を挙げていただきましたら、マイクを持ってまいりますので、ごさいますでしょうか。

○男性1 このいただいている資料の21ページのところです、今のお話と若干かぶさるところがあるんですけど、要するに、「きおくみらい」見学対応ということで、見学者によって異なる対応が必要だと。で、その中で、一番上の自主防災組織や自治会、区長会、民生委員などあるんですけど、こういう方々への対応というのは、具体的にどういう対応されてるんでしょうかね。

○山崎氏 対応と言いましても、見学の対応ということになりますので、簡単な流れを言いますと、一番、先ほど見ていただいた映像をまず見ていただいて、そしてパネルで中越地震の概要を説明したものがありますので、そこで概要を説明します。その後、iPadをつかひながら、中越地震の被害から復興の様子を見ていただくという展示がありますので、そちらをごらんいただくんですね。で、希望があった場合には、その自主防災会の役員をさされてる方を語り部としてお招きして、別室、会議室で1時間ぐらいの講義と質疑応答の時間を設けています。そういったやりかた

が今のところこうだんだん定着してきたかなというふうに思います。

○男性1 そういった中で、地域自主防災組織の方の中からの語り部という人をお呼びして、話の内容というのはあくまでその震災当時の対応がですかね、それとも、それを教訓にして今こんなふうにもたまたま例えば、次に備えてこんなふうにはやっていますよと、どちらがベースになってるんでしょうね。

○山崎氏 そうですね、後者ですかね。今現在の取り組みを主にお話いただいておりますが、やはりその今できるだけ願っている自主防災会の方は、震災前から活動されている方たちでしたので、震災前にこういう活動していて、震災があった時、こういう活動した、そして、そこでこんな反省点があったので、今はこういうふうな取り組みをしているという一連の流れをお話いただいております。

○男性1 ありがとうございます。

以上です。

○男性2 こんにちは。京都からまいりました山田と申します。教育学の観点から、記憶のミュージアムなどに関心を持っておるものです。非常に興味深く、一度訪問させていただきたいなという思いを強くしました。で、私が思ったのは、追悼とあるいは想起すること、学習すること、あるいはコミュニティをつくることや、あるいは未来への備えをすることという、要素として非常にバランスがよいなと思ったのですが、このような形で要素を構成するというのを、どなたかブレインのような方がいらっしゃって体系化していらっしゃったのか、それとも、できていく中で、その体系を皆さんで考えていかれたのか、どちらに入りますでしょうか。

○山崎氏 そうですね。当初から、「メモリアル回廊」、各拠点施設を中越に点在させようというまずコンセプトがありました。で、その地域の特性を生かした展示ですとか、紹介内容にしていこうという展示運営委員会をする中で、「きおくみらい」であれば学術的にも対応できるような頭脳としての役割を持つ場所にしようですとか、小千谷はそういう防災に関する活動が震災直後も活発になっていましたので、そういったことを重点的に展示していこう。川口は、地域の方と外部の方のきずながとても深いところだったので、そこにメイン集中して展示をしようということで、整備の中で、浮き上がってきたものを重点的に見ていただくようになっているものですね。

です。例えば川口でしたら、地域の方と外部の方のつながりを見せていきたいということで、整備段階から地域の方に中に入ってもらって、地域の人たちがどういう施設にしたいのか、その地域の方の思いを形にする施設になりました。

で、小千谷もその小千谷市の住民の方はもちろんですが、小千谷市さんともこの「メモリアル回廊」に思い入れが強いものがありまして、自分たちもこういう展示をしてほしいという要望もありましたので、そういったその地域の方と一緒に話し合いをする中で、それぞれの展示の内容が固まってきたというものになります。

○男性2 展示運営委員会について、構成とか機能についてまたあとでお伺いしたく思いましたので、どうぞよろしくお願ひします。

ありがとうございました。

○司会 もうお二方ぐらい、いけると思うんですけども、ございますでしょうか。4時から5時までの間にもお話を伺いすることがありますので、それに参加されない方を優先させていただきます。そのほかありますか。

○男性3 ボランティアの一員なんですが、先ほどの仮設住宅なんかへの集落ごとに集団で入るようになってたのと、この考えかたは私の記憶では、ここの・・・河田センター長から聞いた・・・こちらから阪神淡路の関係も持っているんですがね、やっぱり慌てて、どこでもいいからとにかく早く欲しいなと仮設に独立したところに入りたくて・・・ですね。それで、孤独死なんかいっぱい出てきて、これはいかにからということで、この体験を思い知ってたら、新潟県では大いに活用していたと聞いている。それは1ボランティアにとっても大変なモチベーションになるんですよ。さっきのお話では、自慢話する気はもうどうもないと思うんですけど、この体験が次の大きな災害に生かされたんかなと今度の東日本とのコミュニケーションなんか・・・その辺、どう見ておられると考えておられるのかちょっとお聞かせいただけたらと。

○山崎氏 はい、まさにおっしゃるとおり、その阪神・淡路大震災の教訓をもとに中越地震ではその集落ごとに仮設住宅に入れようという動きが出てきたのはそのとおりなんです。で、本当にお恥ずかしながら私、本当に今日それをすぼっと忘れておりましたが、これも本当の話、「きおくみらい」で来た皆様に御案内するときは、いつもそのお話をさせてもらっているんですね。阪神・淡路では、くじ引きで皆さん入居されたので、隣近所知ってる人がいない、そしてひきこもりになってしまったり、孤独死の方がとても多く出たという社会問題がありましたので、中越地震では、そういった教訓を生かして、先ほどもスライドありました孤独死を出さないというのを合い言葉にして仮設住宅に入居されているんですね。同じように中越地震では、「エコノミークラス症候群」が問題になりましたので、そのあとの被災地にその社会問題が受け継がれていると。

です。ので一つの災害でやはり人間はそれぞれ何かしら教訓を得て、それを受け継いで行くということが今後の防災ですとか減災に役立っていくんですよっていうようなお話をさせていただいております。忘れずに伝えて行きたいと思ひます。

ありがとうございます。

○女性 済みません。一番つまらないことをお聞きしたいんですけども、これらの施設を見学するのに、拝観料はあるんですか。

○山崎氏 いえ、こちらは無料になっています。

お待ちしております。

○司会 では、どうしても御質問したい方がいなければ、これで一応質問は終了したいと思うんですがよろしいでしょうか。

では、これで一旦終了とさせていただきます。

どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 最後に告知ですが、全6回のミュージアム研究塾のうち、第3回目が、12月16日に開催されます。

第3回のテーマは文化財レスキューということで、3.11の後に文化財を救出しようと活動をされた方々とその展示について、講演をするということになっています。ぜひ参加してもらえればと思っております。

では4時から5時までの間、当館の1階で紅茶とコーヒーを飲みながら、このあともお話していただけるということですので、参加できる方は、どうぞ1階のほうに集合してもらえればと思います。

では、終了させていただきます。

どうもありがとうございました。

(拍手)

### 第3回「東日本大震災の文化財レスキューと展示活動」

日時：平成24年12月16日（日）

場所：人と防災未来センター西館1階ガイダンスルーム1

#### 1. はじめに

○司会 それでは皆様、長らくお待たせしました。ただいまより災害ミュージアム研究塾第3回東日本大震災の文化財レスキューと展示活動を始めたいと思います。それではまず、本日の講師の方をご紹介したいと思います。はるばる岩手県の遠野市からお越しいただきました。遠野文化センター調査研究課主査兼学芸員の前川さおり様です。

○前川さおり氏（遠野文化研究センター） 前川です。よろしくお願ひいたします。

○司会 そしてもうひとかた、震災からよみがえった東北の文化財展実行委員の若月憲夫様です。

○若月憲夫氏（震災からよみがえった東北の文化財展実行委員会） 若月と申します。よろしくお願ひいたします。

○司会 ありがとうございます。本日はこのお二人の講師の先生方に東日本大震災の文化財レスキューについてお話しいただく予定です。東日本大震災では地域の博物館、そして図書館が大きな被害を受けました。この被害を受けた文化財をレスキューしようと今回お越しいただいた前川様は、いち早く被災地に入ってレスキュー活動に携わるとともに、展示を通してそれを伝えるという活動が行われていました。また、若月様はそのレスキュー展をパッケージ化して日本全国へ持っていくという新しい試みをなされています。

それぞれ講師の先生には1時間ずつ、お話が50分、そしてその後質疑応答の時間を設けてお話しいただきます。それでは、前川さんから。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

#### 2. 前川氏による事例報告

○前川氏 皆さん、こんにちは。遠野文化研究センターというところで学芸員として働いております。2012年3月までは遠野市立博物館で学芸員をしておりました。4月からは同じ部局の調査研究課に移りましたが、博物館の震災関係の支援活動続けさせてもらっております。

今日は、「ふるさとの宝は失われていない」というタイトルで私がかかわった文化財レスキューと、それをなぜ展示として伝えることになったのかという事情をお話ししたいと思います。

私の住んでいる岩手県遠野市というところは、柳田國男の「遠野物語」の舞台となったところです。「遠野物語」には、遠野のザシキワラシや河童などの不思議な物語や、人々の暮らしのあり

さまが記されています。遠野市は、北上高地の中央に位置し三陸沿岸と内陸を結ぶ交易の中継地として栄え、古くから三陸とのつながりをもってきました。今回の津波で大きな被害を受けた陸前高田市、大船渡市、釜石市、大槌町、山田町、宮古市とは街道でつながっており、今も車で大体1時間から1時間半で行くことができます。鉄道が通る以前は、馬の背に米や野菜、塩、魚などの荷物を積んで大体1日ほどの距離で往来していました。当然、物流と一緒にたくさんのさまざまな情報と人間が行き交うため、自然と婚姻圏にもなっています。遠野の人間が、三陸にお嫁さんやお婿さんに行ったり、逆に三陸からお嫁さんやお嫁さんが来たりという血のつながりが、もともとあったのです。

今回の東日本大震災というのは、私たち遠野の人間にとってはある意味、三陸の家族親戚の一大事なのです。遠野の人たちの間でも、津波でうち（の親戚）は4人やられたとか2人やられたとか、そんな話が当たり前に語られています。

私の勤めていた遠野市立博物館というのは、「遠野物語」を主題にして、遠野の歴史と民俗を伝える民俗専門の博物館です。私自身も民俗学を専門にしている学芸員で正直を言うと文化財レスキューとか文化財の保存処理についての知識は余りありませんでした。せいぜい年に1回ある岩手県立博物館の講習会でそれを学ぶ程度でした。

震災のあった3月11日は、館内には数人の観覧者の方がいらっしゃいました。その方々を外に避難誘導した後も余震がおさまらず、そのまま閉館することになりました。閉館は4月22日まで続きました。建物そのものは、ガラス窓や壁にヒビが入ったり、展示物が1個落ちたり程度で大した被害はなかったのですが、私たち遠野市職員全員が災害対応に従事することになったためです。私たち図書館博物館職員が最初に命じられた仕事は、防災マニュアルに従って、避難所になっている下水処理場に行き、遠野市民の避難者を受け入れることでした。しかし受け入れるといっても、部屋にご案内するだけで何も配るものがないのです。停電して暖房も止っておりますから、寒さに震えている赤ちゃん連れのお母さんもいたのですが、どうしようもない。仕方がないので、一旦自宅に帰ってあったけの毛布を車に積んで戻りそれを配り、一夜を過ごしました。翌朝、博物館に戻ると、遠野市役所中央庁舎の柱がほぼ全壊し、辛うじて1本の柱で建物を支えていて倒壊する寸前であるとの新たな情報が入りました。そのため、建物の中にある行政文書やパソコンなどの貴重品類を全て外に運び出す作

業が始まるということで、選抜された市職員が行くことになり、私は「こりゃ、決死隊だな」なんて他人事みたいに思っていましたら、私も作業を命じられました。なぜかと言うと、市役所の展示ロビーや市長室には、寄贈を受けた貴重な絵画や書画などの美術品類がたくさんあったからです。私の仕事は、そういった美術品類を博物館の収蔵庫に搬送することで、実はこれが私の最初の文化財レスキューでした。

ヘルメットをかぶって市役所の建物に入っていって、余震で揺れたらあわてて外に出てくるというヒット・アンド・アウェイをくりかえして物を外に運び出しました。

公用車が全部出払っていましたが、私の自家用軽トラックで行って、さっさと仮梱包をし、車で3分くらい離れた場所にある館外収蔵庫にピストン輸送しました。

次にやった文化財レスキューは、東日本大震災に直接関係はないのですが、同年4月14日に市内のお寺でのものでした。漏電によって火がついてあっという間に本堂・庫裡が燃え尽きてしまいました。私達は、それをただ見ているしかなかった。本堂の中に指定文化財や仏像があるとわかってはいたけれども、その余りの火勢の強さに庫裡の中にいる和尚さんすら助け出すことが誰もできなかった。そのお寺は、我が家の菩提寺でもあり、和尚さんには日頃からお世話になっていたのですが…。鎮火宣言した後に、博物館職員で鳶口（とびぐち）を持って行って、焼け跡をあさって見つけたのがこの梵鐘です。遠野市指定文化財であった江戸時代の梵鐘を1個やっと発見することができました。梵鐘をつっていた綱に火がついて切れ、床下に潜り込んで落ちたために、火を受けずに焼け残ったという幸いな事例です。私たちがふだんの生活の中で体験する確率が高い文化財レスキューは、恐らく火災によるものだろうと感じました。しかし一旦火がつけば、そこから救出することはほとんど難しい。やっぱり文化財レスキューよりも災害を予防することが、ふだんの暮らしの中で大切だということを嫌というほど思い知らされました。また、市役所の貴重な行政財産をどこに避難させるかということも防災マニュアルでは、決まっていなかったことにも「ええ!？」と思いました。あんな分厚い防災マニュアルがあるのに、まさか自分たちの市役所が被災するということが想定されてなかったとは。結局、パソコンや書類などの行政財産は、倒壊を免れた市役所東館という別棟の建物に運び込みました。ところが、東館はもともと老朽化し最も危険であるとされて、普段は使用されていない建物だったのです。もしこの中に行政関係の方がいらっしやったら、自分たちの役所が被災したらどこに財産を持って行くののを考えておいたほうが良いと思います。これは私達遠野市だけではなく、これから御紹介する三陸沿岸自治体でも、役場が被災するという同じ目に遭っていたからです。

私がおの後にした仕事は、災害対応でした。米を集めて炊き、おにぎりを市民ボランティアと毎日3000~4000個握って三陸に送ったり、あるいは市民から寄付を受けた救援物資をいろんな手段で三陸に送ったり、何かしたいとやってくる市民ボランティアに仕事を見つけて割り振る災害ボランティアのコーディネーターみ

たいな仕事もやっておりました。そんな中で、通電してパソコンが使えるようになると三陸の博物館の様子や職員の消息を尋ねるメールが来るようになりました。しかし私自身も三陸の現場に行くことができなかったのも、やっと行けたのが3月28日のことでした。

その日は2週間ぶりに休みをもらい、一番気になっていた陸前高田市に行ってみました。その頃には、自衛隊が道路を啓開してくれていたのも、自家用車で浸水域の市街地までいくことができました。これが最初に見た陸前高田市立博物館の様子です。博物館の後ろの壁には窓がなかったので、瓦れきが正面からギューと押し込まれたような状態で中に入ることができません。恐らく車も2台くらい入っていたと思います。これを見た時に茫然としたのですが、博物館屋の性（さが）なんだろうね、天井とかに博物館資料がひっかかっているのを見つけてしまった。何とかできないだろうかと思いつつ、ここの職員の方々みんな亡くなっているという情報があったので、誰に相談すればいいのかわからなかったのです。博物館の後ろに回り込むと1カ所だけ開くドアがありました。そこを開けてみると、地面にたくさんの資料が散乱してはいるが、そこに1枚だけこういったメモ書きが挟まって残っていました。これを読むと、「博物館資料を持ち去らないください、高田の自然・歴史・文化を復元する大事な宝です。市教委」と書かれておりました。これを見たときに正直足が震えました。このメモが亡くなった博物館職員の人たちの伝言というか遺言のような気もしましたし、またこのメモを書き置いた方も市外からやって来た博物館関係者なんだろうなとも思いました。

「復元する」という言葉がすごく印象深く、あの豊かだった陸前高田市立博物館の資料をもう一度取り返せるんじゃないか、それを粗末にはいけないと思っている人間が自分以外にもいるんだということをこの置き書きは教えてくれました。私もその場で手紙を書きました。生き残っているという情報があったもう一つの陸前高田市の博物館「海と貝のミュージアム」の学芸員の熊谷賢さんあてです。博物館資料の回収作業をする日が来たら、必ず声をかけてほしい、広くこのことを手伝ってくれる人に呼びかけるから。今はお互いには動けない立場にいるだろうけど、でも無理をしないで、そういう日が来たら必ず電話をください、手紙でも構わないというふうを書いて、その足で陸前高田市災害対策本部に行って、そこにいた市職員の方に、この手紙を熊谷賢さんに渡してほしいというふうに渡しました。

それが無事に届いたみたいで、連絡があったのは4月に入ってからのことでした。電話では民俗資料を見てもらいたいとのことでした。陸前高田市立博物館には、国の登録有形民俗文化財があります。2,045点という膨大な数の陸前高田の漁労用具が収蔵されていたのです。これを何としてでも回収したいと言うものでした。熊谷さんとは歳が近く、資料の貸し借りや研修会で一緒になったりするような顔見知りでもあったので連絡があったのだと思います。やっと救援依頼が来た、これはもう遠野市立博物館、遠野市を挙げてそれに当たるべきだと思ったのです。当博物館職員は、理解してくれましたが、市の行政的な判断で、今は博

物館の公的な仕事として出すことはできないよというふうに言われたのです。今は人命優先の時期で文化財レスキューは時期尚早ということだったのかもしれませんが。それで私はその時ブチッと切れまして「わかりましたって。公務でなきゃいいんですよね。休みください。」と3月の震災対応勤務でたまった振替休日を使ってレスキューに参加させてもらいました。その時にやっぱりすごく悔しい思いをしたのです。一つは、岩手県立博物館や岩手県内の他の自治体教育委員会の職員の人たちは、公用車でチームを組んで公の資料を持ってきて文化財レスキューに当たっていたので、遠野の私たちはどうして出してもらえないのだろうという悔しさでした。もう一つは、レスキュー現場というのは、ふだんは一緒に働くことがないはずの分野の学芸員たちが同じ現場に集まって資料を探すのです。一つの石を見ても、これは化石だねとか、これは石器だよとか、これは漬物石だから民俗資料でしょというように、あらゆる分野の人たちが同時に知恵と知識を総動員させる。そういった情報と技術とを交換が行われる高度な学問の実践の場でもありました。うちの若い職員は、その体験を共有することができなかったという悔しさもあります。私が文化財レスキューを紹介する展示を行っていく大きな動機になっているのは「文化財レスキュー」そのもの、「文化財は災害時に救うべきもの」なのだということを理解してもらいたいという気持ちがあったからです。

その後、5月になって博物館活動として、レスキューを行うことができるようになりました。それは5月に新しく設置された「遠野文化研究センター」が、「三陸文化復興プロジェクト」という事業を立ち上げて、文化財レスキューと被災した図書館や学校に本を送る献本活動を行うようになったからです。博物館もそれに協力するかたちになりました。現在も継続して行っているところです。

陸前高田市立博物館の資料は、6万点以上が回収されました。全国から多くの人たちが集まってきて、回収作業をやってくれた成果です。博物館の専門家だけではなく、現場で大きな力を発揮してくれたのは自衛隊、特に青森県弘前市の第9師団第9偵察隊員でした。自衛隊員さんは行方不明者捜索をしていたので、一緒にやろうというふうに言ってくれたのだそうです。文化財レスキューの現場は、行方不明者捜索の現場でもあった。私たちもこの中に行方不明者がいたりするかもしれないというのは覚悟しながらも、おっかなびっくりやる部分もあったのは正直なところです。瓦れき回収が全て終わった後では、これほど多くの資料回収というのは難しかったかもしれません。

回収資料は、岩手県立博物館がリースしてくれたトラックや持ち寄りの軽トラック、あるいは自衛隊の一部車両で運んでいたりしながら、閉校になったばかりの生出（おいで）小学校に移送されていきます。現在もここが陸前高田市立博物館仮収蔵施設という形になって、安定化処理が続けられています。

その後は、大槌町立図書館のレスキューを行いました。大槌町は、遠野市と隣あった町で、町役場そのものが被災して多くの職員が津波の犠牲になりました。大槌町の図書館も市街地にあつて、

2階まで津波が浸水したのですが、1カ所だけ閉架書庫の扉が破られず残っていて、そこに郷土資料や明治以降の議会議事録を含む行政文書、公文書がたくさん残っていました。ここから行政文書160冊と郷土資料を600冊ほど遠野市に移送し、洗浄・修補作業を行っていて、2013年3月いっぱい完了する予定になっております。

他の文化財レスキューにも関わりました。あの頃は、ガソリンも不足しておりましたから、被災地の近くでガソリンが買えるまちは遠野市だったこともあります。

これは陸前高田市の「海と貝ミュージアム」にあったツチクジラのはく製標本レスキューです。全長約10メートルで、ツチクジラの皮の剥製標本はかなり珍しいものだそうです。この標本は、プラスチックのようなものでコーティングされていたため無事なんですが、津波で脇腹が破られて、そこから内部にかなり海水が入っておりました。また天井からつられていたのですが、だんだん下がってきた。このままだとツチクジラが真二つに折れてしまうだろうということで、国立科学博物館の方々がレスキューチームを組んでくださって、県立博物館と陸前高田市の「海と貝のミュージアム」の熊谷賢さんと自衛隊員と私たち遠野市職員が手伝うかたちで、天井から取り外して仮架台に吊って外に運び、クレーンでつってトラックにのせ、つくばの科博収蔵施設に移送する作業を行いました。

釜石市では、国文学研究資料館の呼びかけで、釜石市役所の海水損した行政文書の乾燥作業の手伝いに行きました。ここで「スクウェルチ・パッキング法」という誰にでもできる、資材も近くのホームセンターで買える簡易な乾燥法を教わりました。

また釜石市郷土資料館の収蔵庫洗浄のお手伝いもやりました。旧釜石第一中学校にあり、資料の流失はまめがれたものの、津波を被っていました。ここで山形県文化遺産防災ネットワークの人たちと出会って、山形県や宮城県、福島県の状況の情報交換もできました。

こちらは、陸前高田市の埋蔵文化財収蔵庫です。ここも津波で建物を持っていかれて土台と建物の一部が残っておりました。ここは、岩手県内の教育委員会埋蔵文化財担当職員が集まって大体2週間程度、その後は自衛隊と陸前高田市の方で回収作業を行った事例です。私たちも数回参加しました。

大槌町立図書館から遠野市内に持って行った資料は最初、このように立てて風乾しましたが、なかなか乾きませんでした。なぜかと言うと粘りの強い泥が、本のすき間にベトトリとふたをするようにこびりついていたので。困ったなと思っていた時に、先ほど釜石市で習ったと言った「スクウェルチ・パッキング法」をやってみたら、目覚ましく乾き始めました。これは、掃除機と座布団圧縮袋とキッチンペーパーと新聞紙を使った乾燥方法です。ところが、乾いてもシットリした感じが取れない。水分を測ってみると20%以上の水分が維持されたままということがわかった。通常の紙は、大体7%くらいの水分です。やっぱりちゃんと塩分を抜いて洗わないといけないということになりまして、「東京文書救援隊」という国立公文書館や資料保存関係者で結成したボラ

ンティア組織から資材提供と技術レクチャーを受けて、「エア・ストリーム法」という水洗方法を行うことになりました。資料を目の細かい金網ではさみ、浮き板ののせて揺り動かしながら、金網の上からハケで資料を洗っていくという方法です。洗ったらペット用タオルで水気を取って、このようなラックに取り付けた扇風機で一方方向から風を送ると、3時間くらいで乾きます。この作業を多くのボランティアさんに協力してやっていただいております。この技術は習得が容易で、大体2時間くらいやり続ければ普通に誰でも習熟できる技術なのです。このような修復の専門家が来るまでの時間を地元の人間が稼ぐことができる技術提供はありがたいものでした。野戦病院のように被災した資料が大量にある状況で、岩手県立博物館などの高度な保存科学技術の専門家のいるところで修復される資料の優先順序を考えると、最初はやっぱり貴重な指定文化財の古文書類であり、そうでない優先順序の低そうな資料は、その間に放置すればするほどカビが出て手がつけられなくなっていく。被災の最前線に立っている地元の人間は、資料を専門家のところに連れていくまでの時間を稼ぐ必要があります。

私は次第に文化財レスキューというのは、専門家でなくてもできることがあると思い始めていきました。実際に自衛隊員さんたちだっ、災害ボランティアさんたちだっ、やれることがあったからです。これは、陸前高田市高田小学校の子供たちが遠野へ遠足に来たので、被災土器片の水洗作業を体験していただきました。発掘した土器片の水洗作業は、ふだん遠野市内の学校でよくやっている体験です。1本の歯ブラシでシャカシャカシャカと軽くたたくように泥を落としていく作業を通して、文化財に身近に触れ、地域の歴史を実感しようねらいがあつてやるのですが、たまたま高田小学校の皆さんがいらっしやっしたので、津波の砂にまみれた土器片を洗う文化財レスキュー体験をしてもらいました。こんな時だからこそ、地域の文化財というものは、ハードルが高い存在ではなく、身近なものだと感じてほしかったのです。

陸前高田市立博物館のレスキューをしている時にも、周囲の家でアルバムなどの思い出の品を探そうとする人たちがたくさんいらっしやいました。博物館にも、寄贈した物は何か残ってないかと訪ねてくる人がいました。あの苦しい状況の中で、自分の家やまちの思い出の資料を探していたのは、被災地の人たち自身だったのです。心の支えになる家の思い出、地域の思い出を取り戻したいと行動することが必要だったのだろうという気がします。それこそが文化財レスキューの意味だと思いました。瓦れきと一緒に地域の大切な思い出、ふるさとの宝である文化財が捨てられ、失われていくのではないかとこの恐れから、文化財を救いたいと思っている人間がいるんだということを、被災地の人たち、あるいは毎日遠野から出発していく災害ボランティアに知ってもらいたいと思いました。7月22日から9月29日まで「文化財を救え！～東日本大震災と文化財レスキュー」というタイトルの展示会を急遽やりました。文化財とはこんなものということを知ってもらうため、すでに回収した被災資料を展示したのです。特に陸前高田市の資料は、地元職員の人たちに救出や思い出のエピソード

ドを聞いて紹介しました。選んでもらいました。これが、これから皆さんにごらんになっていただく「震災からよみがえった東北の文化財展」の最初の出発点でした。とにかく文化財レスキューを知ってもらうこと、多くの図書館、博物館、文化財が被災しているという事実を、内陸や東京の人たちに知ってもらいたかった。この展示は、申し出があつて東京の代官山のヒルサイドテラスでもやりました。この展示を大規模に開催したのが、2012年2月～3月にかけて東京都立中央図書館でやったものです。この展示会には、秋篠宮両殿下と眞子内親王様も観覧にいらっしやいました。今日は時間を気にせず全部説明してくださいと言われ、展示資料を一個一個丁寧に見ていかれました。秋篠宮殿下は海洋生物に関心が高く、よく大槌町などの三陸にも行かれていたし、陸前高田市の鳥類標本のレスキューをしていた山階鳥類研究所の総裁でもあり、文化財レスキューとの関わりがあつたようです。そのため陸前高田市立博物館のアカシヨウビンののはく製標本にも注目していました。眞子内親王様も文化財レスキューに関心が高かつたようです。秋篠宮家の方々が、一個一個丁寧に見て行かれたということは、そのことを三陸の人たち、文化財レスキューを応援していることを伝えてほしいという意味もあつたろうと思ひ、借用資料を返却に行ったときには、秋篠宮家のことを伝えながらお返ししました。

文化財レスキューの展示を作る時には、幾つかのジレンマがありました。一つ目は、福島県の展示、原発事故の影響をどう展示するのかです。福島に行って、実際に文化財レスキューに携わっている福島史料ネットや福島県立博物館の人たちのお話を聞きました。飯館村から全村避難の際に回収され避難中の文化財や須賀川市収蔵庫の土石流災害から救われた資料、福島県浜通りからレスキューされた民間所有資料も一部あるとのことでした。しかし何を展示したら福島の現在を伝える資料なのかかわからない。その時、福島の人たちは繰り返し言っていました。自分たちはまだ文化財レスキューのスタートラインには立っていないと。多くの文化財、博物館の資料が放射線下にさらされたままそこに置き去りにされているのが今の福島だとおっしゃっていました。そうだとすれば「展示すべきモノがない」状況が福島なんじゃないかということに気づいたので。資料そのものを展示することはやめました。かわりに「救出されるべき福島の文化財」みたいなキャプションでもつけて空のケースを置こうかなと考へましたが、それでは余りにも空虚で寒々しい。そこで福島史料ネットの人たちに今伝えたいメッセージがあつたら送ってくださいとお願いしたところ、手書きでこういうメッセージをいただきました。「放射線下の文化財を見捨てないでください」とごくシンプルなメッセージでしたが、それを張り出すことにしました。ちょっと逃げたような感じもしますが、やっぱりそれが自分の思つた福島の今だから、このような形の展示しようと決めました。

もう一つは、どの津波の映像を展示するかという問題です。東日本大震災からまだ日が浅いので、津波の映像を見た時の心理的な影響、PTSDなどの可能性もありました。また、今回ほどたくさん津波の映像が撮られた時はありませんでしたから、どの

映像を選ぶかと考え、こだわったのが「博物館資料としての津波映像」です。それは岩手県立水産科学館に、市民から寄贈され展示公開されたものなのですが、後ほど展示の中でご覧いただけます。

一番大きかった問題は、被災実物資料を展示する問題でした。まだ被災実物資料は、まだ決して安定した資料としては言えないのです。今回展示しているものは、当然1回水洗し燻蒸ガスもかけたものです。しかし、津波による海水損した資料の経年変化を誰も体験したことがなくて、カビのリスクが去ってない。貸出側からその怖さを指摘されました。もう一つは、展示することによって安定化作業が、終わったかのような誤解を生む可能性も恐れていました。まだまだ抜本的な安定化処理は、いまだ続いている状況だからです。今回は、それをきちんと説明するよということで貸し出しを受けております。遠野市立博物館での展覧会では、文化財レスキュー関係者に集まってもらい、お互いの状況を交換し合うようなフォーラムを持ちました。フォーラムで、それぞれの文化財レスキュー関係者は、自分たちの目の前のことに一生懸命で、その近隣の様子を初めて知ったとか、お互いに同じ問題を抱えているとか、逆に異なる状況など情報交換をすることができました。

2012年には、国立科学博物館のコラボミュージアムという支援事業を一緒にやりました。被災地の博物館の希望を募り、アロサウルスという肉食恐竜の骨格標本を貸し出して展示する企画です。陸前高田市会場では、「震災からよみがえった東北の文化財展」の展示解説スタンドや展示ケースを動かして、ミニ巡回展というかたちで展示活動の支援の一手段として使いました。

平成24年度は、静岡県庁、愛知県大府市横根公民館、兵庫県人と防災未来センターで巡回展示をしております。この3県は遠野市が東日本大震災の被災地支援活動を通して特にお世話になったところです。

静岡県は、東海地震に備える意味もあり、非常に熱心に支援活動にあたり、防災のためのデータを取っていっています。静岡県庁での展覧会開催中に、静岡県教育委員会は「文化財救済ネットワーク」を立ち上げました。災害に備え、官民一体になって県庁の文化財保護課の呼びかけに応じたいろんな団体の人たちがネットワーク登録をしていきました。つたんですね。それと同時に「文化財救済支援員」の登録制度も立ち上げました。これは文化財レスキューの民間ボランティアです。災害時に、身近な文化財のある場所に駆けつけ、回収作業や応急処置にあたり、あるいは連絡・案内役になってくれるようなリーダーになるべき人材を募って、文化財の取扱講習会を行い、登録しようという制度です。この制度の研修会ということで、展示解説もやりました。岩手県で最初に文化財レスキューに立ち上がったのは、市民だったという話をしました。陸前高田市立図書館に所蔵されていた県指定重要文化財である「吉田家文書」という古文書を救うため、ふだんからその古文書解読に取り組んでいた地元の古文書の会の人たちが、津波にあった図書館に古文書が残っていることを発見して、それを引っ張り出そうとしました。それがきっかけとなり、

陸前高田市と岩手県教育委員会、岩手県立博物館によって回収され、岩手県立博物館に移送されました。古文書という文化財を救うことを求めたのは、ふだんから目にして親しみ、大切にしてきた、市民自身だったのです。大規模災害の時には、自治体職員も陸前高田市や大槌町職員のように亡くなったり、被災して現場に行くことができなかつたりします。また、人命優先の災害対応業務に当たるので、そういう状況の中で、最初に文化財を見に動けるのは、近くにいる市民の方なんじゃないか、という話をしました。災害に備えようという意識が高い静岡県の人たちには、こちらも勉強させてもらいました。

今回の東日本大震災の文化財レスキューの反省は、災害時には「文化財も救うべきものなのだ」ということを理解してもらうのに時間がかかってしまったことです。ふだんから災害時の資料の取り扱いに対する関心が私自身も薄かった。博物館に勤めている私ですらも、保存科学の専門家たちが行うものというハードルの高いイメージがありました。実際、フタを開けてみれば文化財レスキューの現場にいたのは、市民や自衛隊員だったのです。

回収された資料ですが、まだ安全で恒久的な保管先が工面できてない状況が続いております。今年に入ってから文化庁の補助金を受けて、プレハブ収蔵庫の建設が始まったところも出てきましたが、山田町の「海と鯨の科学館」のように洗浄した資料を被災した博物館の建物の中に戻さざるをえないところもあります。なぜならば、高台移転の場所が少なく、まだ住宅も十分に建てられないような状況では、文化財収蔵庫はなかなか建てられる場所が確保できなかったり、市民感情に配慮して時期をみながらというところもあります。

しかしその一方でレスキューされた文化財をただ死蔵させてはいけなく、博物館活動を停滞させてはいけなくという危機感もあります。先ほどの「コラボミュージアム」のような展示活動や教育普及活動の援助など、文化財レスキューそのものでない部分での援助もあるのではないかと。

また一番大切なことは、文化財をできるだけ多くの人に身近に感じてもらうことです。このことが、どこの地域においても最終的に文化財を救うセーフティーネットになるだろうと考えています。東日本大震災をきっかけとして、自分たちが住む地域で起きた過去の災害に目を向ける。そして将来、災害が起きた時に文化財を救うのは自分かもしれないと、展示を通して感じてもらえればよいと思っています。

陸前高田市立博物館で博物館資料の安定化処理と博物館復興に取り組んでいる学芸員の熊谷賢さんは、「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」と言っています。彼自身も文化財を探すより行方不明者を捜せと言われた。しかし自分がやらなきゃいけないのは「ふるさとの宝」を残すことだ、と信じてやっていると述べていました。

東日本大震災は、このようにいまだ収束をみない、終わらない災害ではありながら、同時にその記憶をどう風化させず伝えていくかを考える時間にもなっています。災害の記憶を伝えていく試みの一つの例ですが、陸前高田市中央公民館の壁のメ

ッセージです。この場所では80人ほどの方が亡くなっているそうです。ここの壁にマジックで母親への感謝を込めた二人の娘さんのメッセージ書かれていました。娘さん達のお母さんは、中央公民館の女性職員で、震災の日は最後まで市民の避難誘導に当たり亡くなられたそうです。この女性は、父親から常々津波の怖さをよく伝え聞いていて、娘たちにも教えていたそうです。娘さん達は、そんなお母さんがなぜ犠牲になってしまったのかという悔しさ、お母さんが生き活きと働いていた場所を忘れないと言っているそうです。娘さんたちは中央公民館の保存を希望されていましたが、建物は結局取り壊されて、メッセージのある壁だけが一部切り取られ、陸前高田市内に保管されております。いつか、もしかしたら新しいまちづくりの中で東日本大震災の記憶を伝える「文化財」として展示されるかもしれません。ていくだろうと、決して自分たちのまちの歴史を忘れない。そして、過去を踏まえながら自分たちは新しい未来を生きていく、そういった決意が込められていた壁のメッセージです。

私の話はこれで、以上で終わらせていただきたいと思います。どうも御清聴ありがとうございます。(拍手)

### 3. 若月氏による事例報告

**〇司会** それでは続きまして、震災からよみがえった東北の文化財展実行委員の若月様にお話しいただきたいと思います。

なお、若月様ですが、今回は震災からよみがえった東北の文化財展の実行委員会としてお話をさせていただきますが、平和祈念展示資料館の事務局長でいらっしゃいます。それでは、若月様。よろしく願いいたします。

**〇若月氏** 若月と申します。よろしく願いいたします。

今、前川さんのお話、非常に感動的だったかと思うんですが、この後、引き続いて展示解説を聞きながら、実際に展示を見ていただくとうまいのですが、その間に私の話をはいります。これ本当は、余計なのかなと思いつつ、でも一応、前川さんのお話を少し補足させていただく意味でちょっとお話しさせていただければと思います。

「震災からよみがえった東北の文化財展」その企画の経緯と展示のポイントです。

まずこれですね、震災からよみがえった文化財実行委員会、あえて私は今回、この名前前で登場させていただいているんですが、「震災からよみがえった東北の文化財展」は、前川さんのお話もございましたように、遠野市さんが中心になりまして、被災した各市が入っています。ちょうど遠野ってこの扇のかなめ、このような感じのところにあるわけです。そんな関係で遠野市が中心になってこの実行委員会を組織しているのですが、日本ミュージアム・マネジメント学会もこの実行委員会に加わっています。

博物館関係の学会は幾つかあるんですが、一つは全日本博物館学会という伝統的な学会、それからもう一つが、この日本ミュージアム・マネジメント学会で、私はその会員ということでこの学会を代表して遠野市の学芸員の方とともに、東北の文化財展の展示の企画に参加させていただいています。そんなわけで今回実

行委員ということで発表させていただきます。一方で先ほど、阪本さんから話もございましたように、ことしの4月から新宿にございます平和祈念展示資料館の事務局長をつとめております。この資料館には、数年前から運営にかかわっているんですが、ことしは専属で事務局長をやらせていただいております。

お手元に平和祈念展示資料館のリーフレットがございます。この資料館、実は総務省直轄の施設ですが運営は民間委託ということで、この資料館を運営しているのが株式会社乃村工藝社です。もともと私は、ここの社員で、そういう意味で展示のプロといえますか、展示の中で生きてきた人間でございます。

で、ちょっと、この平和祈念展示資料館の宣伝をさせていただきますと、場所は三角ビルとも呼ばれる高層ビル、新宿住友ビルの48階でございます。さきの大戦における兵士、それから戦後強制抑留者、海外からの引揚者の体験のした労苦を語り継ぐことがねらいになっています。

で、これがその高層ビルで、これが48階の入り口です。三つのテーマの労苦を語り継ぐというねらいのもとに、展示ですとか、あるいは関係資料の収集保存ですとか、それから館内館外で普及交流活動、といったことを行っています。資料館自体の面積は約700平米と大変に狭い資料館ですけれども、ここを拠点として全国でいろんな活動を展開しているといったところが特色です。

さて、本日の発表ですが、四点ございます。

まずこの展示会が実現するまでの開催の経緯、展示の工夫点、それから今年度の活動。これは先ほどの前川さんのお話ともダブるところがございますが、私の場合は写真が中心です。写真がかなりありますので、前川さんの話を裏づけるような形でごらんになっていただければと思います。

そして最後に、負の記憶を伝える展示ということで、たまたま震災をテーマにした資料館に勤めていますので、その震災と戦災の展示のあり方を比べてみるという話を加えてみました。

以上四つのテーマでお話しさせていただきます。

最初に、この展示会が実現するまでの経緯です。

3月11日に発生した東日本大震災は、多くの人々の命や生活の基盤を奪いました。同時に、この震災や津波によって数々の大切な文化財も失われてしまいました。こうした文化財を守るための文化財レスキュー活動が文化庁の指導でいち早く開始されました。

東日本大震災、いろいろな分野で進んでいるところ、おきているところがあるんですが、実は文化財は結構進んでいるほうではないかなと思っています。一番の発端はやっぱり神戸だったんですね。そのときからボランティアとかが始まって、それから何年か経って割と成功したほうだと思います。文化庁もいち早く乗り出しまして、全国の博物館関係者がその活動に参加されたということです。これは遠野市の取組みですが、参加までジレンマがあったというお話、前川さんからもございましたけども、5月くらいから本格的にスタートして地の利を生かして遠野市の方々、精力的に活躍されたということかと思います。

いち早く、そのことを伝えようとするのがこちら、「文化財

を救え！東日本大震災と文化財レスキュー展」。先ほどお話があったかと思います。その会場の様子がこちらでございます。

狙いとしては当時そこにいたボランティアの方々、そういった方々に文化財レスキューという活動を知ってもらうことであり、文化財レスキューによって資料が救えるんだといったこともあったかと思います。

さて、この展示会、これがきっかけになりまして震災1年後となる平成24年の3月11日前後、ちょうど1周年を機に文化財レスキューによって救い出された東北の文化財を一堂に集めて、集客力の高い東京で展示会をしてはどうかという計画に発展していきました。遠野市文化研究センター、それから市立博物館を中心としながらも全国的な情報発信の広がりを持たせていくために我々ミュージアム・マネジメント学会も加わり、さらに文化庁の文化遺産を生かした観光振興・地域活性化事業、ミュージアム活性化支援事業といった補助金も受けることができました。

そして、当初こんな感じの予定で考えていたんです。まず東京での展示会、それからそれと合わせたシンポジウムをやる。それにプラスして、遠野での里帰り展とシンポジウム。この三つで考えていたんですが、ゴールデンウィークにいち早く文化財が危ないというテーマの写真展を立ち上げたグループがございまして、その2弾としての企画を融合して行ったらどうかということになって、4番目の企画として代官山での秋の展示会が加わりました。

その様子をごらんになっていただきたいと思います。これは震災から1周年に行う本番の文化財展のプレ企画という位置づけで、産経新聞社の報道写真展と遠野市立博物館の企画展を終了後にそのまま移設したもので実施しました。会場は代官山のヒルサイドフォーラムというところで東京でも大変おしゃれな場所でございます。これがその展示会の風景ですけれども、こちらの左側、これが産経新聞社の報道写真で文化財レスキュー活動取材したものです。そして右側、こちらが遠野市博物館の企画展で9月の末に終わったものをすぐさま代官山に移設してそのまま設置ものがございます。

この二つの展示に加えて、文化財レスキューに応援のメッセージを書いていただこうというコーナーも設けました。これが御来場いただいた方に書いてもらったメッセージの数々です。またロビーでは忘れられない記憶といたしまして被災した直後の様子、それから半年後の様子取材した新聞記事で構成しました。デザイン的には夜になると「絆」という文字が外部からみえるような工夫をうたしました。

さて、この会場では、1周年を契機に「震災からよみがえった東北の文化財展」をやるぞということポスターで告知したんですけれども、実は、まだこの時点では会場は調整中だったんです。当初は江戸東京博物館あたりでやりたいなと、そんなことも考えていたんですが、博物館とか美術館は、予定が埋まっています。そんな中でいろいろ探し、協力をしていただけることになったのが都立中央図書館さんなんです。都立の中央図書館と言えば日本を代表する図書館

です。東京には国会図書館がありますが、それに次ぐ規模の大きな図書館です。こうしたところを会場にすることができるということは、素晴らしいことで、情報発信力に期待が持てます。

さて、このように会場が決まった頃、先ほどの前川さんのお話には、展示準備などのバックヤードの話はなかったのですが、遠野市の学芸員の方々が、被災地の方々とコンタクトを取りながら展示の準備を進めてまいりました。

同時に私たち学会も何か被災に関係する活動を、ということで、日本ミュージアム・マネジメント学会主催の被災地ミュージアム訪問交流を実施しました。これは三陸の被災したミュージアムを北から南へ2日間で回るというコースで、こういった活動がその後、文化財展の企画を具体化していくうえで、大きく役に立ちました。

その様子を簡単に紹介して見ますと、12月3日の午後11時に盛岡を出発しまして、久慈市のまちなか水族館と被災した「もんぐらんぴあ」を見学。宮古市に移りまして県立水産科学館、2日目は山田町にある鯨と海の科学館、そして途中、大槌町を車内から見学いたしまして釜石へ移動して郷土資料館、食事は車内で済ませるといって強行軍で大船渡市立博物館、そして予定にはなかったんですが陸前高田の博物館とその隣の体育館、高田の一本松も何とか見ることができて、一ノ関駅で解散。と、こんな強行軍での視察を行いました。

そして、いよいよ都立中央図書館を会場とした「震災からよみがえった東北の文化財展」が開会いたしました。

2月26日から3月11日までの期間で、初日の26日のオープニングのセレモニーは遠野市長などの挨拶に続きまして、三陸の民俗芸能である虎舞の実演。これは二対の虎で舞うんですけども、三陸地方の郷土芸能として非常に有名です。

そしてオープンのテープカット、これを実行委員会を代表する遠野市長を初め三陸沿岸の方々、それから日本ミュージアム・マネジメント学会の副会長も加わってやらせていただきました。

これが正面です。入口を入りましてエレベーターで進んで4階、これが会場です。そして会場構成ですが、二つの部屋に分かれているんですけども、この多目的ホールを展示室A、こちらの企画展示室を展示室Bという構成といたしました。

さて、この多目的ホール、非常に天井が高い広々とした空間なんです。そこでこの空間を生かして被災地で繰り広げられた文化財をめぐるドラマを再現したいと考えました。未曾有の震災を乗り越えてというテーマで行ったのですが、気仙沼から始まってずっと三陸沿岸を巡って久慈へ、ちょうど先ほどのJMMAの視察のルートとは逆に南から北へめぐるといって展示を構成していきました。

一方、この展示室Bですが、これは通常の天井高の、普通の展示室なので展示物を整然と並べるような構成としました。展示室Aとは異なる印象の展示を目指してみました。ごらんのようにこちらは古文書ですとか図書ですとか、そういった資料の分野別にみていくような構成としました。この文化財レスキュー、各分野の博物館の専門家が一堂に集まるということが非常に特色だった

ということですが、そういったことをもイメージしたレイアウトです。

それから、都立中央図書館の資料保全技術も紹介しました。会場である図書館とのコラボレーションも意識した企画です。

そしてこの展示室AとBとを挟む廊下を使って、情報コーナーというものを設けました。ここでは先ほどの代官山展を紹介するコーナーを設けるとともにそのときに来館者に書いていただいたメッセージを、デジタルフォトフレームを使って紹介しました。

そして、会期中の3月4日には遠野文化研究センター所長の赤坂先生と立正大学の三浦先生の対談を実施しました。また3月9日には秋篠宮御一家にも来館していただきました。

そして、3月10日と最終日の11日には前川さん、それから長谷川さんというもう一人の遠野市立博物館の学芸員によるギャラリートークを実施いたしました。きょう4時から、このギャラリートークを体験していただけます。やはり話を直接聞くと本当に感動する物語が数多くございます。

さて、その感動する物語ですが、先ほど前川さんのお話の中にもいろいろなストーリーが出てきました。こうした被災地の心をどう展示として伝えていくか。ふつめのお話といたしまして、東北の文化財展の展示として工夫点を述べさせていただきたいと思えます。

展示全体のスタートとしたのが先ほどのお話「瓦礫の中のメッセージ」です。津波にのみ込まれた陸前高田の博物館の室内にあったノートの切れ端のようなメモ。それがこれですけれども、博物館の資料を持ち出さないでください、高田の自然・歴史・文化を復元する大切な宝です。。。これですね。この資料を見たときの前川さんの気持ち、先ほど語っていただきました。これがやっぱり展示のスタートだね、これから全てが始まる、ということでこの瓦礫の中のメッセージを、前川さんのお名前も入れて展示にいたしました。

それから、これ。あの日、3月11日を忘れないということで、その記憶を改めて思い出していただくために大型映像を導入いたしました。ここでは津波の様子が脈々と映されておりますが、震災からまだ1年、本当に記憶に生々しいということで映像処理をして、非常にゆっくりした動きにしたり、ちょっと色を落としたりして、ご覧になった方にショックを与えないような加工を施しました。そして、津波のことを伝える新聞記事、それからこの時間でとまった時計も展示しました。きょうはこれらの実物、皆さんごらんになっていただけるかと思えます。

そして今回の「震災からよみがえった東北の文化財展」の特色がこのエピソード展示です。

これがその構成ですが、ここを読んだだけで大体、何が言いたいかわかるというメッセージコピー、それからその英訳、さらに詳細な情報を読んでいただくキャプションがこれになります。それから展示の番号、これは展示の解説シートなどと照合できるようになっています。それから資料展示。これらをひとつのセットといたしました。このメッセージやストーリーの核は遠野市の学芸員の方が作ったわけですが、その心というか魂をくみ取って、

我々は、それを一つのシステムとして、あるいは展示の装置として仕上げていったわけです。

被害が大きかった陸前高田のエピソードを紹介させていただきますと、ただ一つ残った高田人形。壊れていたためビニール袋に入っていた高田人形。ほかの人形は海水に溶ける中で壊れた人形だけ、壊れていたがために奇跡的に残ったという話です。こちらです。壊れていたから残ったんですね。ほかの人形はみんな溶けてしまったというお話です。

このように一つ一つの話や、物語として構成していきました。津波で亡くなった学芸員の口癖が、「漫画は昭和の浮世絵」ということで、その意志を受け継いで文化財レスキューに取り組んだというお話です。このあたり、私が語るよりも後で前川さんに熱っぽく語っていただいた方が良いかと思えますけれども、そういった中で漫画の本、これを展示したわけです。このような本、レスキューの対象にすべきかどうかということもあるわけですが、ここでは亡き学芸員の心をくみ取ってレスキューしたというストーリーです。

それから日常的な博物館活動、これがいかに大切であるかというエピソードがこちらの展示です。タグがついていたために博物館の所蔵資料としてレスキューされたというお話です。この資料、民俗資料なんですが、これが瓦礫の中に入っていたらどう見てもごみと間違っちゃうような資料です。ところがこれです。タグがついているんですね。あ、これはタグがついている、これは博物館資料だ。ここで判別できるわけなんです。そのタグをつけるという地道な作業に10年間取り組んでいたのが実はこの方でした。残念ながら亡くなってしまったんですけど、こういった地道な作業がまさに地域の文化財を救った、そういったストーリーでございます。

次の物語は文化財のレスキューに携わった学芸員のドラマでございます。陸前高田の博物館にはせき坊と呼ばれるアイドル資料があったんですね、これです。こうやってチラシなんかに使われていたんですけども、それが津波にのみ込まれてしまったということで、瓦礫の中から何としてもこの資料を見つけ出してやるぞという学芸員の執念。岩手県立博物館の方ですが、これが見つけられたときの勝利のスナップ写真です。

それから津波の恐ろしさを物語るお話です。陸前高田の海と貝とミュージアムのオオシャコ貝ですが、半分は津波で流されて半分だけが残りました。これが残った貝ですけども、代官山の展示では、ただ貝を置いただけだったんですが、これだとただの大きい貝、デカイ、ということになるんで、中央図書館の展示では、ありし日の姿の写真パネルも合わせて展示しました。本来は二つだったものの片方ということを確認するために、貝を立てて見せたのですが、これでは非常に資料が危険だという意見も出て、今回の神戸の展示では、寝かせています。

そしてもう一つの津波の恐ろしさを物語る展示というのがこちらです。三陸地方は昭和8年にも津波に襲われているんですけども、そのときに海岸から巨大な石が陸に流されました。その石は津波石とよばれて碑文が刻まれて非常に大切にされていたんですが、

いつしか人々はそのことを忘れ、その上を道路にしちゃった、道路の下に埋もれてしまったんですね。それが今回の津波で道路が流されてひょっこりあらわれたんです。それがこの石です。展示に当たっては昭和8年に刻まれたこの碑文、この石の碑文の拓本を取りました。ここに津波記念石と書かれています。こんなエピソードもあるわけです。

以上、幾つかのエピソードを紹介しましたが、ほかにもございます。きょうは展示をゆっくりごらんになっていただければと思います。

それから、特色的なテーマを物語る、テーマ展示というものも設けました。その一つが、民俗芸能のコーナーでございます。

オープニングのイベントで実演されたように、三陸地方は虎舞が大変に盛んで、それを中心にして紹介しました。シンボルの展示がこの虎舞の頭です。名前は、次郎といいます。実はこの次郎君には、物語がございまして、6月に釜石の瓦礫の中で遠野市の職員が発見しました。で、遠野市立博物館の展示で持ち主不明として展示したところ持ち主があらわれまして、双子の虎、虎舞では虎が二対でてくるのですが、その双子の次郎であることが判明いたしました。代官山の展示会ではポスターのキャラクターとしても採用され、いわばさすらいの虎次郎といつことで、非常にひょうきんな顔をしているんですが、実は、虎舞の頭は、本来精悍な顔なんですね、このひょうきんな顔、ここをよく見ると実は潰れているんですよ。そうなんです、これ実は被災を物語る資料なんです。ということで、この次郎君、恐らくは虎舞に使われるというよりは今後津波の恐ろしさを後世に語っていく資料になっていくんじゃないかと思っております。

それから三陸の人々の海への心を物語る「海とともに生きる」というコーナーを設けました。ここではよみがえる奇跡の海ということで、津波の被害を受けながらも再生しつつある海の様子を写真と動画で紹介しました。この展示、東京でやったときには固定的な展示だったんですが、移動展示できるように若干途中でつくり変えて、今ではこのサインとパネル、映像がセットで展示できるようになっています。

津波の記録を伝える方法の一つが伝承です。このシアターでは明治三陸津波の記憶を紙芝居風の朗読で紹介しました。題材になっているのが遠野物語の99話で、明治三陸の津波で妻を亡くした男の1年後の物語です。ちょうど「震災からよみがえった文化財展」を中央図書館でやったときは1周年だったので、そのことになぞらえて紹介しました。ストーリーを簡単にお話ししますと、夢に出てきた亡き妻がかつてうわさのあった男とあの世で夫婦関係、ラブラブな関係になっていると、そういったことで震災から1年後の男の心の葛藤を伝える物語です。内陸の遠野で津波の記憶が語り継がれるということ自体大変非常に興味深く、この文化財レスキューの原点がこういった伝承にあることをメッセージした展示でございます。

この「復興した三陸の街」という展示ですが、被災地もやがては復興するのだという、そういった強い願いを込めた展示です。原画はこの鳥瞰図ですが、これは釜石を描いたものなんですが、

東京や遠野など、このたびの文化財展に関係するところが全部一つに描かれています。この写真は、昭和8年の津波の前後のもので、津波に襲われる前、襲われた後、そして4年後。この4年後の釜石を描いたものが、この鳥瞰図です。最初つくったときは展示室Bの入口という位置づけだったんですが、入口というのはイコール出口にもなるわけで、最後にやはり未来に向けての話ということで、ギャラリートークでもエピソードとして、取り上げられるようになっていきます。今回の神戸の展示でも最後のところがございます。

さて、この文化財展ですが、アンケートを実施しました。アンケートを書いていただく方というのは大体熱心な方なんですが、ごらんのような自動集計装置を使って集計してみたんですけども、その結果、約9割の方から満足という答えをいただいております。やはり残っているのはこれですね「瓦礫の中のメッセージ」。それからエピソード展示では先ほどの津波石の話、それから学芸員の意志を継いだ漫画の話ですとか、あと瓦礫と資料を分けるもの、タグの話ですね、そういったところが上位で選ばれています。

さて、博物館はたくさん笑顔が咲く場所だと、こういったメッセージ、これをいただいた方、これは県立水産科学館の梶山さんという学芸員の方です。こういうふうには被災地の学芸員の顔、その姿を展示室に持ち込み、展示に臨場感を高める工夫を行ってみました。

海には二つの顔があるというメッセージをいただいたのは大船渡市立博物館の金野館長です。これ、開会式に金野館長がいらした時に撮影したものなんですけども、御本人と並ぶとこのように感じになります。

それからこの方が先ほど前川さんのお話でもたびたび出てきました梶山さんという方。陸前高田市で唯一生き残った学芸員の方です。展示室にそういった姿があるだけで被災地とのつながり、その臨場感を感じることができるかと思えます。

それからもう一つ、先ほどのお話にもございましたが、今回の大震災では、本当に自衛隊の方々が活躍しました。文化財レスキュー活動にも貢献されていますが、そうした方々を顕彰するという展示でございます。中央図書館の天井はひじょうに高く、天井からつるしたんですが、天井が低い展示室の場合にはごらんのような展示となります。

そして最後に文化財レスキューの活動を紹介する展示です。文化財レスキュー全体を紹介するパネル、それから宮城県、岩手県の三つはこう並べたんですが、福島展示のほうはどのようにしたかということ、寄せられた、このメッセージを展示しました。中央図書館では1点だけケースに入れて展示したんですけども、ことし8月になって警戒区域の文化財レスキューが遂に始まるということで、新しいメッセージも加わって展示しています。

そして、前川さんの最後のお話にもございました、これが本年度、追加した展示、「壁に残された母へのメッセージ」です。これが公民館、そしてこれがメッセージの拡大です。これは、公民館が壊された後も、切り取られて保存されるということです。文化財展の展示のスタートは、文化財を思う心、「瓦礫の中のメッ

セージ」ですが、子供たちのこうしたメッセージも震災というのを後世に伝える文化財の一つになってくるんじゃないかなと思っております。パネル1枚の展示ですけども、被災地の心を伝えていく展示です。

続きまして、中央図書館ではじまった、この「震災からよみがえった東北の文化財展」が、全国への巡回展として発展していく過程を紹介していきたいと思えます。

3月11日に東京での展示会が終了した後、展示は直ちに撤去されて遠野へと運ばれてまいりました。これはその梱包の様子なんですけれども、パネルや展示映像などは最初から巡回展を想定して制作しています。例えばこのエピソード展示ですね。おわかりになるでしょうか。二つをあわせてパッケージにすると四角い箱になっちゃうんですね。こんな工夫です。こういうふうなことをすることによって巡回しやすくしようということを考えました。

これは私が今おります、平和展示祈念資料館で行っている地方巡回展です。同じ展示を巡回させて年に8回もの展示会を行っているんですね。ボックスですとかパネルですとか、資料ですとか、セットになっているんですけども、こういった巡回展のノウハウというのがございますが、それを展示の開発に活用してまいりました。

さて遠野での展示会、3月16日から開催しました。これが正面玄関の様子です。ここは、企画展示室が非常に小さいのでエントランスや廊下などを全部使って行うという構成にしました。スタートは「瓦礫の中のメッセージ」でその向かい側が展示の導入部、そして廊下を使った展示です。そして展示室では、できるだけ東京展のムードを再現することをめざして、既存のケースなども使ってまいりました。そして「海とともに生きる」のメッセージ、また、よみがえれ奇跡の海の展示は、先ほどもちょっとお話ししましたが、遠野に合わせて作り直しました。これが、そのち巡回展として活躍しております。

それから津波を語り継ぐシアター、そして民俗芸能の展示。狭いながらもこの遠野の展示会では東京の約9割を再現することができました。また、これに関連する行事としてフォーラム、それから被災地をめぐる博物館ツアーが開催されました。

さて、ここまでが平成23年度の実績ですが、この遠野展の実績で、この東北の文化財展、これは巡回展としても、うまくいくねということが実証されました。遠野展の現場設営の日、私、昼ぐらいに遠野に着いたんですが、現場に行ったらもうでき上がってたんですね。あれ、もう終わったの。翌日スタートの予定だったんですが、その辺は、地域博物館のいいところで、来てお客さんには見てもらおうかということで、その日の午後から半日早くオープン。同時に、これ十分に巡回展として成り立つぞ、やっていけるぞといったことも確認した次第でございます。

そして今年度、平成24年度は、3会場、静岡、愛知、兵庫をめぐる巡回展として新たなスタートを切りました。その様子を順に紹介していきます。

これが10月26日から開催された静岡での展示会。会場は県庁の別館の2階展望ロビーということで、これが入口の風景で

す。そして2階エレベーターを上がったところ。展示のスタートは、もちろん「瓦礫の中のメッセージ」で、あわせて震災の記録と文化財レスキュー活動の紹介を行っています。この会場は2階の展望ロビーということで眺望抜群です。けれども眺望がいいということはイコール窓からバッチリ光も入ってくるわけで、こういう空間、本来、文化財の展示には適しておりません。そこで、パネルを中心とした展示の構成といたしました。

これは高田の一本松の話ですが、こういった文化財に余りないものは実物を展示できます。そして今一本松は保存のため作業中であるということも伝えました。

津波を語り継ぐシアター、民俗芸能、そして最後を物語るのが、「海とともに生きる」の二つの展示です。

続きまして、大府会場です。遠野市と友好都市ということでこの会場が愛知県では選ばれました。「瓦礫の中のメッセージ」それから震災の記録、メッセージ展示は静岡会場と同じようにパネルを中心に構成しています。それから、民俗芸能の展示、津波を語り継ぐシアター、それから海とともに生きると続きまして、最後が「復興した三陸の街」ということで、このような展示の流れが定着してきました。

そしてこれが今開催中の神戸の会場ということで、ここ、人と未来防災センター東館の3階で開催しています。これが入口です。今日、ギャラリートークでごらんになっていただければと思いますので、早目に飛ばしていきますが、バナー展示も空中から吊るし、大型映像も再現しています。そういう意味では東京で最初に行った中央図書館の展示、会場が二部屋じゃないというところが違っているんですけども、イメージとしては、そのムードを再現できているような気がします。それから民俗芸能の展示、この津波を語り継ぐというシアター展示は、別の場所に構成して特色づけております。それから、廊下を使った展示。これが展示の終わりの部分です。「復興した三陸の街」ということで、それに続いているのが、人と防災未来センターの東日本大震災を語る展示なんですね。街の復興のモデルが示されていつのですが、これと「復興した三陸の街」がうまくつながっていて、流れができていくかと思えます。

ぜひこの後ギャラリートークを聞きながら展示を体験していただければと思います。

さて、このほかにも情報発信活動といたしましては、11月20日から3日間、横浜で行われました図書館総合情報展。これは図書館関係の展示会なんですけども、その一角にポスターセッションというのがございます。そこに出演させていただきました。都立中央図書館でやった展示会の実績がきっかけで実現しました。会期中、口頭発表の時間があり、わずか5分という短い時間だったんですが、この東北の文化財展の意義をプレゼンテーションすることができました。

それから、うれしいことに、この「震災からよみがえった東北の文化財展」が日本空間デザイン協会の2012年度特別賞に選ばれることができました。この協会は長い間、日本ディスプレイデザイン協会と名乗っていたのですが、ことしから空間デザイン

協会と名前を変えました。その第1回目の賞ということで、ほかにも候補があった中で選んでいただくことができました。これはその受賞の風景でございます。

以上、ちょっと駆け足で「震災からよみがえった東北の文化財展」について紹介してきましたが、最後にまとめるということになるかどうか判りませんが、今、私は、平和祈念展示資料館の事務局長ということで、さきの大戦をテーマとした資料館に勤務しています。昨年度うちの資料館、4月5月はやはりちょっと来館者が落ち込んだんですが、その後は、非常に多かったんですね。どこか人々の心の中で震災と戦災とは、つながっているのではないのかとか、そんな観点でお話しさせていただきたいと思います。

この東北の文化財展のエピソードの展示の一つに「戦災と震災、二度被災した資料」というのがございます。戦争末期釜石市が艦砲射撃に襲われ、その戦災を物語る戦災資料館ができたんですけども、残念ながら半年で津波に流されてしまったということで、残ったのがこのような大型資料。それを集めて文化財展として紹介しました。実は、この写真、阪神・淡路大震災のものですが、1995年は戦後50年。そのころ、阪神・淡路大震災で被災したまちの様子を、まるで戦後の焼け野原のよう、、、こんな表現をしていたんですね。ちょうどそのころ、私は、沖縄県平和祈念資料館館、こちらですけども、そこの基本計画策定の業務をたまたま担当していたんです。戦災と震災の違い、その頃から、それは、なんなのかを考えだしました。

これは沖縄戦の戦闘風景です。こういう戦争の写真というのはたくさんあるんですけども、果たしてこういった写真で戦争の真実、沖縄の人々の犠牲、その悲惨さがどこまで語れるんだろうかと。実は被災を直接的に伝える記録というのは、あんまりないんです。

弱者は記録を残さない、あるいは残せないと言ったほうがいいかもしれません。この写真、沖縄戦に関する有名な写真なんですけれども、原典は、アメリカの国立公文書館、米軍が撮った写真は大体、アメリカの公文書館にあります。この写真には、裏書があって、米軍の砲撃で犠牲になった人々、、、という裏書きなんです。ところが、その後この写真を見たある方が、写真の裏書にはそう書いてあるが、状況から見ると集団自決と思われる、というふうなことをあるキャプションで書いていたんです。それがいつしか、集団自決を物語る写真としてこれが唯一の写真というふうなことになっている。そうすると集団自決なんて、そんなのなかったんだよと主張する人はそれを攻撃して、あれはうそっぽちだみたいなのを言うんですけども、では、記録がないから本当に集団自決はなかったのか。それを物語る証言は、たくさんございます。

記録とか、写真とか、ものの資料とかがなければ、何でこの戦争の悲惨さを語ればいいのか、実はこの沖縄の平和祈念資料館、新しい資料館は、2000年に開館したんですけども、母体は1978年にできた古い資料館。その古い資料館をつくった人々、当時その人たちと一緒に仕事をしたんですけども、沖縄の有識

者の方々ですね、その方々が取り組んだこと、それが、体験者の証言を一級の資料とするということです。そのときに集めた証言を証言集としてまとめたのがこの本です。そのタイトルは、人間が人間でなくなる、、、。この言葉に戦争の本質といったものを込めていったわけでございます。これはその証言を集めた証言の部屋の展示、これは古い資料館にもあったんですが、新しい資料館でもそのままこの考え方を踏襲した展示を行いました。

戦争は、まさに人間が人間でなくなってしまう悲劇ですが、一方で平時に突然襲った悲劇、でもその中では人間性を失われていない事例がこちらです。

人間らしさ、人間の尊厳を保っているのがこれで、阪神・淡路大震災のさらに10年前に起こった日航機事故です。これは、墜落直前の機内、これを写真でおさめた人がいるんですね。そんな中で残っているメッセージがこれです。読んでみると、大変にすばらしい人だったんだと思います。本当に何かこう、人間の尊厳というか、心の豊かさというか、そういったことを感じます。平時に襲った悲劇。その中でも人間性は失われていないんですね。今までは幸せな人生だった、感謝の言葉まで入っています。実はこれ、震災も同じなんじゃないかな。やはり、死があって犠牲がある一方で生ですとか絆ですとか、命が輝くことがあるわけです。例えば、神戸のときも神戸元気村というのがあったり、その一方で花が添えられたりするわけなんです。戦争というのはやはり至るところ、人間が人間でなくなる状況、一見、風景的には似て見えてもここが大きく違うんじゃないのかなと思います。

歴史資料としての価値を持つビジュアル資料という観点で考えていきますと、こちらですね、これは原爆の図、有名な画家の作品です。それからこれは原爆の悲惨さ、それを描いた絵の数々です。大体このどちらかなんですね。芸術的なものか、あるいは体験した悲惨さをストレートに描いた素朴な絵か。それに対してうちの資料館なんです。シベリア抑留もテーマにしています。このシベリア抑留、57万5,000人の方々が抑留されて5万5,000人が亡くなっており、実に10人に1人が亡くなっています。大変過酷な体験だと思いますが、生き残った方々もたくさんいます。その方々が冷静さを取り戻した中での著作、帰ってきて暫くたった70年代80年代に書かれているんですが、実に見事に当時の状況が描かれています。これはやっぱり第一級の歴史資料なのではないかなと思います。

東北の文化財展の展示の一つとしてとりあげたのが、この市民が撮影した津波の映像で、県立水産科学館がコレクションしたものです。映像技術が日常的になった今日では、映像という絵解きの資料を、たくさん集めることが可能になっております。これは将来、負の遺産を物語る大きな歴史資料になるにはではないでしょうか。

駆け足でお話ししましたが、以上のことを整理してみますと、見た目は同じようでもやはり戦災と震災の違い、まずは人間性の問題、これが一つあります。それから記録性の問題。それから戦争は、やっぱり過去の出来事です。ところが震災、これは今日の出来事で、これからも起こるかもしれないという切実感がありま

す。

そういったところが相違点ですが、これを踏まえつつ一方で展示や継承活動の類似点を浮き彫りにしてみたいと思います。

まず一つは、資料の来歴が大切ということで、これは博物館活動の基本なんですが、実は私、大学の非常勤もやっています、資料の来歴の大切さを伝えるためにクイズを出すんですね。この資料は何でしょうかと、答えを4つ用意しとくんですけども、正解はこれ、原爆で溶けたガラス瓶で、平和記念館の資料です。けれども私が、口から出任せを言いますと、学生は意外に現代美術あたりを選んじゃうことが多いんです。このように見た目だけではわからないという体験をきっかけに博物館資料には、来歴こそが大切であることを伝えていくんです。

これは広島原爆の資料館です。被災した資料ってこういうものが多いんですよ。で、この時計、これは先ほどの大槌のまちに残されたもの。この時計だけだったらやはり、何のものか将来わからないでしょう。それからこれですね。これ、こちら人と防災未来センターの当館の1階で今展示しているやつものですが、地震海鳴りほら津波という三沢市の歴史民俗資料館で行った展示の記録をいち早く紹介したものです。これがその会場風景の様子なんですが、こういった大漁旗ですとか時計、それからがらくたですね、こういったもの、これはやはり来歴がないと、その価値がわからないですね、将来。

それからもう一つ、被災者の顔が見える展示。資料から個人体験を物語ること、これが非常に重要なことであると思います。個人の体験、人々の悲しみ、それを乗り越える勇氣、これは広島平和記念資料館の有名な展示物の一つです。原爆で亡くなった子供の遺体を焼く気になれずに隣にあった三輪車と一緒に埋めたと。そして被爆の40年目にそこから掘り起こしたという展示物です。

広島平和記念資料館が開館したのは、1955年ですか、ことし開館した滋賀県立平和祈念館でも、資料に加えて個人の証言パネルで語っています。これは平和関係の施設ではよく見られる手法です。

それから、先日、尊厳の芸術展というのが東京芸術大学の美術館で行われました。これはいずれ巡回展になるそうで、こちらの方では、たしか広島に来る予定だったかと思います。内容は日系アメリカ人の収容所での作品、それを展示した展示会でございます。

その会場風景ですが、まず生活用品をつくっていた、やがて芸術作品が生まれていくと、そういう流れの展示なんですけども、その展示の一つに表札があるんです。ぱっと見ると「山市」と書いてあるんですが、何で表札があるんだろうなと思ったんですが、実はその奥で映像をやってみて、これこそが、実はこの尊厳の芸術の始まりだっていうんですね。当時、収容所に収容されていた人間は名前じゃなくて番号で呼ばれていたのです。何番、と。それに対してこの方は自分の家に表札を作ったんです。俺は番号じゃない、俺は「山市」だと。ああ、なるほどなあ。ただ物だけ見たら、何で表札が芸術作品に紛れてあるのと思ったんですが、その来歴を知ることによって価値は倍にも数十倍にも広がります。

そういう個人のストーリー、これが重要であるかと思います。

で、既にこちらの人と防災未来センター、もうしっかりそういう展示をやってみて、例えばこちらのフルートです。そのキャプションを読んでみますとこんなことが書いてあるわけです。父は生きて娘は死亡という悲しすぎる結果に、、、ということで、そのストーリーが書いてあるんですが、実はここにさらに携帯端末があってこの147番。この番号を入れるともっと細かいストーリーが出てくる。そうすると、一人娘だったわけですね、さらに34歳のときにようやく授かった子供、しかも旦那さんと離婚しちゃって、で、さらに娘がいろいろと相談を持ちかけてくれたという、より深いストーリー。キャプションで書いてあるのと内容の深みが違う。このような個人のストーリーがものの背景にはある、これは非常に重要なことかと思えます。こちらの人と防災未来センターは、阪神・淡路大震災記念ということで非常に先駆的なことを行っているかと思えます。東日本大震災の展示でもこういったことが大いに参考になるんじゃないかなと考えております。

そしてもう一つジオラマという印象に残る展示。これはうちの資料館の展示です。ラーグリーという収容所、シベリア抑留の収容所の様子を描いたジオラマです。ほかに、傷痕軍人のことを扱ったしょうけい館の野戦病院の風景を再現したジオラマ。それから沖縄県平和祈念資料館のガマですね、ガマという洞窟に当時、住民とそれから日本兵も避難したという様子を描いたものです。広島平和記念館の原爆投下でさまよう人々。このようなジオラマ、原寸大が復元されているものですが、震災でも例えばこちらのセンターでもこういった復元展示を行っています。

これは大英自然史博物館なんですけども、神戸スーパーマーケット、恐らくこれ、ここの展示よりも早かったと思うんですが、スーパーマーケットの被災を題材に震災の恐ろしさを語っている。実は震災の恐ろしさというより、地球の威力みたいテーマの中で語っています。こんな展示もあって、どう見てもこの文字の書き方は日本人じゃないですね。そんな展示がいち早くつくられているわけですが、いずれにしてもこういったリアルな手法、これはやはり心に残ることになるんじゃないかと思えます。

そして最後が語りと伝承を考えることで、直接的に体験者のお話を聞く事。これは大変に説得力があるかと思えます。ただ見るだけよりも直接人の話を聞くと非常に説得力がございます。

で、その一つが戦争体験の「語り部」ということで直接体験者の話は非常に臨場感が高い、この語り部活動は全国で展開されています。

さらに、これは調べてみますと、例えばハンセン病ですとか公害病ですとか、あるいは火砕流ですとか、そういった負の記憶を語ることに全体に語り部という言葉が使われています。既に津波の語り部さんという、そんな人も登場しております。私たちの資料館でも語り部活動が大変に盛んで、例えば学校派遣を年20回、資料館内で行う定期お話し会で10回とかをやっていますが、問題は語り部さんの高齢化でございます。間もなく戦後70年ということで戦争体験の高齢化は共通の課題です。それに対応する一つ

の方法として、こういった証言映像ということが考えられています。人と防災未来センターでも語り部のコーナーということで証言映像と語り部によるお話の両方ができるようなコーナーがありますが、やはり人が語れること、これは非常に重要なんだと思います。

そこで改めて語り部って何だろうと考えてみますと、辞書を引いて見ますと平安時代の大嘗祭、天皇即位のときの語らい部というのあったということですが、一方である物事を語り伝える人を指し、その例として挙げられているのが戦争。ということで、やはり語り部に戦争体験は、つきものなのかも知れません。

では、負の記憶の体験者じゃない語り部は何かというと、民話とか伝承の語り部、こういった人々なんです。あんまり i p s 細胞の語り部とか言わないんですが、民話とか伝承を語る方、これはよく語り部と言われます。

この民話や伝承の語り部、ここで語られているのは体験談ではないんです。民話ですね。体験談ではなくても、語りは成立しているのです。お話に非常に心を打たれることもある、ということです。

今回の文化財展でも語りによる伝承に注目した展示を行ったんですけども、これは遠野物語の遠野ならではの展示ですが、実はこの戦争体験者が少なくなる中で、この戦災を語り継いでいく大きなヒントになってくるんじゃないかなと注目しております。

まとめてみますと、先ほど戦災と震災の違いは、戦災は高齢体験者が語る過去の出来事、震災はつい最近といったわけなんです。実は今の遠野物語に載っているように遠い昔の震災の伝承記録っていうのもあるわけなんです。それを照合してみますと、伝承としての戦争体験、こんな捉え方もできるのではないかなということです。

そうすると、この体験を語り継いでいく体験者ではない語りのプロ、これが必要になってきます。まさに民話の語り部に、そのヒントを学ぶということですが、同時に民話に当たるもの、語りコンテンツ、これを今後どうしていくか、これも課題になってくるのではないかなと思っております。

戦争や津波など災害の記憶を伝承として伝えてきた日本人、その英知が戦災、今、風化しようとしていると言われていた戦争体験を今後未来に語り継いでいく、その語り継ぎのヒントになるのではないかと、そんなことを考えている次第でございます。

ということで、以上でお話、早口になって最後済ませます。これで終了させていただきます。(拍手)

#### 4. 質疑応答

○司会 若月さん、非常に盛りだくさんの話をどうもありがとうございました。うちの館の宣伝までしていただいたようで、どうもありがとうございます。

既に時間をオーバーしております。前川さんには、この後ひきつづきギャラリートークをお願いしておりますが、もしこの場で若月さんに質問したいことがある方いらっしゃったら挙手を願います。一人いらっしゃいます。では、お願いします。一番後

ろの方です。お名前と所属先を言ってから質問をお願いします。

○足立氏(人と防災未来センターボランティア) こちらでボランティアに来ている足立なんですけれども、きのうたまたま目の見えない方が来られまして、こちらのジオラマとかどうして触らせてもらえないんだと意見があったんですけども、そういうことに関してはどういうふうに思ってますか。

○若月氏 御指摘ありがとうございます。実は、展示というのはほとんどがやっぱり見るコミュニケーションなんです。例えば、耳の不自由な方には見ているだけで何か工夫できたり、あるいは足の悪い方、そういった方は車椅子の方が例えば車椅子目線で見られるという展示とか。

けれども目の見えない方というのは、やはりこれはもうビジュアルコミュニケーションのある宿命的なところがございまして。そうした中で今取り組まれていること、これは我々の会社もこの館も、というより日本全国的という視点でいったらいいかと思うんですが、触れる展示、触察展示というところを積極的に取り入れている館がございまして。あるいは、イベント的に例えば被災した資料もそういった方だけ触って感じてもらっていいよというふうなこと、こんなことも活動としては考えられるかと思えます。

実は私どもの資料館もことしの3月ですか、そんな展示会を開いたことがありまして、触って鑑賞をしようということで。でも頻繁に触られちゃうと資料というのは摩耗してしまうんですね。そこで一般の方々には手袋をはめてもらいました。だけど、目の悪い方というのはやっぱり直接的な指の感覚がまさに目の役割をしているということで、その方々は生で触ってもらった、そんなことをやったことがございまして。

そういったことで、ちょっと本当にこれは大変大きな課題で、こうですと王道はないんですけども、そのような活動の中で地道に取り組んでいくのが今の現状かなと、そんなところで答えになっているかどうかわかりませんが。

○司会 はい、お願いします。

○平林英二氏(人と防災未来センター企画運営ディレクター) 別の質問ですが、人と防災未来センターで企画をしております平林と申します。

最後のところで語り部のお話がありまして、僕も日々考えるテーマでしたのでちょうど伺えるかと思ったところなんですけれども、体験者ではない方が語り部の今していることを継承していくことを考えなくてはならないのではないかなという具体的な課題があると今おっしゃって、神戸にもたくさん語り部がいますけれども。そして若手も語り部になるという動きもありますけれども。それでもやがて本人の話が聞けなくなる可能性というのがあって、そのときにどういう道の選択が必要かというのを考えたんですけども。

ある方の体験はその人固有のものであって、その方が語るからほかの人には語れない語りというのが成立していて、ところが誰かが引き継ぐときに全く同じようにはできないだろうと思います。そのときにその継承していくものは非常にオーソドックスなわかりやすい話として再編集をしていくというようなことを選択

することがよいのか、あるいはある人がこうだという話を忠実に継承していくのが大事なのか、その二極どちらか選ばないと先に進めないなということでもいつも思うんですけども、その辺をどのようにお考えか、教えていただければと思います。

○若月氏 ちょっと難しい話になってしまうのでもしかすると懇親会のときの話題かなと思うんですが。今、御指摘のとおり、まさに語りのコンテンツなんですよね。体験談というのは体験そのものがコンテンツになりますけども、そうじゃない人間が語っていくといったことになると、何か普遍的なコンテンツが必要になるんじゃないか、それが重要なことになってきます。実は、絶対的にこうだというふうなことはないし、考えている試行錯誤の途中ですけども、やはり今はある普遍的なものをつくらないといけないのかな、その素材はどういうものをつくっていくか、それは吟味が必要なんですけども、一人の体験もAさんの体験をBさんの語りではAさん以上のことは語れないのですよね。そうするとやっぱりもともになるものというのは、何らかの形でA、B、Cを合体した普遍的なものである、合意を形成できるようなものをつくっていくしかないんじゃないかなという気がしています。遠野物語に学ばないですけども、そういった一つの物語性をどうつくっていくか、そのつくり方はいろいろあるかと思うんですけども。ただ、体験談を、Aの体験談はやっぱりAさんそのものじゃないかなというのが今の感想です。

○司会 どうもありがとうございました。前川さんも、どうぞ。

○前川氏 今、語りという言葉が出てきたので、少しお話ししたい。遠野物語の中に出てくる津波の話というのは、その津波の体験をした男から、遠野の親戚に伝えられたものなんですね。でも、恐らく最初にその被災した人自身の話からとはちょっとかけ離れた形で遠野で再構成されていると思うんです。恐らくそれは共感された内容だったと思うんですよね。心を寄せた内容であるとか、それが理解できるとか、自分も同じ思いを抱いてそれを伝えたいと思ったなど、その共感した内容が恐らく遠野において再構成されたと思われまます。もしかしたら福二も、被災者であり、自身は津波そのものの恐ろしさを語ったかもしれないけれども、恐らく遠野の人たちが伝えたのは肉親を失った男の悲しみの体験だった。語りというのは、毎日、遠野で昔話の語り部を相手にしているとわかるんですけども、一人として同じ内容を伝えている人はいないんですね。桃太郎というよく日本全国にある話であっても、ある人は桃の子太郎と言ってみたり。語りというのは固まったものではなくて、それを聞く聞き手によって弾力的に変化していくものでもあります。相互コミュニケーションなんです、語りというものは、で、相手が共感してもっと聞きたがっている内容があればそれをもっと出力していくみたいな、そういう場面もあると思うんです。だから、二つの方向性だと思うんです。語りを受け継ぐ人がその、まず決まった内容のフォーマットで、文字で記録されたり、映像で記録されていくんだと思います。それを直接

聞いて、正確に一字一句違えず記憶していくことを選択するのか、あるいはその中のエッセンス、共感した内容を引き継いでいくのかというのは、その語りを伝承する人の選択になっていくのだろうという気がしています。自分が血肉の通った語りを伝えたいのか、あるいは正確な歴史を伝えたいのかは恐らく伝承者が考えていくことだと思います。

○司会 非常に興味深いお話ですね。まだまだこの話を続けたいのですが時間のほうも既にオーバーしておりますので、きょうはこれで終了したいと思います。

今回は東日本大震災の文化財レスキューと展示活動ということで遠野から前川様、そして平和祈念展示資料館からは若月様のお二方にお越しいただきました。このお二方のご尽力があってこそ、東日本大震災被災地の様子が伝えられている。また、展示資料もこの場所神戸で見ることができます。被災地の陸前高田市立博物館は、現在、展示活動が全くできない状況なんです、こういう形で展示することは、その展示活動にも結びつき、被災地の復興にも将来的にはつながっていくのではないかと思います。

それでは皆様、改めまして講師の皆様には拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。(拍手)

## 第4回「地域を拠点とした被災経験の継承—阪神・淡路大震災と東日本大震災—」

日時：平成25年1月26日（土）

場所：人と防災未来センター西館1階ガイダンスルーム1

### 1. はじめに

○司会 本日はお忙しい中、第4回災害ミュージアム研究室2012にお越しいただき、誠にありがとうございます。これより第4回災害ミュージアム研究室2012を始めさせていただきます。私、司会を務めさせていただきます、人と防災未来センター審査資料専門員の石原凌河と申します。どうぞよろしく申し上げます。

おかげ様で、災害ミュージアム研究室、昨年の10月から始めさせていただきます、今回で第4回目を迎えました。

今回、内容になるテーマが、地域を拠点とした被災検定の検証ということで、阪神淡路大震災と東日本大震災、こちら、それぞれの被災地において地域を拠点として、震災の教訓を伝える活動をされている方々に講師としてお招きいたしました。

阪神・淡路大震災の被災地からは、野田北部たかとり震災資料室の河合様から、震災資料室の事例について御報告させていただきます。

また、神戸市立地域人材支援センターの内屋敷様からは、神戸市立地域人材支援センター、旧二葉小学校の土地について御紹介いただきます。

そして、東日本大震災の被災地については、岩手県大槌町から、大槌新聞の編集長でいらっしゃいます高田様から御紹介いただきます。

順に事例紹介をしていただき、休憩を挟みまして後半からは、パネルディスカッションということで、東日本大震災の経験と阪神淡路大震災の経験を比較しながら、それぞれの交流でありますとか、例えば、東日本大震災の災害伝承は始まったばかりなので、阪神淡路大震災の教訓がどう生かされるべきか、あるいは逆に阪神・淡路大震災と東日本大震災の震災資料が共通の伝え方が異なるといった観点からディスカッションができればと思っております。

仮にディスカッションと言いましても、少人数でありますし、また、堅苦しいものではなく、気軽に行えればと思っております。そしてまた、後半では、質疑応答も行ないたいと思っておりますので、どうぞ気軽に御参加いただけたらと思います。

では、まず初めに野田北部たかとり震災資料室の河合節治様より、御報告をお願いいたします。どうぞよろしく申し上げます。

### 2. 野田北部・たかとり震災資料室の事例報告

○河合節二氏（野田北部・たかとり震災資料室） 皆さん、おは

ようございます。今、御紹介いただきました野田北部たかとり震災資料室をなぜか主催してしまいました河合と申します。

今日、ほんとは資料室に関してさせていただくというのは、今回が初めてのことです。実際はこれがどうやってできたのかという事例を、ほんとのことを言ってしまうと皆さん、失望なされるかも分かりませんが、いわゆる表向きと秩序とあわせてお話ができたらいいかなと思いますので、よろしく願いいたします。座らせていただきます。

お手元の資料をご覧いただけたらと思いますけども、ちょうど今から、丸々4年前に開設しました。以前からずっと、こう、地域で取りためた写真もあるんです。ただ、あと、我々のところへ復興支援に来ていただいたボランティアの方々が撮っていただいた写真とか、あるいは専門家の先生方、特にこの、先生方が撮っていただいたパネルであるとか、そういうものが地域には置いてあったんですね。

置いてるだけなんです。で、何かイベントがあるときには、それが日の目を見て、手にされる、そういう使われ方でしかなかったわけです。でも、それはそれなりの資料として有効に使われてきたわけですけども、ただ、残念ながら日常的、常習的にということができないというか、そういう場もない。その中で、それらの貴重な資料ですね、復興のプロセスがたっぴり詰まってるようなその資料が結局、段ボール箱の中に入ったまま温存されていたというような、ずっと10年以上続いていたわけです。

で、はっきり言って段ボール箱の中に入ってますので、保管するのにじゃまなんです。とって、ほかすわけにもいかない。ですから、ずっとそういう状態でありました。

当時は、今のデジタル化もありません。飽くまで写真というのはフィルムで撮ってたということですんで、例えばマスコミに提供する場合というのは、ネガを貸してくださいって簡単に言われるんですよ。簡単に言われるんですが、ほんとに返ってくるかどうかで定かでないんです。実際にはマスコミに渡してそのまま返ってこなかったということもあります。中にはネガが傷ついて、もう、それを現像すると、傷がびつと入ってたりとか、そういうことも実際ありました。

唯一、残ってたネガを基に、当時まだ、走りだったんですけども、フィルムスキャナーというのがありまして、それで取り込んだというのがデジタル化の最初です。ただ、残念ながらパソコンの能力もさることながら、そういうフィルムの画像を取り込むと

なると、膨大な時間と膨大なそのメモリーの消費量を要して、なかなかうまくいかなかったという、そういう経験を覚えています。でも、少なからず苦心しながら、当日のフィルムだけはデジタル化して、取りあえずは置いてるんですけども、でも、これ、実際に誰が撮ったのかなというのがよく分かってません。多分、マスコミ業界、現在もやってはりますけども、実際にじゃあ、これは誰が撮った写真なのか、全く分からないです。でも、写真としては残ってるんですね。

実際に写真ではつぶれた家屋が映ってます。でも、その後、火が入って、そのつぶれた家屋が焼けてしまってるんですね。ですから、焼ける前の写真が残ってる。これは当時は余り深く考えなかったんですけども、今、考えるとすごいことです。そのとき、そのときが残っている。

昨日も大槌高校の高校生の方にも言ったんですけども、こんなときに写真を撮るのということ、簡単に言うと、でも、こんなときやから撮るとかんとあかんの違うかという、人それぞれの考え方。でも、それがやっぱり残ってるということが、後々の自分たちのためにもなりますし、ある意味、この資料室を当初作ったっていうほんとの表向きの狙いは後世に伝えていく、あるいは、今後、やはり自然災害が起きるかも分からない、でも、その中で阪神淡路の我々がやってきたこと、それを伝えていくことで、少なからず復興の一つプラスになればいいなという思いでやったわけです。

実際に御存じだと思いますけども、私たちのまちづくり協議会の中心となってやってきた復興プロセス、それを青池憲司監督がドキュメンタリーで映像化してくださってます。実際、95年の1月の下旬から99年の3月末、4月かかりでやったんですね。3年半、しっかり、中で映像としてDVD14巻、時間にして14時間36分、記録が残ってます。ただ、これもやはり、当時、その場でカメラを回してもらってなかったら記録として残ってないんですね。ですから、そういうことで我々がやってるということが、記録として残るというのが、やはり、後々にきいてくる。ですから、資料室を作ろうと思ったのも、その映像があったおかげです。

結局、我々住民自らが手を挙げてやるっていうのは、なかなか言い出しにくいというか、思い付かないというか、でも、外から入ってこられた方が、これは貴重な記録になって、あるいは、これは大事だということで撮っていただいた。そういうことが結局、後々に地元に残って残っていったんですね。だから結局、自らが暴動を起こすこともなかなかできなかったんですけども、でも、そういう残していただいていたというおかげで今現在の方、たかとり震災資料室というのは、できたわけです。ただ、これも地元のカトリックたかとり教会の建物の一部をお借りしております。教会も再建されたという経緯もあって、これも、偶然と言えば偶然なんですね。ですから、結局、我々がずっと震災復興で、ついてるなっていう言い方をスタッフみんなですべて、ある人に怒られました。ついてるんじゃないって、それは努力した結果やっというのを言われました。

でも、結局は自分たちの手だけではできてないんです、何をやるうとも。誰かの手を借りて、支援していただく皆さんの手を借りて、そういう形になっていく。ですから、この資料室にしてもそうです。実際に助成金が付いた。こちらの裏話になっちゃいますけども、お金が付かないといけません。こういうことをやるうとも思っても。やはり、じゃあ、復興基金からもらえる助成金、それを取りに行こうと努力をやって、やったらやっただけで今度はいただいたお金を有効に使うっていう、そういう中で備品であるとか、そのしつらえですね、そういうのも有効に助成金を使ってやらしていただいたっていうのもあります。

ですから、全てが場所もそうです、お金もそうです、人材もですね。その全てが集まらないことにはできません、簡単に言いますと。発想は一人の思い付きでもいいと思います。でも、その思い付きにじゃあ、誰がついてきてくれるのかってなると、やはりこれは人と人の繋がりですから、その繋がりがなかったら、極端に言いますと、あいつが言うんやったらやめとけと言われてしまうと、もうおしまいなんです。それよりも逆に、あいつが言ってるんやったら、何か一緒になってやっていこうとか、言ってくれるかたがたが周りにおれば何とかかななっていく。そういう思いでこの資料室を作ったわけです。

ただ、お金がないといけませんので、助成金を仰ぐ。でも、せっかくだいてるんですから、無駄遣いはしたくないと、いろいろ試行錯誤をしながらコストを考えながら、やっていったわけです。実際言いにくいですけど、貴重な資料なんですけども段ボール箱に入ってるわけです。あるいは、いただいた賞状やったり、額であったりとか、そういうものも飾ってるんですけども、はっきり言ってじゃまになるんですよ。ところが資料室を作ると、ここに全部置けるんです。となると、その分、置く場所が助かったという、また訳の分からん本音の部分なんですけど。そういう一面もありました。それなりにみんなで手作業で、ほとんど地域の人間でやっていただいて出ております。

それと、あと、この資料室にあわせて、先ほど言いました青池憲司監督が撮っていただいた14時間36分の映像をこれ、一遍に見てくれて言ったらなかなか難しいなというのと、それと、言っても震災直後の3年数か月の記録でしかないわけです。

で、我々が求めたのは、じゃあ、今、どうなってるのっていうのを記録に残してほしいんだというのがあって、それで、ダイジェスト版みたいなものを33分でまとめてます。ですから、今から4年前に作ってますから、震災14年のときですね。そこで、我々はどう変わったのか、震災後の混乱の中から日常に戻る中、どう変わってきたのかっていうのを短編にまとめてもらって、実際は資料室で来場者のかたがたに、来たときに見ていただくということをもくろんで作りました。

ところが、一旦できちますと、内容を見ますと、あるかたが「これは研修とか、修学旅行の震災体験も含めての資料になるん違うか。」という指摘を受けまして、我々は余りそこら辺、深く考えてなかったんですけども、でも、結局、そういう御指摘をいただいて、少なくとも、これは悪い癖なんですけども、すごく調

子をこくんですね。「そうやって資料になるんやったら、ああ、ええわ、やったろ。」っていうのがありまして、助成金も幸い、まだ残り余ってますんで、じゃあ、DVDを作ってしまうということで、無謀にも、しかもコピーであると機種によっては再生できないとかっていうのが出てきますんで、プレスでいこうっていう、そういう形で、実際に2,000部を作って、当時、取りあえず、ただで渡すのはあれやからって、1部2,000円とかで、制作に携わってくださった青池監督は「1,000円でもええやん。」とか「いや、5,000円や。」とかって、いろいろあったんですけど、取りあえず、2,000円でということで、県に頒布を当時はしていました。

ただ、おとしの3.11以降は、もう無償で配ってます。実際にはやはり、せっかく作ったものをやっぱり、日の目に出さないと意味がない、資料ってそういうものだろうということで、取りあえず、我々が震災復興の3年の歩みって3年間ですから、95年から5、6、7年に掛けて本を作ったんですね。これも無謀にも3,000部作ってます。まだ、在庫は800か1,000近くあるんですけども、これも1部2,000円で当時は販売してました。ただ、これも東日本以降、全てイージーウェブにしまして、本を背表紙をぴっと切って、それを全部スキャナーで読み込んで。これは今、ホームページで見ただけ、そういう形を取ってます。ですから、やはり、別に東日本のああいう災害を我々は予測してたわけではないんですけども、でも、あのタイミングで震災資料室を立ち上げることができたっていうのは、偶然なのか、それこそ運がよかったのか、みんなの努力なのか、いまだにもって分かりませんが、そういう場を自分ら自らが、地域が自ら、設けることができたというのが、ほんとはよかったかなと思ってます。

実際にはメンテナンスをほとんどやってないんですよ。なかなか、手が掛かります。でも、やっぱり一つの景気が、やはり東の方の3.11で、我々も現地におじゃまして、何もできませんが、でも、自分らが見てきたこと、肌で感じたこと、聞いてきたこと、そういうものを今、中心に展示してるのが現状です。でも、それがどうなのかと言っても分からないです。分からないですけども、でも、伝えていくっていうことは、絶対に必要なことだと思います。昨日、大槌高校生のかたがたに質問されてるんですが、やっぱり、保存しておくのか、災害が起きたものを。あるいは、それはなくしていくものもあると思いますからっていう、何か住人さんたちを、その意見が二分しているっていうことを言われて、確かにそうです。で、我々も実際にはそういう軋轢はあったわけです。我々の野田北部の中でも。

でも、やはり、我々が直接動かなくても、その外から来られた第三者のかたが記録を残してくれたっていう、これ、一つのきっかけみたいなもんです。誰かがやってくれないと自分ら自らはなかなか動けないと。で、自分らが動こうとなると、当然、先ほども言いましたけど、思い付きもそうですし、人もそうでしょう、お金もそうです。そういうものが揃わないことには前に動けないです。

ですから、今回のその4年前にできた資料室も兵庫県がお金を出してくれたっていうのも、一つの大きい意味があります。なおかつ、その案に乗ってくれる、たかとり教会のスペースを貸していただくことも含めてやっぱり関わってくれてる人がいる。ですから、そういう中で、こういう形ができたのかなっていうのが素直な気持ちです。でも、言ってますように、動機はいささか不純だったわけです。いわゆる在庫処理であったりとか、荷物の整理であったりとか、そういう部分が根底にはあるんですけども、結果的にこういう形でできて、不特定多数のかたにいつでも見ていただける、そういう施設ができたっていうのが非常にありがたかったです。

で、伝えたかったことが、ちょうど震災14年だったんですね、できたのが。15年であったけど、14年。いわゆる中途半端、区切りでも何でもないです。ところがこの中途半端が非常に役に立ちまして、ほぼ、マスコミ全社、連絡がないないからって、14年という中途半端な、いっぱい来てくれました、取材に。「あつ、そういうこともあるんやな。」ってふっと思いますね。何か節目、節目に何かやるっていうのは、よくあるんですけども、中途半端なときにやるっていったら、マスコミさんネタがないみたいで、そういうときには比較的飛びついてきてくれて、後、取材を受けていただく。そういうことでメディアにも開設したということが載ります。先ほど言いましたDVDが完成したって載りません、となると、お問い合わせをいただくというケースもやっぱり増えてきたというのが実際のところですよ。

だから、ほんとに幸か不幸か分かりませんが、思い付きから始まって、在庫処理も含めて、人の手伝いも含めて、それが何でこうやって、曲がりやりにも形になったのかというのが、偽らざる気持ちです。ようこんな、適当に考えたことがここまで来たのかなというのがほんとの思いです。

では、次、そういうことで形によると、今度これ、維持しているかなあかんという、この意識が働くんすね。やっぱりいつまでも同じしつらえではだめなんで、その一つのきっかけ、失礼なんですけどもやっぱり3.11なのかなという、そういうのがあります。実際には、ほんとは東日本に対するエールというの、そこにこもってるんですね、我々からも。特に3.11直後、多分、阪神淡路で被災した我々も含めて、皆さん、やきもきして、いまだにしつこく、足しげく東日本に帰ってる偉い先生方もおられます。我々もその住民としての立場ですけども、その一つなんですけど、やはり、見ちゃおれんわけですよ。何か神戸から伝えることできないかという思いはあるんですけども、ただ、残念ながら都市部の災害と違い、広域に亘っているっていうのがありまして、なかなか現地のかたも含め、我々のもんも含め、できないっていうのが現状です。もう、まもなく2年がきますけども、でも、決して我々、忘れることはないです。阪神淡路も忘れたいから資料室を作って、こうやって18年過ぎても、こういう場でお話しさせていただくというのが、しつこくやってるわけですよ。

でも、やっぱりこう、形がついていかないとやっぱりどうして

も、また同じようなことになるのではないかという不安はありますから、それらも含め、何か意義というのがあるのではないかという思いはあります。

実際に、後ろでスライドショーに写真を流してます、これもカトリックたかとり教会の神父さんが当時、撮ってくれてた写真なんですけども、やはり、こういうのを今、見てますと当時を思い出します。

やはり、人間、学習しないと記憶って元に戻らないかなとよく思うんですね、最近。私はこうやってお話しさせていただく機会を与えていただいているので、ずっと過去のお話についての記憶というのは、現在にこうやって残ってるんですけども、もし、この機会が与えられなかったら、多分、自分の中で通過してしまってるかもってつくづく思ってます。それは、当時のお話っていうのも繰り返しお話しするって、お伝えするっていうことで、自分の中でそれをメモリーしているっていうのかなと思います。ですから、逆に言うと、機会がなくなってしまうと、もう、私の自分の中でも多分、消えてしまうかな。でも、こういうふうにならしたら、これはそれで何か不安になってきますね。ですから、機会があればどこへでもお話に行こうっていうことに、自分の中では勝手に決めてるわけなんですけども。でも、やっぱり記録っていうのは、残しておく方が私の個人的な考えとしてはいいと思います。

日々日々、日常で見えますと、これまた、いろんなことが起きてくるわけですね。それがまたまた積み重なっていくわけです。当時の日常の部分でなくて、今は日常での積み重ね。これが当然出てくると思います。だから、そういうものも含めて、そういう重なったものをいかにして出していくのかっていうことをこれからは続けていこうかなと。これはある意味、まちづくりも同じことが言えるんですね。まちづくりって言うと、何でもありみたいな部分もあるんですけども、でも、被災時のまちづくりと復興途中のまちづくり、それから、ほぼ日常に戻ってきたまちづくりっていうのも、おのずと動き方も体制も変わってくるわけです。ただ、残念ながら神戸のまちづくり、特にまちづくり協議会、震災後にできたまちづくり協議会っていうのは、ほとんどが価格整理事業であったり、参画事業であったり、そういう事業系のまちづくりとなると、その事業とともに活動がやっぱりどうしても落ちてしまう。結局、設立目的が事業という名目の目標の下にできてるわけで、結局、その事業が終息すると、そのまちづくり活動も終わらすようになってしまうっていう、そういうちょっとつらい部分があるんですけども、幸い、我々のところは、震災の丸々2年前にまちづくり計画ができて、通常の、日常の中ではまちづくりをやってきたおかげで、震災後はある程度めどがついた後でも日常のまちづくりをそのまま継続してやっていけた。ですから、別に事業目的ではないっていうのがありますから、だから、そういう部分もどうしてもあるのかなという。ですから、そういうことも一切を含めて、何か記録というのを残していけて、なおかつ、それを外へ発信していける。幸い資料室もできましたし、地域のホームページもあります。

ですから、結局、日常の情報というのがありますし、それから、

過去の情報もあります。ですから、そういうのを織り交ぜて発信していくっていうのが必要なのかなと思います。

今日、この後、大槌の高田さんの方からお話もあるでしょうけど、特に今、大変な状況かなと思います。我々も大体、震災から3年ぐらいたった辺りから5、6年なるぐらいまでが一番しんどかった部分がありました。それは何かって言いますと、それぞれのやる事業、当然、専門家、行政、地域住民、ボランティアを含めて一緒になってやってきたことが日の目を見るか見ないとか。まちづくりはプロセスっていう言葉があるんですけども、結果を伴わなかったら、モチベーションが上がらないんです。だから、最終的には何かを結果というのを出不ないと、やったという気にならないんですね。東京とかによくおじやまするときに言われるんですけども、ずっと長年やってきてしてるけども、結果が出てない。結果が出なかったら何をしてるのか分かんない、何でこんなことやってなあかんのやろっていうふうにおっしゃるお母さんもおられて、それは確かにそのとおりなんです。何か、我々も結果が出るか出ないか分からないんですけども、それでも、それを求めてやっていく。確かに、地域の中ですからね、不況はもう、出てきます。でも、我々がありがたかったのは、目標は一つなんです。それを地域の人がみんなそれぞれアプローチはしてなくても、目標が同じですから、そこへみんな乗っかっていくということになるんで、結局は足並み揃うんです、最後はね。ですから、そういうことがやっぱり、ありがたかったと。ですから、これらもずっと、我々の中では記録というか、記憶の中にあります。

ありがたいことに震災後、3か月ちょっとで早稲田大学の学生がボランティア、研究室丸ごとがボランティアに来ていただいて、ずっと、我々の動きを見てもらった。それを彼らは論文にまとめてくれてるんですね。これも外部の力なんです。言っちゃあ何ですけど、我々は論文は書けませんから、やってきたことをまとめて、それを検証するなんていうことなんて全くないわけです。でも、やはりそうやって、外から入ってきた第三者的な目を持ったかたが、そういう形で我々の動きを見てもらって、それを書いてくれてるってね。それを後から読むと、こういうことやったんかという、本人、全然意識してないんです、我々は。ところが外から見ていただいたことが、実はこういうことやったんやっていう、後から分かるんですね。

昨日も高校生に言いましたけど、地元のことは地元人間、よく分かってないと思います。だったら、外からの人の所見とか、支援とかっていうのを素直に受けて、やったら、その方がええかなってやっぱり、我々も実感って思います。

ですから、資料一つにとっても、地域で用意した資料もありますけども、そうやって、ボランティアの学生たちが作ってくれた資料、あるいは専門家の先生方が作ってくれた資料、そういうものがやっぱり合わさって、形になるというか。何か、そういうものなのかなって、もう、ほんとに私の実感として今、たかとり震災資料室の内容を見てますと、ほとんどそんな感じがします。

実際に、3.11以降、皆さん、神戸の復興に携わってこれ

た先生方、我々を含めて、何か妙に元気になっちゃって、めっちゃくちや失礼な話なんですけども。でも、何とかしたいっていう思いはずっと持ってます。必ず言ってるんですけど、絶対忘れませんから。自分たちのできる範囲で、これは続けていこうと思っ  
てます。

それを実際に動いてる人間だけじゃなくって、我々は地域の住人さんにも知ってもら。今、こういう状況ですと、東日本は。それで、じゃあ、あなたに何が出来るんって、自分たちは当然で出来るっていうことを、これはこれで、我々の地域から発信してる。これを続けていこうとはずっと考えています。

幸い、神戸大学の建築の学生さんたちもやってくれてますし、大槌高校さんとも連携が取れてます。ですから、今後見える関係の仲ですね、我々ができること、できることしかできませんから、できひんことは、できひので、やっていきたいなと思っ  
てます。

そういうことで、たかとり震災資料室は、曲がりなりにも丸4年過ぎて、今、東日本の震災に特化した形での報告を中心にやっております。これからも、それはそれで、また、不定期的になるかも分かりますけど、切り替えてやっていこうかなと思っ  
ています。

そういうことで、話がとびとびになってしまいましたけども、やっぱり求めてますのは、記録が大事です。で、情報発信も大事です。それがなかったら、どうしてもこう、忘れ去られてしまうかなっていう不安がありますし、それよりも逆に言うと、我々がそれに関わった人間として情報発信するのは義務がある。そういう思いがやっぱりあります。ですから、これからもできるかぎり、我々もそういう活動を続けてい  
るお話の場としてやっていければいいかなと思っ  
てお  
ります。引き続き、今後ともよろしくお願  
い  
いた  
し  
ま  
す。

どうも今日はありがとうございました。

(拍手)

## 2. 地域人材支援センターの事例報告

○司会 河合様、非常に深い話をありがとうございました。

後ほど後半のパネルディスカッションで詳しく議論をしていき  
たいと思います。どうもありがとうございました。では、続きま  
して、神戸市立地域人材支援センターの事例紹介に移らせていた  
だきます。それではよろしくお願  
い  
し  
ま  
す。

○内屋敷保氏(神戸市立地域人材支援センター) 皆さん初めま  
して。地域人材支援センター長田区の方から参りました内屋敷と  
申します。本日は短い時間かもしれませんが、お話しさせていた  
だきたいと思っ  
て  
お  
ら  
し  
ま  
す。よろしくお願  
い  
し  
ま  
す。

さて、座らせていただきます。

まず、お話を始めるに当たりまして、簡単に自己紹介なんです  
けれども、こちらにございますとおり、名前が内屋敷と申します。  
余り耳慣れない名前かと思っ  
ま  
すけれども、私、ルーツをたどり  
ま  
すと、鹿児島県の方が出自になります。両親の代までは鹿児島  
県の方におりまして、その両親がこちら関西の方に出て参りまし  
て、私たち、子供の世代は大阪の生まれ育ちになります。その後、

私の方は大学を出まして、普通にメーカー勤務をしております、  
各地、営業で転々としておりました。

そういった中で、この1. 17が発生した年、1995年とい  
うときには私、東京の方に住んでおりました。ですので、私自身、  
実際、被災を体験をしたわけではございません。また、この地域  
人材支援センターの立ち上げの方にもリアルタイムに関わったわ  
けではございません。ですので、私が本日、お話をするのはコー  
ディネーターとしての立場・視点からの事例紹介になるかと思  
います。そういったことを踏まえ置いた上でお聞きいただければ  
と思っ  
ま  
すので、よろしくお願  
い  
し  
ま  
す。

(以下、パワーポイントの映像に併せて説明) まず、地域人材  
支援センターを御存じのかたもいらっしゃるかもしれませんが、  
前身といたしましては、神戸市立の二葉小学校という小学  
校が基になります。写真5ですが、こちら、ちょっと左側の方で  
ございます。これは昭和36年に撮った写真になりますけれども、  
周りは瓦屋根がずっと見えるような地域ということで、地場産業  
としましては、ケミカルシューズやゴム、そういった作業が盛ん  
だったというふう聞いてお  
ら  
し  
ま  
す。そういった中で小学校があ  
ったわけですが、こちらの写真は1. 17発生当時の写真にな  
り  
ま  
す。この左下に見えてお  
ら  
し  
ま  
すのが、上から見た二葉小学校の  
写真になります。もう、こちらの真ん中辺りは火災でほとんど焼  
け落ちてしまっているような状態なんです、幸いにいたしまし  
て、この二葉小学校は、この火災からは運良く免れたというこ  
とで、また、倒壊の方からも免れました。1. 17当日は最大で約  
1,000人ほどのかたがこちらの方に身を寄せられまして、学  
校がその避難所として使われていたというふう聞いてお  
ら  
し  
ま  
す。これは、その発生当時の長田の町の写真になりますが、こうい  
った形で、特に新長田は火災での被害が多かった町になります。

そういった中で、改めてセンターの成り立ちをたどって参り  
ま  
す。

簡単な紹介になりますが、まず、1929年、昭和4年の創立  
となります。これはセンターになる前、二葉小学校として創立さ  
れました。そして間が飛びますけれども、1995年、今、申し  
上げましたとおり、阪神淡路大震災が発生いたしましたときに、  
避難所が設置されました。

その後、建物の方はその後も小学校として運営されてお  
ら  
し  
ま  
したが、その後、地域の少子化の影響によりまして、校区の統廃合  
がございました。長楽小学校と統廃合という形になりまして、二  
葉小学校は駒ヶ学校に名前が変わりまして、その後、元の長  
楽小学校の跡地に新校舎が建ちまして、そちらの方に生徒さんが  
移動されまして、残された二葉小学校は校舎としての歴史に幕を  
閉じるという形になりました。学校としての機能は終えたわけ  
ですが、では、この建物をどうするかという話になったときに、  
その昭和の初期から約80年の歴史を持つ学校、それを簡単にな  
くしていいものかという声、やはり、その地域住民の皆様方か  
ら上がりました。

また、その阪神淡路大震災の折には、多くの方がこの学校に救  
われたという思いが非常に強かったということで、何とかして、

何らかの形で建物を残せないかという声が上がって、2007年、旧二葉小学校の活用検討委員会が発足されました。これは、ざっと、こういうふうメンバーの方を書いておりますけど、約二十数名の方、地域の自治会の方々、学校関係の方々、そういった代表の方々が集まりまして、この校舎の再利用について、この年、2回、ワークショップを重ねまして、検討を重ねた結果、その年の11月——定期的に市の方で婦人市政懇談会という形で、市長の方と懇談をする機会が設けられているそうなんです——その際に長田婦人会の方から、この旧二葉小学校の校舎を残す要望書が提出されまして、その際に市長の方から校舎の存続が幸い認められるということで認可が下りました。継続して、活用検討委員会の方で施設の活用方法を検討してほしいという依頼を受ける形で、年をまたいで話が続けられます。左に映っている写真は、その当時定期的に出されておりました機関紙になります。活用委員会であるということで、地域の方々にその都度、活動報告を紙面にして配付しておりました。

それから2009年春に、これは神戸市の方からこの活用委員会の方にこういった形の活用法はどうだろうかという提案がされております。ここで出されましたのが、地域活性化の拠点・シンボルとして建物を残すということでした。その流れで、改修工事費として7億4,200万円の計上、認可されまして、この22年、翌年春に着工して、秋には公の施設としてオープンさせようということ確定、決定いたしました。では、この施設の運用はどうするのかというところに話が移ったときに、NPO法人、この話が出て参りました。これまで活用検討委員会として、地域の方々と話を進めてきたわけですが、地域の主体による施設運用、これを目指そうということで旧二葉小学校活用委員会のNPO法人化が初めて検討されました。そして翌年、NPO法人ふたばとして名称を改めまして、NPO法人としての成立がここでなったということです。この時点で、旧二葉小学校の名称は現在の地域人材支援センターという名前になりました。

また、その際、指定管理者、これは幾つか候補があったようなんですけれども、幸い、このNPO法人ふたばが指定管理者に選任されることとなりまして、その後、11月19日になりますけれども、2010年に新たに市の施設としてオープンしたという形で現在に至っております。

そういったことで、私の立場といたしましては、このNPO法人ふたばの職員として地域人材支援センターの管理運営に携わっているということになります。これがざっとした設立までの経緯になります。

では現在、この地域人材支援センターではどういったことが行われているのかということで、入り口の方にリーフレットを置かしていただいております。皆さん、お手元にお持ちかもしれませんが、簡単に申し上げます。まずは先ほど申し上げました通り、地域の活動拠点ということで、様々な施設がこの中に入っております。産業ロボット若しくは災害時に活躍するロボット、そちらの開発等を目指しておりますロボット工房、又は学校活動を支援する団体教育地域連携センター、それから子育て広場えん、

これは神戸常磐大学さんの子育て支援センターが、大学施設といたしましては震災研究に特化する形で神戸学院大学さんもお入っております。又は、戦前からの貴重な映像資料を保存している神戸アーカイブ資料館が、現在、このセンターの中に入っております。

もう一点、青少年の居場所づくりということで、地域の子供たちに場を開放することで、その発育、成長を支援するということで、様々な催しを行っております。夏休み、冬休み、春休みは子供教室ということで、かつての教室を開放して、これまた地域の方々にお手伝いをいただいて、いろんな物作りの教室を開いたり、宿題のお手伝いをしたりとか、そういったことを行ったりしております。また、活動発表の場の提供ということで、例えば、よく街中でラジカセを前に置いて、ヘッドフォンをした若者が踊りの練習をしたりしている姿を御覧になったことがあると思うんですけども、そういった、なかなか発表の場が与えられない子供たちに、講堂を無料で開放して、ダンスフェスティバルを行ってもらったりしております。また、センターが始まって以来は月1回、2012年からは月2回、現在まで定期的に開催しているものにコスプレイベントがあります。これが月2回平均400～500名の参加者がある、非常ににぎやかなイベントになっております。

コスプレって皆さん、お分かりになりますか？アニメーションや漫画のキャラクターの格好をして、お互いに友達同士で写真の取り合いっこをするというような、言ってみれば他愛のないものなんですけれども、これが非常に人気を上げております。そういったコスプレ姿のまま街中に出て、買物もできるよう、商店街で使えるクーポン券を入場券に含めた形にすることで、街中を賑やかにしながらお金も落とすという活性化の方法が、住民の方からも喜ばれています。そしてもう一つは教室の貸出し、いわゆるレンタルスペースということで、貸部屋としてかつての教室、これは講堂なんかも含めてですけれども行っております。個人、若しくはグループの地域活動への参加支援ということで、比較的、低料金での貸出しを行っております。これまた、リーフレットの方に料金表なんかも挟んでありますので、御覧いただければと思います。これは、立地場所は長田区になりますけれども、特に貸出し対象を限定するわけではございませんので、よろしければ今日、お越しの皆様方も御自由にお使いいただけますので、機会があれば是非ご利用ください。

こちら写真の方は、まちの文化祭というセンター主催の事業になるんですが、秋口、11月を基本として年1回、開催しております。昨年も11月に開催いたしまして、来場者が約2,000人と、非常に大型のイベントとなっております。参加費等を徴収するわけではなく、市民参加型のお祭りをして場の提供を行ってのもので。

また、この右上の写真ですね、これは特に資格があるわけではなく、ちょっとした知識や経験をお持ちの方が講師となって、同じく地域住民の方を対象とした楽しく講座という企画です。他にも、ちょっと変わったところでは地域の若者の支援ということで、

カップリングパーティーという、ちょっとした合コンと婚活の真ん中ぐらい、柔らかい感じのお見合いパーティーみたいなこともやっております。

こういった形で様々な事業展開、運営をしているわけなんです、その中で一つ、大きな事業がもう一つあります。震災学習ですね。

この震災学習のプログラム概要ということで、簡単に御案内いたしますが、大きく分けまして上の2つ、出前講座と修学旅行受入れ、こういった2本柱で行っております。出前講座と言いますのは、その名の通り、私どもセンターの職員が各学校の方へ出掛けて行って、そちらの方でお話をさせていただいたり、いろんなプログラムを実施させていただくという形。もう一つは修学旅行の受入れということで、これは主に市外、県外となって参りますが、最近、修学旅行の中では必ず社会科学学習がプログラムとして組み込まれているということで、そのコースの一つとして、センターの方にお立ち寄りいただく、若しくは修学旅行とはまた別に、社会科学学習ということで、それに特化した形でお越しになるという学校もあつたりします。そういったところの団体、これがひとクラス単位から全学年まで含める形で、大小様々な人数の方がお越しになります。

平成23年の1月からスタートいたしまして、これまでのところ、出前学習の方で11校、それから修学旅行の受入れの方で14校実施しております。修学旅行の方につきましては、シーズンもありまして、どうしても春先、若しくは秋口に集中するため、数はある程度絞られてしまうんですけども、おかげ様で、この約2年半ぐらいの間に震災学習の方も定着して参りました。旅行会社さんからの覚えもおかげ様で良いようで、既に今年の冬までいくつかご依頼をちょうだいしております。まだ予約の段階も含めてですけれども、そういった中で継続して進めております。

具体的にどういった学習内容なのかは、この下半分のところになるんですけども、基本的には、お伺いする学校、若しくは受け入れさせていただく側の学校の御要望をまずはお伺いして、それに添った形のプログラム提案ということで進めております。例えば今、私どもで御提案をしておりますのが、左の方から語り部体験談、それから避難所体験、炊き出し体験、まち歩きというふうに、これらは全て地域住民の方々のボランティア協力によって成り立っております。語り部体験談といいますのは、その名の通り、地域住民の方、実際に1.17を体験された方々の個々の目線からその当時の様子を語っていただくことで、より体感的なお話、これを今の子供たちに伝えていただくということがまず一つ。それから、この上の2つの出前講座と修学旅行用の各写真、これは、スライドを見てもらいながらお話をするというので、このスライド学習、これも1点ございます。特にこの地域人材支援センターにおきましては、旧二葉小学校時代に復興担当教員として非常に尽力されまし方がいらっやまして、現在、震災ボランティアということで密に御協力をいただいております。震災学習の対象は主に小中学校ということもありますので、そういった子供たちと同じ目線で語れる立場の方ということで、いつも助け

られています。

下の方の写真に戻りますが、旧二葉小は1.17の被災時には避難所として使われておりました。実際に避難所として使われていた、その講堂をメインにして、簡単な廃材、段ボール、新聞紙、そういったある程度の資材を与える形で生徒の皆さん方に自発的に、思い思いの考えでしばらくの生活場所を作ってくださいということをやっております。また、完成したところで、実際に床に寝ころんでもらって、背中に感じる床の硬さだったり、冷たさだったり、そういったことも体感してもらうことで、当時の方々がどれだけ厳しい状況だったのか、特に1.17阪神淡路大震災が起こった1月という冬の寒い時期、いかに過ごされていたのかを身をもって体感をしてもらったりもしています。

炊き出し体験、これにつきましては、調理も含めて生徒さん自身にやってもらうという形です。実際には被災者の方が調理をしたわけではないんですが、県外から多数お越しいただいたボランティアの方々に助けられたその経験、その人の温かさと言いますか、助け合いの精神、そこを学んでいただくということを目的としてやっております。

そして、まち歩きとしましては、現在、見た目だけで言いますと、もう、すっかり復興してしまったように見える新長田の町なんですけれども、その街中を実際に歩きながら、当時の資料写真を片手に持って、実際、同じ目線で写真を見てもらいながら、その落差、今はこれだけきれいになったけれども、当時はこれだけの状況だったんだよということを比較しながら見てもらうことをやっております。

それからもう一つ、紙食器作り。これは、被災時に水もない、ガスも電気もない、また食器棚、家具類は全て倒壊、倒れてしまって、お皿も何もない、そういったときに、洗う必要がない、使い捨てができる、そういったひと工夫でこういったこともできるよということで、主に炊き出し体験とセットにして、プログラムを組んでおります。子供たちには、新聞紙なり厚紙なりがあれば簡単な食器が作れるよということで、作ってもらった紙食器や豚汁であったり、カレーだったり、それをよそって、実際に食べてもらうというのをやっております。また、簡単に作れる紙スリッパですとか、そういったことも同じ流れで作ってもらったりしております。

こういった形で震災プログラムを進めているわけなんです、一つ、大きく変わりましたのがやはり3.11です。センターの立ち上げ当初は、私たちセンター職員自身もゼロからのスタートでしたし、私自身も最初に申し上げました通り、被災経験があるわけではありません。私たち自身、試行錯誤を重ねながら進めてきましたが、その中でも一つ、大きなテーマとして考えてきたのは、やはり現在の学習を受けるほとんどの対象となる“1.17以降に生まれた子供たち”へ如何にして震災を語り継ぐのか、という問題ですね。これから先、どんどん世代交代が進む中で、どんどん記憶が薄れていく、家庭でそういった話をする機会もなくなってきているというようなことを聞く中で、記憶を繋げるということの一つの目的として進めて参りました。ただ、これまでは

1. 17 阪神淡路大震災のこと“だけ”を語ってれば事足りたというところがございます。しかし、3. 11 以後は、子供たちが目に見える形で体感する形で、実際の地震を知ってしまったというところがあります。そしてこれから先、30 年だかの間には 80 パーセントの確率で起こると言われている南海トラフ大地震を始めとして、様々な震災被害が語られる状況の中で、これから先、どういったプログラムをやっていけばいいのかというところは、私たちセンター職員に問われている課題だと思います。そういった中で、現在はプログラムの練り直しを含めて様々なことを考えております。これから先、どういったことを子供たちに伝えていけばいいのか、まだ具体的な答えは出ていませんが、大切なのはやはり日頃からの防災意識であり、それを日ごろから家庭で話し合ってもらうことですね。手近なところから言えば、例えば防災グッズ、倒壊防止の本棚の突っ張り棒を付けるだけでもいいから、そういったところから始めよう、ということです。もし、何かがあった場合、大きな地震がこれからあった場合、どこでお父さん、お母さんと落ち合ったらいいか？そういったことを一つ話すだけでも何か頭の中に残るんじゃないか、そういったことを伝えていけばいいなというのがまず一つ。それから、もしもの際、大きな災害が起こったときにはどうしたらいいのか？どうするのか？そういったところで、昨年より震災学習に取り入れているプログラムに、クロスロードがございます。これまた皆さん御存じの方もいらっしゃるかと思いますが、1. 17 で被災された方々、神戸市職員の方々からの実際の聞き取り調査を元に作られたカード型の防災ゲームですね。ゲームという形で防災を考えるということで、子供たちにとっては取っ付きやすい形になります。また、このゲームの一番の特長は確たる答えがない設問ですね。これまでにやった設問の中で、子供に一番伝えやすかったものの、犬の問題がありました。大きな地震が起こって家族全員、避難所に移動することになりました。家では大型犬を飼っています。では、皆さんはその犬を避難所に連れていきますか？行きませんか？という設問です。それについてイエス、ノーで答える形になるんですけども、これには正解があるわけではありません。それぞれの意見、これを出し合うことこそが重要であって、普段自分が常識と思っていること、自分が正しいと思っていること、それが実は必ずしも正しくはないかもしれない、という意見の多様性を認識してもらうためのゲームですね。ゲームの際には必ず一人一人に意見、発言を求める時間を設けるんですが、普段、なかなか手を挙げなかったり、自分の意見を言わない子供も、この場では自分の意見をしっかりと伝えてくれますということで、コミュニケーション能力を磨くプログラムとしても先生方からは好評をいただいたりもしております。

こういったようにして、座学と体感型学習、避難所体験といろいろございますけれども、それらをより効果的に組み合わせられないか、ということで現在検討しておりますのがプログラムの物語化です。先ほど、避難所体験の際には簡単な設定を与えるというような話をしましたけれども、そこをもう少し、よりシミュレーション化する形で子供たちをお話の中に放り込んで、その中で

各々に役割を演じさせることによりその体験、体感をより高められないかと考えております。

そして、最終的な落としどころと言いますか、一番大切なのは人と人との繋がり大切さだと、これを最も重要な点として伝えられたらなというふうに思っております。

実際問題、阪神・淡路大震災のときに家屋倒壊等で助かった人、これらの方々が外部の自衛隊だったり、消防隊の方に助けられた割合は全体の 2% ほどだったと聞いております。それ以外、98% の方は自分の力、若しくは家族又は近隣の方々に救われたということがございます。これを考えますと、平日頃からの人と人との付き合い、関係性、これがやはり何かあった際には大きな助けになるんじゃないかなということを、ちょっと目に見える形で子供たちに伝えられればいいなというふうに思っております。

現在、そういった大枠の流れを事前に学んでもらおうということで、冊子作りに取り組んでおります。訪問する学校、お越しいただく学校には、まずそちらに目を通してもらって、ある程度の予備知識を頭に入れてもらった上で震災学習に取り組んでもらう。そういった 2 段の形で、より深い学習が実施できればなというふうに考えております。

そして、最後となりましたが、センターのテーマといたしまして「やさしさわすれないで」という言葉がございます。これは旧二葉小学校時代、震災の 2 年後に小学校の子供たちから学校の標語を募集したところ、生徒投票によって、一番に選ばれた言葉、それがこの「やさしさわすれないで」だったそうです。これは現在もモニュメントの形でセンター敷地内に飾られているんですが、私たちは、その旧二葉小時代の想いを受け継いで、これを子供たちに伝えていければいいなということで進めております。

先に、試行錯誤を重ねながらやっているというように申しましたが、これは現在も続いておりまして、今、まさに試行錯誤の真っただ中です。いろんな問題も抱えております。例えば、今、ご協力いただいているボランティアや語り部さんの高齢化の問題もでございます。であれば、当時、高校生だったり青少年だった次の世代に役割を引き継いでもらえるかといえば、やはり平日の昼間から御協力いただくということは、なかなか難しかったりもします。ただ、そういった中でも地元には漁業関係者等を中心に、ある程度自由度を持って動ける方も出てきております。そういった方々との連携を手始めとして、これから先、より地域に特化した形で、この震災学習を進めていけばなというふうに思っております。

ざっと申し上げて参りましたが、このような形が、現在私たち地域人材支援センターが取り組んでおります震災学習でございます。つたない言葉だったと思いますが、ご静聴ありがとうございました。

(拍手)

○司会 内屋敷様、どうもありがとうございました。阪神・淡路大震災の被災地から野田北部たかとり震災資料室、そして神戸地域人材支援センターの事例を御報告いただいたわけですけど、一筋として思ったこととしては、やはり地域活動とか、まちづくり

とか、そういったところと震災の教訓を伝えるということがうまくリンクしていることです。

そして、東日本大震災を受けて、その震災資料室、あるいは震災体験学習の意味合いが大きく変わったことは、印象的だったと感じております。

では、続きまして今度は東日本大震災の被災地から、岩手県大槌町の大槌復興館について、そして大槌新聞の取組みを高田由貴子様より御報告をお願いいたします。

### 3. 大槌復興館の事例報告

#### ○高田由貴子氏（大槌復興館）

皆さん、初めまして。岩手県の大槌町というところから参りました高田と申します。私個人は生まれてはじめて、兵庫県の神戸市におじゃまさせていただいております。大槌高校生とともに昨日来ました。

このように人前で、今の活動をお話するのは初めてです。題名の復興館、資料館ですけども、復興館と新聞、意外な組合せのように思われるかもしれませんが、こちらについてお話をさせていただきたいと思っております。

まず初めに、私が所属している団体の紹介から始めたいと思います。私は一般社団法人の「おらが大槌夢広場」という団体に所属しております。

最初に被災状況を簡単に説明させていただきます。

岩手県の大槌町、被災前の人口、田舎町で、1万5、6千人のまちでした。で、震災で亡くなられたかたが1割近い1、300人で、この1、300人のうち、800名の方しか見つかってない。約500人のかたは、まだ行方不明の状態、被災地のなかでも飛び抜けた状態です。被災家屋が60パーセントということで、この60パーセントのかたがたが、現在の町内、高台のない浸水区域内にあります。また、仮設住宅が50か所に建てられています。そこに2、000世帯の5、000人のかたが暮らしているような状態です。

私のこの団体は、震災が起きたその年7月に三陸沿岸で各市町村、どういう状況になっているのか分からないということで、町内のかた、夢会議と言いまして、三陸各市町村の報告会っていうんですかね、自分のところはこうですよというような会議を大槌町で持ったんですね。それがきっかけで、大槌町内に住む十数人のかたも職種もばらばら、年もばらばらなんですけれども、比較的若い、20代から40代のかた、男のかた中心のようでしたけれども、復興に向けて何かやりたいなって、がれきもまだ片付かない感じで、かなりあったそうです。毎週のようにミーティング、回を重ねて、それで話しているうちに、今の町の資源というのが、もう、壊滅的な状態だということになったと思うんですね。それで、人を呼ぶしかない、職もなくなりましたので、工場も被災しましたので、民泊、語り部、ガイド、観光ビジネス、そういった資料館もあつたらって、次々にアイデアが出たということです。で、3か月後の11月に一般社団法人、法人化をしました。

目的というのが、復興のための町の人材育成、そして新産業、

大槌っていうのは震災前から人口も減って、決して活性化した町ではなかったんで、元に戻すのではなくて、新しい町を作ろうということで、そういったところを目的とした団体、復興支援団体、町外のかたが来て団体を作る場合が多くありました。私は、ほかの被災地でも団体がいっぱいあるけれども、町内のかたが中心となって設置した団体は珍しいとよく言われます。11月の11日がさけの日、サーモンの日ということで、食堂、おらが大槌夢広場、通称が「おらが」って言うんですけど、ここの食堂から始めました。オープンして、そのときボランティアのかた、あと、支援者、視察のかた、学生関係のかた、大勢いらっしゃいましたので、すごく理に合いました。

で、同じときに、復興食堂の隣にテントも併設されました。もともとは町にコンサルタントが入ってたんですけども、そのコンサルタントのかたが考えた企画がもたっています。被災地としてだけではなくて、大槌の湧水、わき水が有名でしたり、そういったところもある本来の大槌町の魅力というのを、それも含めて、資料館じゃなくても、それを落としたような感じで博物館にしたらいんじゃないかって、命と水のミュージアムっていう企画を出されたんですね。これをもとに復興館ができました。

震災の関連資料、写真、そういったのを集めながら、視察者、ボランティアのかたが大勢いましたので、見てもらえたらなということで、復興館ができました。初めの復興館は写真にもありませんが、テントでした。資料といえども、朝日新聞、パネル、写真などいただいたものを、この建物の内側に掲載して、震災当時、そして震災前の資料、写真をファイルして置いているだけ。このとおりですので、砂も入るし、湿気は多いといったようなところでした。私はここの担当として12月に参加しました。震災の写真とか記録は外部の人ではなくて、町民自身が集めた方がいいんじゃないかなと思ひ、こちらの団体に参加しました。

ですけれども、最初に食堂の方が設置されましたので、食堂の手伝いに借り出されまして、復興館の仕事ができない状態が続きました。年が明けて1月頃に町外から学生さんがここを訪れるようになりました。東京大学の都市デザイン研究室のかたがたがこられました。震災前の写真や映像を集めてくれて、震災前の思い出をヒアリングをさせていただきました。そのときに、「データをいただきたい」と伝えました。「町民にも見せたい」ということで、そして、「大槌アルバム」という被災前の写真を集めたカレンダーを作っていただきました。それを町内外のかたに配付することができました。

春には神戸大学の学生さんに訪れていただきまして、真っ白な模型、町の中心市内地の模型をいただきました。前にいただいていた東京大学からの写真と併せてワークショップを定期的に開いていただいたり、模型を使っているいろいろな活動をしていただいています。視察に訪れる町外のかたに説明をするときにも、すごく役に立ちました。

今、市街地に行って、説明しようとしても何もないんですよね。模型を使って「ここに家がいっぱいあったんですよ」というと、すごく理解が深まる感じを受けました。

この仕事を始めるようになって感じてたことなんですけれども、復興館、いろいろ今、資料館のお話を聞かせていただきましたけれども、この、今、1年ちょっとですけれども、今、あるべき姿ってものを考えるようになりました。大槌町民というのは、今、そのときの現状と、これからのまちづくりの情報にすごく飢えていまして、何て言うんですかね、震災前の記憶が大事、写真が大事って思ってたんですけれども、ちょっと自分とずれてるのかなってというか。町民が必要とする情報は違うんじゃないかと感じました。みんな川の上流にある仮設に住んでいて、住まいが奥に引っ込んだ形になってしまいましたので、なかなか表には出てこれない。ですので、少しずつ町民のかたに見ていただきたいなという思いがつのりました。

去年の6月になるんですけれども。震災後に、地元紙があったんですけれども、そちらが被災して、休刊になったんですよね。それもありますので、震災直後から今でもそうですけど、町内の情報の不足が深刻なんです。外から来たメディアのかたが、大槌町の情報を町内に発してくれています。ありがたいですけども、町民のそのまちづくりの情報、仮設住宅はいつ建つんだろう、病院はいつ建つんだろう、どこに建つんだろうという情報が不足して、噂とか、すごく広がるんですよね、そういう広がりがほんとに早く、ただでさえもすごく不安になってくるっていうのをすごく目にしまして。震災直後から思っていたことなんです、いつか自分の手で、町民のため、外に向けるのではなくて、町民のための新聞を作りたいなと思っていました。6月30日に、町内で大きいイベントがありましたので、そちらに便乗する形で新聞を作ったらどうか、っていつてくれたかたがいました。そこで、創刊第1号っていうのを発行させていただきました。一人でやらなければならないので、毎日の発行は無理ですので、週1回ならできかなと思ひ、週1のペースで今新聞を発行しています。

新聞の目的って何だろうって言ったときに、まず、先ほど言いました情報不足の緩和、少しでもこの情報を与えることで安心させてあげたいというのが一番の目的です。コミュニティーを繋ぐってことなんですけれども、町内で住むところがなくて、被災直後からそのまま内陸の方に避難したかた、東京とかにも避難したかたがいっぱいいます。物理的にばらばらになってしまったんですよね。

ただ、そういったかたがたの町に対する思いも、帰ってこれないということは分かっているんですけれども、思っているのをすごい感じます。ですので、なんらかの形で町内外にいる人も大槌町民としてもコミュニティーを繋げたらなって。そういう媒体を作りたいなと思っていました。

町の歴史だと思うんですよね。今回の津波って、3.11にすごくクローズアップされがちですけれども、冷静になって考えてみると、昔から、例えば江戸時代とか飢饉とかありましたよね。戦争もありましたし。過去にもいっぱい津波が来る。で、今回の津波も自然の一部であると思っています。ですので、その町の歴史、記憶を、津波や震災体験に限定しないで、その地域の記録の一部と思って、残すことも必要じゃないかなって思っています。

そして、地域メディアの確立ができたかなと思います。もともと新聞がありましたけれども購読率はそう高くないんですね。大槌町の場合、お年寄りも多い町です。高齢化率が30パーセント越えています。どんどん人口流出も止まらない状態なので、高齢化は、震災がなくとも高い状態です。ですので、今までにないような、お年寄りが読みやすい新聞にしたい。情報量が多いと、読んでもらえない状態です。大槌町も月に2回、新聞を出しているんですけれども、皆さん、「字がちっちゃいな」って、「何を書いているか分からないな」って、話していて、私自身が読んでこそ思っています。

今、特にまちづくりの情報がどうしても複雑なんです。区画整理とか、ただ、求めてるんですけれども、その情報がないわけじゃないんですね。みんなが理解できる情報がない、そして、その進展がわからないだと思っています。ですので、そういったことも含めて、皆さんが分かりやすい、求めてる情報っていうのをお届けできたかなと思ひました。

岩手県大船渡市にある地方紙では、本職の記者のかたを含めて、多重のメディアを通して、情報を発信、提供っていうのをやろうということで動いてるようです。そういったのを大槌町でもできないかなという思っています。できたらなって夢なんですけれども。

震災当時は、電気が使えなかったので、ネットもだめ、携帯もだめでした。もともとネットをする人って、そんなに大槌では多くなくて。ですので、あのときはラジオしかありませんでした。新聞が届かなくなって、避難所の方が落ち着いてくると、岩手県、一番近くて岩手県の新聞、そして朝日さん、読売さんが届くようになるんですね。その時に私は、紙媒体のありがたみを痛感しました。

ラジオだと、1日ずっとつけていないと、ほしい情報が取れないような感じがしました。新聞だと読みたいところ、ピンポイントで選べる。紙媒体でいいなって。最近では、ネットとか、既存のメディアのかたも紙媒体が売れないということで、ネットで配信とかしてて、それでも苦戦してるって聞きます。ネットもいいですけれども、自分が被災して一番思ったのが、やっぱり紙だなって。ああいう非常時で、地元の記者のかたも、津波、災害を生き延びて、そこに本当に、紙とペンがあれば情報を発信できるんですよ。ふだん便利っていわれているネットだけではだめだと痛感しました。紙媒体がこの高齢化の進む町、もともと新聞の購読率の低い町、大槌町に一番似合うなって思ひ、今でも紙媒体中心に発信しています。こういった地域メディアの確立ができたかなって思っています。

新聞の内容ですけれども、そちらの方に置かせていただきました。

大槌町では9月にお祭りを行われるんですよね。そのときの新聞をお持ちしましたけれども、A3版の1枚です。表、裏。それを毎週出しています。とにかく、読んでもらうことだけ考えました。どんな立派なものを作っても、訳が分からないといって、捨てられたら終わりです。そのことが分かっていたので、とにかく

読んでもらうこと。私、うまい文章も書けないし、うまい写真も撮れない。ただ、必要最低限の情報を見出しだけでも見てもらいたいと思って、字をかなり大きくしています。結構、大きいですよ。でも、皆さんに言われるのは「字が大きくていい」ということを一番よく聞きます。そして、文の方は短くしています。長く書くと絶対、読まないんですよ。ですので、必要最低限のことを簡単に書くように心掛けています。新聞の方の大槌新聞っていう題の下に、懐かしい大槌っていう、被災前の写真が手元にありましたので、そちらの方を載せています。これもすごく好評です。懐かしいなって。もう、全部なくなって場所ですので、津波と火災で焼けたところなので、いいなって言われます。

そういったところで資料館的なところもちょっと入れてみました。で、大槌わんこっていうところは、個人的に私が犬好きっていうだけですけども、どうしても紙面が硬くなるのは、最初から分かっていたんですよ。こういった状況でしたので、まちづくりの情報が主ですので、癒して言ったら何ですけど、ちょっと柔らかくしたいなと思って、この二つは一番最初から継続しています。先ほども言いましたけど情報がないわけではないんですよ。いろんな紙媒体、いろいろ出ています。ですけども、こうして見ていると、団体情報、うちの団体はこういうことをしているんだよっていう情報。そして、次に多いのがイベントのお知らせ。いろんな支援団体のかたが歌を歌いますよ、あと、無料で物資配給しますよっていうようなイベントですよ、そういった後、大槌町被災地って有名になってきますと、名前が有名になってくる人がいるんですよ。団体の代表をやったり、うちでは歌手の女の子、中学校の女の子がいるんですけども、光があった人って何人か出てくるんですよ。言葉は悪いですけど、そういうかたっていうのは、地元紙、大槌の新聞に載せなくても、全国でのごく載せてくれます。それはそうじゃなくて、そういうイベントだったり、個人の行動を皆が求めてるんだろうかって、素朴に疑問なんですよ。それよりやっぱり我が家、自分の家はどなんだろう、戻れるだろうかという方だと思ひまして、そういうのには自分になりたくないなって、素人でもそういうふうになりたいなと思ひをすごく持っています。

取材の経験もないですけども、朝日新聞さん、河北新報って宮城県にありますけれども、そういったプロのかたとどういいうわけか、いつの頃からか普通に混じって、取材をさせていただいてます。質問もしますし、そういった環境に恵まれているのかなと思います。配付は、町内の仮設住宅2,000世帯ありますけど、こちらは全戸配付しています。町内のかた、欲しいかたにも送っていますし、地元のさいがいFMがありますので、こちらの方で週に1回、30分ですけども大槌新聞のコーナーということで、新聞を読んで、更に説明をさせていただいています。これは、こういうんだよとか、裏話じゃないですけども、そういった先ほどの地域メディアの連携と言ひましたけども、そういったこともできればなと思って、足掛かりなんじゃないかなと思うんですけど、やらせていただひています。

今後の課題としては、私一人でやっている、ということに関し

てです。もともと、復興館の担当で、ほんとは資料集めのように専念するべきなんですけど、今、言ったように現在のニーズ、ほんとに町民が必要としているところと、あと、将来のニーズってあると思うんですけど、そのバランスを考えなくちゃなと思ひます。でも、どうしても新聞を毎週作るのといっぱいいっぱいというようなことで限界にきてるなと最近すごく感じています。

新聞の配達、その資金調達、今はこちらの団体のお金でやっていますけど、印刷代だけでも将来の自立を考えて、自立が連携が分かりませんが、そういったところも考えなきゃなと思ひます。新聞以外の活動はできてないって情けない話ですけど、そういったような現状です。

今後の夢っていうんですか。もともと資料館に来た理由って、この主に2つかなと思ひています。こちらに来させていただいて資料、モノでしたり、紙媒体でしたり、いろいろ見せていただきましたけれども、私的には資料館って言って、町民向けの資料館というか、場を作りたいなと思ひて、震災体験談を集めたいなと思ひています。今でも、普通にショッピングセンターに行くと、立ち話をしているんですよ。お年寄りが多いので、特に女のかたが。聞こえてくるんですよ、地震のときの話をしているんですよ。誰かさんはあとき、逃げなかったって、2年近くたっているのに普通に、耳をすませばというわけじゃないのに、聞こえてくるんですよ。それだけ、やっぱり、その時間で止まっているかたが多いのか。会話もしていても、実感します。まだ、皆さん消化し切れてないのかなって、もちろんですけども、この前みたいに津波注意報が前に出て、実際にこの50センチ、1メートルの津波が来たんですよ。そうなる一気にみんな引き戻されます。現実の生活でいっぱいいっぱい、今しか見えない人も、ちょっと何か地震があったりすると、もう一気に。2年たつんですけども、そこに引き戻されるような、自分も含めてですけども、そういった状況。まだ、生々し過ぎるのかなって思ひます。ただ、この震災体験が集められたらなと思ひています。

で、この生きた証っていうんですけども、大槌町に朝日新聞の記者のかたが震災直後から入られてます。一人のかたがずっと、いてくれるんですけども、駐在っていうのは、もともとなかったんですけども、駐在していただひて。で、このかたが震災で亡くなられたかた、先ほど私、言ひましたけど、何人って普通、表現されますよ、800人亡くなりました、じゃなくて、人それぞれの人生があるっていうことで、この意味は大事なんだよっていうことで、人となりですね。このかたはこういう人だった、津波のときに、みんなを助けようとして亡くなったっていうので。また、亡くなったかたの思い出を収集してるかたがいます。町長は、鎮魂の森という場所をつくり、そこを運動場にしたり、緑地化したりしようって。町長がこういったことを結構、考えるかたでそういった、構想がありますので、そこに図書館や資料館ができるんじゃないかと思ひます。そういったハードなハコ物ができたときに、そのソフト面っていうんですか、中身の方を少しずつでも今から集めておいて、提供できればいいのかなって、まだ考えだけなんですけども、すごく思ひます。

朝日新聞の記者のかたも一人でやっていますので、そんなに数が集まってない状態ですので、少しでもこの記者のかたと一緒に活動できたらなという思いは持っています。震災体験談という、生々しいんですけど、生きた証っていうのは、すごくデリケートな問題で、もちろん今、例えば明日、取材をしたから、来週の新聞に載せようなんてことはできないんですよね。ただ、その時期がきたら、何十年後になるか分かりませんが、どういう形か、この町民同士と共有したいんですよね。亡くなったかたが実際にこの町に住んでいたということも共有したいな、新聞に掲載するか、若しくは資料館に保管、展示して、見たい方だけ見ると感じでもいいですので、そういった感じでもできればいいなと思っております。以上です。ありがとうございました。

(拍手)

**○司会** どうもありがとうございました。高田様から、大槌新聞への思いですとか、大槌市の今後について熱い思いを聞かせていただくことができました。

どうもありがとうございました。

そして今から、10分間、3時5分まで休憩とさせていただきます。そして後半からは各3つの事例報告を踏まえまして、東日本大震災、そして阪神淡路大震災の震災と伝えかたを比較しながら皆様とともに議論していく次第です。

(休憩)

#### 4. パネルディスカッション

**○司会** 定刻になりますが、少しお待ちいただけますでしょうか。

先に私の方から、パネリストの方の御紹介をさせていただきます。

まず、私から見て、一番手前側が地域人材支援センターの地域連携サポーターの寺沢様です。

そして、お隣が地域人材支援センターのスタッフであります山住様です。お隣が先ほどの事例紹介をしていただいた地域人材支援センターの内屋敷様です。そしてお隣が、野田北部たかとり震災資料室の河合様です。

そしてお隣が大槌復興館の高田様です。

そして、今回のパネルディスカッションのコーディネーターは研究部の阪本が務めさせていただきます。

それでは後半のパネルディスカッションでは、研究部の阪本にバトンをお渡しします。どうぞよろしくお願いいたします。

**○阪本（人と防災未来センター主任研究員）** 御紹介ありがとうございます。人と防災未来センター研究員の阪本です。ちょっと一番遅く到着になって申し訳ありません。

ただ、時間自体は予定より早く進んでいるので、これから、3時50分まで皆さんとの質疑応答も含めてパネルディスカッションの方を進めて参りたいと思います。 よろしくお願いたします。

では、座って失礼いたします。

今日は、神戸の人材支援センターからは3名お越しいただいて

まして、河合さんと高田さんは大槌市一人ということで、ちょっと心細いんじゃないかなと思ひまして、先ほど大槌高校の先生がいらっしゃったんで、一緒に参加していただけないですかとお伺いしたんですが、上ですごろくのイベントがあるそうでして、そちらの方がいいと言っていつてしまわれましたが、なので、高田さんお一人なんですが、できることはサポートをしたいと思ひますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず、今回、高田さん大槌市を初めて出て、神戸に来られて、神戸も初めてですか。

**○高田氏** 初めてです。

**○阪本** いろいろ神戸の語り継ぎの活動、昨日、見ていただいて、今日も話を聞いていただいたと思うんですが、聞いてみたいことがある、どなたに対してでも結構ですし、どちらの機関に対してでも結構ですのでお願いできますか。

**○高田氏** 昨日、こちらの資料館を見させていただいて、後は高校生と一緒にちょっとお話の方を聞かせていただきました。私たちは、社団法人といっていますけれども、団体の中も結構、ある意味転換期というのを迎えています、何か質問とずれますけれども、最初は先ほど紹介させていただいたように食堂、みんなが集う場所を作りたい、資料館を作りたい、それぞれ思いがあって、まちづくりをしたいと言って、集まったメンバーでやってたんですよね。ほんとにこう、非日常的、震災も日常じゃなかったんですけど、その後も被災地ってハイテンションというんですか、津波とその後の火災があって、震災当初の持つてるハイテンション、変な意味で非日常が続いているような状態で、外のかた、今まで誰もこなかった、交流がなかったところにすごく支援していただいて、いろんなかたが来ていただいて、そういった中で勢いだけでほんとに社団法人化して、1年突き進んできたんですけども、だんだん、特に私たち、地元団体としてのあり方を、一人ひとりが見直してきて、疲れてきてるっていうのもあるんですよね。お祭り騒ぎで家庭を顧みない、皆さんそれぞれ事情があるんですけど、ちょっと立ち止まって、今後の在り方、今度、新年度を迎えますけれども、中の方で体制を立て直してるところなんです。私から見てますと、昨日ちょっとお話ししたんですけども、私たちの団体でも顔になってるようなかた、何人かいるんですけども、メディアに結構出たり、顔としてほんとに頑張ってるかたほど、最近、折れるまではいかないんですけど、先ほど結果っていう言葉も出ましたけど、結果は出てなくはないんですけど、今後、ハイテンションできた状態が保てるだろうか。そして、なかなか、人材って言うんですかね、観光って言うんですけど、観光、一人でやってるんですよね。28歳の男性のスタッフなんですけど、私自身も復興館の一人、実質、一人ですので、自分の限界って感じてきてると思うんです。で、先が見えない、町も含めて、この町全体が2年にして中だるみっていうんですかね、妙な感じで緩い感じを感じるんですよね。そういったところですよ。もう、いっぱいいっぱいやってきたんですけど、こういった状況って神戸にはあったのかなっていう、漠然とした相談ですけど。

**○河合氏** 実際に我々とも全く同じ。ただ、もう既に一般社団

法人になされてるっていうのはすごいですね。我々のところはまだ任意団体ですから、地域の。ですから、結局、法人となっていないわけで、それによって誓約がいろいろあったりとか。

実際に我々も直後だったら仕事もなく、そうですね、その後、習慣になったのが、地域にある大国公園っていう公園、ひし形の。あの公園の春の水やり。今までやったことがない。

でも、時間いっぱいあるわけですよ。仕事もないから。だから、結局、何人かやってるっていうんで、当然、いっぱいいっぱいになるんですけど、それでも続けていかないと、よく言われますでしょ、まだやってんのって。何年もいくと。

でも、もう今なんて、そういうこと、一切、周りの人は言わなくなつて「御苦労さん。」で済んでる。でもって、10年ぐらい続けんと。

○河合氏 大変と思います。でも、今、そうやって何もないところでも今、そうやって立ち上げて、外から人を呼び込んでこういう動きをなされてるんは、すごいことだと見えます。

実際、我々も同じ被災地、市民交流っていうのをやってるんですけど、台湾でも地震がありましたでしょう。

○高田氏 うん。

○河合氏 台湾でも交流をやって、そこのスタッフの話をいろいろ伺ったら、全く同じことをやってるんですよ。大植も。お母さんらを集めて仕事をやってるんですよ。そこで地域の人に来てもらってやってる。だから、やはり何か続けていくっていう。ですから、我々も同じようなことはあったんですけどね。修学旅行生が神戸に出てこいと、メディアで言ってくれたおかげでその年ぐらいからの実際に小学生が我々、自分とこ、更地の状態ですよ、何もない。いわゆる、がれきも全て撤去されたそういうところへ、実際に来られて。でも、残念ながらビジネスじゃなかったんで、一銭にもならなかったんですけど、当時は。でも、やっぱりそういうことをやっていったっていうのが。だから、今だったらもうビジネスになってますけど、でも、当時はそういうのは一切なくて、でもやっぱりやっていくということをしていったわけで。すごくまだ逆にうらやましいのは、若い人が今、かわれて、高田さんも若いけど。我々のとこって言ったら、当時70代から20代まで。神戸市の中では比較的年齢幅が広がった。でも、結局18年やってたって、みんながみんな18歳、年いくだけで、ですから、上は90近くなってます。

私も30代から50代になってます。ですから、やっぱり、そんだけ、どうしても時間が掛かるのかな。でも、昨日も言いましたけど、やっぱり立ち止まってもしんどいですし、戻るのは最悪ですし、やれたら考えながら進む。だから、軌道修正なんて途中で何遍もやったらいいですよ。でも、絶えずやっぱり、進んでいくっていうことをやっていかないけど、しんどいけどね。大体、根本先も私は話の中で言いましたけど、3年から5年っていうのが一番しんどいと思います。

実際にボランティアでたかとり教会に来てた、いわゆる、プー太郎ですね、学生でもなく、何か知らないですけど、やっぱりボランティアで当時、入ってくるとやりたい放題できるんですよ。

今でこそボランティアセンターとかが一連化ということで窓口になってやってますけども、阪神淡路のとき、それ、なかったですね。ですから、一応、ルールというか、コントロールをする拠点はちゃんとやって、その代わり何でもかんでもやりたい放題となつてくると、先ほど高田さん、おっしゃったように、やっぱりみんなテンション高まっているんですよ。で、何でもできるみたいな、ちょっと間違った感覚になつちやうって。でも、結局、そういうボランティアの一部の人は結局、燃え尽き症候群になつてしまつて、結局、やる時間が時間とともになくなってくるんですよ。で、やる事がなくなつて、いや、ボランティアはもういいよっていう話、だから、やっぱり引き際が分からなくなる。結局、もう、ほんとと精神的に参つて、神戸から出ていくっていうことになつてるんですが。ただ、これ、我々もずっと言つてたんですけど、住民はそれはできひんわけですよ、燃え尽き症候群、ずっとそこにおるから。ずっとそこで、い続けなあかんから。だから、最初は急上昇していくね、テンションが高く。で、後は水平飛行、行くけど、でも大体、着地できないんですよ。もうほんと、低空でも飛び続けていく。でも、あるときまた来たら、きっとまた上へ上がる。だから、その多分、繰り返しになるんかなっていう。実際、我々はそれを繰り返していつ、今、まだ、こういう状況になりつつあるんですけど、これをいかにして今年、もう一遍、戻そうかと悩んでるところなんですけども。18年たつてもこんなことなんです。ですから、余り、大変でしょうけど、ゆっくりでもいいから、走っておってください。こんなんで答えになりますかね。

(拍手)

○阪本 では引き続き、地域人材支援センターの皆様、いかがですか。

○山住勝利氏(地域人材支援センター) 震災に関して地域人材支援センターでしたら、震災学習ですが、それをずっと続けていくモチベーションということで言えば、震災学習っていうのは、子供たち、特に小中学生に対して阪神淡路大震災の記憶を継承するっていうことなんです。出前学習とか、修学旅行生の受入れとか、そういったプログラムを一回だけやっても結局、記憶というのは伝わらないと思うんですね、根付かないし。それを繰り返してやることが重要だっていうふうに考えてます。言い換えれば、ずっと同じフレーズを奏でるということです。例えば音楽の話なんですけど、同じフレーズばかり何十年も演奏しているようなミュージシャンがいたりします。すごいそれって格好いいなとか思ったりするんですね。そういうふうにとずっと続けていくことによって、話を聞く人の心に何か残るものがあるんじゃないかなって思います。そういう意味で、とにかく、同じことの繰り返しでも、子供たちに記憶を伝えるためには、続けていくこと、たとえ内容が同じであっても、それをいかに続けていくかっていうことが重要だと思います。続けることに使命みたいなものを感じますし、それが地域人材支援センターの震災学習に対する一番のモチベーションではないかと思つてます。

○寺沢正敏氏(地域連携サポーター) 僕は以前は河合さんのと

ころでサポーターをしてまして、また、こうやって並んでお話をするとおは思ってたんですけども、実は私自身は当時、阪神淡路大震災のときは高校1年生でして、尼崎で被災したんですけども、その当時のことを覚えてないというか、実は思い出せない自分がずっといるんですね。なので、語り継ぎ活動のサポートなどもやっていますが、あの当時積極的に何か活動したかっていうと、自分の中で記憶はないんですね。そういう意味では、野田北部で初めて震災っていうものに直接、関わり出すことになったと言えるんですけども、その中で僕は、サポーターと言って、ちょっと第三者的な立場から支援をさせていただいてたんですけども、河合さんが今、おっしゃったように、野田北部、今でも注目されてる地域でも中だるみということがあったということなんですけども、僕がその野田北部を見て、すごいなと思うのが、全国に応援団がたくさんいらっしゃるというのがあって、震災直後には、たくさんのボランティアのかたであったり、いろんな大学のかたが来られていたんですけども、その中でもいまだに仲が続いている方々がいて、全員ではなくて、多分、限られたかただと思うんですけども、そうやって心から通じ合っている仲間が全国に散らばっていて、河合さんであったり、カリスマ的な会長さんだったり、その方々をみんなが、全国から注目していて、あたかも監視されてるような感じで、何してるねん、頑張らんかいみたいな感じで激励にいつも訪れてくださって、何か、そういうかたがいるっていうのは、河合さんや会長さんにとっては、そのかたがたに地域の人には話せない愚痴を言ったりとか実は地元ではあまり見せれない弱みな部分が見せれるというか。実はそれがモチベーションを保って活動し続けることを手助けしてくれることもあるのかなっていうふうに思っています。今、その大槌の方でもまだ2年なので、僕たちがほんと、想像できるような気持ちの部分ではないと思うんですけど、実はほんとに心許せる外部の人たちっていうのが増えてくるとすごく心強いものになってくるんじゃないかなっていうふうに思います。

○**阪本** 神戸の方々からは大変だけれど続けろって言われてるような気がするっていう話 तरीでいかがでしたか。

○**高田氏** そうですね、そんなんでずっとお話を聞かせていただいている、例えば私たちの団体も町民が、町民のために、だったり、町をよくしたいと思って立ち上がったんですけども、始めてみると、食堂が典型的で、町民が来ない、食堂に来ないんですよね。外部のかただけ、ボランティアのかた、支援のかただけ。そして役場がちょっとダメージが大きかったので、役場じゃなくて、民間の私たちが受皿になるような状態。今、少し落ち着いてきましたけどもね、イベントをやりたい、支援したいって言っても役場に行っても多分、役場はイベントところじゃない状態で、私たちがそういう受皿をやったということで、どうしても対外的になってしまう。そういったところで、対応してきたんですけども、すごく共感というんですかね、できるのは、やっぱり外の人、外って言ったら失礼ですけども、町外のかたなんですよ。私の新聞もそうなんですけど、町民のための新聞をただ作りたくて、発行したんですけども、一番先にくいついてきたのは、町

外のメディアなんです。で、先ほど言った朝日新聞のかたが新聞に載せる、そうすると、一通り取材の依頼がすごく来る、一通り落ち着いてまた、忘れた頃にぼんと載せられるんですね、そうするとまた、テレビだったり来るっていう。そして、今回、こういう御縁で呼んでいただいた。町外のかたが見つけてくれるって、すごく理解できるような気がします。町外のかた、ありがたいなと思う反面、逆にちょっと残念だなって思うのが、私たちの団体に今までなかったような観光、今までなかったような新聞、うちでは余り言えないですけど、地元のバックアップっていう、大槌町だったり、この岩手県のバックアップっていうんですかね、町外のかたも本当にすごく認めて頑張れってしてくれるんですよ。その細かく言えば家族内の理解ですよ。私たちの団体って何、社団法人、NPOっていうのは、何をやってるんだという感じで見られることが多い。今はテントじゃなくてプレハブでやってるんですけど、あそこで何をやってるんだろうっていう見方も正直されてます。テレビとかには出るけれどもっていう話なんですよ。ですので、ジレンマっていうんですかね、町外のかたには割と認めてもらえる、励ましてもらえる、ただ、その自分の家族も含め、その地域で震災を経て、新しくチャレンジしたいという気持ちはありますよね、それを地域の人が失敗してもいいからやってみなさいっていう、そういうのがあれば、もう少しちょっとまた、違うんじゃないかなって。いろんなかたを取材してまして、特に女性ってすごく強いんですよ。今日のパネリストの方々は男性ばかりですけど、大槌って結構、キャラが濃い人が多くて、なぜだか女性が強いんですよ、年齢関係なく。もうパワフルで、私、ほんとに取材するたびに感心して、ただ、そのとき問題になってくるのが家族の理解の支えなんですよ。そういったところは私、女性ですごく感じます。この町、あれだけ壊滅的な被害を受けた町で新しい町を作りますよね。どういう町になるか分かりませんが、行政はハードな面しかしないんですよ。そのハードを生かすも殺すも、中身なんですよ。ですので、そこの中身っていうのは、ほんとに今から必要だと思っていて、それができるのはやっぱり女性かなって、新しいのをゼロから生み出すって、すごく嫌でも感じるんですよ。ですので、そういった家族を含め、地域のバックアップって、もう少しあればなと思います。

○**河合氏** 結局、私どもの野田北部も女性なんです、根っこは。実際に今日も言いましたけど毎月全世帯、約1,000あるんですけど、配ってくださるのは、地域のお母さんがた。各町ごとの理事さんですね。ですから、そういう人がまた、周りの女性にやっていただいて配ってくださってる。ですから、そういうシステムがあるから我々、編集、発行って簡単に言うんですけど、最後の配ってくれるかたが動いてくれなかったら、やっても、じゃあ、その人たちに嫌われるとどうなるかって言ったら多分、町の中で生きていけません。ということは、その人たちに、お母さんがたに「御苦労さん。」って言ってもらえたら、もうそれだけでオーケーなんです、簡単に言う。でも、それを言うっていただくまでにどれぐらい掛かるかって言ったら、やっぱり現実、時間

が掛かりますよ。それこそ、ぼっと出て、私は生まれも育ちも地元ですから、がきの頃から素性はばれてますから、だからその点、やりやすいんですよ。普通にぼっと来てっていうて、どこの馬の骨か分かんって言われるんじゃないで「ああ、どこそこの誰々や。」って分かっているだけで、その分、ハードルがきゅっと下がるから、それはそれですごくありがたいんですけど。でも、やはり男ってというのは、いざというときは表には出ますけど、でも、日常の根っこを支えているのは、近所のお母さんがたですから、それは全く同じですよ。今回、時間がなかったんですけど、うちのところのお母さん連中にお会いしたら一番、よう分かります。めちゃくちゃパワフルですから。でも、やっぱりそういう日常があつてこそ、男どもはそういう、それこそハード系のまちづくりであろうが、どつき合いのまちづくりであろうができるってのがあつて。だから、やっぱり伺ってたら、一緒やなって思いましたね。やっぱりそれは、変わりませんよ、大槌市も。我々野田北部も。ごめんなさい、横やりを入れました。

○**阪本** あと、活動に対して地域の人々がどうサポートしてくれるか。この人と防災未来センターも阪神淡路大震災を伝えてはいるものの、来館者のほとんどが外部のかたで、なかなか地域の人に来てくださらないという課題があるんですけど、その辺りはいかがですか。

○**河合氏** 実際、お隣の地域人材支援センターの皆さんも地域外なんですよ。

○**阪本** そうなんですか。

○**河合氏** でも、本当なら、これ、愚痴ですけども、我々の地域にここの施設があれば、もう使い倒してますよ。でも、残念ながら地域が違う、学校区も違う。ですから、我々は施設がないんです。人を集める場がない。でも、ここは場があります。それでも場があるけど、どうしたもんかで皆さん、悩んでられる。だから、本当は以前から言っていたけども、一緒にコラボでやれば、よりいいものができるか、逆に地域人材支援センターさんがコントローラーになって、逆に我々を使い倒してくれたらいいわけですよ。だから、結局、さっきからもその人材のうんぬんっていうのがあるけど、やっぱり、地域でできなくなつて、地域外の人をお願いしてやってもらえるんだつたらいいわけです。実際、私どもの年末の餅つきなんていうのは、周りみんな高齢者ばかりになっちゃって、若い人は出てきませんから、地域外から若手が来てくれて、餅をついてくれるんです。でも、それは何かと言うと、日常の人的交流をやっていると、誰かがそういう人を呼べる人間になってます。その関係で呼んできてくれる。だから、地域に人材が足らへんねんってよく聞かれるんですけど、もしいかなかったら、地域外から引っ張ってくればいいやんって。でも、それは一体、どうなるかって言ったら、個人的な関係でも何でもいっから、その交流をしとけば、それはそれでできるんじゃないか。地域人材支援センターさんにも外部からの力、そこをお勧めしたいと思つてます。

○**内屋敷氏** 私ら職員は地域外という形になるんですけども、その辺は先ほどの事例紹介のときに申し上げましたとおりで、立

場的にはコーディネーターの視点で考えてはいるんですね。外部とセンターとの仲立ちと言いますか。ただ、様々な面で実際に関わってくださっているのは当然地域の方々です。例えば、今出ている問題としては、高齢化っていうのが出てきています。NPOふたばの理事も御高齢の方が多くなってしまいました。次の世代の後継者がなかなか見つからない手が挙がらないのが課題のひとつです。それをどうするかっていうのは、今、ぼっと答えが出てくるものでもないんですけど、先を見据えながら考えていかんとあかんのかなと思つてます。

ちょっと話が変わるんですけども、僕はよく商店街に出て、お店の社長さんとかとお話をしたりするんですけど、そこでよく言われるのは、見た目にはすっかり長田も復興してるように見えるけれども、実際わしらのところは全然復興してないで、という話です。というのは、現実問題、お金の問題が大きいんですよ。その復興資金として国からなり、お金を貸してもらえた、利息はゼロで免除してもらってるけれども、その額が半端ない、それは今も継続して返してるんやと。店の人たちもどんどん高齢化しているのに跡継ぎがない。わしらこの先、どうしたらええんやと。そうは言いながらも皆さん、関西人気質っていうんですかね、バイタリティーに溢れた方々なので、今でも頑張つてはるっていうのが現状ですね。

私ら人材支援センターとしては、そのお手伝いが何か出来ればと思つてます。

名前のせいもあつてか、よく人材派遣、仕事斡旋の施設と間違われるんですけども、基本は地域の活性化のお手伝いということで、そのためには何ができるかっていうことを考えながらやっています。

○**山住氏** 長田区は高齢化率が高いということで、地域人材支援センターの周りも高齢者のかたがすごく多いんですね。でも、長田区の人口は増えてきているようです。ただし、もともとずっと長田にいる人じゃなくて、外から入ってきた人たちが多くなつてるので、昔ながらのコミュニティとか、そういった状態ではありません。そういったところもあり、地域人材支援センターで開催するいろんな子供向けのイベントとかでは、地域の高齢のかたや現役を引退されたかたに講師になっていただいたりして、ちょっとした緩い繋がりを作っていくっていうような試みをやっています。

恐らく、そういった日々のイベントや教室などを通して地域の人々の繋がり、ちょっとした顔見知り程度かもしれないですが、そういったものを作っていくことによって、その繋がり災害時には有効に働くんじゃないかなというふうに考えています。ですから、日々のイベントも急がば回れ的な、防災や減災として捕らえられるんじゃないかと思つています。

いずれにせよ、その日々のイベントとか教室とか、そういったものに、できるだけ地域人材支援センターのスタッフじゃない、センター外部の地域の人を呼び込んでいろいろやっています。

○**寺沢氏** 先ほども河合さんがセンターが指揮を取ってやれって言つてくださっているのは、実感としてもすごく感じるところがあつて、地元の人が関わってもらえないというのは、やはり、いろ

んなどころで課題になってきていると思うんですけども、地域人材支援センターのNPOであるNPOふたばというの、先ほど内屋敷さんの方から説明があったように、旧二葉小学校を残そうという活用検討委員会のメンバーが中心となって立ち上げてるので、こういう言葉があるのか分からないですけども、地域型NPOというふうに言われているNPOでして、ただ、その地域人材支援センターの建物としては、地域だけでなく、神戸市民に向けた施設であってほしいというようなことも言われていて、そこはジレンマを感じています。管理してる人間にとっては、地域を主体として考えていきたいけれども、施設としては広く一般向けに、テーマ的にやっていかないといけないというふうなところで、二面性があって、そういうジレンマに僕たちもはまってしまうようなところがあります。ただ、震災学習の語り継ぎとかに関して言えば、野田北部は歩いて10分ぐらいのところにある、お隣さんなので。部分、部分をそういう河合さんたち近隣地域のかたにお願いをしながら、実は外部の人間と言ってもいいかもしれない我々センターがコーディネーターをしていく形になってバランスをうまくとっていくような役割を果たしていかないといけないのかなというのは感じています。

○阪本 どうもありがとうございました。どこも似たような悩みを抱えてるということですね。

ただ、やはり、地域のサポート、外部からの支援も上手に使って活動されてるような気がします。

今日は会場に11月に講師としてお越しいただきまして、新潟県の中越、地震の後に作られました中越メモリアル回廊から山崎さんがお越しいただいてるんで、今、神戸、大槌の話聞かされて、中越との違い、あるいは聞いてみたいことなどがあつたら、突然振って申し訳ありませんが、よろしく願います。

○山崎氏 新潟県長岡市から参りました、中越メモリアル回廊という中越地震の被災地へも繋ぐ資料館が点在してる所なんです、その長岡震災アーカイブセンターというところで勤務しております山崎と申します。よろしく願います。

中越地震の被災地も中山間地ということで、過疎高齢化のもとと進んでいる地域で、地震の後には、その過疎高齢化が一気に20年分進んだとも言われるようなところになっています。先ほど大槌の方では、地域のかたが社団法人の職員として皆さん、お勤めになるっていう話がありまして、新潟の方では逆にやっぱり過疎高齢化で若者も余りいない中で、外部の支援者のかたがすごくいっぱい入ってくれてたんですね。もちろん、関西の方から大学生が、その阪神淡路でお世話になったから、今度は中越で恩返しというような感じで、どんどん中越に来てくれまして。中越の人たちは、今までそういう外部からの支援というのをもともと余り、受け入れないような気質のところだったんですが、だんだんと外から来てくれる人を受け入れるというか、喜んで交流をするように、ちょっとずつ変化していったんです。

皆さんにちょっとお聞きしたいのは、そういう外との交流ですよ、そういうものが最初からそういうかたを受け入れる気質と言えますか、体制があつたのか、それともやっぱり徐々に信頼

関係を築いていく中で、そういった外部の人との交流が続くようになったのか。

また、そういった人たちに一時的な関係ではなくて、継続的な関係を求めているのかというか、そういう人たちにどういう、何を求めているのかなっていうのをちょっとお聞きしたいなと思います。

○高田氏 今の質問で、同じ大槌町も先ほども言いましたけれども、ほんとに交流人口っていうのがほんとにない町、大槌ってどこって言われるような町で、交流がなかったんですね。出ていく人は多いけども、入ってくる人は少ない。です、そういうところにやっぱり同じように町内のかた、震災後にいっぱい入ってきてもらったんですけども、外から来たかたに言われました。やっぱり大槌町の人って一回、んっ、て固まっちゃう。誰も知らない人が来ますよね、物資もらうときとか、何ていうのか、直後はまた別として、誰かほかから来ると、私、よく典型的な大槌町民だと言われるんですけど、構えちゃうんですね。余り交流がない町で育つたので「この人何しに来たんだろう。」っていうような、思う人って結構いるんじゃないかな。ただ、それでも一回、話をして、交流というんですかね、うち解けると皆さんすごく、外から来た人に心をうち解けますし、そのパワフルなおばちゃんたちがおもてなしをするんですね。避難所にいるときから「まあ、上がって、上がって。」って避難所の段ボールで分けしたところに「上がって、上がって。」って言って、お茶を出すんですね、メディアのかたに。そういった事実もありまして、そんな感じで個人的にその支援団体だったり、支援者と繋がってる例をすごく多く聞きます。

ただ、一つ、ちょっと最近気になることが、この前、大槌中学校の校長先生、東京の方で講演会をしたんですけども、私がそこで初めて聞いたのが、支援がすごく来っていて、2年たっても来てるそうなんです。ありがたいんですけど、校長先生が支援をちょっとストップっていうんですかね、考えをやってるそうです。皆さんが来られて、例えば中学生と交流したい、支援したい、物資を届けたい、イベントをしてあげたいって言うんですけど、実際、授業数の方が限られてますよね、授業もこなせない。来るとやっぱり3.11のことを聞かれて、特に子供さん、家族を亡くされたかたがいる、その微妙な時期ですよ、中学生で。です、校長先生が言うには怖いって言うんですね。何が怖いかって、子供たちがすごい素直で、笑顔が絶えないですね。何でこんな2年もたっていないのに笑ってられるんだろうって、逆に折れるんじゃないかってすごく心配してまして、支援していただくかたには申し訳ないんですけども、例えば休憩、授業と授業の時間15分っていうことで制限をしまして。心を鬼にして、生徒のためっていう発表を聞いたときに、すごく団体の人間として考えさせられたんですね。ただ、支援してくれてるかたにはお礼も言いたっていうのは、気持ちはありますので、ビデオレターを大槌町の中学校、おかげでこれで頑張ってますよということで、ビデオレターでやってますよって。支援してくれるかたには、ほんとに申し訳ないんですけど、日常を取り戻したいって。

私も最近、同じことをちょうど考えてまして、どきっとさせられたっていうような状況です。

○河合氏 私は野田北部の事例から言いますと、まず、学校区でない近隣の中学校へ我々の地域の人が大部分が非難したんですね。

じゃあ、その人たちを今後、そうフォローしていくかっていうのを発育協会の会長が考えて、その人たちの今後をどうするか、その意向を調査して、聞いて、書き留めておこうと。要するに元ところに戻ってくるのか、若しくは、やがてはその仮設住宅に入るのか、あるいは親類、縁者のところに行くのかとか、その人の行動をですね、それを把握していこうということで、ボランティアの派遣要請を長田区役所に、もう1週間たつた、たないかぐらいの段階で出したわけですね。ところがそんな時期に1.17の1週間後ですよ、その時期に、ボランティアが来てくれるわけでもないんですが、10日ぐらいたってから、長田区役所の担当者から連絡があったんですね。長野大学の学生たちが卒業生がリーダーとなって、来てくれるかも分からない。そういう形で来てくれる。で、彼らも面白いですね、神戸の東灘から、順繰りに灘区、中央区って渡り歩いたけども、どこもそんなボランティアの要請を出してるところ、地域がないということを出してたんは、たまたま長田区では我々のとこだけだったんで、そこで引っ掛かって。で、1月の下旬辺りにお見合いをやって、大学の先生がたともやって、それから、翌月から週に1遍、大型バスで繰り出して、班分けをしながら、3月末までずっと関わってくれて。

で、それもやはりこちらが移動があって、こういうことをやっていただきたい、やってほしいっていうことがあって、お願いしたっていうような経緯ですね。実際に、今でこそ個人情報保護法の問題があって、なかなか個人情報を簡単に扱えないんですけども、まだ、当時はそんななかったんで、やっぱり、個人のその家族、家族ごとの動きっていうのをそのときに把握できてよかったんです、結果的には。

実際に区画整理事業とか、そういう事業になると、当然、個人の権利者のかたに連絡を取らなあかんんですね。実際、ああいう被災したときには、皆さん、そんな住民票をいきなり移しませんから、旧住民票の所在地のまんま、でも、その本人がどこに行ってるか分からないとなると、連絡の取りようがないという問題が考えられたんですね。大体、よく言いますね、聞いてなかったって、そんな連絡してくれへんねんやもんって言って文句を言うっておっちゃん、おばちゃんがおるんですけど、大体、そういう人たちは、自分で情報を出してないんです。私、ここにいますよっていうことを言ってくれない。だから、言ってないから誰も分からないから連絡がつかないっていうそれが分かってくれないんですね。でも、そういうことで、個人のデータを把握するためにボランティアを要請して、でも、残念ながら今、申しました3月末までだったんですが、じゃあ、4月以降、どうするかっていうときに、これもまた御縁があって、早稲田大学の建築の研究室が来てくれたおかげで、ほかの大学が入ってこなくなりました。あそこが入ってるんだったらというこで。

我々の方は基本的なスタンスは昨日も言いましたね、来る者は

拒まず、去る者追わずなんです。ですから、来ていただくんは、もう、いつ来ていただいてもいいし、去って行くんだったら、ばいばいでもいいんです。でも、やっぱり居心地がよくて、ずっと来てくれてるっていうかたも結構、多いですね。ですから、やっぱり、そういうお互いの関係っていうか、もう、そうなる個人関係っていうのも続くと、それが気が付くともう18年ずっと続いているんです。だったら当時、学生でも、もう四十超えてますから。もう、そう考えると、中には結婚式に呼んでくれたりしますから、非常にそういう関係を続けていくっていうのが、なかなかよかったなと思ってます。

○山住氏 地域人材支援センターの震災学習では、先ほど内屋敷から説明があったように、神戸市内の小・中・高校生に加えて、他の都道府県から修学旅行生を受け入れています。

それで、神戸市内の子供たちを対象にした震災学習では、その準備を阪神淡路大震災についてある程度聞いたことがあるという前提でできますが、神戸市外から子供たちが来るときっていうのは、ありません。長田区の状況とか何も知らない生徒たちなんて、いちからどういうふうに説明するのかとか、考えないといけないというのがあります。それでも、そういうふうになると、このパネルディスカッションの一番初めにあったことですけど、モチベーションが高まるものです。生徒たちが阪神・淡路大震災を全く知らないのなら、どういうふうに、いかに大震災の記憶を伝えるかということを考えますから。それこそ来る者全く拒まずっていう感じになります。

これは震災学習とは違うんですけど、個人的なことを言わせていただくと、私、阪神淡路大震災の後、数か月、結構、ひどい目にあつたんで、そのときの記憶というのは、自分でも混乱してて・・・西神の桜ヶ丘にある仮設住宅に二、三か月の間一人でずっといたんですが、そのときのことを今、振り返ると、よく生きていたなとかって思うんですね。結局、何かよその、他者の力が何か加わらないと、人間って言うのは、そういう災害時とか、もう、やっていられないなって。今でも生きてる心地っていうのは、ずっと18年もしてないんですが、そういうことがあるんで、ほんと、災害時には他者の力っていうのは、必要です。今、地域人材支援センターが担当している震災学習っていうことに関しても、よそから震災学習に来る子供たちっていうのは、すごく震災学習を実施する上での力にもなってると思うんです。とにかく、他人とか、全然知らない人っていうのは、拒むんじゃなくて、むしろ逆に受け入れることでよりいい方向に進むんじゃないかなと個人的には思っています。

○寺沢氏 僕も山住さんと同じで、河合さんもおっしゃってたんですけど、来る者拒まずっていうのがいいんじゃないかなって思います。あと、地域の中でもきつと、ほんとは関わりたい人もいると思うので、逆に外部の人ばかり集めてしまうと、地域のかたから「何や。」みたいな感じで見られがちではあると思うので、何か、その両面を大事にするっていうか、地域の中からも発掘しても、ピンポイントで1本釣りでもいいので、追い掛けていくっていうか。僕たちの場合だったら、語り部さんを地域の中から1本釣

りをお願いしてやってもらうっていうパターンがあるので、両方に門を開くというか、そういうバランスを保つのが大事かなっていうふうに思います。

○**阪本** はい、ありがとうございます。まだ、まだ、聞きたい話がたくさんあるんですが、ちょっと時間の管理が悪くて、そろそろ時間なので、会場の皆様の中で、この後、お茶会、隣でお茶を飲みながら講師のかたと交流会をやるんですが、それに参加されないかたで、質問があるかたはお一人か、お二人、質問を受けたいと思うんですが、質問があるかた、いらっしゃったら挙手をお願いできますか。

では、お名前を言っていた後にどなたに質問か言っていたら、質問をお願いします。

○**質問者1** 私は一度も東北の方に行ってませんけれども、テレビで見るとかぎりですけれども、確か大槌町は役場が浸水し、職員が40パーセント以上が亡くなったと私はちょっと覚えてるんですが、私は実はまちづくりですね、これは大変なことになると、これから先、思うんですが、40パーセントの役場の職員がいなくなって、全国から実際、職員が応援に来るとはいえ、その人たちは一定の期間で帰られます。

まちづくりは、1年や2年ではできる話ではないんですね。だから、それをどう・・・の皆さんがどうされるのか、大槌町だけでは私はとてもじゃないが、新しいまちづくりをするのは大変だと思うんで、そのことは非常に気になってるんです。

この新聞にも、具体的にいろいろ近い問題も出てきますから、こういう問題が住民の皆さんにとっては一番身近な問題になるんですね。

仮設に今のところ入れても、これから先に、生涯入るっていうのを言えば、どこでどう作ってもらえるか、あるいは自分で建てるか、そのことが一番、住人の皆さんにとって、大きな問題になると思いますんで、この新聞はしっかりとその辺、大変でしょうけど、10年ぐらい続けていかないと終わらないと思いますんで、質問じゃなくて申し訳ありませんが、私は実は隣の芦屋市の行政職員で、まちづくりをやってきましたんで、多分、たかとのあのかたはよく存じ上げてますが、要は、その行政だけでできるもんでなくて、地域のまちづくり協議会の皆さんの協力がなかったら、とつても紛糾していきますから、そこが心配で心配でしょうがないんですよ。

○**高田氏** ありがとうございます。

大槌町役場では震災のときに役場、庁舎も津波で流されたんですけれども、40名のかたが実際に亡くなってしまったんですよ。ですので、それで町長が亡くなったのが大きかったですね。被災地で唯一、町長も流されてしまったので、その8月に新しい今の町長が決まるまでが全然何もできなくて、周回遅れのトップランナー、そんな感じで、確かに大変なんです。

そして、今年度の終わり、全国から派遣職員のかた、応援を受けてますけれども、今、おっしゃられたとおりで、3か月、6か月、1年なんですよ、派遣期間って。

そして、鹿児島から来てるかたも、地域整備課、都市整備課で

いますけれども、今年3月で総入れ替えなんですよ。ちょっと先日、いろいろ事件って言うんですかね、

ちょっと悲しいことがありまして、派遣職員、大槌に限らずの確保っていうんですかね、非常に難しい状態です。新聞を書くことで、団体だけじゃなくて、行政に取材をさせてもらって、ほんとにこういった団体、ほんとに嫌っていうぐらいに感じるんですよ。ですので、この私個人で言えば、この新聞は、もう、何て言うんですかね、いろんな課題山積、笑ってしまうぐらいに、落ち込めばきりがいいので、そういった状態なんですけれども、おじいちゃんとかおばあちゃんが読みやすいよって言うてくれる人が一人でもいるかぎりには、ほんとにもう、できることって限られますけれども、人生を掛けてもいいかなと思って、ほんとにそう思っています。その中で、地域、行政だけでは何もできないと、ほんとに思う。町長の苦しみというんですかね、そういうのも実感してますので、そういったところを活動できればいいなと思っています。

○**阪本** 大槌新聞の方なんですが、高田さんがお一人で取材をされて、編集をされて、発行して、配送までされているんですね。今回、ここにお越しいただくことで、その作業が遅れてしまうという話がありまして、6月から発行を初めて、まだ、一度も休んだことなく、毎週継続して、ほんとに休む間もなく、発行を続けていらっしゃって。でも、やはり神戸のかたにも伝えたいということで今回、お越しいただいています。

あと、大槌新聞なんですけど、今は、ほんとに御自分の御負担で発送してくださってるんですが、これから先は定期購読も設けられるんですよ。

○**高田氏** そうですね、はい。

○**阪本** なので、今、今回読まれて、もし、御関心をお持ちになられて、今後も定期購読をとられるかたは是非、また、福岡の方に御連絡いただければありがたいと思います。1年間で5,000円くらいでしたっけ。

○**高田氏** ぐらいですね。

○**阪本** はい。という形で定期購読ができます。

それではもう、ほぼ、時間がないんですが、お一人質ということで手を挙げてらっしゃるんで、最後の質問にしたいと思います。

○**質問者2** 今日はほんとにありがとうございます。

たかとの資料室のかたの活動も知りませんでした。ほんとにありがとうございます。

一つ目はですね、大槌新聞の効果がすごいあると思うんですよ。阪神淡路大震災のときに、各区にこういう新聞があったら、もっと早く復興してると思うんですけど、ほんとに知らないことで復興がすごい遅れてるんですよ。何十倍も何百倍のすごい効果があると思うし、こういう歴史的な新聞だと思いますが、応援してます。

それと、もう一つは最初、地域人材支援センターのかたが、すっかり復興した新長田とおっしゃったんで、私は新長田は復興したとは思えないので、やっぱりきちっとした1日を認識していただいて、率直に言いますけど、中学生だったら分かります、もう。

シャッター通りを見たら。身の丈に合っていない復興。豚まん屋さんがあったと思うんですけど、おうどんと豚まん屋さんをやった。

○内屋敷氏 ごさいますね。

○質問者2 その斜め前辺りの、おうどん屋さんも辞められたと思うんですけど、家賃が払えなくて、だんだん、西の副都心って言って、神戸市も県も国も、復興事業をやったわけですけど、やはり、このとこをきちっと中学生にも伝えていけないと市の復興にも情報発信が繋がらないし、東日本との連携にも散らばっていかないと思うんですよ。あえて、そういうところも見せて、身の丈に合わない、やっぱり自分の意見をそのときに言えるような環境づくりは復興ですよ。

情報もなかったと思うんですよ。だから、あんな大きい箱物を作って、次々、店は畳んでいくわ、いい地域にセンターを作られて、すばらしい活動をされてるんですから、そういうのをもうちょっと、ずっと最初にすっかり復興した新長田の町なんですけどって言われて、私も、書いてるペンが震えましたけど、人口も戻ってないわけですので、元の人口、立派な住まいはできましたけど、人の復興が進んでない事実をやっぱり、ここの防災センターの3階のビデオでも10年前の新長田のお茶屋さんが「みんな戻ってきました、元気にやっています。」って戻ってませんよね。古いビデオなんで、ああいうのもきちっと正しい情報を発信していただかないと、大槌の皆さんに広がらないので、これで帰られたら、立派に復興した神戸という認識しかないので、ちょっとはっきり言いますが、やっぱり、こういう塾を開いていただく意味をやっぱり伝えていかないと、私も被災者ですけど。

教訓もいっぱいあるんですね。私も陸前高田に行って、親しくなって仮設住宅に泊めていただきましたけど、仮設住宅は、かなり阪神淡路大震災と違って、設備がよくなっていますし、陸前高田は比較的、雪は太平洋側で少ないですけど、そこのお宅はこたつ一つで二重のガラスになって、快適でって。狭いんですけど、そういう実態もありますので、そういう何か、阪神大震災があったからこそ、教訓があるとか、そういうのも、本当に私は、一市民としてできてないことがたくさんあって、皆さん、すごい若いかたがやってらっしゃるので、うらやましいですけど、やっぱり実態を見てますと、問題が多いので、そういうのも伝えて、こちらのかたと連携をして、個人的には情報発信してますけど、新長田のユーチューブで「復興の狭間で」って入力してもらったら、朝日放送のテレビエンタリーというドキュメンタリーをやっていますので、それを皆さんに、全国の人に私、見てくださって言うてるんですけど、やっぱり、そういう発信の仕方これから、いち市民としても言っていきたいなと思っておりますけど。

以上です。

○河合氏 ごめんなさい、多分、この中で私、年齢が一番上でしょうから、彼らのフォローをちょっとしときます。

新長田の再開発の事業そのものは神戸市が勝手にやったことです。簡単に言いますと。ですから、失敗は神戸市にあるわけです。途中で事業もいろいろ変更があって、それを今、まだ続ける

状態ですね。

残念ながら、その話し合いのときの時点で事業計画を組んだときと、経済状況がもう、一変してしまってるんですね。ですから、当初、予定してお値段とか、価格よりも値段がカタ、カタ、って下がってしまってるというのが実情で、実際にこの場で言っているのかわかりませんが、家賃がただで、共益費だっただけのケースも見受けられます。というのは、共益費は入ってもらわないことには、神戸市が全部負担するんですね。ですから、家賃が高いから入れへんって言うよりも、共益費もまた、これ、ばか高いんです。ですから、多分、正規に設備から1からやるってなると、どんなお店を出しても多分、成り立ちにくい状態には間違いないです。ですから、別に彼らのせいでもなく、建物は出来上がってるっていうだけで、中身については、これからまた、神戸市さんも考えるんかなって思います。

私もずっと見続けてますんで、どういう気で、どうなったのかっていうのは分かってますから、今、こうやってちょっと代わりにお話をさせていただいてますけども、ちょっと予想というか、予定が甘かったっていうのが、実際のところの原因です。

○内屋敷氏 みません、御意見ありがとうございます。

ちょっと私の言葉足らずなところがあったようで、大変失礼いたしました。

先ほどの説明のところ、私が申ししたのは、“見た目には”すっかり復興したというふうに申し上げたつもりでして、そこに言外に匂わせることを意識してお話させていただいたつもりでした。

また、お話ししました商店主さんのお話ですね。まち歩きなどで近隣を案内する際には、見た目はこうだけれども、その内実はまだまだ復興には至ってないんだよと、生徒さんたちには必ず補足させていただくように心掛けております。ただいま伺いました御意見も、一応理解したつもりで進めておりますが、これからも、いろいろな御意見を承りながら進めて参りたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

○阪本 それでは、ちょっと司会の不手際もあり、時間も大幅にオーバーしてしまったんですが、震災の資料展示、収集、展示をするに至って、どんな葛藤があるのか。あるいは、伝えられていること、伝えられていないことがたくさんあることもよく、皆さん、お分かりいただいたんではないかと思えます。

それでは、もう時間も過ぎましたし、以上でパネルディスカッションの方は終わりにしたいと思います。

登壇者の皆様に大きな拍手をお願いします。(拍手)

○司会 以上をもちまして第4回災害ミュージアム研究室2012を終了させていただきます。

まだまだ、パネルディスカッション等で議論されてあること、あるいは参加者の皆様で登壇者の皆様と議論したいことがあると思えますので、続きはまた、東館1階に場を移しまして、活発な議論を展開していきたいと思っております。

それでは、今日は長丁場にもかかわらず、最後までご参加いただきありがとうございます。(拍手)



## 第5回「長田区役所員による阪神・淡路大震災の記憶継承の取り組み

### 一人・街・ながた震災資料室の事例―

日時：平成25年2月10日（日）

場所：人と防災未来センター西館1階ガイダンスルーム1

#### 1. 人・街・ながた震災資料室の報告

##### ○ 寿広文氏（人・街・ながた震災資料室）

資料の収集と保存の話をしていただきます。余り慣れておりませんので、聞きにくいこともあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いたします。

お手元の方に、資料をお配りさせていただいております。

まずは、人・街・ながた震災資料室。これは、資料室のほうで見学に来られた方たちなどに配っております震災資料室のパンフレットです。その表書きになります。大分古いですけども、こういうのは用意しております。それともう一つ、「人・街・ながた震災資料室」の歩みというもので、主に新聞に掲載されました記事なんかを年月日順に取りまととめたものです。それと、聞き取り調査ということもしてございまして、その一部の報告をまとめているパンフレットです。以上2点であります。

まず震災資料室の経緯ですけども、簡単に申し上げますと、1月の17日、95年の1月17日に大変大きな地震が起きました。そのときに、全国各地からいろいろなボランティアの方々が支援に来ていただきました。その中で、とりわけ長いこと活動していただいたボランティアのグループもありますし、もちろん短期の方もいらっしゃいます。皆それぞれの方々がいろいろな形で、記録をとられたと思うんです。そのうちの一部を、区役所の震災資料室のほうで保存している状態です。

資料を集めるきっかけは、当然震災が起きたからです。多くのボランティアの方々に来ていただいて、いろいろな仕事か、や活動に携わっていただきました。とりわけ区役所には、全国の市町村の職員の方が入って避難所の運営や、罹災証明の発行等いろいろな業務に携わっていただいております。その方たちも順次去って、それぞれの職場へ帰っていただいたんですけども、一つは、その時点で私たちも、あまり資料のことについては気にもとめなかったんですけども。ボランティアの方たちが残していかれた資料ですね。例えば、こういうような避難所での連絡網や日誌、炊き出し要項等。そういう日常の、避難所での日常生活を記録したノートというようなものをたくさん残されていきました。そういうものがある中で、なかなか自分たち自身が持っている資料はないと。区役所の職員が、ほとんど当時の様子を残した資料、写真。そういうのは一切手元には残っていないような次第です。それを、自分たちではないものですけども、いろいろな形で残していただいたものを保存していこうということで保存の活動が始まりました。

最初の震災後1年については、神戸区役所の職員などいろいろな業務に携わっています。例えば、ボランティアの関係や、物資とか、あるいは義援金の関係、それから避難所の関係等々。いろいろな業務が入っていましたので、当時在籍していたときの職員の話をもとに記録紙をつくっていくということで、翌年の1月に震災資料室でこういう記録紙をつくってきたわけです。それから、順次いろいろな資料を集めていかないといけないということで、震災資料室で立ち上げるための準備室と言うんですか、96年に冊子を出しまして、その翌年に資料室を立ち上げるわけです。そのための準備の部分ですよね、会議と言うんですか、そういうものを持ちました。およそ30人ぐらいで、資料室を立ち上げていこうかということで、それが経緯になるのですけども。

実際に、どのような資料が集められているのか、それはどういった方法で今まで集めてきたのかというように少し、前にある写真で見たいと思います。

例えば、先ほど申し上げました、各避難所での連絡ノート、日誌ですね。そういうものがありますとか、当時避難所で炊き出しに来られたときの情報のチラシ。実際に避難所で使われておりました、トイレ当番の掃除の札。直接書かれたものとしては、避難所の日誌。あるいは、ものとしてはこういう小学校で使われていた、お湯を沸かすためのカバー。あるいは、長田区にありました夜間中学校にかけられていた大時計。ちょうど5時46分とまっております。そういったものが資料の中心になっております。例えば、震災当日からの新聞3カ月分ほど置いてあります。食事の配給の記録カードっていうものもあります。臨時で現場で使われていたもの、書かれたものを中心に資料室のほうで保存しております。

それから、これだけではなく、資料を収集していくということで、できるだけ広く区民の方に呼びかけていこうということです。基本的には最初、まあ今もほとんどそうなんですけども。長田の区役所の職員でありますから、長田区民の長田区ということに限って、資料を集めていこうかということで最初やっておりました。いろいろな形で、各学校関係なんかに残している資料があれば、提供してくださいというふうな呼びかけも行ってきたところです。その中で、いろいろな写真、当時ボランティアの方が残していただいた写真もたくさんありましたので、そういった写真も含めて一度、持ってる資料について資料展と言うんですか、展示会を開いて皆さんのほうに一度見ていただこうと。いろいろ震災から

も時間はあんまりたっていませんでしたので、なかなか難しい面もあったわけなんですけども。

平成9年の3月に、ちょうど最初の、第1回資料室展ということで、開催させていただきました。資料室展を開いていくと同時に、あわせて資料を持っておられる方がおられたら、どんな資料でも結構ですから出してくださいますと。それについては、公開と言うんですか、展示会などを通じて出していくということですね。あわせて、当時たくさん多かったのが、いろんなところから見学に来られますので、そういった方たちが見学に来られて見ていただいてももらいました。そういう資料展を平成9年の3月から開催しております。それは、最初は年2回ほど、出張展示も含めて年2回ほどしていたんです。今は1回、毎年11月に区役所の7階のロビーを借りて、震災資料室展というものをやっております。少しですけれども、こういう展示の、こういう形で、5日前後の期間で資料室展をやっております。

資料展を重ねていく中で、例えば、市民の方がいろいろな資料を持ち寄ってくださるようになりました。例えば、ここにあるのはすずりです。震災で、火災で家が燃えた後こういうふうに残ったと。そういうのを置いてほしいとか。例えば、これは水笠の方なんですけども、早朝に御飯を炊くために電気釜に御飯を仕掛けていたんです。震災で家が焼失され、御釜の中に残っていたお米が、こういう形に炭のような状態で残ったというわけです。その他いろんなものが焼け跡の中から出てきたので、区民の方からこの分を資料室のほうへ寄贈いたしますということでいただいたわけです。あと、ちょっと生々しいんですけども、大正筋の近くの方が燃える様子を記録にとめておいていただいたのをこちらのほうに寄贈していただきました。それとあわせて、震災当日のビデオも他の方から寄贈していただいているような次第です。毎年、こういう資料展を開催していく中で呼びかけていって、少しずつではありますが、いろんな形で資料が集まり出したというような経過もあります。特に、寄贈された資料は写真とかが多いんですけども。先ほどのようなもの、あるいは、火災で亡くなられた御主人の遺品も含めて、資料室のほうに寄贈していただいている分もあります。

後で水本先生のほうからお話いただけると思うんですけども、資料室のほうもふだんは仕事をしております。なかなか専任でやっているわけではないので、資料を集めるのはいいんですけども、整理が全然できないのが、活用も含めてなかなか難しい部分もあります。神戸学院大学の水本先生のほうが、2005年くらいでしたかね、資料の整理と保存ということでいろんな形で協力をさせていただいているような次第であります。

大きい流れをもう一度整理して言い直しますと、資料室にある資料というのは、ボランティアを中心に寄せられた資料、それともう1つは行政資料ですね。神戸市の災害対策本部なり、あちこちからその当時ファクスなり文書が送られてきましたのでそういったものが幾らかあります。ただ、ファクスにつきましては、5年ほどで字がかすんでいって消えてしまうというような状態です。先ほど申し上げました資料展を重ねる中で、そういった寄贈して

いただいた資料等があります。

また、一番最初に申し上げました、そういった資料に加えて、当時来ていただいた方に聞き取りをしていこうということで、長野県のほうから来ていただいた職員のところへ出かけていって、当時のお話の聞き取りなんかを済ませているところです。昨年は東北の宮城、福島です。その当時の、来ていただいた職員のところのほうへお伺いして、その当時の様子なんかを聞き取りしたところであります。これも、水本先生のところと一緒にやらせていただきました。大体こういうような中身です。

拙い話で申しわけないんですけども、どうもありがとうございました。

(拍手)

## 2. 神戸学院大学の水本ゼミにおける人・街・ながた震災資料室での取り組みに関する報告

○司会 寿さん、どうもありがとうございました。後ほど、質疑応答の時間をとらせていただくんですが、ここで御発表内容の事実確認等の御質問があれば、少しお受けしたいと思いますがいかがでしょうか。よろしいですか。

では、続きまして神戸学院大学の水本先生に、御報告をお願いしたいと思います。水本先生、よろしく願いいたします。

○水本浩典氏(神戸学院大学人文学部教授) 神戸学院大学の水本です。私は、防災学とか地震学などの専門家では全くありません。大学院、それから博士号をとりましたのも日本古代史という歴史学の中でも一番、律令法とかいうような全く門外漢の研究をしておった者でございます。たまたま、大学のほうでいわば仕事として避難所をテーマに何かをやってみないといけない。この全くの簡単な気持ちで、歴史学からのアプローチができるんじゃないかなという形です。今から思えば非常に大それたことだったと思うんですけども。地域に行かせてもらいました。それが、2003年ぐらいでございました。そうしますと、実は衝撃的な言葉を地域の方から私に向かって言われました。「大学の先生は、震災以来たくさんの人が被災した地域に入ってきた。いろんな形で提言もあった。いろんな形でアンケート調査だとか、いろんなものにも協力した。大学の先生は、それを皆研究室に持って帰って学会で発表したじゃないかと。5年もたったら誰も来なくなった。」という非常に衝撃的な言葉を聞かせていただきました。私が初めて地域に行かせてもらったのが、8年ぐらいたった後でございました。やはり私も大学の教員でという形で、一種上から目線で行ったんだと思います。その上から目線の私に、そういう強烈な言葉が返ってきました。これは今でも忘れませんし、いわば自分の、どう言うんでしょう。そういうおごる気持ちをなるべくどこかで抑える。または、なくしていくというための耳の奥にちゃんと記憶として残していこうという、そういう気持ちをずっと持っております。

たまたまそういうときに、学生たちと震災ってどんなもんだったのか皆で勉強しようというので勉強を始めたときに、学生がた

またまなんですけども、「長田区役所で記録展というものをやっています。一緒に見に行きましょう」というので、非常に軽い気持ちで長田区役所の7階に行き震災資料展を見せてもらいました。膨大な資料、写真、その他が展示されてございました。その前に、人と防災未来センターにも来させていただきます。ここも、たくさん資料が展示され、そしてさまざまな見学者がたくさんお見えになっていたんです。長田区役所の展示を見せていただいたとき、先ほど寿さんからの写真にもございましたが、実は、区民に向かって発信をされている展示ということでした。長田区という区役所が、区民に向かって自分のところの被災状況、それを幾つか残してあります。それを、区民に向かって展示という形でフィードバックしていくという、非常に衝撃的な、私は内容の展示だったというように思っております。今もそれを続けておられるということが、非常に敬服しています。なかなかそういう形のものではできません。どうしても博物館といいますが、ものは無機物として扱ってしまいます。そして、それをガラスケースの中に入れ、そして説明本をつけてどう言うんでしょう。私の言葉で言うと、見せてあげるという、そういう姿勢がどこからかおいてあります。長田区役所でおやりにやったときには、垣根もございませんでした。資料もなるべく手にとって見られるように。そしてものも、のぞき込んでみずからがそれをじっと眺めることができるようにというように、非常に細かい配慮のもとに区民に向かって展示をなさっております。

ぜひ、ここで勉強させてくださいというのが、実は先代の代表でありました清水さんで、お願いした次第でございます。そうすると、清水さんが、たくさん資料があるんだけど、なかなか業務が忙しくて整理をしたりということができないので、そういうことがもしやれるのであればというようにお話がございました。私一人だけがやりましたら、微々たるものでございます。研究者という立場でやるのであれば、これまた上から目線です。今日、何か研究者の立場と書いてございますが、そういう形ではなくって、学生と一緒に学ばせてくださいと。学生と一緒に整理作業もさせてくださいと。その中で、私も学びますし、学生も学ばせていただけたらうれしいですという形をお願いいたしました。見ていただきますと、どれでしょうか。聞き取り調査報告書という、真陽小学校のボランティアの記録。こういう形のもがございませぬ。ここの最初のほうに、神戸学院大学人文学部水本ゼミと共同作業にて資料の整備を進めていますとお書きいただいております。私は、研究者が研究をするというのではなくて、一緒に、つまり共同して1つの作業をさせていただいている。このお書きになった言葉が、非常に私しびれておまして、ぜひ、こういう形のことこそが、こういう震災を勉強する、震災の資料を残していくという姿勢の中で、ぜひ必要なことなんだろうと思っております。

見ていただきますと、きょうお配りいただいた震災資料室のさまざまなところに水本ゼミの学生たちがたくさん登場いたします。真陽小学校のボランティアの記録というのも、その右側のところに神戸学院大学伊藤というように下に署名がついております。これも、学生が卒業論文としてアプローチしたものでございます。

私は、学生が一生懸命、全く知らなかったり、または被災をしてまだ小学校だったり、ときには幼稚園で余りよくわからない学生も含めて勉強してみる。その背後から一生懸命支えてあげるという、そういう学びを支えるのが私の務めだというように思っております。そういう中で、いろんな成果が上がればそれこそが震災資料室の成果になるわけです。将来、何らかの役に立つようなことが次にできるのであればというように思っております。

実は、震災の10年のときに、2005年でございますけども。神戸市さんにぜひ、公文書を残してくださいと。実は、公文書は10年廃棄というのが重要な書類関係は廃棄されるんですね。市長さんに10年廃棄をせずつ残してくれと。これは、私たった一人で言ったのでは力がございませんので、大部分貴重な資料が保存されずにトイレトペーパーに変わってしまったんだろうというふうに思うんですけども。やはり、どこかで何かを残していくというのはいろんな形の努力がないと残らないんだというように思っております。ですから、震災資料室というのが長田区役所でございます。長田区役所にある震災資料室、非常に特殊でございます。残り8つあるんでしょうか。各区に震災資料室は存在するか、ございません。須磨区にも中央区にも兵庫区にも同じように当時ボランティアが参加し、そして拠点が設けられ多くの方がそこを拠点にして支援に入られ、区役所の方々も努力もされ、そういうことがあったはずなんですけども残ってないんです。どっかにひょっとしたらあるのかもしれませんが。でも、長田区役所は、たまたまそれが存在しておった。それを捨てず、または隠さず、保存という形をとられた。これが、やはりすばらしいと思っております。実は、この人と防災未来センターさんも、その前身だったときに2000年と2001年に大規模な震災資料、当時の資料の収集作業をされておられます。たくさん膨大な資料の提供を受けて、現在も保存をされております。こういう保存活動へのエネルギーがありませんと、将来どないにもならんのだろうと。あれはすばらしかったというだけでは、思い出話でございます。大変だったというだけでも、思い出話でございます。どう大変だったんだ、どのようにボランティアがすばらしい行動をしたんだということを検証できるものは、当時の人々の記憶と、そして書いたもの以外にはないんでございます。もう1つ長田区役所がすばらしかったのは、先ほど見せていただいた、これは報告書だというようにおっしゃった。なかなか立派な報告書でございます。通常、報告書をつくと基礎になるデータは捨てます。あらゆるところが捨てていきます。これのベースになったものが必ずあるんですね。ありまして、年表だったり図表だったりそういうものに基礎になったものは、ここにあるからもういいじゃないかと言って、第一次資料というのですが、その価値が、実はぐっと低下しまして、段ボール箱に入れられ、そして最後は段ボール箱とともにどこかに廃棄となり、誰かがお開けになってもごみですよ。という状態で消えてしまう。長田区役所はそれをなさらなかったという意味で、今貴重な資料がたくさん残っておるんだと思っております。

私も2年前、東日本大震災が起きるまでは長田区役所で勉強さ

せていただいたことをベースにぜひ残してくださいと。残しておけば、30年たち50年たった後、冷静にちゃんと分析をする方々に、あの阪神・淡路大震災のときはどうだったのだという分析してもらえないはず。そこまでちゃんと保存する義務が、我々にはあると思います。いろいろ御苦労もなされた、ときには悔しい思いもなされたでしょうし、ときには怒りもあったはずなんです。それを全部墓場に持って行ってしまったら二度と復元はできません。どこかで吐き出してください、文字にしておいてください。というように、お願いをしました。それが、幾つかの聞き取り調査のような形のものになり、そして保存をし、非公開でもいいから残してください。消防局の聞き取りなどは、50年非公開という形で聞き取りをいたしました。今、少し変化が来ておりますので、少しまた新しい形でのことをやる予定にはしておるんですけども。ただ、東日本の大震災が来ました。阪神・淡路大震災の後、我々はこの中には被災者もおられるでしょうし、そうでない方もおありになると思うんですけども。二度とあのような辛苦、苦勞、そして悲しみ。味わいたくないというように思われた方がほとんどでございます。二度とあんな大きな災害は起こってほしくない。逆にそれは起こらないだろうと思ってきたということも事実だと思います。でも、起きたわけですね。阪神・淡路大震災は、油断だったと。神戸の油断というように言われました。東日本大震災は想定外だったというように言われました。南海トラフが動いて、西日本各地に大きな被害をもたらすであろう将来の災害のときに、どんな冠をかぶせるのでしょうか。想定外も油断も、もう使えない。もうわかっておるわけです。どうするんだというときに、都市型の災害。都市型の地震災害を検証できるものは、阪神・淡路大震災のときのさまざまなデータになるはずだろうと思っております。当然、東日本のあの津波を受けて、そしてそれを生き残った方が、どのようにしてもう一度今悪戦苦闘なさっておられるのか。このデータもありませんと、多分次の大きな災害の備えにはならないと思っております。でも、なかなか今東日本やと阪神のときの2カ月ぐらいのスピードで2年たって2カ月だという程度で。

宮城県の大分南ですけども、山元町というのがございます。先日連絡が入って、まちづくり協議会のようなものをやっとなることができた。やっとなですよ、できた。ただし、中では意見が分かれていて、どうなるかわかりませんと。やっとなりましたという報告が来ております。その状況だと、でもその状況の中で、やはり東日本のデータはやはり残しておいてほしいし、それを西日本の我々が活用できるような形のものをつくっていただく必要が絶対あるというように今は考えを大分改めております。活用させてもらえなければ、どないにもならない。ただし、まだ18年前の阪神・淡路大震災の関係のものは、現行の法律で得る、個人情報保護それから守秘義務というようなものの、非常に厳しい制約があります。にもかかわらず、活用させてくださいと。それが無い限り、西日本の方々の被災被害というものは、単に巨大な防潮堤をつくったら何とかかなというものではないはず。生き残った後どうするんだってその記録が、この長田区役所の中

にたくさん残っておるんだと。それを活用していかないと、どうにもならないんじゃないんですかというように思っております。

私は今、この人と防災未来センターさんが、すごく努力をされて残しておられる震災資料も、今調査をさせていただいております。そういうものを、総合的に何かしないと、というように思っております。一生懸命そう思うんですけども、なかなか輪が広がっていきません。たまたま朝日新聞の論説委員の方から連絡がありまして、私の視点というのに主張を書いてみられませんかというので書かせてもらったのが、私の視点で保存を急げ研究の場つくれという見出しで書かせてもらったものでございます。今は何とかこういうものが、ネットワーク上にもちゃんとつくれて、単なるアーカイブではなくって研究をし、そしてそれが活用できるというところまで絶対進めべきだと。その先駆になったのが、実は震災資料室さんなんだろうというように思っております。

これ以上しゃべりますと、寿さんがもうちょっと長くお話しになるというように思っております。私15分くらいほど何かしゃべれというので、ゆとりを持って今ぼうっとしておりましたら、ちょっと長目にしゃべれというので必死になってしゃべったんでございます。30分はもちませんでしたので。済みません。今ののが大体私の軌跡と、今の思い、それとできるだけ皆さん、御協力をいただいて残せるものは残す。そして、それをどう活用したらいいのかというようなことを皆で考えていくという、そういう時期に今あるだろうというように思っております。というのが、私の今の偽らざる気持ちでございます。

○司会 水本先生、どうもありがとうございます。

(拍手)

○司会 寿さんのお話も水本先生のお話も、行政職員の立場、研究者としての立場そういう御立場をとって、皆さん御一緒になって震災資料を通じて震災の記憶を発信していくという姿勢をお持ちのようで、とても感銘を受けました。どうもありがとうございました。

ここで、今の水本先生の御発表内容について、事実確認等をしたいという御質問があれば、お受けしたいと思いますがいかがでしょうか。

特にございませんようでしたら、ここで10分間の休憩をとらせていただきまして、その後ゲストの皆様の前に御越しいただき、パネルディスカッション、そして参加者の皆様からの御質問を受け付けるお時間をとらせていただきたいと思います。

では、2時55分にまたお集まりいただきますようお願いいたします。どうもありがとうございました。

## 2. パネルディスカッション

○司会 皆様、お戻りでしょうか。

ではここから後半部分、フリーディスカッションに入りたいと思います。前にゲストの4名の方に出てきていただいております。ここからは、幾つかポイントを絞ってそのポイントごとに議論を深めてまいりばと思っております。

ここからの司会は、震災資料専門員の石原凌河専門員にバトン

タッチしたいと思います。では、石原専門員、お願いいたします。  
○石原（人と防災未来センター震災資料専門員） 震災資料専門員の石原リョウカが、後半のディスカッションと質疑応答を含めて進行していきます。よろしくお願いします。

まず先に、パネルディスカッションの講師の方を御紹介します。僕より左側が、人・街・ながた震災資料室の清水誠一様です。

○清水誠一氏（人・街・ながた震災資料室） 清水です。よろしくお願いします。

（拍手）

○石原 お隣が、先ほども御紹介ありましたとおり、神戸学院大学人文学部の水本浩典先生です。

○水本氏 水本です。よろしくお願いします。

（拍手）

○石原 お隣が、人・街・ながた震災資料室の寿広文様です。

（拍手）

○石原 そのお隣が、人・街・ながた震災資料室の武川泰恵様です。

○武川泰恵氏（人・街・ながた震災資料室） 武川です。よろしくお願いします。

（拍手）

○石原 早速ディスカッションのほうに移りたいと思うんですけど、実は前回、第4回のときのテーマというのが、地域を拠点とした被災経験の継承ということで、そのときには同じ長田地域ではあるんですが、野田北部鷹取震災資料室の河合節二様、そして神戸市地域人材支援センターの内屋敷様から被災経験の検証というところの御紹介をいただきました。また、東日本大震災の教訓をこれから発信していこうということで、大槌町のおらが大槌夢広場、大槌復興館の高田様より御紹介いただいて、その後のディスカッションでは、そういった地域を拠点とした被災経験の継承のあり方について討議いたしました。そのときの課題といたしまして、地域に密着した伝承はどうすればいいか、資料を活用するのはどうすればいいかということが十分に議論できなかったもので、そういったところも含めまして今回の議論では、地域密着型の震災資料のこれからということで少し議論を深めていけたらなと思っております。

まず、私のほうからお伺いしたいこととして、地域に密着した震災資料を収集、保存、活用する意味、あるいは、意義ということについてお伺いしていきたいなと思っております。それを考える上で、有効な情報といたしまして人と防災未来センターと人・街・ながた震災資料室、そちらの2点の施設を比較するとすごいわかりやすいかなと思うんです。

人と防災未来センターのほうというのは、ある種、被災地域にこだわらない。被災地域全ての震災資料を集めるというミッションがございます。そして、公開や収集、保存については基本的にガイドラインがあって、そのガイドラインどおりに収集、保存、活用していくというスタンスです。また、私の立場でありますように専任スタッフによる収集、保存、活用ということをやっております。

その一方で、人・街・ながた震災資料室のほうでは、基本的には長田地域に限定した被災資料となっております。また、公開や収集、保存についての明確なガイドラインというのは基本的にありません。また、寿様から御紹介いただいたとおり、専任のスタッフではなく、別の仕事をされながらこういった資料室に取り組みされているということです。ということで、そういったところから長田の地域にこだわって密着して震災資料の収集、保存、活用という意義について御意見を聞いていけたらなと思っております。では、清水様からお願いいたします。

○清水氏 清水ですが、今おっしゃった中でですね、私なりに整理しなければいけないなと思っていたのは、前回お話しいただいた鷹取の資料室のお話は聞いていないんですけども、多分、鷹取の資料室における資料はこういうものであるかというお話だったと思うんですが、我々の資料室の基本的な性格といいますのは、区役所に残っていた資料を整理して公開しているということです。町の一部分のところの姿をあらわしているというのではないんですね。当時長田区の人口は13万人ほどおったのが、10万人に減ったと。減った分の内容はどうだったかとか、というふうな長田区の行政としての資料ですね。死亡者が何人とか、うち高齢者が何人とかそういうデータも我々は持っているわけなんですよね。例えば真陽小学校で3,000人避難されておって、その食料はどのようなルートをとってみんなに配っていったかとか、いわば行政の内部の資料ですね。こういうのを持っているのが私たちの資料室の特徴じゃないかなと思うんです。というのは、簡単に一言で言えば長田区災害対策本部の内幕が全てわかる。それは何かと言えば、隠しておく資料という行政資料になるんですよね。それを、法的に許されるところで出していこうとしているのが今の長田の資料室の特徴じゃないかなと思うんです。町のどこかの一資料室と基本的に内容が違う分なんですよ。ですので、資料の根拠というのは法的根拠に基づいたものとかいろいろありますので、出すか出さないか、展示するかしないかというせめぎ合いは、我々の内部では絶えずやっておかなければならない。この資料は公開するにはちょっと無理がある。30年先か、40年先ぐらいに見てもらおう資料であるとか、ここで言うたらどうかかわりませんが、ざっくばらんに言うと内緒の資料がまだ山ほどあるということなんです。

もう1つは、いろいろ提供された資料を保存するとか、また公開していくという基本の根拠というのは、個人情報をごとまで開示するかどうかということだけには気を使っているんですが、あとは先ほど言いましたような行政内部資料と位置づけられるものについては公開しないと。時代が来れば公開できるだろうと。その時代は、今まだ到来していないというふうな扱いで来させていただいているんですけど。あとまたいろいろ先生方にもおっしゃっていただいて、私はちょっと今気がついている点というのはそういうところですね。

○石原 ありがとうございます。

続きまして、先に寿様のほうからお願いできますか。

○寿氏 清水のほうがかつてしゃべりましたので特にないですけど、

長田区に限ってというか、長田という1つの行政の単位でありますから、呼びかけていくのも長田区の方に向かってということになります。あわせて、長田区の方からそういったお手持ちの分を寄贈していただく。ガイドラインは全くないわけじゃなくて、御本人さんの了解をいただくなり、あるいは持っている資料について、特定の地名といったものが表示されているような場合は、それは当然消してコピーして公開していると。先ほどスライドで映しました日誌なんかはいろんな名前が出てきます。でも、その名前を全て出すということにもなりませんので、そういうようなところは、ペンで消したりしております。全体の避難所での日常というものがわかればいいのではないかと思いますので、こちらも細かい個人のところまでは特定もする必要はありませんということでやらせてもらっております。以上です。

○石原 ありがとうございます。

続きまして、武川様のほう、お願いいたします。

○武川氏 お二人がしゃべられたとおりで、寄贈していただくときには、基本的には公開させていただきますということでお預かりした上で、後はどうするかということをお互いに相談して、コピーなりして展示していくということなんです。ただ、持ち込みで持ってきていただくケースが多いですので、逆に来られた方が、展示している資料の中に私の地域の資料がありませんということで、御要望をいただくケースなんかもありまして、人と防災未来センターさんと違うのは長田区に限定していながら、寄贈していただいたり、行政資料として残っていないものがある場合には、展示できない地域、どうしても薄い地域というのがありますので、そのあたりはカバーし切れないところがあるのかなというのは展示会のたびに思ったりしているところなんです。そういう意味で、どうしたものかなというのは悩みと申しますか、考えていけないといけないところもあるのかなと思っています。以上です。

○石原 ありがとうございます。

先ほど武川様のほうから御指摘がございましたとおり、どうしても長田区という一行政区の中で資料のほうの公開をしていきますと、やはり薄い地域と濃い地域がどうしても出てくると思うんですけど、その一方で、長田の人・街・ながた震災資料室に限らず、人と防災未来センターでもある程度資料のほうというのは、公開できる形になっているんですけど、そういった意味で水本先生のほうは、どちらの資料室にも資料のほうを御活用いただいているという立場の方でいらっしゃると思いますので、この2館のほうを比較して、長田の資料を公開するあり方とかで何かコメント等がありましたら教えていただけたらと思います。

○水本氏 やはり、清水さんがちょっとおっしゃってましたように長田の震災資料室というのは、やはり区民にどのように発信していくか、区民にどのように寄り添うか、接するかという、これが一番大きな柱なんだと思っています。そうすると、区民の方と年に1回展示という形で当時は振り返る。または当時は区民と一緒に考える、そういうチャンスを区役所が陰ながら支援されているんですけども、そういう形で提供するという、その部分が非常

に大きいんだと思っています。

人と防災未来センターさんの資料というのは、アプローチをすれば保存箇所から出していただいて、そして調査は可能になるんですけども、それは私という研究者が、研究申請をして調査をさせてくださいという形で許可を受けての調査という形ですから、全く発信の方法が違うというようになってます。保存のためにはどちらがいいのか非常に難しい部分がございます。やはり個人情報もございまして、公的な行政がやりましたさまざまなことについては、守秘義務の問題、公文書という形での扱いという部分、これをどうやったらいいのかなというものもあるわけですけども、もう一つ大きな違いがあるのは、こちらは資料専門員という専門の方がケアをされての資料室があり、そして対応されている。長田区役所内の震災資料室というのは、区役所の職員の方が、ボランティアという形で暇を見つけては対応されたり、または、仕事が終わった後のボランティアでいろんな準備をなさったりというようなことですので、対応の仕方が大分違うというふうに思っています。

もう一つよくわかるのは、清水さんがおっしゃったように公文書を扱うメンバーが支えている資料室である。ですから、やはり公文書の扱いということに関してはプロですので、その辺は見事なケアがされてると思っています。今ずっと人と防災未来センターさんの資料を見せていただいているんですけども、まだ行政資料にぶち当たったことがないものですから、2000年と2001年に悉皆調査をされてるんですけども、行政資料の部分がどうなっとならうかと。2005年のときには、兵庫県知事にアプローチしたんですが、公文書館に残してございますという話ではございましたけども、さてというようには思っています。

次の震災が起こったときには、行政のアプローチがどうしても必要になります。自助、共助、公助というようなまず一人で生き残りなさい、それがだめなら隣近所で助けてもらいなさい、それでもだめなら渋々自治体が出てまいりますというような3ランクに分けての、いわば備えというようなことを今言われるんですけども、どちらにしろあの津波が来て、そして家が倒壊しというようなときに自助ができる部分、公助でいける部分なんて微々たるもんだらうと思っています。そうすると、ある程度公助に頼らざるを得ない部分が結構大きなウェートを占めるはずだと。そこをどうしてきたんだ、またはどこを問題として是正しないといけないんだ、ここは非常に順調に、ここはエラーがあったというようなことが検証されませんと同じことを繰り返すことになるのかなと。

東日本も今、さまざまにやっておられるんですけども、公務員の方が途中でどんどんおやめになるそうです。どうしても肉親の問題、それからさまざまな問題、いろいろな格好での出おくれ、対応のおくれ、それを全部自分で受けとめる方が多いということ、中途退職という方もたくさん出ておられるということも現状だと聞いております。そうするとなかなか厳しい。でも、ないにだめでしょね。ボランティアの方の活動というのも、これにきちんと対応があったわけです。これも今、手柄話ではないボランテ

ィアというのは、どういように活動してきたんだ。何が過不足したのかという部分をきっちり検証しないとイケないだろうと。

ある避難所、あるテレビ局が1月17日に向けて特集を組みたいと。いろいろなどこで話を聞くと、1月17日、18日に食料が足りなくてほんとに困ったというような話を聞いて、そういうデータが欲しいというので、幾つかの震災資料、避難所日誌のようなものをめくってみたんです。ある避難所ですけども、先ほど出てきました真陽小学校です。1月17日におむすびが1,000個来たという記録がちゃんと書いています。ほかのところにも非常に多くの食糧支援が来ているというのが事実です。結局、そのテレビ局はもくろみがうまくいかないんで特集を断念してしまいました。つまり、非常に悲惨な避難所、そして食料が来ないというときに皆が苦労したんだという少しお涙頂戴風のストーリーを描かれたみたいですが、他にないですかとおっしゃってました。データとすれば、もう初日からたくさん支援物資が来たということで、こういうことも含めてきちんと検証していく必要があります。なぜ、ボランティアは炊き出しなんだ、なぜか炊き出しなんです。これは学生が言い出したんですけども、先生、何で震災だとすぐ炊き出しなんですかと。震災の関係のイベントというたら、すぐ炊き出しですよ。何で炊き出しなんですかと。言われて説明ができませんでした。おまえ、それを卒論のテーマにしろと言うと、わかりましたと言っておりましたけども。これもデータがあれば、検証ができるというように思っています。今から学生がそういう調査をすると思いますので、人と防災未来センターのほうも震災資料室さんのほうもよろしく願います。

○石原 ありがとうございます。

皆さんのお話を伺いまして、阪神・淡路大震災からもう再来年で20年を迎えるわけなんですけど、人と防災未来センターの方でも、そういった意味で資料をどう活用していくのかということとは十分承知して、それに向けて企画展の開催や、あるいは資料集をつくといいところまで進めていますが、その一方で、そういった活用を進めていき過ぎると、やっぱり個人情報漏えいの問題でありますとか、あるいは、資料そのものの劣化とかそういったところでなかなか難しいというジレンマが存在します。そういうところで資料を保存する、そして活用する、そのジレンマというのはどうしてもあるわけなんです。

そういった意味で、人・街・ながた震災資料室の資料室展でありますとか、その公開の仕方というのは、どちらかといいますと活用のほうに重きを置かれているなということで、私どもにとってはすごく参考になるなという印象を受けております。人と防災未来センターの方は、どうしてもガイドラインといった、ある種の明文化されたものを設けておいて、それに向けて資料それぞれに対してどういうふう保存していくかというのを対処する次第なんです。そういった意味で、次にお伺いしたいのが保存と活用のジレンマをどう克服されているのかということ。特に行政、公文書とかそういったものというのは、非常に活用が難しい面もある一方で、上手に活用されていると思うんです。その辺の秘訣とか、そのジレンマの苦労とかそういったところを清水様か

らお聞かせいただけたらと思います。

○清水氏 去年の夏、奈良県の職員さんのところで、少し話をする機会があったんです。神戸の長田からしゃべるとすれば何がいいかなと思っていたんですが、何とんでもやはり火災だろうなというので、火災の資料を調べに来られました。案外、火事についての資料は学者の先生方もあまり出してないんですよ。私の手元にあるものを見ていったら、町は何丁目、一丁目、二丁目、三丁目というふうに分かれているんですが、その一丁目ごとの死者の内訳をずっと見ておったんですよ。そしたら、例えば戸崎通三丁目というところで亡くなった人の数が15人ぐらいいかな。また、二葉町四丁目でも十何人と。ぼんぼんとはね上がるんですよ。普通の町のところであれば、町ごとに1人か2人亡くなっているんです。それは何でかと言うと、西代四丁目にしてもそうですし、菅原三丁目にしてもそうですけれども、全部火災の起こった所なんですよ。火災の起こった所での死者の数というのは、10人以上ぼんと大きくなってます。これは、全然どこにも発表されてないんですよ。手元の資料で、町通り別に死者の数を数えていたらそんなのがわかってきて、奈良の職員さんの自分の町は自分で守らないとあかんという、そういう防災の研修会だったんですけど、この数字をもとにやっぱり一番大事なのは火事をどう防ぐかということです。もう1つ、そこで生き埋めになっている方がいて、隣で火が出ているとしたら、消防としてはどっちを先に選択するのだというときに、火を消すというのがこの長田の事例で明らかになっていくんじゃないかなということ。こういうことはまだまだ発信されてないなと思います。我々はこの立場ですので、発信をどの程度していくかというのを個人的な人間関係のつながりで全国のあちこちに伝えているわけですので、その辺はちょっと人防さんのほうが有利じゃないかなと思うんですが、こういう積み重ねでこの長田区の資料がいろいろところで役に立っていただきたいなと思いますけど。

○石原 ありがとうございます。

続きまして、寿様はいかがですか。

○寿氏 そうですね、先ほどから清水の方からたくさん申しておりますが、出せない資料というのは確かにたくさんあります。例えば、神戸市内で長田区が一番多く居住しておられる方、外国籍ベトナムの関係の方の資料でありますとか、あとは障害者の関係の資料でありますとかそういうのも手元にも確かに持っております。でも、それをただ資料の一部だからといって何も見ずにというんですか、何も考えずに保存、公開していくことはできませんので、いろんな資料の中身と色々な方の御意見なり、あるいは、その時々時代の背景というんですか、公開・活用するまでに年月は非常にかかると思います。今はそういうような資料を活用ということよりも、いかにして保存していくかということも大事じゃないかと思うんです。それが、少しそういった部分で気にかかっているところ。区内から集めた資料というのは、言ってみればすぐ出せるような資料が多いので、できるだけ公開はしていけるんじゃないかと思うんですけども、行政の資料については、守秘義務といいますか、それは非常に日ごろ

を通じて重くのしかかっておりますので、どうしていくのかなとは思っております。

○石原 ありがとうございます。

武川様はいかがでしょうか。

○武川氏 公文書ということで、震災資料室の活動しながら残っている公文書を見るときに、それまで区役所の職員として働いている中で、本来の業務以外で知らないことというのがすごく多いというのが恥ずかしながらわかったんですけども、ただそれをどう活用してくかということに至るまでに、まずこの公文書がどういうことでどうして残るといふか、中をもっと読み込んで活用をよく考えないといけないというのが個人的な考え方なんです。というのは、残っているんですけども、それがどういう経過で残ったかという、まずその基本をしっかりわからないと活用というのできないと思うので、このときはこういう状態だったからこういう資料が残ったというところを活動する前に、活用する側としてもっとしっかりと立場を固めないといけないというのが私の個人的な今の立場なんです。今、寿のほうが言いましたように、例えば要援護者の資料があります。それがあっても、公開できないということは資料室の活動でわかったんですけども、たまたま自治会の活動をしたときに、役所は何もしてくれないから、教えてくれないからということですので役所がやり玉に挙がって自治会が紛糾したことがあったんです。公開できるもの、できないもの。そういったこともやっぱり難しいです。というのは、住民としては本当に今できなくても将来的に、できるだけ近い将来に何とか活用できないのかなというふうに思ったので、両方の気持ちを持って考えていきたいとは思っているところです。

○石原 ありがとうございます。

ここまで議論したところで見えてきたのが、人と防災未来センターの資料の保存と活用のやり方と、人・街・ながた震災資料室の資料の保存と活用のあり方は、ベクトルが全然違うわけなんですけど、やはり違うとはいっても、やはり20年に向けて資料をどう公開するべきか、いろんな人に震災資料を見てもらいたいという思いはすごく一緒だと思うんです。そういった意味で、神戸学院大学の水本先生は、両方の資料室のほうを行き来されているんですが、そういったところでの連携の可能性とか、あるいは、資料室同士が連携すべきかとかそういったところのお考えとかありましたらお聞かせいただけたらと思います。

○水本氏 非常に難しいですね。私の視点でも書いたんですけども、現状では拘束されて難しいんだと思ってます。人と防災未来センターは、兵庫県がつくるわけですから兵庫県のガイドラインにどうしても拘束されてしまいます。それに載っているものしか表に出せないわけですから、ひよっとしたら、深いどこかに闇があるのかなということになるのかもしれないし、先ほど清水さんのほうもお話になったように、区役所は区役所なりにいろんな公文書を扱ってるんだと、または保存もしています。ただし、守秘義務の問題、または公文書の扱いというものも地方公務員法その他でがんじがらめになっている。ですから、どう連携するかというよりは、何らかの形で次の災害が起こるのであれば、どこ

かでちゃんと活用してそのエッセンスだけを抽出してでも、今活用できる方策を探る以外に道がない。ですから、全面公開だとか、一部分黒塗りをすれば公開ができる、そういうような形での連携がとれば何とかかなというよりは、私はもっと焦ってまして、ひよっとしたら今、南海トラフが動けばここも3メートル以上の津波が来るわけですね。我々は、多分全員溺れ死ぬんでしょねということになるのかもしれない。そういうように、割と緊急性のある事態を国も内閣もどこかいろんなところも認識し、新聞も出しながら、でも防潮堤をつくるぐらいが関の山なんですよかね。それだったら芸がない話だよね。あれだけ阪神のときも苦勞し、いろんなノウハウもつくったと。それは、失敗も含めて行政も持ってるはずだ。国も東日本のときに、福島のことも含めてあれだけ失敗をした。いろいろなことを検証して次どうするか考え、それを何らかの格好で次の災害に継承していかないと。それは、それぞれの町、それぞれの都市、過疎も含めてですけども、それが生き残っていくためのもの。そうすると、何らかの研究施設があっても個人情報の問題とか守秘義務の問題とかを打破できるようなものがない限り、ずっと隠しておいてもどないにもならんんじゃないかなと思います。阪神のときにたくさんの方が亡くなりました。そのときに、死体検案というのをやっとするはずなんです。どないやったんやと。東日本のときの死体検案は津波で流されて、そしてときには溺れ死んだり、いろんな格好でそういう方々の死体検案をどうしたんやと。次の災害のときは両方起きるわけですから、それをきちんと把握してないとうにもならないだろうというように思うんですけども、動かないですね。少しでもそういう声が上がってこない限り、今は人からコンクリートへだそうですから、神戸の海岸ふちに15メートルか20メートルのコンクリートの防潮堤をずっと万里の長城みたいにつくっても、河口ならどないにもなりませんので、川の所までさかのぼれば必ず津波は横に広がっていくわけですから、一定の被害は起きてしまう。それを防ぐことは多分できない。淀川をせき止めるわけにもいかないはずというように思えば、その後どうするのだというのは経験則から考えていかないと。それが教訓という問題につながるだろうと思ってます。ですから、すごく悩むセッションが人と防災未来センターにあり、もう1つ、震災資料室でそういう悩ましい問題を抱えながらという2つがどこかでタッグを組みながら、声を大きく出していかないと、どないもならんではないかなと思います。それを支援していただく市民の方だったり、有識者の方だったり大きな輪になっていかないと、どうにもならないんじゃないかなというすごい焦りを持っております。

○石原 ありがとうございます。

非常に重い言葉をくださったわけなんですけど、次の後半戦のほうではまさに水本先生がおっしゃった次の災害に向けて、そして阪神淡路大震災20年に向けて、こういった震災資料というものをどう活用していくかということについて少し議論を深めたいなと思っております。

その前に、人・街・ながた震災資料室の皆様にも、まず阪神淡路大震災から18年までを振り返られて、ここまで活動されてきた

モチベーションとか、18年ずっとやられてきたところでそういった思いとかがもしありましたら、いただけますでしょうか。まず、武川様、お願いいたします。

**○武川氏** モチベーションは、そんなに高くないんです、済みません。といいますのが、ほんとに何て言うんでしょう、震災の後よくわからない状態でずっと仕事が続いて、そのまま震災資料室が続いているということで何か区切りはないんです。仕事でいえば、残業しなくなったとか、もう泊まり勤務がなくなったとかそういう区切りはあるんですけど、自分の中でどこが区切りなんて言われたら、年がいったことしか区切りがなくて、あとはベテランの職員さんたちがどんどん退職されて震災資料室で活動していくときに、若い方にどう伝えていくとかそちらのほうはなかなか難しい問題が発生しているんですけど、よくわからないままに過ぎたというのが申しわけないんですけど本当のところですね。とりあえず、毎日の活動が続いているので、どこが区切りなのと言われたら、まだ何もない状態です。何を伝えてどうしていこうというのが、うちは自分ところから向かって行ってこういうものがありますからここで公開させていただきますという形をとってなくて、拠点が区役所なので区役所で展示して、そして皆さん見に来ていただいて伝えていくという形でどうしてもちょっと受け身のよう形になってるんです。そのときに来られる方が、どういったことを要求されたり、聞いてこられるのかなというのがだんだん変わってきてるなど。物すごく違いが出てきてるんですけど、それによって月日がたったのがわかるという、そういう形ではないので、とりあえずモチベーションは低くてもいいので、続けることが第一目標かなという形で今活動のほうは続けさせていただいているんです。以上です。

**○石原** ありがとうございます。寿様はいかがでしょう。

**○寿氏** モチベーションといわれるようなものはほとんど持ち合わせてないんですけども、たまたま大きな災害が起きて、それが阪神・淡路大震災となった。そのときに、いろんな形でいろんな所で作業をしてきました。震災の業務というのは大変でしたけれども、私個人にすれば、そんなに身が潰れるほどつらいとかそういうのはなくて、何か慌ただしい中で時間が過ぎていったような感じなんですけども、仕事柄、町中を歩くんですけども、いろんなこととお話しさせてもらったりする中で、声もかけてくださる方もおられますし、批判される方もおられます。そういう気持ちの一つの糧になっているのかなと思うような気がします。残されている資料、あるいは、自分が仕事で外を回っていて、区民の方との話の中で何か重なり合って今まで来ているのかなと思います。自分でこれをどう高めていくんだとか、これをきちっとこうしなければならぬとかそういう大層な気持ちはいつも持っておりませんので、できるだけ1人でも多くの人たちと細く長く、あるいは、水本先生の学生さんたちと一緒にやっていければいいのかなと思います。残せるものは残し、伝えられるものは伝えていくと。活用していただけるところがあるんでしたら、それはぜひ活用していただきたい。基本は、この長田でそういう場所を僕らが持つていくという気持ちをずっと続けていきたいとは思

っているところです。

**○石原** ありがとうございます。次、清水様はいかがでしょう。

**○清水氏** 別にないんですけど、実は私、長田区に住んでまして、勤務も長田区でしたから、どういうんですかね、普通の生活が地震の渦中にあるというようなことでしたので、毎日、意識的に生きとるわけではありませんので、ただ単に生きとったらもう18年たったというふうな状況ですんでね、余り深刻に考えたことはないです。

**○石原** ありがとうございます。そういった意味で、お三方のお話を聞かせてもらおうと、モチベーションというよりも、区切りがないとか、続けるということそのものに意味があるというのをすごく共感して、20年、30年たってもやっぱり続けなければならぬかなと思います。そういった意味で、今後、阪神・淡路大震災から20年、30年経過していく中で、どう活用していくべきかというところをまずは水本先生のほうからお考えがあれば、お話の中にいろいろヒントが隠されてたと思いますが、そういった中でまとめる形で何かヒントをいただけたらと思います。

**○水本氏** やはり私は、震災資料、震災資料と言っておるんですけども、震災のとき残されたいわば現場の教訓、それから現場のノウハウのようなものを必ず継承していかないといかんのだらうなと思います。それが途切れてしまうということはどうなんでしょう。次第に神戸にも被災された方が少なくなり、次第に鬼籍に入られる方も多くなっていく。忘れ去っていけばそれで済むんだというものでもなさそうな感じがしております。歴史学というのは、忘れ去ってどこに残ったものにスポットライトを当てて、これは重要文化財だ、これは国宝だと言ってるのがほとんどでございますので、それは利害関係や人がいない資料なんです。冷泉家のどこに残っておる大部分が国宝なんです、平安時代のもがあります。そこに、ひょっとしたら、冷泉家の方とどなたかがいろいろ問題を起こしたとかですね、いろんなものが書いてあるかもしれません。藤原頼長という人物はいろんなエピソードが多い人物なので、当時どのような男女関係があったのかというのが克明に書いたりしてるんですけども、それを論文に取り上げても、あの世から頼長さんがけしからんと言うような資料でもないですね。ですから歴史学で扱う資料というのは、利害関係や人が全部死に絶えて問題がないところで研究者が業績に点数化しているものだと思います。ただし、震災資料はそうはいかない資料なんです。だけでも、何とかしないとイケない。

私は、ぜひ人と防災未来センターというこの建物の中から一度外へ出ていただいて、どこでもいいと思うんですが、東灘区の資料もたくさんここに保存されているわけですから東灘区、灘区、兵庫区だとか中央区だとか移動展示のようなことも考えてみられてもいいのかなというように思ってます。そこから、また何かが発掘できるように思っております。今日来ている私のところの学生なんかも、真陽小学校の資料が震災資料室にたまたまございまして、それをテーマに卒論を書こうとしています。書いているうちに、いろんなアプローチの中で、当時の校長先生、教頭先生がいろいろお話をさせていただいています。いや、学校にもまだ資料

が残っているはずだよというので見せていただいて、ちゃんとした記録が金庫の中に残っていました。そういう情報を聞きつけて、東京の方がボランティアで行ったんだよ、ボランティアに行ったときの写真や班長会議のときのメモが残ってるよと。見せてあげるといようにして資料の輪が広がっていくと思ってます。震災資料室は、長田区という限定バージョンですけども、人と防災未来センターは、ひょっとしたら兵庫県全域なんですから、そういう中でさまざまな活動の輪を広げられるというのも一つの手なんだろうなと。

ちょっと前なんですけども、長田で一泊避難所体験というようないろんな行事をさせていただいたんですけども、その中でいろいろな方がいろいろなことを情報提供していただける。けども、待っておったんでは情報提供はなかなかしてもらえない。いろいろなアプローチをしているうちに、実はこんなのがあった、うちにはこんなものがあるというようなことが出てくると思ってます。

消防局の方々に聞き取りもやっておるんですけども、水の出る筒先というんですかね、あれを持っておられる方に聞き取りをやってましたら、すごい勢いの風を記憶していらっしゃる。火災旋風、関東大震災のときにはそれで人馬が巻き上げられ、竜巻になるんですけども、そこまではいかなくても火災旋風が起こってるのを体感されている。そういうことは、どこにも書いてないですね。または、長田港の近くの方に聞き取りをしますと、消防局の方がすごく頑張っておられたってました。じゃあ火災が起きた大正筋、その他の地域の方に話を聞きますと、消防士の方は水の出ないホースを持ってうろうろしてただけだと答えられます。全然反応が違うんです。海水を必死になってくみ上げて、そして長いホースをつなぎながら消火に努められたその現場を見ておられた方は、評価が違う。これもやはり、アプローチしないと出てこないんだと思うんですね。そのまま、あの世に持っていかれたのでは、ほんともったいないというように思いますので、ぜひ移動展示をしていただけるとうれしいなというふうに思ってます。

それをもとにして、避難訓練のようなどころでも活用する。少しずつ、全面的に活用ができなくても当時こうだったんだ、このようにして支援物資が来たんだ、このようにしてそれを配ったんだと。余ったらどうしたんだということも含めて活用すると区民の方も考えやすいというように思ってます。それは、長田区役所内で外に出ることができない区役所の職員の方が、努力をされて今までずっと維持をされて来た、その制約の中で区民に向かって発信し続けておられるという震災資料室のあり方、やっぱり、人と防災未来センターさんに一歩踏み出していただいたらすごくうれしいなといったところでお願いでございます。

○石原 ありがとうございます。すごく具体的なアドバイスをいただいて感謝しています。この災害ミュージアム研究塾は、災害ミュージアムや災害の資料の収集、保存のあり方について考えていく場ではあるんですけど、その一方で主催者側の話で恐縮なんですけど、こういった人と防災未来センターと他館とが連携して今後、人と防災未来センターがどういうふうにあるべきかということを考える場でもありたいと思っているので、そういった中で

の御指摘というのは真摯に受けとめて、今後の活動についていろいろ考えていけたらなと思っている次第です。

続きまして、人・街・ながた震災資料室の中で、これからどう活用していくか、あるいは、東日本大震災を受けて何か変わったところとかについて清水様からお聞かせいただけたらと思います。○清水氏 阪神から18年たっていますので、そのときに東日本でも地震が起こった。たまたま我々は向こうの自治体の職員さんと会う機会がありますので、やっぱり東日本においても、同じように資料を保存していくのは必要なことではないかということをおっしゃっていただいているんです。神戸も政令市ですので、東日本では仙台が政令市ですので、仙台ぐらいがちょっと前を走ってもらって、あと岩手なんかも出してもらったと思います。遠野市というなかなかすぐれた自治体もあります。やっぱりそれをつないでいくということは、将来の防災といえますか、そこのまちづくりになっていくと思うんです。東日本に行けば、ほこらが山の後ろにありますし、以前はそこまで水が来たというのがずっと伝えられて来ておって、あれだけの被害も起こっています。幾らかのところでは、私たち長田とのつながりをよく考えていただいている方もいらっしゃると思いますので、我々としたらできるだけノウハウというたらちょっと失礼ですけども、やり方なんかをお伝えできたらなと思っています。これからの時代は阪神ばかり言うんではだめだなと。やっぱり東日本と一緒に運動していかないとあかんとは思っています。

○石原 ありがとうございます。続きまして、寿様、お願いいたします。

○寿氏 今年で18年、あと2年すれば20年という時間が流れていくわけなんですけども、大変大きな一つの区切りになっていくのかなと思っています。人も資料も、当時の方も亡くなられる方も結構おられますし、資料も散逸していくと。資料を持っておられる方が亡くなれば、ただの家の荷物みたいな感じで失われていく資料もあるかと思っています。できるだけいろんな機会を通じて、区の広報なんかもありますので、この20年という機会にできるだけ資料も見せていただくなり、複写させていただくなりそういったことをしていきたいとは思っております。

○石原 ありがとうございます。続きまして、武川様、お願いいたします。

○武川氏 20年が近くなったということで、展示会に来られる方とかお話を伺う方も、当時体験された方がもう来られずに、全く体験したことがないという若い方が来られたりということで、来られる方、見られる方というのも変わっていかれているので、伝えていくほうも体験したことのない者が伝えていくような形になってきているので、先の方が残していただいたり、教えていただいたことをどう伝えていくか、その伝え方というの、こう聞きましただけではやっぱりだめなのかなと思います。

去年ですけども、水本ゼミの学生さんたちと神戸で支援に来てくださって東日本で震災体験された方にお話を伺う機会を一緒に持っていただいたんですけども、その方たちは、神戸で支援したその体験がすごく役に立ったと言うわけです。これはやはり財

産なんだというふうにおっしゃっていただいて、その当時の資料もまだ持っていますと。お会いした方が、多賀城市の資料で研修資料をつくりましたということをお知らせをいただいていますので、そういったことでこちらのほうでは風化しないように続けていく。東日本の方も、資料を置いていますというふうにおっしゃっていらっしゃる方もあるので、連絡をとって何かの形でお互い行き来といえますか、そういったことが今後もしなければいいかなと思っています。

○石原 ありがとうございます。続きまして、会場の皆様からいろいろ御意見あるいはコメント、質疑応答に移らせてもらうんですが、その前に本日は水本ゼミの学生さんで中平さんがお越しです。中平さんは、人・街・ながた震災資料室の資料室展のほうにもお手伝いしていただいているということで、人・街・ながた震災資料室を見ての感想とか、あるいは卒業論文で真陽小学校のほうの避難所の研究もされているということで、本日の感想とかそういったところももしありましたら御意見をいただけたらと思います。

○中平遥香氏（神戸学院大学人文学部） 御紹介にあずかりました神戸学院大学4回生の水本ゼミの中平遥香と申します。

私は高知県出身で、阪神・淡路大震災のことは全然わからなくて、まさか自分が卒業論文のテーマで阪神・淡路大震災について取り上げるなんて夢にも思っていませんでした。震災資料室のほうには、先輩が資料の整理をしておられて、そのお手伝いということで入っていたんですが、資料にもありますようにイグマさんという方が長野県本部の聞き取り調査を行っていたときに、長野県本部の方が真陽小学校へ支援に入られていて、震災資料室の方が真陽小学校の資料を保存されていたので、私が今回卒業論文で真陽小学校が当時どのようなものだったのかというのを一緒に勉強させていただきました。

初めて震災資料室を見たときは、圧倒されて今まで震災とかそういうものに触れたことがなかった私にとってすごく衝撃的で、今まで修学旅行とかで語り部さんが語ってくれるものと違う、資料が伝えてくれる力というものをそのときに感じました。水本先生もおっしゃっていたように、資料を展示したりとかということで、私たちみたいに震災を全く知らない世代の人にも資料の力で何か伝わればいいなというふうに感じました。以上です。

○石原 ありがとうございます。会場からその他御意見、御質問等がありましたら、挙手のほうをお願いいたします。

○佐藤翔輔氏（東北大学災害科学国際研究所） 東北大学の佐藤翔輔と申します。大学のほうで災害科学国際研究所に所属しております。災害の記録活動に取り組ませていただいているんですが、立場としては水本先生と同じように研究させていただき、勉強させていただき立場ですが、今日は記録されている方々もいらっしゃるの、自分は半分半分なんですけども、今さっきモチベーションは正直に言ってないですとおっしゃってたんですけれども、僕も最近何かだんだんなく始めてまして。研究をしたかったんですけれども、活動しているとどうしてもそっちができなくなってしまうという、モチベーションが下がりつつあるんですが、モチベー

ションという言葉でそれは何ですかと聞くと、また答えが違ってくると思うんですが、今おっしゃりたいのに率直に衝撃でしたというふうに言ってくれたりすることでよかったと思うことが幾つかあるのではないかなと思うんですね。今回の保存とか年に1回の展示をされていて、率直によかったと思うことをお三人から伺いたいです。

○石原 武川さん、お願いします。

○武川氏 よかったと思うのは何点かあるんですけど、例えば修学旅行の学生さんたちが小さな班で来られるんですけど、ものすごく勉強して来られるんですね。自分たちでこれを知りたい、こういったことを教えてくださいということ聞いて来られる。こちらの方も、どう伝えようかをそのとき一生懸命考えるんですけど、すごく勉強して来られたのがわかるし、そういうのがすごくうれしいなと思います。また、展示会に来られた方とお話するときに、私はこう体験したんだとかいろんなお話を伺ったりそういったことというのはすごく刺激になるというか、モチベーションはそれですごく上がるわけじゃないんですけど、「あ、そうか。」みたいな何か自分の中では得心できる部分かなと思って、年1回の展示会のときすごく緊張するんですけど楽しみではありません。

○石原 ありがとうございます。続きまして、寿様お願いします。

○寿氏 何やったのかを考えるんですけども、小学生、中学生、高校生が修学旅行であれ、夏休みの宿題であれ、何であれ訪ねて来てくれたときはうれしいですね。この子たちもここに来ているんなことを見て帰ってくれるんだと思うような気持ちでうれしくなります。あとは、連絡なしで来られたら困るんですけども、しょっちゅうじゃないんですけども資料室にのぞきにいられていろいろお話しして、こういう思いで来られたのかなというのが伝わってきた時なんかは嬉しいです。

あと、実際に資料を展示するときに、例えば持っている写真の展示で、「どうしたらこれを見てくれるか。」とか、朝日新聞社からいただいた5枚の写真を自分なりに考えて、組み写真にしてみたりして、最近はやってませんがちょっと見てくれたらよかったとか、実に他愛のないようなことばかりしています。以上です。

○石原 ありがとうございます。続きまして、最後に清水様お願いします。

○清水氏 ちょっと趣味の世界に入ってしまうのですが、今、長田区で人口は10万人ぐらいなんですよ。以前は24万人ぐらいあったときがあったんですが、10万人ぐらいであれば暗記しようと思ったら覚えられると思うんです。その中で町の人たちと震災の資料を提供してもらったりして深くお話をするときに、その町の歴史というですかね、柳田國男じゃないけど、その民俗学みたいなそういうところまで入り込んだりしたら、ああ楽しいなというか、面白いなというふうになるんですよ。個人的にちょっと昔の小字を調べたりしているんです。そうしたら、都会の場合は、昔、池だったところを埋め立てて、そこに建物が建ったり公園になったりしてますから、そんなのを調べていくと、ここ

が昔双子池というところだったんやと。そこで大正になって、人が出てきたと。その町が今回焼けたんやなというふうなのを見ていくとですね、ちょっと自分の趣味の世界に入ってしまうけれども、半分面白いなというような感じも持っていますね。

○石原 ありがとうございます。他に御質問、コメント等がある方はおられますでしょうか。なければまた4時から、東館1階の方で講師の方と一緒に議論する場もございますので、とりあえずこの場をもって閉会にしたいと思います。

最後に今回のディスカッションのテーマが地域密着型の震災資料ということだったんですけど、その観点からまとめさせていただきます。まず、やはり視点を限定することということは、すごい重要ななと思いました。人と防災未来センターは観覧者の方とか、あるいは広く公開することが主流でした。しかしこれからは、その地域に絞って、地域や区民の方へ視点を限定するということが地域密着型の震災資料のあるべき姿なのかなと思います。あと、地域の活動の輪を広げるとか地域で活動されている人々に、積極的にアプローチしていくということもすごく有効ではないかと考えました。最後、清水様のコメントにありました通、地域の歴史や文化とかそういった観点から震災資料の保存、活用について考えていくということが有効ではないかと考えております。なので、まだまだ地域密着型の震災資料というのは、議論がたえないと思いますので、今後とも皆様と一緒に検討していけたらなと思います。

拙い司会でお聞き苦しい点が多々あったかと思いますが、もう一度講師の皆さんに盛大な拍手をもって終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

(拍手)

○司会 どうもありがとうございました。

今、石原専門員のほうからもありましたように、この後5時ごろまで隣の東館1階のレストラン新上海にて交流会を行いたいと思っております。参加費は300円となっております。お時間のある限り御参加いただければと思っております。

また第6回の御案内もさせていただきます。今年度災害ミュージアム研究塾の最終回第6回は、来月3月9日の土曜日2時から4時開催予定となっております。テーマは、災害記念館からジオミュージアムへということで雲仙岳災害記念館副館長であり、第5回ジオパーク国際ユネスコ会議事務局に在籍しておられる杉本伸一様をお迎えいたします。雲仙岳災害記念館も当センターと同じように開館から10年を迎えまして、災害の展示施設から防災教育やジオパークを推進するためのジオミュージアムへと生まれ変わろうとしているそうです。そのような取り組みをお聞きしてまいりたいと思っております。また、そちらもよろしければ事前お申し込みの上、御参加いただければと思います。

本日は、どうもありがとうございました。

(拍手)

## 第6回「災害記念館からジオミュージアムへ」

日時：平成25年3月9日（土）

場所：人と防災未来センター西館1階ガイダンスルーム1

### 1. はじめに

○司会 そうしましたら、お時間になりましたので、今年度の最終回になりますが、災害ミュージアム研究塾の第6回を開催したいと思います。

きょうは二部構成になっておりまして、最初、講師として島原より杉本伸一さんに来ていただきました。あと略歴も御紹介いたしますが、最初は1時間から1時間半ほどかけて島原での災害記念館からジオミュージアムということで、島原普賢岳の噴火災害以降の取り組みについて御紹介いただきたいと思います。そして若干5分10分休憩をとりました後に、最後30分ほど、今年度最終回になりますので、ことしのこれまでの6回の振り返りと、それから来年度をどうしようかというのを相談したいと思います。

じゃあ、冒頭に簡単ですけど、こちらの村田のほうから簡単に御挨拶したいと思います。

○村田昌彦（人と防災未来センター研究部長） 皆さん、こんにちは。人と防災未来センター研究部長の村田でございます。本日は年度末のお忙しい中、多数お集まりいただきましてありがとうございます。

この災害ミュージアム研究塾2012、去年の10月から始めて今回で6回目で最終回となります。神戸の関係者の皆様に来ていただきまして、それから、遠野の博物館関係者、大槌市の方々、新潟長岡の方々、それと本日は、雲仙島原のほうから杉本さんにおいでいただいております。それぞれの博物館、あるいはさまざまな活動を、皆さんでいろいろと学び合いながら、こういった博物館での経験をいかに語り継いでいくかという手法、そういったものを皆さん学んできたところかと認識しております。今回、一応今年度は最終回ということではありますけれども、来年以降もこの取り組みを続けていきたいと思っておりますので、関係者の皆様方、また一般の市民の方々、ぜひ引き続きまた御案内いたしますので、よろしくお願ひしたいと思います。きょうは、皆さんお集まりいただきましてありがとうございます。よろしくお願ひいたします。

○司会 そうしましたら、この後、杉本様から雲仙普賢岳の取り組みについて御紹介いただきます。

杉本様は、1950年島原市でお生まれになりました。そして、70年からいわゆる島原市役所に勤められていたところ、1991年に雲仙普賢岳の噴火がございました。その際に住人の避

難対応ですとか、避難生活、それから、復興事業にも中心にかかわっておられたということでございます。その後、日本の各地の災害、火山災害ですとか、それから海外の火山についてもいろいろ研究をされまして、平成21年9月からは、内閣府の火山防災エキスパートにもなっております。そうしたこともありまして、各地の災害体験ですとか、災害教訓の伝承について非常に力を入れてらっしゃって活動されておられます。今、2008年からは、島原半島のジオパーク推進連絡協議会の事務局長を務められてまして、2009年に定年退職された後は、今、御紹介があったと思いますけれども、第5回ジオパーク国際ユネスコ会議の事務局長をされまして、引き続きこういったテーマのジオパークですとか、あるいは島原の伝承について積極的に御活動されております。そうしましたらこの後、杉本様から御講演いただきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

### 2. 報告

○杉本伸一氏（雲仙岳災害復興記念館副館長） 皆さん、こんにちは。ただいま紹介いただきました杉本と申します。雲仙岳の災害記念館の副館長もしておりますけれども、紹介にありましたように、もともと市の職員です。もともとは市民課とか税務課で、住民票を焼いたり、税の計算をしたりそういうことをしていました。全くの素人です。ただ1991年に教育委員会の公民館の勤務になりまして、そのときにちょうど噴火災害がありまして、地域の最前線のものになったことが、防災との出会いになるわけです。その後、友人を亡くしたということもありまして、私も危ういところでしたが、私は助かったというような経験を持っているんですけども。もう少し何か火山を知っていれば、ほかのことができたのかなということもあって、その後、いろんな防災の勉強を始めました。その後、島原の2つの国際会議の事務局長をしたり、また後でジオパークの話もしますが、そういうことに取り組んでいます。よろしくお願ひいたします。

きょうの大体の話の流れですけれども、雲仙岳災害記念館の設立の経緯、記念館の見どころ、それからフィールドミュージアム構想、ジオパーク、現状と課題、最後にジオミュージアム、こういう流れでお話をさせていただければなというふうに思っています。

まず、設立の経緯ですけれども、皆さん御存じのように、1990年に噴火が始まりまして、91年から95年まで5年間にわ

たって噴火活動がございました。その間多くの被害を受けました。特に雲仙の災害で火砕流というものが一般用語になったと思いますけれども、9,000回を超すような火砕流がこの時期雲仙で観測をされています。昼に見ると、このように煙のように見えるんですけど、夜に写真を撮りますと真っ赤ですね。もともと溶岩自体が800度ぐらいありますから、噴煙自体も400度とか500度、そういうのが時速100キロぐらいで流れ出してくるんです。これに巻き込まれて、最終的に44名の方が亡くなりましたし、この火砕流によって808棟の被害を受けました。私たちも、火砕流という言葉始めて聞いたわけですけども、専門家の間では、皆さん御存じだったと思うんですけども、一般用語としてはなかなか知りませんでした。危険だから危ないというようなことは、新聞、その他で報道されてましたけれども、実質的にこんなに危ないものだという事は、感じていませんでした。私も毎日被害のあった現場にも登ってましたし、報道陣、消防団、一般の市民がたくさん、一応避難勧告を発令してましたけれども、その中にたくさんの方が、大勢の人が入って行って、その中に火砕流が来て、多くの被害を受けたというのが雲仙普賢岳の災害なんですね。それで、大量の火山灰が山腹に積りますから、雨が降ると今度は土石流が出ます。これが水無川ですね。この川の中を流れている分にはいいんですけども、大量に来ますと、これはあふれ出して民家に流れ込むということで、1,692棟の家が押し流された、これが普賢岳の噴火災害です。結果的に農畜産物とか農林水産施設、公共土木施設、商工業。商工業は、その噴火災害で観光客が来なくなったりとか、いろんな工場が閉鎖されて営業できなくなった、そういう被害も含んでますけれども、総額で2,300億円の被害が出たんですね。

噴火災害になってから、全く観光客も来ない。実際に被害があったのは、島原市と、深江町という島原半島の一部だったんですけども、その被害というのは、風評被害も含めまして島原半島全域に及びます。それで、5年間続いたと言いましたけれども、平成8年になりますと噴火活動も鎮静化をしまいいります。この時、基金が増額されまして、1,000億円の基金が創設されました。噴火活動も少しおさまって鎮静化した、基金の増額もあったのですが、さっき言いましたように、産業活動が停滞をする。農地なんかも全く使えなくなりますし、工場、商店も営業ができない。それに加えて人口の減少ということで、もともと4万6,000人ぐらいいた島原市の人口が、噴火活動によって6,000人ぐらい一気に減りました。島原、隣町の深江町だけではなく、1市16町の島原半島全域が疲弊していく、こういう状況にあったわけです。

そういう中で、島原地域再生行動計画、島原半島全体をもう一回再生しようということで、平成8年、これを復興元年というふうに位置づけまして、島原半島全体の再生施策をみんなで住民も行政も一緒になって考えるというようなことを行いました。そこで島原地域再生行動計画というものが組み立てられました。これが、がまだす計画といわれるものなんです。その中に27の大きなプロジェクトが含まれますが、その中の一つとして、島原火山

科学博物館の建設事業というのが盛り込まれました。事業年度としますと、平成12年度から13年度、事業主体が長崎県で、総事業費30億円、事業箇所は島原市の安徳海岸、水無川の河口部分です。当初、約30億円の予算で考えられていたけれども、最終的に建設したときには43億円の費用がかかっています。

これが島原半島の有明海、熊本の方向から写した写真ですが、噴火災害前の写真です。水無川があって、緑豊かな島原半島だったわけですけども、噴火災害によって、火砕流、あるいは土石流によって町は壊滅的な被害を受けます。こちらのほうにも火砕流、土石流が流れまして、まさしく島原市は陸の孤島という形になっていくわけですね。ここに埋立地がありますが、ここに災害記念館を建設しようということになったわけです。これが、平成15年です。災害のとき、土石流が流れたところも、15年の段階でこういう形に今はもう完全に復興しています。ここに、災害記念館が建っています。ですから、もともと海岸だったところを埋め立てたところ、今回の土石流で流れた土砂で埋め立てたところに記念館が建っています。

では、記念館の見どころはどんなところでしょう。まず、オープンは2002年、平成14年の7月1日に開館をいたしました。愛称で、がまだすドームというふうに呼んでますけれども、がまだすという言葉はよく出てくるんですけども、がまだすというのは、島原の方言で頑張るという意味です。頑張るという言葉なんですけれども、復興のときにはこのがまだすというのが、地元の合い言葉であり、地元の人に親しまれた言葉です。島原に行くといろんなところにがまだすという言葉が看板に書いてあったりしますけれども、頑張るという意味です。

まず、どういう趣旨で建てられたかということ、先に御説明しますと、平成の雲仙普賢岳の噴火災害の脅威や教訓を風化させることなく後世へ継承しよう。それと自然災害に対する防災意識を後世へ継承しようというような目的があります。それと火山学習、観光の中核施設として観光客の集客に努める、地域の活性化を図る、そういう趣旨です。それと、災害時に全国から温かい支援をいただきました。その支援のおかげで復興できたわけですけども、その支援への感謝の気持ちをあらわす、こういう目的で災害記念館というものは建設をされています。

おいでになった方もいらっしゃるかと思いますけれども、一応施設がどういうところかということの説明をいたします。まず、駐車場で車をおきますと、エントランス広場がございます。エントランス広場にモニュメントがございますけれども、これは全国から支援をいただいた人々に感謝の思いと、復興の願いを込めた溶岩と水によるモニュメントなんです。この溶岩も今回の噴火で土石流で流されてきた溶岩を使っています。エントランス広場から会館のほうに向かいますと、溶岩と土砂で盛り土をした中にはめ込まれたように建物が建っています。そのドーム型の建物は、真ん中で二つに、クレパスで2分されていて、雲仙岳と有明海、雲仙岳と有明海。そういうイメージで実はこの建物というのは建てられているわけです。これは島原半島全体の地形もあらわしています。これは後でジオパークのところで説明

をしますけれども、そうイメージを持ってまして、駐車場から、さっきのモニュメントを通過して、館の中へというふうに導かれています。

館の中に入りますと、アテンダントが立っていますけれども、アテンダントの誘導によって、マグマゲートというところに入っていきます。この溶岩流をあらわしたマグマの通り道、トンネルの中に映像が映し出されています。この映像は、雲仙普賢岳の噴火災害のときに外国の火山学者が3名亡くなっています。その中のフランスの火山学者クラフト夫妻が、イタリアのエトナ火山で撮った映像を実はここで映しています。

まず、この中を歩いていよいよ、館の展示室の中に入っていくようになります。展示室に入りますと、まずは、皆さんの目を引くのは、火砕流の道というものがございまして。このガラス張りの下に、火砕流によってなぎ倒されました木々を再現しています。長さ40メートルぐらいあるわけですけども、この中を赤い光が走り抜けます。火砕流のスピードと同じ時速100キロ。その時速100キロというのはどのくらいのスピードなのかというのを体感してもらうためにつくられたものです。数分おきに、この中を光が走っていきます。それで火砕流の速さというものを体感していただくという施設になっています。

次にここから行きますと、平成大噴火シアター。14メートルの円形ドームの中に映し出されます土石流とか火砕流、そういう映像が流れる8分程度のスライド映像です。映像に合わせて床が振動したりとか、あるいは真ん中に手すりを持つようになっているんですけど、その真ん中から熱い空気が出てくる、熱風が吹き上がる、そういう噴火災害を体験してもらうドームシアターになっています。そこで8分間の体験をしてもらいシアターから出ますと、目の前に広がるのが焼き尽くされた風景です。これは、多くの消防団員とか、報道陣の方が亡くなった北上木場というところがあるんですけど、この研修所付近、情景をジオラマとして構成をしております。炎が揺らめくたばこ畑、灰をかぶった石垣、倒れた電柱、そういうものを再現しています。実際に現場にあった公衆電話、カメラとかそういうものがここに展示をされています。

さらにもう一つ、シアターがございまして。これは今回の噴火のさらに198年前、島原大変という火山の噴火に島原は遭ってまして、火山の噴火自体では被害は起きなかったんですけども、噴火の最終段階で眉山という市内のすぐ背後にある山が大崩壊を起こしまして、それが城下町を埋める。さらに有明海にその土砂が突っ込んだために大津波が起きました。島原市の城下町、大手門のところで10メートルぐらいの津波が来たというふうになっていますけども、このときの津波で、島原半島側で1万人、反対側の肥後、熊本県側で5,000人、約1万5,000人の人が亡くなっています。そのことを島原大変肥後迷惑と呼んでいます。その島原大変肥後迷惑を、立体紙芝居風に住民のいろんなエピソードを交えながら紹介をしています。それと1階から2階に行くところにある、らせんのスロープを上っていくときにある、溶岩の庭。これは前回島原大変のときに出た溶岩であるとか、今回に

出た溶岩、そういうものを配置して、200年たつてコケがむした岩、そういうものを比較しながら、溶岩の展示をしています。

2階に上がって出口のところには、明日へのメッセージということで、農業者の人とか、その当時の島原駅の駅長さん、消防署の人、学校の先生、住民の人、そういう人たちのメッセージを、ここの作り物ですけども、手が出てますね。握手をするとその人たちのメッセージが流れてくると、そういう仕組みになっています。

2階から今度はらせんの階段をおりて1階に行くわけですけども、その正面には、ショップがございまして。実は、ジオパークを始めてから、階段の下に、足跡をたどるといふ工夫がありまして、この足跡は何かということ足跡をたどれます。恐竜から象、鹿というふうにしてその足跡をたどりながら行くと、ジオパークの情報スペースにたどり着くという工夫をしています。

ジオパークの情報スペースなんですけども、ここには、世界のジオパーク、日本のジオパーク、島原半島のジオパークというふうにして、これをモニターテレビでそれぞれ紹介してありますし、いろんなパンフレット、岩石標本、そういうものを並べて、このジオパークの紹介をしています。これは、去年の5月に、この部分だけリニューアルしました。ジオパークのコア施設ということで、昨年国際会議を開きましたので、それに合わせてリニューアルして、ジオパークの紹介をしているコーナーです。しかも、ここにちょっと見えてますけども、床には、赤色の立体地図がございまして。植物とか建物をみんな剥ぎ取ったような地図なんですけども、これを見ますと、過去の溶岩流であるとか、溶岩ドームであるとかいろいろな断層、こういうのがはっきりわかります。子供たちが来たときには、まずここで自分の家を探させたり、島原半島がどうなっているかというのをいろいろ勉強した上で、実際に現場に出ていく、そういうことに使っています。これが大体、今の館の中身なんです。

次に、ジオミュージアムの構想についてお話をいたします。

雲仙岳の災害記念館、平成14年にできましたけれども、それと同じように、大野木場の砂防みらい館、これは国土交通省の施設ですけれども、平成新山ネイチャーセンター、環境省の施設ですね。こういうものが同じような時期に建ちました。さらに土石流の被災家屋、土石流で埋もれた家屋をそのまま保存するという被災家屋の公園であるとか、この大野木場の砂防みらい館の横には、火砕流で焼けた小学校をそのまま保存しています。そういうところを結んで、火山の恵み、火山との共生、火山噴火の教訓、噴火の歴史、地球の鼓動、災害の防備、そのエリア全体が野外の博物館というふうに見よう。そこを結びつけて皆さんに楽しんでもらい、楽しみながら、その防災、いろんなものを考えてみようということで、平成新山フィールドミュージアム構想というのが立ち上がりました。

これが砂防みらい館ですね。もともとこれは砂防工事のための監視所なんですけども、この中に何かあったときは作業員が逃げ込めるようになっています。平常時には火山とか災害とかそういうものを紹介するコーナーに使われています。これが被災した大

野木場の小学校です。校舎そのものをそのまま保存しています。火砕流で燃えたままの状況を皆さんに見てもらおう、これがこの砂防みらい館ですね。監視所の施設です。次はネイチャーセンター、垂木台地といって火砕流で一回全てが燃えてしまって焼け野原になったんですけれども、そこに植物とか動物がどのようによみがえってくるだろうかということで、手を加えずにそういうものを観察できる施設です。もう22年たちましたので、随分緑が復元してますし、あと小さな動物も入ってきています。次が、土石流被災家屋保存公園、土石流で埋まったままのところをそのままに保存をしています。みんなで11棟保存していますけれども、3棟だけはドームをかぶせています。これは、長く保存するためにということで3棟分はこのドームをかぶせて保存していますけれども、残りはそのままです。これはもう年数がたっていて、屋根が落ちてきてまして、今後これをどう保存していくかというのが大きな今からの課題になってくるのかなというふうに思います。

この平成新山フィールドミュージアム構想をするに当たって住民も加わり、あるいは専門の人を呼んでいろんなワークショップを行いました。その中で、さっきのいろいろな遺構とか見どころをどのようにつなげていったら一番いいかというようなことで、住民の人たちを交えていろんな話し合いをしてきましたし、あとボランティアのガイド養成もこれも同時に行ってきました。こういう座学で勉強し、実際にこれは災害の前後の写真なんかを見ながら、どういうふうに地形が変わったのか、どういうふうに地域が変わったかということを学んでますし、あと現場に行って、被災地、あるいは砂防工事でどのように地域が変わっていくかというのを実際に見ながら、いろいろと研修を重ねてきています。このときはたしか8回ぐらいだったと思いますが、講習を受けると、一応修了証を交付する。こういう人たちが中心になって、あとボランティアの仕事をしてくれています。あと、子供たち向けにもこういう学習クラブをつくりまして、子供たちがいろんな災害についての勉強をしたり、あと現地に出て行って災害の遺構を学んだりというようなことをずっと続けてきたわけです。

じゃあ、次にジオパークに入ります。ジオパークですけれども、皆さん御存じの方もいらっしゃるかと思いますが、山陰海岸でも3県でジオパークに取り組んでいます。ジオパークって何ということですが、簡単に言いますと、ジオパークというのは、地球の歴史を学ぶことができる自然の公園です。地形、地層だけでなく、その恵みも受けて生活する人の暮らしや生活も含むんです。ジオというと何か地層と地形、そんなふうによくとられるんですが、そうではないんですね。そういうそこで暮らす人々の暮らし、あるいは歴史、文化。そういうものも含まれるのがジオパークなんです。もともとジオっていうのはギリシャ語で地球とか大地という意味で、パークは皆さん御存じで公園という意味ですね。そのまま直訳すると、大地の公園とか、地球の公園ということになるんですけども、中身的には、先ほど言ったように地層、地形だけじゃなくて、人々の暮らしあるいは歴史、文化などを含みます。ですから、もう少し具体的に言いますと、新しい切り口から島原半島を見てみようということになるんですけれど

ども、島原半島、平成新山を初めとして、雲仙火山あるいは千々石断層の断層崖など、地球が活動している証拠がたくさんあるわけ、そういうものを観察しようとするものです。火山というものをマイナスからプラスへ捉えようというふうにも考えています。火山は、災害や多くの被害を受けますが、その一方ですばらしい景観であるとか、おいしい流水、温泉があります。これは火山の恵みなんですね。

じゃあ、島原半島のジオパークの見どころって何なんだろうということになります。実は島原半島というのは約430万年前に起きた海底火山から起きて、今は長崎県の諫早で本土につながっていますけれども、もともと火山の島なんですね。約20万年前ぐらいからは、断層活動が盛んになってきて、これも美しい景観をつくり上げているということですね。実は断層というのはここに千々石断層というのが走ってまして、ここに金浜断層、布津断層というのが走っています。ほかにもたくさんあるんですけど大きくいうと、この二つの断層の真ん中に島原市、雲仙火山があるんですけども、この中がですね、実はずっと落ち込んでいる、そのような地形なんですね。約50万年かけて、1,000メートルぐらい落ち込んでいるっていうのが、ボーリング調査でわかっています。ですから、本来ですと、二つに島原半島という島はちぎれたはずなんですけども、その落ち込んでる真ん中から実は雲仙という火山が噴火をしまして、溶岩が出てきてここをずっと埋めているということになるんですね。しかも、一番最初この噴火活動というのは、西のほうで起きてました。それがだんだん今は東のほうに移ってます。西のほうは、もう噴火活動がおさまってまして、土砂の供給がないんで落ち込むだけですから、ずっと海が入り込んできています。逆に島原市のほう、東のほうは普賢岳が活発的に噴火してますから、ずっと火砕流と土石流で土砂を供給しますから、ずっと扇型に扇状地ですね。まあ、こういうところなんです。実は、記念館の建物は真ん中にクレバスが走ってます。ドーム全体を島原半島とみなして、真ん中にその地溝帯クレバスが走っているというのをイメージしてあの建物はつくられています。

恵みですね。雲仙火山、小浜温泉、雲仙温泉、島原温泉、有名な大きな3つの温泉があるわけですが、あの半島の中で、温度も違うし、泉質も全く違う温泉が楽しめますね。小浜温泉。ここは約100度の温泉が出ますけど、塩湯ですね、塩化物泉、お塩のお湯です。一番頂上のところにある雲仙温泉ですけど、硫酸塩泉ですね、硫黄の温泉。温度も90度ぐらいに下がります。さらに東へ行って、島原の温泉、炭酸泉ですね、温度も40度というふうに、あの半島の中で全く違う温泉が楽しめる、これも島原半島の魅力です。さらに火山特有の豊富な湧水。島原は至るところに湧水、湧き水があります。それを昔から生活の水として、ずっと使ってきた水の文化というのがあります。そのほかに火山地域ですから、石がたくさんあります。自然石を使ったアーチ橋、あるいは棚田ですね。棚田ですけど、これもほんとお城の石垣みたいに立派な石積みをした棚田が広がっています。こういうのも、火山の中の文化ということでジオパークとして今、紹介をし

ています。

実は、昨年の5月12日から15日までジオパークの国際ユネスコ会議を開きまして、世界各地から約600名の方が島原に集まって、ジオパークを今後どうしたら発展できるかというような協議をしました。これは、閉会式のときの中学生の出し物ですけども、私たちは地球が大好きですというようなことで演奏してくれたときの写真なんです。

会議の中で、島原宣言という宣言を出しました。8項目あるんですけども、その中の1番目と2番目なんですけども、世界各地のジオパークで東日本大震災の被災体験を自然の脅威がある地域に住む人々への教育の一つの手段として有効に活用しよう。だから、東日本の被災体験を全世界で有効に活用しようというようなことですね。それともう一つ、大地の遺産であるジオパークを生かした教育は、地域社会が自然といかに共存するかを理解するのにもっとも効果的である。だから、ジオパークというのは、自然と地域社会がいかに共存するかというものを学ぶものにとっても有効なんだというようなこと、このほかに環境の問題とかいろんなものがありますけども、まあ、災害に関してはこの二つ、1番目と2番目に掲げられました。その中で、記念館でも、もともと記念館を活用した教育プログラムということで、火山防災の学習ですね。体験的な防災学習、あるいは語り部による学習をしていましたけれども、よりこれに力を入れていこうということで、さらに進めています。

特に今、毎週日曜日には、語り部さんが記憶を風化させないためにということで、交代で15分程度ですけども講話を続けています。これもできれば回数を週1回ではなくて回数をふやしていこうと、今、語り部さんを少し増強しようということで準備を進めています。

じゃあ、現状と課題ということなんですけれども、現状としまして入場者がここ10年間で減少の一途をたどっています。これは数字を後ほどお示ししますが、それと10年たつと、施設がすごく傷んできてまして、特に変型した建物ですから、すごく修理が大変なんです。それが今かなり修繕費にお金がかかってきているというのが一つあります。それともう一つ、噴火災害から24年を過ぎました。開館から10年、噴火災害の脅威、伝承というテーマが、だんだんとやっぱり、色あせてきている。集客施設といっても、魅力度が下がってきている、こういう実は課題を抱えています。入場者の推移ですけども、2002年開館のときは、38万人くらいあったのが、これは見込みですけども、本年度は11万人くらいになるだろうというふうに予測されています。少なくとも16万人くらい来ないと、館の運営としては成り立たないんですね。かなり今年度は赤字になりそうなんです。これをどうするかというのが一番最大、頭の痛いところなんです。このようにずっと下降状態で、ここでちょっと上がっているのは、開館10年目で実は、入場料1,000円なんです、ちょっと高目なんです。これを500円半額セールにしまして、少し持ち直したんですけども、その反動で、今年度は急激に落ち込んでいます。23年度でいいますと、入館、入場者が15万

6,000人来ました。今訪れる小中学生は、噴火災害後に生まれた子供たちばかりですね。こういう子供たちに、噴火災害をいかに伝えるかということで頑張っているわけです。全体の入場者の約35%が小中高校生ですね。

では最後に、新たなコンセプトとして、災害伝承からジオミュージアムというものにチェンジしていこうというふうに考えられているんですね。どちらかと言うと今まで、名前もそうですが、災害記念館とって災害だけ、やっぱり災害にすごく力が入ってたなというふうに思うんですけども、火山の災害というマイナス面だけではなくて、火山の恵みであるプラス面も合わせて皆さんに楽しんでもらって、火山観光と防災にそれを生かしていきたいなというふうに考えています。

ジオミュージアムというふうにするには、どうしたらいいかなということで、今いろいろと考えているわけなんですけども、展示等のリニューアルも考えてまして、災害だけじゃなく、ジオミュージアム、ジオパークの拠点、施設という形で、地球の成り立ち、地球の脅威でありますとか、島原半島全体の成り立ち、まずこういうものを学んで、こういう中からその過程で災害というものが噴火あるいは災害があったんだということを学びとってもらえるようなものにしたいなというふうに考えています。あと、防災教育施設として機能を充実させたいなということで、もう火山だけじゃなくて、地震であるとか、火災であるとかそういう防災センター的な役目も果たしていきたいなというふうに考えてまして、まあそういうもの、あるいはさっき言いましたけれども、やはり、実際に体験した人たちが直接語る、そういう語り部ですね、これを重点的にふやしていきたいというふうに考えています。それと、まだまだ雲仙の場合、災害に対する、あるいは防災に関する資料のデータベース化が整ってません。これもここの記念館の役目として、資料をデータベース化するとともに公開をしていくと。こういうことを今からやっていかなければいけない。本当はこれも、まだ今、手をつけ始めただけですけども、こういうことも今後、きちっとやっていきたいなと思います。

あともう一つ、私がずっと前から考えていたのは、防災と云わない防災を目指したいなと思っています。先程申しましたような地球の成り立ちとか、地域の成り立ちを知る中で、その中で災害を知る。災害を知り、それを未来につなげる、未来に生かす、将来起きるであろう災害の被害の軽減につなげていくというふうに思います。あんまり何か、災害災害、防災防災っていうと長続きしないですね、そうではなくて、島原半島全体の成り立ち、あるいは地球の成り立ち、そういうものを伝える、そういう中に恵みもあるけど、災害もあるんだよということを伝えていく。まあそうして、その中で災害というものを知ってもらってそれを次の災害にどう生かすかということを知ってもらうという形につなげていきたいなというふうに思います。

まあ、ちょっと時間が早かったですけども、以上、今島原の記念館での取り組み、あるいは今抱えている課題、今後こういうことを目指したいということをお話しさせていただきました。ありがとうございました。

(拍手)

### 3. 質疑応答

○司会 大変わかりやすい御説明でありありがとうございました。私も学生時代、噴火災害のころ、ボランティアに行っただけで懐かしいなあと思いついて聞いてみたけれども、災害としてはこちらの神戸の震災、少し前に来られて、その後長年、ミュージアムの活動であるとか、伝承であるとか、あるいは防災、そして再現ジオミュージアムということで、もともと神戸の先輩に当たるということでございます。そうしましたら、この後ですね。20分ぐらい時間がございますので、今の内容につきまして、こんなことを聞いてみたいとか、あるいは意見交換をしたいと思います。ご質問がございましたら、手を挙げてもらえますでしょうか。細かい質問一つ。お二人のキャラクターの名前は何かですか。

○杉本氏 ああ、済みませんね、名前が入っていませんでした。これ男の子と女の子なんです。全国公募でやりました。たしか大阪だったかな、どこかの人が応募したジーオ君というキャラクターなんです。男の子だけだったんで、女の子も欲しいということで、昨年の国際会議に合わせて妹も誕生しまして、ジーナちゃん。これが、島原半島ジオパークのマスコットキャラクターで、きょうお配りしました缶バッジにもそのどちらかがついてるかなと思ってますけれども、マスコットキャラクターで、ゆるキャラも二つ、つくってまして、いろんなイベント等にはそれを持っていろんなPRをしています。

○質問者1 ありがとうございます。展示施設のリニューアル等は考えてないんですか。

○杉本氏 さっき言いましたように、展示施設のリニューアルを考えています。ここにありますように、展示施設のリニューアル、もう10年たちましたので、ここら辺でももう少し防災面も含めたところで、あとですね、このまだ開館された平成14年というのは復興の半ばだったんで、その後のことは反映されてないんですね。ですから、その災害もそうだけど、災害からどうやって立ち直ってきたかというものが、どういう形で立ち直ってきたかというものがこのリニューアルのときに追加して、今度は災害だけじゃなくて、どうやって人々が力を合わせながら復興に立ち向かったかということも、まあ少しスポットを当てたいというふうを考えています。

○質問者1 予算もあれですか。補助金とかで工面できますか。

○杉本氏 実はですね。当初のさっき基金という話をしましたけれども、1,000億の基金をつくったときは随分景気がいいといえますか、年の利息が7%ぐらいつく時代だったんですね。1,000億に70億、実は年間生み出してまして、それは被災者対応に使ってたんですけども、その一部を保留してまして、まだ今恐らく30億ぐらいの基金を持っています。それを少し取り崩して、リニューアルに使おうかなというふうを考えています。

○質問者1 ジオパークに認定されたじゃないですか。ジオパーク関連の補助金もまたあるんですか。

○杉本氏 ジオパークは基本的にまだ補助金制度がありません。まだできたばかりなんで。ただし、観光関係とかいろんな県の補

助金なんかを使って、実は今、運用しています。

○質問者1 ジオパークは、たしかユネスコが認定しているものですね。

○杉本氏 そうです。

○質問者1 となると、何て言うんですかね。国際的、国連とかからのお金とかかっておりないんですか。

○杉本氏 そういうことはなくて、ジオパーク、ユネスコがしてるそういうのになったからといって、お金が来るわけではないんですね。これは、その言うなれば名前をくれるだけで、お金が来るってことではありません。

○質問者1 あくまで名前だけですか。

○杉本氏 そうです。

○質問者1 ありがとうございます。

○司会 ありがとうございます。今、リニューアルですね、復興過程の話とかについても関係する話があったんですが、島原のときの基金であるとか、あるいは仮設住宅など、いろんな取り組みをされましたよね。あれがまさに私たちの神戸に生かされてまして、実は、島原の方々が頑張ってくださいのおかげで、その後の被災地への取り組みが結構よくなったりすると思います。そういう意味でこちらでリニューアルされて、復興についても御展示をされたら、それはほんと、いろんな意味ですごく勉強になると思いますので、とにかく期待しております。

○杉本氏 はい。

○質問者2 済みません。年間に必要な維持管理費ですね。それはどれぐらいでしょうか。その財源は国、県、市、どういう割合になっているのでしょうか。

○杉本氏 基本的には入場料で賄うという形になっています。ただ、一部事務的な経費として、県の基金から5,000万ぐらいのお金をつぎ込んでいますけども、修理費その他、修繕料その他も含めてですね。基本的には入場料でやりなさいというのが基本なんです。ただ、入場料だけだとかなり厳しいです。さっき言いましたように、16万人以上入るとそれでどうにかやっていますけども、ことしですと、11万人ですからどうしてもやっています。それで、今年度はどうしても赤字になるんで、別途5,000万ぐらいその基金から取り崩しをお願いするようになっています。ですから、費用は入場料プラスその基金からの取り崩しです。その部分だけで運用しています。

○質問者2 年間にどれくらい維持管理費がかかるんですか。

○杉本氏 そう、ちょっと待ってくださいね。ええとですね。これは23年度ですけども、2億4,000万ぐらいかかっていますね。

○質問者2 それは、基金の取り崩しだけで賄えるんですか。

○杉本氏 ですから、営業収入と基金の取り崩しで賄います。

○質問者2 そうすると、小中高校生は有料ですか。

○杉本氏 有料です。一応大人が1,000円で、小中が500円という形になります。

○質問者2 将来の見通しはどうですか。

○杉本氏 なかなか厳しいですね。ですから、16万人に持って

いかないとなかなか難しいので、そこまでどうにかして持っていきたいということで、今回リニューアルも少し考えてますし、防災センター的な要素も入れながら、少し立て直しをしたいなあというふうに考えています。

○質問者2 ありがとうございます。

○司会 ちなみに、お客様って、外からいらっしゃる観光客の方と、地元の方々と割合はどれぐらいなのでしょう。

○杉本氏 地元と外からという、ほとんど外からですね。はい。地元は小中学校が、それぞれ小学校3年生は必ず来ますけども、そのほか市内の、一般住民の方というのはほとんど来ないですね。ですから、外部からがほとんどです。

○司会 人防はどんな感じでしょうか。

○花本（人と防災未来センター普及課長） どうも。人と防災未来センター普及課花本です。いろいろ参考にさせていただきました、ありがとうございます。人防がですね、一応7割ぐらいが兵庫県外からの方で、特に小中高校生ですね、約6割以上を占めております。ちょっと参考にお伺いしたいんですけども、集客対策といいますが、そういったものを特別に何かされておりますか。

○杉本氏 集客対策というのは、うちは島原半島の観光連盟あたりと一緒に主に修学旅行誘致、あるいは一般のエージェントを回ってということ、観光連盟なんかと一緒にずっと営業に回って、一応専任の営業が2人おまして、回ってまして、あと、雲仙の場合ですと、韓国でありますとか、中国でありますとかそういうところも一応営業をかけていますけども、ただ最近、なかなか海外から特に中国、韓国からは激変しているというのが現状です。

○司会 ありがとうございます。そうしましたら、ほかにございますでしょうか。

○質問者3 ありがとうございます。島原のほうには何度かお伺いさせていただいたことがあるんですけども、大野木場小学校の遺構の保存というのが非常に臨場感があって、実際に経験していない我々としては非常に大変な災害が起こったんだなあというのを感じることができたんですけども、今、東日本大震災のほうで、発生した日に三陸のほうで遺構の保存の問題があるかと思うんですけども、そういったことを考えまして、地元の住民の方の賛成とか反対とか、遺構の保存に対して何かこういった議論とかというのがあれば教えていただけたらと思います。

○杉本氏 はい。実は、東北からはたくさん視察の方が見えまして、その遺構の保存についていろんな論議をされていかれるんですけども、まあ一つ、先ほど言いました土石流被災家屋保存公園、あの土石流の公園にしても、その大野木場小学校にしても、実はあそこで誰も亡くなっていないんですね。もう1カ所、北上木場の農業研修所というところを災害遺構として保存しています。ここでは多くの消防団員が亡くなっています。今、公開しているのは、その北上木場はまだ工事中ですので、一般人は入れないで一般公開してないですが、これを実はどう公開するかというのが今後一つの課題になっています。雲仙の場合は、噴火活動が5年間続いたんですね。5年間続いた後に結局復興に向けての過程の中で、遺構の保存とかいろいろな問題が出てきました。5年

間して、ある程度落ちついてきた段階での論議だったものですから、逆に地域の人たちが遺構として残したいという気持ちがある、そういう意見がかなり多かった、強いものがあったんですね。そういうのを行政が受けて、いろいろな方策を講じながら遺構の保存をしていったという経緯がある。どちらかという遺構の保存については、住民の人たちの意見が先に出てきて、それを行政が後ろからバックアップしたという形になっています。それが今の東北、丸2年目ですから、まだ生活も安定してない、先がどうなるかわからないという時点というのと若干状況が違うかなと思いますけども、ただおっしゃるように、本物にまさるものはないですね。幾ら記念館でああいうシアターで画像を映しても本物を見る、本物の訴えかける力というのは物すごく強いわけですね。ですから、そういうものをやっぱ残して、本物を残すというのはすごく大事だと思います。ですから、ただなかなかやっぱ今の状況で、東北でなかなか論議はできないだろうと思うんですけども、じゃあ、先にとっ払ってしまうと、後で論議をしようとしても、もうものがなくなるってこともありますよね。ですから、できればもう少し結論を延ばすというんですかね。もう次々に遺構がなくなっていきますよね。瓦れきの撤去だとかいろんなのと一緒にもうほとんどそのものがないという状況になってしまい、私も4回ぐらい向こう、いろいろと行かせてもらったんですけども、行く度にもうそういう状況になってくる。そういう中で、なかなか住民の人も、災害遺構というところまで、まだまだ手が届かないんですけども、ただなくなってしまえば、元に戻すことはできないということもあるんで、ここはどうしても残さなきゃというところがあれば、それを残すか残さないかをもうちょっと何か論議を先に延ばすというか、壊すのをちょっと待ってもらおうというんですか、そういうことができればなあと私自身は思ってますけども。雲仙はですから、ある程度、噴火災害という長期間続く災害の中で、しかも5年たった後からそういう復興が始まってきましたから、そうすると、住民の人たちもそれを残したいという気持ちがさらに強くなって、そういう人たちの意見が地域を説得していったという形になるわけです。

○司会 ありがとうございます。火山の場合のお話を伺って、火山の場合は地震と違って、その地震は一瞬起きて災害後すぐに復興過程に入るんですけども、火山の場合は、結構長い間いろんな期間があって、始まっていく部分あるのと、その辺が時間感覚が違うんじゃないかと思います。私は、亡くなられた多くの方がおられた場所、体育館の報道の方も、この報道の方を規制しようと思ってむしろ地元の方が消防団の方とか、タクシー運転手の方がそこに行って、ある意味巻き込まれた感じで亡くなった場合があったりしまして。ちょっとその辺が多分さまざまな遺構としての。

○杉本氏 ですから、もう1所の消防団員がたくさん亡くなった遺構は、防災目的というか、そういう目的で、条件をつけて今後公開しようとかというのは、国土交通省と色々な話し合いをしますけども。やはり東北で、もう一つ大変なのは、そこで多くの方が亡くなってる、犠牲者の方がその遺構の中でとか、遺構の周辺で亡くなっていらっしゃるというのが、遺構に残すためには

その関係者の人たちのある程度の協力が必要になってくるというところが大変なところかなと。

○司会 ありがとうございます。今の島原の話、神戸の話、東北の話もございました。

○杉本氏 あっ、もう一つ追加でお話ししますけれども、北上木場の農業研修所を残すときも、地域の住民の人たちだけではなくて遺族の代表の人に入ってもらったりとか、いろんな人に入ってもらって、その中でこの遺構をどうするかという話し合いを進めました。そういう中で、遺族の人たちにも一定の了解をもらった上で、遺構の保存を進めたという経緯があります。

○司会 地域の皆さんで話し合っていることですか。

○杉本氏 そうですね。

○司会 ほかに聞いてみたいとか、意見交換をしたいことはございますでしょうか。時間はまだ十分ございますので、遠慮せずどうぞ。

○質問者4 ありがとうございます。簡単な質問なんですけれども、普賢岳は今後の活動については、どのように捉えていて、それはどれくらいの規模を想定されていて、その防災をどのように考えていらっしゃるのでしょうか。

○杉本氏 この次、どの時点で噴火するかというのは、ほとんど今の科学技術ではわかりません。今、噴火警戒レベルというのが、気象庁との間でいろいろと研究されて出てまして、噴火レベル1から5までという中で、あくまでもそれは過去に起きた噴火災害を想定して、今回も含めて。ただ、あくまでも過去に起きた同レベルの噴火が起きたときにどうだっていうことで、全て計画が立てられてまして、火砕流についても今回の範囲で火砕流が起きたときにどう対応するかということになってまして、それ以上の大きなものについてはまだ計画書の中には書かれていないというのが現状です。次、いつ噴火するかっていうのも、一般の市民の人は200年ぶりの噴火でしたから、もう200年噴火しないと、皆さんはおっしゃるんですね。だけど、これ、自然のことですから、決して200年噴火しないわけなんて、いつ噴火するかわからないんですけども、もう20年たつともう皆さん、そういう気持ちにだんだんとなってきているというのが現状ですね。

○質問者5 例えば、2年前に東日本大震災の津波というのが過去を踏まえてこれくらいという、それをはるかに超えたということもありますので、過去と同程度、同レベルということも、そういう選択肢があるかもしれませんけども、それを超えたレベルの対策というものが需要ではないかと思うんですね。それから、まあ10年以上前の三宅島の全島避難ということもありますので、その辺はいかがでしょうか。

○杉本氏 そうですね。その噴火自体ではなくて、眉山崩壊ということを想定しては、島外に避難するという計画書も実は立てられています。ただし、もう一つ地震の違いといえるのは、火山というのは前兆現象がありますから、その段階で、徐々に広がっていくとかいろんなことができるのかなというふうに思っています。しかし、おっしゃるとおりにもっともっと大きなことを考えて、計画をつくっていくというのは必要だというふうに思います。

○司会 ありがとうございます。過去の経験だけじゃなくて、もう少しそれを超えた場合の対策も必要ではないかということも大事だと思います。しかし、島原の過去の経験を大切にされている一方で、噴火口とをボーリングして、中を掘削して、世界ですぐまねな研究だったんですけども、噴火した後の火口にすごい穴を掘って岩石を採って調べると、つまり過去の経験だけではなくて、新しい調査研究をしてどうなるかと。研究も先進的にされておられますね。

○杉本氏 そうですね。火道の掘削といいまして、噴火して間もないマグマの通り道を掘ってみようということで、世界で初めてそういう研究もされました。その中では、普賢岳というのは過去に何回も噴火をしているんですけども、今まで思われていたのはある一つのパイプがあってそれを常時通ってそのマグマが上がってくるんだというような考え方をされていたんです。そうではなくて、板状に上がってきて、その一回固まった板状のものではなくて、その隣とか、そういう過去のその上がってきたマグマの跡が何枚もあってというようなことが結局ボーリング調査をしたことによってわかってきてます。それともう一つ、今回、溶岩ドームという形で出てきましたけども、同じ時期に出てきたピナツポみたいに大爆発を起こさなかったんですけども、なぜかという、ガスがすごく抜けていると。その抜けているようなところも今回見つかってますから、もっともってなぜ普賢岳の場合はガスが抜けるのかというようなこともっと研究が進んでいくのかなというふうに思っています。

○司会 ありがとうございます。まだ時間は十分にございますので、ほかに御質問がございましたら。

○質問者6 どうもありがとうございます。二つ、よかったら伺わせてください。一つ目は、先ほどもあったように東日本の被災地でもこれからこういった災害記念館とか資料館について、検討が重なると思うんですけども、実際この雲仙でも、またこの人と防災未来センターでも、細かい展示内容だとか、その見せ方についてはかなり展示業者さんのほうからの提案であったり、形づけだったり、逆に言うと、相当地元の側でもこだわりとか、うまく指示をしていかないとなかなか、実際体験された方と、こういった記念館、資料館のコンテンツをつくる側との相違というのが生じかねないかなと思うんですが、そのあたり当時のこの普賢岳の災害記念館としてこだわりを持たれた部分であったり、もしくはできてしまってから、今後、この東日本とかへの教訓として地元としてはこういうところでこだわりを持つべきだとか、やりとりを大切にすべきだというのがあれば教えていただきたいのが一点です。二点目については、雲仙ももうすぐ、もう既に10年を過ぎてますけれども、さっきおっしゃった語り部さんを初めとした、ソフト部分の継承というか、時間がたつにつれてなかなかそういうところは難しくなると思うんですけども、時間の経過の中で、そのあたりをどう続けてきてるか、もしくはどういうふうに変えていくか、何かお考えがあればお教えいただきたいと思っております。

○杉本氏 はい。まず、雲仙の記念館でこだわっている部分とい



討論が行われたかということの概要をこちらの通信でまとめております。ちょうどこちらの通信のほうを御参考にしていただきながら、少し各6回分のことについて振り返りを行いたいと思います。

まず、第1回のほうは、「阪神・淡路大震災 震災資料の17年」ということで、人と防災未来センターの震災資料専門員、高野のほうから発表しました。当日のほうなんですけど、人と防災未来センターにおける震災資料の収集、保存、活用についての成果について報告させていただきました。震災資料の収集事業は、震災から9カ月後の1995年10月に開始されました。その7年間で17万点の資料が収集され、2002年に開設された当センターに、そういった収集事業は引き継がれました。センター開設後も震災資料はふえ続け、現在は約18万点の一次資料が所蔵されております。また当日なんですけど、このようにセンターに所蔵されている火災で焼けて溶けてしまった硬貨などの実物資料をお見せしながら、震災資料の保存、活用の実例について御紹介させていただきました。

そして第2回は、「被災地経験継承のために—複数の展示拠点とネットワークづくり—」ということで長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」研究員の山崎麻里子氏をお迎えし、中越メモリアル回廊の事例について御報告いただきました。中越メモリアル回廊は、4施設3公園として整備された中越地震のメモリアル拠点で、被災地域に点在した拠点全体をめぐることの中越地震の全体像を浮き彫りにすることができます。山崎氏からは、中越地震が発災して回廊ができるまでのプロセスや、コンセプトが異なる各施設の概要について御紹介いただきました。また本日のお話にもあったんですけど、中越地震の被災地においても集落を震災遺構として保存している地区があります。その地区の概要やその地区の保存をめぐる課題についても御紹介がありました。

そして、第3回は、「東日本大震災の文化財レスキューと展示活動」ということで、遠野文化学芸センターの前川さおり氏、そして、震災からよみがえった東北の文化財展実行委員の若月憲夫氏をお迎えして、東日本大震災で被災した文化財のレスキューとその展示活動について御報告いただきました。被災した文化財を一刻も早く救出するためのレスキュー活動が東日本大震災の被災地で行われたわけなんですけど、その成果とその重要性を伝えるために全国各地で企画展を開催されました。前川氏からは、文化財レスキュー活動に携わった経緯や展示に込められた思いについて御紹介いただきました。また、若月氏からは、文化財展実行委員として文化財レスキュー活動を通した展示への思いや、戦争展示と災害展示の比較について御考察されました。そして、その報告後は前川氏から、人と防災未来センター東館で、ちょうどその展示が行われていたんですけど、その展示解説ということを行ってもらいました。参加者の方からの感想といたしまして、文化財を助けることからではなく、価値を伝えることを行うことはとても難しく、事前に理解してもらうことの大切さを知ることができてよかったといった御意見を伺うことができました。これが展示会室の様子です。

そして第4回は、「地域を拠点とした被災経験の継承—阪神・淡路大震災と東日本大震災—」ということで、このときはとても多くの方を講師にお招きして御報告いただきました。大槌復興館の高田由紀子氏、野田北部・たかとり震災資料室の河合節二氏、神戸市立地域人材支援センターの内屋敷保氏、山住カズト氏、そして、地域連携サポーターの寺沢正敏氏をお迎えし、阪神・淡路大震災と東日本大震災で被災した地域ぐるみで震災資料を活用している事例について御報告いただきました。野田北部・たかとり震災資料室の取り組みの経緯や地域が震災資料を収集、保存する意義について河合氏から御報告いただきました。そして内屋敷氏からは、地域人材支援センターが開設するまでの経緯や地域の被災経験を伝える震災体験学習などの取り組みについて御紹介いただきました。大槌市の高田氏からは、定期的に発行している大槌新聞の取り組みの様子や復興館における今後の展望について御報告いただきました。その後のタイムディスカッションでは、山住氏と寺沢氏を交えて、神戸で被災した地域が震災教訓を伝える取り組みというものが東日本大震災の被災地ではどう生かせるのかなどについて、議論がなされました。

そして第5回が、「長田区役所職員による阪神・淡路大震災の記憶継承の取り組み —人・街・ながた震災資料室の事例—」ということで、人・街・ながた震災資料室から、寿氏、清水氏、武川氏。そして、人・街・ながた震災資料室の資料を使って共同で活用している神戸学院大学人文学部の水本浩典氏をお迎えし、御報告いただきました。寿氏のほうからは人・街・ながた震災資料室の取り組みについて御報告いただきました。そして水本氏のほうからは、資料室とともに震災資料を活用している観点のその取り組んでいる理由や、実際の資料活用の事例について御報告いただきました。その後、資料室の清水氏と武川氏を交えて、人と防災未来センター資料室と震災資料室と比較しながら、地域に密着した震災資料を伝える意義や課題、そして再考した災害資料をどう今後伝えていくかなどについて、後半タイムディスカッションを行い議論をしていきました。

そして、最後に今回の「災害記念館からジオミュージアムへ」ということで、杉本氏から御報告いただきました。

このように以上の全6回にわたって開催してきたわけなんですけど、ここで皆様と一緒に議論していきたいなと思っております。まず、6回やらせていただいて、印象に残った回とか、あるいは感想とか何かそういうものを少し考えていただきながら、そういった意見、これまでの災害ミュージアム研究塾の取り組みを通しての感想とか、あるいはよかったところとか改善点とか、そういうところがあれば、ぜひ御発表いただければと思います。何かありますでしょうか。

ちなみに、挙手で、第1回に来られた方、もしおられましたら挙手のほうお願いいたします。なかなか少ないですね。リピーターが少ないかもしれません。第2回に来られた方、おられますでしょうか。第3回に来られた方、ありがとうございます。第4回に来られた方、だんだんふえてきましたね。6人ぐらい。はい、第5回に来られた方、おられますか。これも5人ぐらいですね。

第1回お越しになった関西大学の。

○平川達也氏（関西大学社会安全学部）御指名ですか。

○石原 御指名で、平川君にお願いいたします。第1回の感想とかがありましたらお願いします。

○平川氏 済みません。第1回に行かせてもらったときは、運営ボランティアの仕事の関係上、どうしても仕事の勉強という形で行かせてもらったという面が、そういった側面が強かったですね。ただ、何と言いますかね。ふだん、展示会室にしているものとは、また違って倉庫にずっとしまわれているようなものまで、しっかりと見ることができたのはよかったなというふうには思います。

○石原 そうですね。そのときに高野のほうから報告があったんですけど、その後に、人と防災未来センターの収蔵庫が7階にございまして、ふだん一般の方は入れないんですけど、そのときは特別に収蔵庫の見学というものを御希望の方にお見せする機会も設けました。何かその資料を見て、びっくりしたこととかありましたか。

○平川氏 その後、それをフィードバックするようになりましたよね。展示会室をするにしても。

○石原 例えば、どうフィードバック、例えばどういう内容を伝えるようになったとか。

○平川氏 3階にあるようなものを、関連づけたりとかしましたね。

○石原 ありがとうございます。恐らくふだんはなかなかこういった収蔵庫というのを見る機会がないですし、人と防災未来センターでありながら、資料の収集、保存についてなかなか皆様に発表する機会、お知らせする機会がなかったのも、こういった場をおかりして、こういった資料室の活動とか、震災アーカイブの取り組みについて御報告できた会は個人的に運営者側なんですけど、すごくよかったかなあと考えております。

じゃあ、第2回にお越しの方で、もしよろしければ御感想をいただければ。もし第2回に来られた方で挙手いただけたら、幸いです。おられませんか。じゃあ、今回は長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」のツツ様がお越しなんで、もしそういった「きおくみらい」のことについて、災害ミュージアムの実際の感想について、すごいむちゃ振りで大変恐縮なんですけれど、何かこれまで、きょう、恐らく第6回しか来られてないとは思いますが、今回の研究会を見て感想とかをいただけたら幸いです。

○松井千明氏（中越防災安全推進機構） 長岡震災のアーカイブセンター「きおくみらい」から参りました松井と申します。第2回では、うちの山崎が発表させていただきましてお世話になりました。今回、全体の振り返りをするということで、私、初めて参加させていただいたんですけど、まとめられた資料をちょっと見ていて、震災資料の、第5回の当時の経験を知るための貴重な資料になるという震災資料は、当時の貴重な資料になるということなんですけど、語り部の話が先ほど出てましたが、語り部の方が持っている情報をこれから資料としてどういうふうに残していったらいいのかというところが、中越のほうでも今問題になっていまして、同じ被災した地域でこれから語り部の方が持っている

情報をどういうふうに体系立てて残していったらいいのかというのを、これから皆さんと考えていけたらいいなと思っているのですが、その点に関してきょう御来場の方から何かお話がいただければと思っています。

○石原 ありがとうございます。今の御質問に対して御意見とかありましたら、挙手願います。例えば、今書いてくださった高野さんは、大学院のときに語り部さんの御研究、防災未来センターの語り部さんのお話を聞いてそれについて修士論文でまとめられたので、そういった観点から何か、今までの御質問について何か御意見がありましたらお願いします。

○高野尚子（人と防災未来センター震災資料専門員） はい。私は、阪神・淡路大震災の語り部さんの研究を大学院時代にしておりまして、そこで何か答えが、これという答えが見つかったとかあるとかいうわけではないんですけど、神戸も、語り継いでいく中でだんだん語り部さんが高齢化して行って、それを語り継いでいくためには次の世代とか、次の災害が起こり得る地域とかに継承していかないといけないんですけど、長岡もやっぱり、語り部さんを5人養成したらいいとかいうんじゃないかと、その人がまた誰かほかの人、また、家族、自分の子供、そういう人、近所の人に伝えていって、またその人が、またこういうことを聞いたからまたこれをほかの人に伝えていこうとなって、またそれを聞いた人が、あつ、私の体験ではないんだけど、こんなことがあってんだけど伝えていく、そういうふうにとんとんとんとと少しずつでも、じわじわじわと広がっていくような、語り部をしていくぞとか、そうしなきゃいけないという意気込みではなくて、そういう形でもじわじわ広げていくようなこと、少しずつ目指されてはどうかと、私は個人的に思いました。

○石原 ありがとうございます。ほかに御意見等がありましたら、お願いいたします。ありがとうございます。今ので大丈夫でしょうか。参考になりましたでしょうか。

○松井氏 はい、ありがとうございます。

○石原 じゃあ、時間だけ、第3回、第4回、第5回について、何か感想とか、印象に残ったことについてありましたら、この場で御意見をいただけたら幸いです、いかがでしょうか。

じゃあ、単純な質問を聞いてみたいと思います。災害ミュージアム研究塾を開催してよかった、勉強になったと思う方、手を挙げてください。ありがとうございます。ほとんど皆さん。余り勉強にならなかったとかそういったことがありましたら、挙げにくいんですけど挙手をお願いいたします。それとかここは改善したほうがいいとか、そういったことがございましたら。せっかく皆さん、市民の皆さんとか研究者の皆さんも来ていただいたわけなので、今後活動していく上でよりバージョンアップしてやっていきたいと考えておりますので、忌憚のない御意見がありましたら、ぜひこの場で遠慮なく御意見をいただけたら。はい。

○参加者 一市民の立場として、参考になるかどうかわかりませんが、述べてさせていただきます。共通して言えることはというよりも、5カ月5回、参加させていただいたんですけども、大きく分けて、先ほどの島原の杉本さんもおっしゃってたんなんですけど、

こういういわゆる箱物をつくるときに何を見せるのか、何を展示するのか、何を伝えていくのか。一つはマイナスの要素があると思います。そのマイナスの要素があるということは、プラスの要素もあるという。じゃあマイナスというのは何なのか、要は災害のそのときの状況、状態というのは、後世の人は知らないで、そういうところに行けば、そのときにどういう状況であったというのがある程度わかる。プラスの要素は何なのかというと、で、そのプラスですから、後世の人たちにその当時経験した人を、さっき出てきました語り部なんかもそうだと思うんですけども。阪神淡路なんかでも、あと何十年そんなに時間がたたないうちに経験者というのが年齢的にこの世からいなくなってしまう。そうすると、それは語ってくれる人がいない。じゃあそれをどうやって残すのか、映像に撮るのか、あるいはほかの手段、要は文字にして残すのか。その人がいない以上は何らかの形で残していかないといけない。その中から、じゃあ何を残していくのか、ただ単に状況だけを伝えるのか。それともそこから、その語り部たちが、あるいは経験した人が、そこから自分がその災害から何を学んだのか。こういうことを行うことによって、いわゆる防災、あるいは減災、災害が少なくなるという、そういうノウハウというものを伝えていく、それがプラスの部分だと思うんですね。ですから、ただ単にマイナスでこういうその災害があった、これだけいろんなその影響があった、これだけ大変だったというそれだけを伝えるものだけだったら、効果というのは半減するというふうに私は考えてますね。ですから、経験した者たちが何かを残す。ノウハウを残していく。それを伝えていく。そちらのほうへもっとウエートをかけるべきだというふうに思います。ですから、そのためにはそういう現在の若い人たち、20代前半から下、特に小中高、そういう人たちが何を学んで、自分たちが今度自分たちより若い人たちに何を伝えていくのかという、それをを行うことによって、いわゆる風化をさせないという、それを伝えていく、伝承というそのノウハウというのも考えていったらいいんじゃないかというふうに思います。そういう部分というのも、私自身はこの研究会で学んだものです。

○石原 ありがとうございます。非常に重要な御指摘だと思います。やはりこういった震災の教訓とか、語り部さんが語る体験談を単に伝えるのではなくて、どう伝えていくかというのが、やはり東日本大震災で、今後伝えていくときにすごいそういったことを体系化するといいますか、そういったことを考えていくことで、次の東日本大震災、そして次の大きな地震の教訓を生み出すことにすぐつながるかなと思っております。そういったことも今後の研究塾によって学んでいきたいポイントだなと感じました。それでは、先ほどの御質問とか関連しまして、今度は災害ミュージアム研究塾のこれからというのを考えていきたいと思えます。

○石原 先ほど御質問がありましたことにも関連しまして、例えば今後災害ミュージアム研究塾で取り上げてほしいテーマとか、内容とか、そういったものがありましたら、ぜひこの場で御意見をいただけたらと思います。はい。お願いします。

○参加者 伝承という点で、例えば和歌山とか、福島とか、そう

いう南海地震を経験した地域が果たしてどれほどの災害文化を残しているのか、そういう話はちょこちょこ聞かれますが。どういう伝え方をしてきたか、稲むらの火は余りにも有名ですが。そのほかにもそういう地域があると思うんですね。というのは阪神も市民の方40%の人がもう知らない。いずれそれが過半数を超えて、あと20年、30年しましたら、どんなふうになっているのだろうか。そういう点で、例えば、関東大震災、果たして地元であの教訓がどうなっているのか、風化してしまっているのか、いやいや、一部伝わっているのか、その辺のことをどういうふうにしてきたから伝わってきて、そういうのを聞きたいですね。だから、新潟地震もはるかもうかなり昔の話になってきましたが、新潟の方にこの前お話を聞くと、やっぱり津波が川を6メートルぐらいの高さで上ってきたと。私どもも子供のころでしたがテレビを見とったら、住宅とかマンションが液状化で倒れている。あの映像をたくさん見ましたが、津波があそこで起きているというのは知らなかったんですね。そういうことで、そういうことが地元で、果たして新潟市民の方が共有して伝承されて、今はどうなっているのか知りたいですね。そしてそれが風化しているとすればなぜなのか、もし風化していなかったとすれば何をしてきたから残っているのか、そういう意味で、阪神・淡路大震災もうすぐ20年ですが、やはり今後20年、30年に向けて何をやるべきなのか、特に人と防災未来センターもそういう観点からして、さらにもっとやることではないかと、そういうのがわかるのではないかなという、そういうことに興味があります。以上です。

○石原 ありがとうございます。非常に重要な御指摘で、こういった災害の教訓が、伝わっている地域とこういった大規模な災害、例えば阪神・淡路大震災としても20年たつと風化していくわけで、そういったところで、伝承が伝わっている要因は何なのか、そして、伝承というもの、そして災害の文化が風化していく要因なのか、阻害していく要因は何なのかということは、改めて考えていかなければならない課題なんだなあと思っております。また、こういったことも研究レベルでなるかもわからないんですけど、皆様とともに考えていけたらなあと思えます。ほかにはいかがでしょうか。はい、お願いします。

○参加者 個人の関心を申し伝えるだけなんですけど、例えば、伝承の問題ということであれば、戦争のミュージアムということであれば、日本には災害ミュージアムよりも、少し長い経験とそれから問題への突き当たりがあるかと思うんですけども、そういった意味では災害ミュージアムと戦争ミュージアムの対話ということから学ぶことがあるかというような観点が私は重要だと個人的に思っております。以上です。

○石原 ありがとうございます。災害と戦争、どちらも追悼するという意味ではすごく共通点はあるんですけど、やはりどうしても、戦争というのは人為的なものがどうしても働いているので、そういった意味で伝え方とかというのは、どうしても災害とそして戦争とは違ってくると思います。そういった意味で比較するということは非常に有意義ですし、今度の参考になるなと考えておりま

す。ほかにかがででしょうか。はい、お願いいたします。

○参加者 きょう、初めて来させていただきましたけども、土石流と津波を比較してみますと、土石流は津波より質量が大きいですが、速度が遅い。しかし、距離が近いので避難の時間がどちらも流れとして捉えるため、スパコンになりますけど、津波シミュレーションが流用できるかもしれないと思うんですね。土石流については、地震とか津波に話題が移ってしまって、風化されつつあると思うんです。最悪の場合、地震、津波、土石流が同時に発生するかもしれないとそういうこともあるのじゃないかと思うんですね。そやから、三つまとめてどうしたら、減災するように考えていけば、土石流とか噴火と火砕流とかの予算とかをね、おけるんじゃないかと思うんですけどね。

そして、大体日本はね、高い技術力に裏づけされた防災先進国ですね。ですから、まだまだ、メーカーはその辺の潜在能力が高いと思います。家電メーカーは今あかんけど、防災に関してはまだまだ伸びる余地があるので、それはメーカーさんが頑張ってもらって、技術立国、日本パート・ツォーね。昔そういうのがはやりましたよね。だから、今からリベンジをかけて、途上国に仕事を持って行かれてる場合じゃないんで。この分野は日本独自で、日本は建築土木みたいな日本国内産というか、雇用も生まれるし、景気回復にもなるし、いいんじゃないかと思えます。

○石原 ありがとうございます。ただ、ことしに災害ミュージアム研究塾2012で取り上げた内容は、やはり大規模自然災害の被災教訓の伝え方についての中心の話題が多かったと思うんですけど、土石流とか、ほかのハザードの部分と比較することというのは非常におもしろいですし、それか、比較することで見えてくる、新たな課題とか伝承の意味とか、そういうことがすごいわかるかなと思いますし、非常に参考になりました。ありがとうございます。はい。かがりさん、お願いします。

○かがりさん きょう、私、来て、ちょっと場違いみたいにしてるんですが、このミュージアムの対象というか、そういう人たちはきょうのような学者とか研究者ですか。私はいつも思うけど、防災に関してもっと市民に知らしめてやってくれんと、もう皆さんのような研究者や学者はしっかり勉強しておられるけども、その辺を対象にもっと呼びかけてもらって、やってもらいたいと思えますね。私は実はこのセンターで語り部をやっているんです。先ほど、杉本さんがおっしゃってました私は行政出身の語り部で、あのときの体験をできるだけ行政職員に伝えたいと思ってここでやっていますけども、一般市民の皆さんにとって非常に参考になったと言って、喜んで帰ってもらってますけども。ちょっと話は横に行ってしまうんですが、語り継ぐということは、やっぱり幾ら文字であらわしてもちょっとわからないと思えますね。映像と生の声で伝える、もうこれしかないと思うんです。でも、私たちはもうじき死にます。もうあと何年もありません。そういう意味でどう伝えていったらいいかわかりませんが、要は、学者だけの話だけではなくて、市民相手にしっかりと伝えて、あとは勉強を教えてやってほしいです。それだけです。

○石原 ありがとうございます。貴重な御意見をありがとうございます

います。この災害ミュージアム研究塾も、研究者とかそういった人を対象にしているわけではなく、あくまでも一般市民の方を交えて議論したいというものとして、主催者側の意図といたしますか、そういった理念というのがございました。やはり、そういった災害の伝承を伝えるということは、研究者レベルだけの話ではないので、市民を交えてどう伝えていくかということを考える機会にこの場をしたいということも思って、センターのイベントとして位置づけてやったんですけど、結果的には研究者とか関心がある方々、知識が豊富な方々が中心の議論になってしまったり、その点については来年度以降、広報も含めて、どうやったら一般の人が来てくれるのかといった面を考えていけたらなと思います。

ほかには御意見等がありましたら、はい、平林さん、お願いします。

○平林（人と防災未来センター企画運営ディレクター） 平林と申します。今のお話、引き続きというか関連で、僕も思ったんですけど、今回のシリーズではもちろん専門家の、ミュージアムの専門性のある方もいたし、行政系の方もいたし、でも市民寄りの人もいたと思うんですね。いろんな形があることも非常に勉強になりましたし、結局災害というものは大ざっぱに言えば、どんな人にも降りかかることであって、それを学びを伝えているということを考えてときに、誰がやろうとしてもいいというか、誰かやりたいと思う人がやっていくんだというようなことも含めているいろんな人がかかわる場であるということも思いました。今の御意見につながるとは思ったんですけども。だから、すごく一般市民に対してこういうことやるというのは、難しい面があると思うんですけども、しかし、本当にミュージアムをつくらなければという思いがある現場には、必ず一般市民がいるはずで、その人たちがどうやっていくべきかということに、とても重要なことがあるとすごく思いました。今回のシリーズを通して。うちの人防も含めてですけど、何か箱をつくるときにどうしても行政のつくりになって、お金もどれだけかかるのかというようなことが問題にもなるけれど、展示の見てくれのことはいろいろまくいくこともいかないこともあると思うんですけど、その裏に何をやっていかなきゃいけないかという、それはそのやっぱり市民からの発案、発想というのもとても重要であるというのをすごく思ったし、そういう意味では今後この研究塾というのは、専門性のある方にリードしていただくにしても、どうやって市民を巻き込んでいくかということもいつも考えながら、ぜひ続けていただきたいなというふうに思いました。

○石原 まとめて、いい話をありがとうございます。先ほど、平林さんからの御意見もありましたとおり、今後災害ミュージアム研究塾というのを、さらにバージョンアップしてやっていきたいと主催者側は思っているわけなんですけれども、そのときの方針として二つございます。

一つが市民の方か、あるいは研究じゃなくて単に市民活動といたら恐縮ではあるんですけど、やはりそこまでの専門知識を有しない方々でも災害アーカイブに取り組んでいる団体や人というのは神戸の各地で結構おられます。そういった方々をつないで

いって、人と防災未来センター単体として災害の教訓を伝えていくのではなくて、そういった団体、そういった人々をつないでいきながら神戸の震災教訓を伝えていくネットワークをまずつくっていきたいなと考えております。

そして、もう一つが神戸ではなくて、例えばきょうもお越しの長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」ですとか、あるいは東北では今後そういった災害ミュージアム、災害の教訓を伝える施設ができてくるわけなんです。そういった施設、そしてきょうお越しの雲仙普賢岳災害記念館と。そういった全国各地にある災害ミュージアムをつなげながら、全国一斉のそういった施設が集まって災害の教訓を伝える、そして、災害ミュージアムはどうあるべきかということを考える場を来年度以降徐々にではあるんですけど、考えていきたいなと思っております。

主宰者側としてはこういった方針を掲げているわけなんですけど、何かその他御意見、ざっくばらんにありましたら、挙手をお願いします。ないでしょうか。じゃあ定刻4時になりましたので、今回災害ミュージアム研究塾2012のまとめを終わらせていただきます。拙い司会でしたけど、どうもありがとうございました。

(拍手)

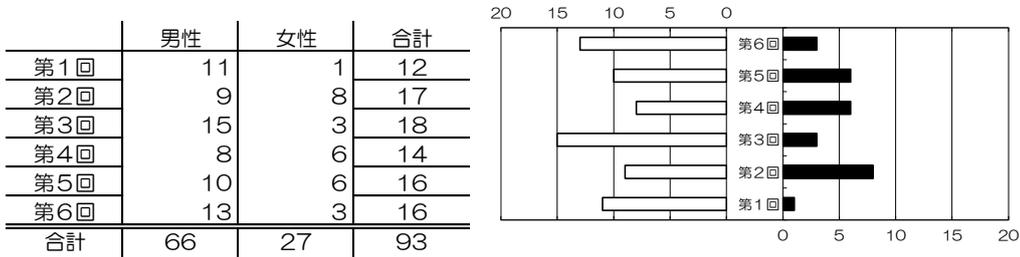
**○司会** これで今年度のプログラムは全て終了いたしました。最初に申し上げましたが、来年度以降もこの活動を続けたいと思いますので、改めて来年度の開催については御案内したいと思います。

# 災害ミュージアム研究塾 2012 参加者の動向と評価

## 1. 災害ミュージアム研究塾 2012 参加者の個人属性

### (1) 参加者の性別

参加者の性別を見ると、すべての回において女性よりも男性の参加者が多いことが伺える。第2回の参加者に関しては、女性と男性の参加者がほぼ同数となった。

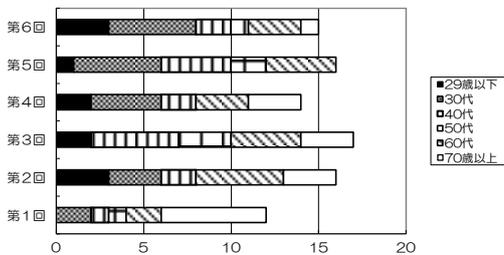


図—1 参加者の性別

### (2) 参加者の年齢

参加者の年齢を見ると、60代の参加者が一番多く、次いで30代という結果になった。第1回に関しては70代以上の参加者がやや多いものの、その他の回については、年齢に偏りはないことが把握できた。

|     | 29歳以下 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70歳以上 | 合計 |
|-----|-------|-----|-----|-----|-----|-------|----|
| 第1回 |       | 2   | 1   | 1   | 2   | 6     | 12 |
| 第2回 | 3     | 3   | 2   |     | 5   | 3     | 16 |
| 第3回 | 2     |     | 5   | 3   | 4   | 3     | 17 |
| 第4回 | 2     | 4   | 2   |     | 3   | 3     | 14 |
| 第5回 | 1     | 5   | 4   | 2   | 4   |       | 16 |
| 第6回 | 3     | 5   | 2   | 1   | 3   | 1     | 15 |
| 合計  | 11    | 19  | 16  | 7   | 21  | 16    | 90 |

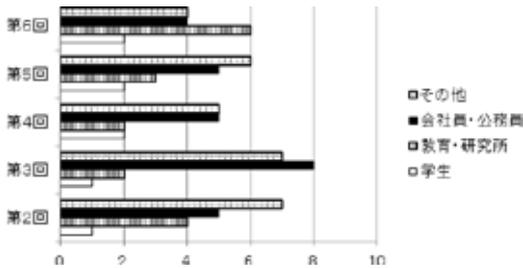


図—2 参加者の年齢

### (3) 参加者の職業

参加者の職業を見ると、その他が一番多く、次いで会社員・公務員という結果になった。会社を定年退職した人や人と防災未来センターの運営ボランティアの参加者が多かったために、その他が一番多くなったと考えられる。

|         | 第2回 | 第3回 | 第4回 | 第5回 | 第6回 | 合計 |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| 学生      | 1   | 1   | 2   | 2   | 2   | 8  |
| 教育・研究所  | 4   | 2   | 2   | 3   | 6   | 17 |
| 会社員・公務員 | 5   | 8   | 5   | 5   | 4   | 27 |
| その他     | 7   | 7   | 5   | 6   | 4   | 29 |
| 合計      | 17  | 18  | 14  | 16  | 16  | 81 |

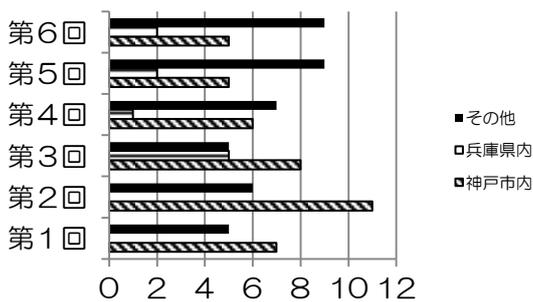


図—3 参加者の職業

### (4) 参加者の居住地

参加者の居住地を見ると、神戸市内が最も多いものの、その他とほとんど差がない結果となった。そのため、神戸市内近辺だけでなく、県外からの参加者が多かったことが把握できる。また、回が進むにつれて、その他の参加者がやや多くなる傾向にあった。

|      | 第1回 | 第2回 | 第3回 | 第4回 | 第5回 | 第6回 | 合計 |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| 神戸市内 | 7   | 11  | 8   | 6   | 5   | 5   | 42 |
| 兵庫県内 | 0   | 0   | 5   | 1   | 2   | 2   | 10 |
| その他  | 5   | 6   | 5   | 7   | 9   | 9   | 41 |
| 合計   | 12  | 17  | 18  | 14  | 16  | 16  | 93 |



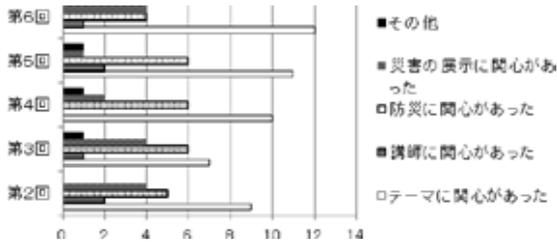
図—4 参加者の居住地

## 2. 災害ミュージアム研究塾 2012 参加者の参加目的

### (1) 参加動機

参加動機を見ると、「テーマに関心があった」が一番多く、約半数の回答者が選んでいる。次いで「防災に関心があった」、「災害の展示に関心があった」と続いていく。

|              | 第2回 | 第3回 | 第4回 | 第5回 | 第6回 | 合計  |
|--------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| テーマに関心があった   | 9   | 7   | 10  | 11  | 12  | 49  |
| 講師に関心があった    | 2   | 1   | 0   | 2   | 1   | 6   |
| 防災に関心があった    | 5   | 6   | 6   | 6   | 4   | 27  |
| 災害の展示に関心があった | 4   | 4   | 2   | 1   | 4   | 15  |
| その他          | 0   | 1   | 1   | 1   | 1   | 4   |
| 合計           | 20  | 19  | 19  | 21  | 22  | 101 |



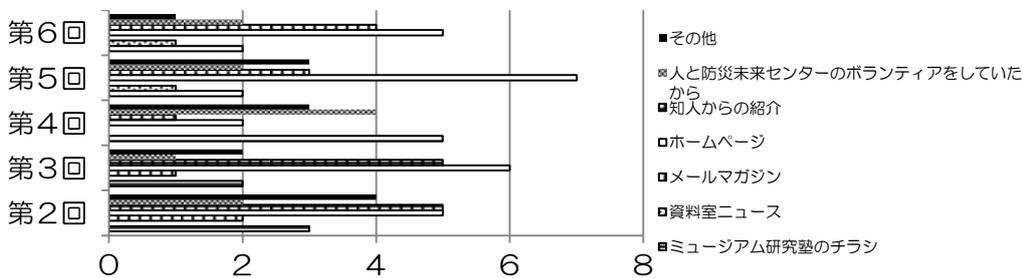
※ 複数回答可

図-5 参加動機

### (2) 参加したきっかけ

参加したきっかけをみると、ホームページが一番多く、次いで知人からの紹介、ミュージアム研究塾のちらしと続いていく。日本災害情報学会や日本災害復興学会等のWEBサイトやメーリングリストに掲載したことで、特に研究者への災害ミュージアム研究塾 2012 の認知につながったものと考えられる。

|                          | 第2回 | 第3回 | 第4回 | 第5回 | 第6回 | 合計 |
|--------------------------|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| ミュージアム研究塾のチラシ            | 3   | 2   | 5   | 2   | 2   | 14 |
| 資料室ニュース                  | 0   | 0   | 0   | 1   | 1   | 2  |
| メールマガジン                  | 2   | 1   | 0   | 0   | 0   | 3  |
| ホームページ                   | 5   | 6   | 2   | 7   | 5   | 25 |
| 知人からの紹介                  | 5   | 5   | 1   | 3   | 4   | 18 |
| 人と防災未来センターのボランティアをしていたから | 2   | 1   | 4   | 2   | 2   | 11 |
| その他                      | 4   | 2   | 3   | 3   | 1   | 13 |
| 合計                       | 21  | 17  | 15  | 18  | 15  | 86 |



※ 複数回答可

図-6 参加したきっかけ

### 3. 参加者からの災害ミュージアム研究塾への意見・感想

#### (1) 第1回の参加者からの意見・感想

第1回の意見・感想を見ると、資料収集・公開や震災資料を通じた情報発信の意義について理解したという趣旨の意見が多くあがっていた。また、資料収集のノウハウなど、より専門的な意見を聞きたかったという意見があがっていた。

- 人防の役割・資料収集、公開の考え方がわかって良かった。今後、東日本の資料収集について考える上での参考になった。
- 真摯に取り組んでおられるご様子が具体的にわかり大変良かったです。大切な体験を長く伝えるよう、さらに積極的な取り組みをお願いします。
- センター資料室のスタッフは、大変よい仕事をしておられます。とても立派だと思います。東日本大震災にボランティアとして行かれた人々から資料をもらったり、聞き取りをして資料化されると良いと思う。
- 1. DRI10周年、このような地道な基礎と情報発信されるのはとても有意義。  
2. 期限をきめて貸出も認めてほしい。
- 後ろから入ろうとしたらピツタリふたがされていた。それで、あきらめて最前列の席へ座ったが、ふと見ると、「講話中の出入りはうしろへお廻り下さい」とあった。うしろへまわっても出入り出来るようにしておいて、チコクした人が後ろからそっと入れるようにした方が良いのでは。活動中のボランティアが、途中から入ってきて、途中で出ていく時に困ってたよ。
- 資料室のスタッフが、お互いに協力して、大変熱心に震災情報の発信に取り組んでおられることがよくわかった。これからも、多くの人々の協力を得て、神戸の震災を風化させぬようにして、減災の大切さを訴え続けてほしい。
- 貴重な情報をありがとうございました。教育学を専門としており、ミュージアム・エデュケーションに関心があります。これまで、災害の記憶に関するミュージアムの日英比較研究に携わりました。・2013年6月後半、阪神・淡路大震災の記憶伝承に関するシンポを日本教育学会で企画中です。
- 一生懸命に語りかけた高野さん。美しく、解り易さで勉強になりました。17年前の様子が走馬灯になって思い出されました。風化させない為、災害の対応処置、防災、安全への知識を拡大しましょう。『防災文化』育成しましょう！
- ふだん陽の当たらない場所に光をあてて見せてくれている、何か不思議な気分で話を聞いていました。ありがとう。
- 資料展示の解説が個人まかせになっている。資料室からの解説がほしい。多くの資料を集め、整理し今後活用しなければ何の役にも立ちません。住宅再建の本を一寸だけ見ましたが、当時のまちづくり協議会の会議録もあり、問題を解決しながら進めたことが記載されておりました。ありがとうございました。
- わかりやすく、参考になるお話でした。資料収集のノウハウが留意点など、もう少し実践的なお話を聞ければなお良かったと思います。

図-7 第1回の参加者からの意見・感想の全文

## (2) 第2回の参加者からの意見・感想

第2回の参加者からの意見・感想を見ると、阪神・淡路大震災とは異なり、地域に点在したメモリアル拠点を巡りながら震災の教訓を伝えることについて興味を持ったという趣旨の意見が多くあがっていた。また、モノ資料の活用方策についてももう少し話を聞きたかったという意見もあがっていた。

- 中越、その後を知ることが出来て良かった。回廊として6か所の拠点を設け、展示しているのが興味を持った。今後は情報を他県に発信されるよう望みます。
- 施設のコンセプトが明確に理解することができましたが、なぜこのタイミングでの開館か、モノ資料よりもiPad活用に注力するのか等、館活動についてのお話をもう少し聞きたかったところです。
- 中越メモリアル回廊のように個々の施設がそれぞれ異なった役割を持っているが、つながりがある、という所は本当に少ないと思うが、より人に伝えるという点で効果が大きいのでは、と感じた。とても興味深かった。
- 内容に関係はありませんが参加者の年齢層が偏っているように感じました。内容に関しては、震災を後世に伝える為の方法を知ることが出来て勉強になりました。
- 意義がありました。
- 第4回以降楽しみにしています。日程の告知おまちしています。
- ここまでの「回廊」をつくられたこと、すばらしいと感じました。「自主防災」の研究をしています。今後、機会がありましたら、住民の方にぜひ話を伺ってみたいと思います。
- 後世に語りつぐ事大切です。未来の被災者への発信が大事。
- 中越地震の現状がスライドでよくわかりました。改めて、涙しました。自分達の阪神も大変だったのでよく乗り越えてこられたと思います。
- このような本格的な災害記憶伝承の試みが中越地方でなされていることをはじめて知りました。非常に興味深く、一度訪れてみたいと強く感じました。
- 良かった
- 大変有意義でした。ありがとうございました。好奇心で見に行っても良いのなら是非行きたいです。今は、観光地帯になっているのなら、今度計画して行きます。
- 後世に残したいと言う気持ちがとてもわかりやすく説明して頂き、同じ経験した者と同じ思いがとても心に響き伝わって来た事。そして大きな「絆」が復興への尊さが早かった事も日本人魂がそうさせた事を改めてタイムスリップしながら思いました。
- 中越の方が明確なコンセプトで運営されているように感じた。
- 町全体で震災の記憶を残すと取り組みの実践例をうかがえて勉強になりました。
- 大変に良かったです。現地担当者による、より具体的な報告として聴かせて頂きました。状況の把握、情報の交換、等々より大きく活用されていく事が目に見える様で、皆さんの英智・努力に感謝です。重ねてよろしく申し上げます。

図－8 第2回の参加者からの意見・感想の全文

### (3) 第3回の参加者からの意見・感想

第3回の参加者からの意見・感想を見ると、多くの方々から文化財レスキューを取り組む意義を理解した趣旨の意見があがっており、参加者の満足度はおおむね高かったように思われる。それ故に、参加者の少なさや時間の短さ等の運営面での課題についての意見もあがっていた。

- 文化財を「助ける」ことからではなく「価値を伝える」ことから行うことはとても難しく、事前に理解してもらうことの大切さを知ることができ、よかった。
- 文化財レスキューは人命救助と同じく、初動、また専門家が来るまでの時間にどう対応することが大切かといった点が印象的であった。今後の東北の展示に大いに期待したいです。
- これまで、当然ながら「人」を中心とした考え方を元に震災を考えてきましたが、今日のような「物」に視点を向けた、同時に「人と想い」も付随する企画は非常に私自身”目からうろこ”のお話でした。貴重なお話、ありがとうございました。
- 文化財を如何に時代に残すか、又、どう残すか、そしてどこまで残すかを知ることが出来た。今後考えていきたい。
- 良かった。資料がほしかった。
- たいへん内容が良い。今まで関心のうすい分野を大いに啓発された。内容はいいとして、時間が短い。30分早くはじめてゆっくり話してうかがいたかった。
- 文化財レスキューの現状がよく分かった。
- 残し、伝えることの必要性を感じました。最後の質疑、語り・伝えるという話はとてもよい話だと思った。
- 現地講師のお話には迫力し感動させられました。本当に良い企画だと思う故に参加者の少ない事が残念ですね！
- 「ふるさとの宝」として文化財レスキューする必要性を理解することができました。東日本大震災からの被災文化財等レスキューネットワーク（広域ネット）による取り組みに期待したい。
- 若月さんの話しは盛りだくさんすぎた。固有名詞はまちがいのないように。

図－9 第3回の参加者からの意見・感想の全文

#### (4) 第4回の参加者からの意見・感想

第4回の参加者からの意見・感想を見ると、震災資料を活用していくことや継続的に震災の記憶を継承していくことの重要性について学んだ趣旨の意見が多数あがっていた。また、継続的に活動していくことの難しさを実感したという意見もあがっていた。

- 表から町を眺めてるだけでは分からない裏側を知ることができました。
- 他地域での取り組みを知りたくて参加しました。資料の収集、展示だけではなく、活用していくこと、何を伝えていくのか、参考になりました。
- 災害の記憶は薄れてしまう。このような取組を継続することが有意義だと考えています。河合さん、高田さんの取り組みに心を動かされました。ご苦勞が多いかと思いますが応援しています。がんばって下さい！
- 「記憶を残し、後世に伝えていく」とひと口に言っても、モチベーションを保ち、継続していくことの難しさを感じました。災害ハネムーン期を過ぎた東北、災害20年を控えた神戸、それぞれに続けていくための転換点を迎えているように思いました。
- 資料収集事業に関わっていた者として、その当時の思い、資料提供して下さった方々の言葉が逆にタイムスリップさせられました。
- 大槌町の新聞に心をうたれた。
- 急なお願いにもかかわらず対応していただきました。ありがとうございました。3.11以降やはり何かが変わったし、変えていかなくてはならないという思いが伝わる内容でした。
- 研究塾の内容をまとめた記録集があったらと思います。
- 震災を伝える現場の生の声、貴重なお話を聞くことができよかったです。

図－10 第4回の参加者からの意見・感想の全文

## (5) 第5回の参加者からの意見・感想

第5回の参加者からの意見・感想を見ると、行政関係の震災資料の保存・活用する意義について理解できたという趣旨の意見が多くあがっていた。また、実際に震災資料に携わっている現場の声を聞いて良かったという趣旨の意見もあがっていた。

- 資料の保存に携わる方、活用する側の方、両方の立場からご意見をお聞きできたのは、とてもよかったですと思います。
- 震災当時の経験がない世代にとって、震災資料は当時の経験を知る為の貴重な資料になると思うので、今後も機会があればお話を聞きたい。
- 行政資料の重要性和守秘義務の問題という点は、今まで意識してきませんでした。
- 区役所の資料室ということで「公文書を扱うプロ」だという言葉が印象に残りました。各々の資料室が得意分野を生かしていくことで、神戸・淡路（兵庫）全体で記録を残していくことができれば良いと思いました。
- 又機会があれば参加させて戴いて、勉強して、今後の参考にしたいと思います。
- 今回は、資料の説明でしたが頂いて帰ってゆっくりと読ませていただきます。防災グッズも少しずつ用意して昨日はお水1本だけ買って帰りました。
- 自治体で実際に活動している方々のお話を聞いて、大変興味深かったです。私も学生時代に歴史学を専攻し、町役場の方に資料を見せていただいた経験がありますので、長田区役所の皆さまに敬意を表したいと思います。
- 資料の保存について、とても勉強になりました。長田区の資料は必ず見に行きたいと思っています。今日まで知りませんでした。
- 「ながた」資料の活用方法を具体的に聞きたかった。防災にどのようにつながっていくのかを。
- 水本先生の研究室の学生さん方がなさっている研究に興味がありました。
- 議論の最初の話が、すぐにパネラーに否定されていることは、最後のまとめで地域の文化を仰っていましたが、司会の勉強不足に感じます。(資料室の歴史や資料や構造に関しての)。その分、聞けることが聞けてないように思います。はっきり言わずすみません。資料室の方と利用される方を呼ばれたことは良かったと思います。
- 今日のように小規模なパネルディスカッションとかインタビュー形式の進行も個々の意見を深く拝聴できたと思います。
- 移動展示は面白いと思った。

図-11 第5回の参加者からの意見・感想の全文

## (6) 第6回の参加者からの意見・感想

第6回の参加者からの意見・感想を見ると、災害ミュージアムの運営や今後の課題について聞いてよかったという趣旨の意見が多くあがっていた。また、今後の震災の記憶の伝え方についての意見もあがっていた。

- 初めて参加させて頂きました。今後も色々と参考にさせていただきます。よろしくお願いします。
- リニューアルを予定されているとの事、内容について小学校高学年～高校生 10名程度に希望を聞き、どういう展示を望むか、又どういうものを伝えていきたいかを或いは自分はこういうものを見たい、知りたいを具体化させてみてはどうでしょう。今の若い人の意見を取り入れていただければ。生き残った者だからこそ伝えていける。伝えていくものがある。生きる術を。
- ミュージアムの運営、これからの悩みをお聞きできたことは貴重な時間だったと思います。サステイナブルな運営方法も、ミュージアムのこれからの考える1つの視点は思います。
- 遅刻してしまい、残念でしたが、最後の総括にはまにあいました。お世話になりました。
- 全く一般市民であり主婦なのですが是非勉強したく思いました。大変よかったです。有難うございました。
- ミュージアムの資料が市民にどれほど伝えられていくのかは今後も関心がある。
- 全体を通した、ひとぼうの意図が伝わってよかったです。
- ジオパーク、ジオミュージアムの取り組みが聞いて良かった。
- 土石流と津波を比較してみると、土石流は津波より質量は大きいですが、速度は遅い。しかし、距離は近いので避難する時間が無い。どちらも波、流体としてとらえると、スパコンの津波シミュレーションが流用出来るかもしれません。土石流については、地震・津波に話題がうつってはって風化されつつあると思う。最悪の場合、地震・津波・土石流が同時に発生するかも。3つまとめて、防災・減災する事を考える。日本は高い技術力に裏付けされた防災・減災先進国です。家電に代表される様に、途上国に仕事を持って行かれている場合では無い。防災は国内産業で雇用も生まれます。高度経済成長パートIIもあるかも知れません。
- 人防の語り部の方のご意見”語り継ぐというのはいくら文字でおこしても伝わらない、肉声によってはじめて伝わるものがある”

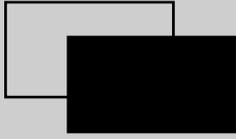
図-12 第6回の参加者からの意見・感想の全文

#### 4 今後の災害ミュージアム研究塾で希望するテーマ

第6回の参加者から今後の災害ミュージアム研究塾で希望するテーマを伺った。その結果、特に多かったテーマとして、原発災害の記憶の伝え方、戦争と災害の記憶の伝え方の比較、噴火や土砂災害等の地震や津波・噴火災害以外の記憶の伝え方、防災に関わる内容、震災の記憶の伝え方、東日本大震災の被災地で取り組まれている事例等があがっていた。

- 原発への対応
- 内容に関する希望ではありませんが、今回の一連の研究塾に参加されている人の多くが語り部さんや人防に深くかかわりを持つ人、兵庫南部地震で実際に被災されている、“身内の人”が多いように感じます。とても興味深い内容が多いので、ぜひ市民・一般など、広くから人が集まればより効果的かと思いました。
- 災害、防災に関心の薄い方をいかに巻き込むか、ということで工夫されていることを教えていただきたいです。
- 東北に出張して開催するようなことはどうでしょうか。来年度以降も続けて頂きたいと思います。
- 今後起りうる巨大地震に対し、この国難に対する備え、生き残り方法について
- 今後起りうる地震に対しての各一人一人に対しての心がまえなどのテーマを望みます。
- 広島原爆祈念ミュージアム
- 「過去の経験を伝える」という視点に加えて、「今後により効果的に、多くの人にくり返さないために活かしてもらうためにしていること」という視点のものを1つ話を聞けたらと思う。
- 海外ではあるが、スミソニア博物館など大展示館のコンセプトなど伺える機会があるとうれしい。
- 関俊明氏。浅間山噴火災害に関するフィールドミュージアムについて。
- 家具固定、耐震化推進に関わる内容
- ・災害資料の利活用について・平日しか開催していない震災資料室の見学ツアー（特別に開室していただく）
- 夜廻り先生の水谷修さんの教え子が、生徒の大多数を津波で亡くした大川小学校の先生であったそうだ。その「ナオコ」と言う背値士やその時亡くなった先生、生徒の最後を語って、その後、消息をたった先生が、ご遺族に何を語ったか、それを知る方法があれば是非聞いてみたい。
- 震災を伝える活動について参考になりました。今後のボランティア活動に活かしたい
- できれば前回同様東日本での話を聞きたいです。
- 災害を乗り越えた記録が、生き残った方の証言、災害の復興の記録は大変重要なものと思いますが、この研究塾の質疑でご意見にあったような「うまくいかなかったこと、課題」や、生き残れなかった人のことなど、成功体験ばかりではないことをどうやって伝えていくか、一歩ふみ込んだ議論もお聞きしたいと思います。
- 阪神地区の津波のシミュレーションと被災予測及防災について。
- センターの設置10年をこえた、資料室と研究の現在の取り組み
- 広島原爆ドーム、平和記念資料館
- 災害、防災をテーマとしたミュージアムは、目新しいが継続することが難しく、防災の日が、何か災害のあとに注目され、学びたいと思う人が増えることも事実です。地域の中で、災害伝承が、防災学習だけではなく、地域の生活がいろいろな機能を複合させ、みんなでふだんから利用できるようなあり方も考えてみたいですね。
- 今後の「災害文化として伝承していくための企画」を期待しています。お世話になりました。
- 奈良県南部で発生した紀伊半島大水害のアーカイブ資料等のテーマなど
- おそらくですが、①阪神・淡路に関して、ひとぼうと他施設・団体、②他地域・分野、のようにシリーズ化すると、足下と俯瞰ができるのではないのでしょうか。
- 議論の中に出てた土石流の脅威でいえば、2011年に被災した十津川などの取り組みがあれば聞いてみたい。
- 東日本大震災の被災地でこれまでに取り上げられた地域・団体以外での災害記録の伝承の取り組みを紹介していただきたい。

図－13 参加者からの今後の災害ミュージアム研究塾で希望するテーマ



## 第3章

災害の記憶・記録の保存と継承に関する論考



# 記憶のメディアとしての災害ミュージアム

阪本真由美 (人と防災未来センター・主任研究員)

## 1. はじめに

2011年3月11日に起こった東日本大震災は、死者15,833名、行方不明者2,671名(2013年6月25日時点警察庁による)という大規模な被害をもたらした。地震とそれによる巨大な津波は、多くの命を奪い、街を破壊し、人々がそれまで培ってきた暮らしを一変させた。東日本大震災は、まさに地域の歴史・文化をかえてしまうようなできごとであった。

そのようなできごとを目の前にした地域では、今回の災害の痕跡を刻むモノを保存するのか、という点をめぐり議論がみられる。例えば、宮城県南三陸町では、津波により全壊し、赤い鉄筋コンクリートがむき出しとなった3階建ての防災庁舎を保存するのが議論になった。この防災庁舎からは、役場職員が必死に広域防災無線で住民に避難を呼びかけた。そして、庁舎屋上に避難していた人41名が犠牲となった。当初、町はこの防災庁舎を保存する意向を示したものの、遺族から「つらい記憶がよみがえる」との訴えが相次いだため<sup>(1)</sup>、保存を断念した。しかし、その後も遺族側から建物の保存をめぐり議論したいとの要望が出され<sup>(2)</sup>、結論はだされていない。岩手県大槌町では、民宿の上ののりあげられた観光遊覧船「はまゆり」の保存が議論になった<sup>(3)</sup>。はまゆりは、2011年5月に撤去されたが、その後、住民から保存の声が上がり、町は復元の方針を示している<sup>(4)</sup>。

災害を経験した人のなかには、一人ひとり異なる災害の記憶がある。その記憶を忘れてしまいたい人、想い出すことにより苦痛を感じる人がある。その一方で、災害の記憶をとどめ、伝えなければならないと考える人もいる。災害を経験した社会は、災害の記憶を忘却すべきなのか、それとも、とどめるべきなのか。災害の記憶継承には常にこのような葛藤がつきまとう。

地理・気候的な条件から自然災害が多発する日本では、古来より、地名・記念碑・語り・絵・記録などに地域で起こった災害というできごとを刻み、それを通して記憶を伝えるという試みが行われてきた。自然災害に関する

多様なモノ資料(一次資料)を収集・保存するとともに、展示を通してそれを伝える、災害を主題としたミュージアム(以下、災害ミュージアム)もその一つである。古いものとしては、1923年に東京を襲った関東大震災の「復興記念館」(1931年開設)が、ここ20年ほど振り返っても、1990年～1995年の雲仙岳の噴火を伝える「雲仙岳災害記念館」(2000年開設)、1993年の北海道南西沖地震を伝える「奥尻島津波館」(2001年開設)、1995年の阪神・淡路大震災を伝える「人と防災未来センター」(2002年開設)「野島断層保存館」(1998年開設)、2004年の新潟県中越地震を伝える「中越メモリアル回廊」(2011年開設)など、多数の災害ミュージアムが被災地に設置されている。

これらの災害ミュージアムには、災害により破壊された建物の断片、災害が起こったその瞬間で止まった時計、避難所でのやりとりを記したノートなど、災害に関する記憶をとどめる一次資料が収集・保存・展示されている。熱により溶けた硬貨、壊れた時計、瓦礫など、一次資料の多くは、復興過程において捨てられてしまいそうなものであり、美術館や博物館などで行われる社会的価値が高い資料の展示とは性質が異なる。しかしながら、これらの資料は、災害が起こったその時に人々がどこで何をしていたのか、災害が人々の暮らしにどのような影響を及ぼしたのかなど語りかけてくる。すなわち、災害ミュージアムでは、災害の記憶が潜む一次資料を展示として再構築することで、記憶を想起させ、それにより、災害というできごとを伝えようとする試みがなされている。このような、一次資料を記憶想起のための媒体(メディア)として位置づけているミュージアムを、本論では「記憶のミュージアム」とする。そして、記憶のミュージアムとしての災害ミュージアムに着目し、災害ミュージアムを通じた記憶の想起と継承について検討する。

本論の構成であるが、第2章では、記憶のミュージアムの特性を既往研究から整理する。第3章では、災害が発生してから18年を迎える阪神・淡路大震災の被災地

神戸に設置された災害ミュージアム「人と防災未来センター」に着目し、センター設置に至る経緯を整理するとともに、震災から18年を迎え、センターが地域の災害の記憶の継承にどのような役割を果たしているのかについて地域の小中学校からのヒアリングを通して把握する。以上の議論をふまえ、災害のミュージアムを通じた記憶の継承のあり方を検討する。

## 2. 記憶のミュージアムとしての災害ミュージアム

### (1) 記憶のミュージアム

前章において、災害ミュージアムでは、復興過程において捨てられてしまいそうな一次資料で展示が構成されていることに触れた。アメリカのニューヨークにあるブルックリン美術館の館長であったキャメロンは、「ミュージアム、寺院かフォーラムか (The Museum, a Temple or the Forum)」という論文のなかで、素晴らしくそして価値があると考えられるものを納めたミュージアムを「寺院」と表現している<sup>2)</sup>。ミュージアムで展示される資料には多様なものがあるが、キャメロンのいう社会的に評価が定まったものを展示する、あるいは、ミュージアムに収蔵・展示されることにより、一次資料に対する社会的な評価が定められるという傾向は一般化されている<sup>1)</sup>。災害ミュージアムは、このような至宝を展示し、それを祀り、あがめる、というミュージアムとは性質が異なる。これは、災害ミュージアムが、一次資料そのものよりも、一次資料を通して想起される記憶に重点をおいていることによる。

議論に先駆け、本論における記憶の概念を整理しておく。記憶とは、あるできごとを経験した個人の内面にあるものである。同じできごとを経験した複数の個人が存在すると、その個人の間で共通の記憶、即ち「集合的記憶」が形成される<sup>3)</sup>。個人は、学校、職場、趣味のサークルなど同時に複数の集団に属していることから、その属する集団ごとに共通の記憶が存在する。集合的記憶は、複数の集団に属する個人の人々に共通の記憶であり、「個人的記憶」の集積ともいえる。

自然災害は、同時に多数の集団を横断するできごとである。例えば、1995年1月17日に起こった阪神・淡路

大震災であれば、地震が起こったその時に神戸市にいた160万人の人、神戸にいなかったにせよ揺れを感じた人、あるいは、テレビでそのできごとを見た人に、横断的に阪神・淡路大震災に関する記憶が残されている。そして、その記憶は一人ひとり異なる多様なものである。

記憶は、時間の経過とともに曖昧になり、いつしか忘却される。記憶を忘却させずにとどめるために、個人に属する記憶を集積する、文章、写真、記念碑、記念日、記念式典、史料、映像、博物館などの空間的あるいは時間的な空間が創出される。このような空間をフランスの歴史学者ノラは「記憶の場」としている<sup>4)</sup>。記憶の場には、「伝承」のように半ば自発的に創出されるものもあるが、多くの場合は記憶を継承しようとする人により意図的に創られる。また、継承しようとする記憶は必ずしも立派な素晴らしい記憶とは限らない。社会的弱者、戦争、集団虐殺、環境破壊、災害など、ネガティブな記憶が主題となっているケースもみられる。記憶は、「記憶の場」に刻まれることにより、時空間を超えて想起される<sup>4)</sup>。記憶の場の重要性は、そこが記憶を刻む場であることだけではなく、そこを通して記憶の想起が促されることにある。

記憶のミュージアムは記憶の場であり、できごとの記憶を刻む一次資料を保存し、それを展示として再構築することにより想起を促す。パーモンティエは、「過去を現在化する」機関としてミュージアムを位置付けているように<sup>1)</sup>、想起を通して過去の記憶は現在、そして、未来へと動的に伝えられる。

### (2) ミュージアムにおける記憶の固定化

記憶のミュージアムでは、できごとの記憶をとどめる一次資料を収集・保存するとともに、それを展示として再構築することにより、意図的にできごとについての想起を促す<sup>5)</sup>。ミュージアムによる意図的な工夫は、第一に、記憶をとどめるために時を固定化すること、第二に、展示を通して記憶の想起を促すことにみられる。本節では、時を固定化するという点に着目する。

記憶のミュージアムでは、記憶をとどめるために、多様な資料のなかから特定の資料を選定し、それを展示として再構築する。資料を選定するという事は、集合的記憶のもつ多様性を否定することになりかねない。この

点について、ノラは、記憶の場は、記憶を継承するという目的で意図的に創りだされるが、記憶の場を創り出す集団が、民族・国家というようなより大きなものになるほど、そこに刻まれる記憶は、抽象的なものとなり、自然なもの、あるいは、多様なもの、というような記憶の特質は薄れていくと指摘している<sup>4)</sup>。また、なかには記憶の選定過程において、忘却されてしまう記憶も、保存すること自体が忌避され、それにより欠如してしまう記憶もある<sup>6)</sup>。アルヴァクスのいう集合的記憶は、過去からの「連続的な思考の流れ」であり「何ら人為的なものを持たない」という点と、「たくさんある」という点で歴史とは異なるものである<sup>3)</sup>。記憶の多様性が否定されると、それは、もはや想起の可能性を秘めた記憶ではなく、歴史と化す可能性がある。

ここで重要になるのが、記憶の場に「変化」の余地があるのかという点である。ノラは「記憶の場が存在するのは、その意味がたえず変わり、その枝が予期できないかたちで茂るなかで、変化に対して適応力をもっているからなのである。また、それゆえにこそ記憶の場は情熱を呼ぶのである」<sup>4)</sup>と述べている。キャメロンは、至宝を展示しそれをあがめるいわば「寺院」としてのミュージアムに対し、「フォーラム」としてのミュージアムという概念を提示している<sup>2)</sup>。芸術におけるもっとも革新的な改革、歴史・社会・人・世界に対する最も矛盾した解釈を受け入れ、そこから新たな議論がはじまる場所が「フォーラム」である。

つまり、記憶のミュージアムでは、時を固定化するために資料を選定し、それを展示として再構築するが、そこに変化の余地があり、新たな議論を巻き起こす場であるならば、その場は、時空間を超えて新たな記憶を想起させる可能性を秘めている。

### (3) 記憶の想起のための試み

記憶のミュージアムによる第二の工夫は、展示を通して記憶の想起を促し、それにより記憶を伝えるという点である。ここでいう想起には、大きく二つのタイプがある。ひとつは、そのできごとを経験した人が、展示資料を通して想起する記憶であり（想起）、もうひとつは、できごとを実際に経験していないけれども、展示を通してできごとを追体験しそれにより想起される記憶（追想）

である。

展示を通した記憶の想起について、アメリカのインディアナポリス子ども博物館で行われた“Mysteries in History”という展示に関し橋本が興味深い考察を行っている<sup>7)</sup>。この展示では、過去の記憶を伝える一次資料を展示するのではなく、過去を知るための方法が提示され、それを、訪問者がたどることにより歴史を知ろうという試みがなされる。例えば、恐竜の骨が隠された砂場で砂遊びをすると、恐竜の骨が顔をのぞかせる。少し古めかしい部屋が再現され、ある家族の生活を一人称で語るナレーションが流されている。訪問者は、子どもと父母、祖父母という家族連れである。古めかしい部屋にならべられている日用品は、子どもにとっては見慣れないものであるが、父母や祖父母にとっては以前の生活を思いださせる懐かしいものばかりであり、訪問者は、展示物を指さしながら自分の家族の歴史について語りはじめる。橋本は、「ここで、子どもは現在に立脚しながらも、過去を想起しており、そのような過去によってこそ自分たちが『いま、ここ』にいることを意識しているのである」と述べている<sup>7)</sup>。

ミュージアムにおける記憶の展示に着目した「人びとの記憶と博物館展示」と題する布谷と安田の対談において、安田は、思想史研究で用いられる「レトロスペクティブ」とその対になる「プロスペクティブ」という言葉を用いて記憶の展示について述べている<sup>8)</sup>。レトロスペクティブは、「今から振り返ってみればこう見える」ということであり、プロスペクティブとは、「その時、その時点に立ってみる」ということである。想起のための展示に求められるのは、過去に起こった災害というできごとを振り返るのではなく、そのできごとが起こったそのときに自分がたっているような展示である。

例えば、阪神・淡路大震災というできごとが再構築された空間に立った時に、阪神・淡路大震災を経験した人であれば、展示を通してできごとが起こったまさにその瞬間に戻りそのできごとに関する記憶を想起する。それに対し、そのできごとを経験していない人であれば、展示を通してできごとを追体験し、それにより災害という記憶を自らの記憶として追想する。

ただし、記憶の想起を促すには、資料を陳列するだけでは難しい。例えば、前述のインディアナポリス博物館

であれば、過去を知るための方法論を提示し、参加型の展示を行うことにより、来館者に「歴史とは何か？」を問いかけている<sup>7)</sup>。ロサンゼルス・サウスウエスト・ミュージウムに設置された「カリフォルニアの人びと」というギャラリーでは、ガラスケースに乳児を入れて運ぶ網かごが展示され、その同じガラスケースの中で、異なるパネルの上にゴールド・ラッシュ時のピストル、金の鍋、金の定規、火薬入れなどの物品が展示されている<sup>9)</sup>。との展示を見たアメリカン・インディアンは、展示に対し嫌悪感を示す。なぜなら、籠はアメリカン・インディアンにとっては、乳幼児のための祈りを込めて作られた、儀礼と家族との結びつきを表象するものである。その一方で、ゴールド・ラッシュの物品は、ゴールド・ラッシュと時を同じくした先住民の大量殺戮を表象するものである。つまり、記憶を伝える一次資料が、その記憶の担い手であるアメリカン・インディアンの視点から再構築されていないわけである。また、一次資料に潜む記憶は現在に至るまで共有されている。それゆえに、展示に対し嫌悪感が想起される。

クレインは、「ミュージアムは、主体性と客観性の衝突を喚起させる場である。私的なものと公的なもの、個人的なものとの衝突は、ミュージアムと記憶の間に新しい、きわめてエネルギーに満ちた関係性を創出するのである」と述べている<sup>5)</sup>。単に展示された一次資料をながめるのではなく、展示資料とのコミュニケーションを通して感じる矛盾・葛藤・不快感が記憶の想起・追想に結びつくのである。

以上の議論を整理すると、災害のミュージアムが記憶のミュージアムとして機能させるためには、災害に関する多様な記憶を伝える一次資料を展示として再構築し、そこを、想起の空間とすることである。ただし、その空間は、変化の余地があり、何らかの感情を生み出すものでなければならない。その空間と対峙し、展示を通して多様な記憶が想起されることにより、記憶は継承される。果たして日本に多数ある災害ミュージアムは、あるいは、本論が着目する人と防災未来センターはそのような記憶のミュージアムとして機能しているのだろうか。次章で詳細に検討する。

### 3. 阪神・淡路大震災の記憶

#### (1) 阪神・淡路大震災の記憶の収集・保存

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災は、第二次世界大戦後に近代都市を地震が直撃した初めての事例であった。地震による死者は6,433人に上り、建物、道路、電気、水道など日常生活を支えるインフラが破壊された。被災後の生活、そして、災害からの復旧・復興は困難を極めた。

震災直後の混乱した状況において、被災した人々のなかには、災害の記憶をとどめる必要性を訴える人がいた。「どんなささいな記憶でも、いつかはきっと役にたつかもれない」と考えた高森一徳氏は、震災からわずか1カ月が経過した1995年2月中旬に手記の公募を始めた<sup>10)</sup>。公募開始からわずか1カ月の間に集められた手記は240編に上りその後も増え続けた。手記には、亡くなった人に関する話もあれば、生きていることに関する話、地震とその後の避難所の生活の話など様々な人の体験がつつられていた。

日本各地から神戸に支援のために集まったボランティアグループを調整していた、阪神大震災 NGO 救援連絡会は、1995年に震災・活動記録室（活動記録室）を設置し、自分たちの活動の記録収集に取り組んだ<sup>11)</sup>。支援に訪れたボランティアの中に1991年の雲仙・普賢岳火山災害での救援経験があるボランティアがおり、同災害での経験をもとに記憶の蓄積が重要だと提言したことによる。神戸大学附属図書館は、1995年4月に震災に関する資料の網羅的な収集を開始した<sup>12)</sup>。網羅的に収集された資料とは、刊行されている図書や雑誌だけではなく、チラシ、ポスター、レジュメ、ニュースレター、写真、ビデオ、録音など震災後に人々が生み出した全ての資料のことをいう。同様の活動は兵庫県によっても行われた。21世紀ひょうご創造協会は、本、パンフレット、個人のメモ、体験記、ビラ、チラシ、避難所での壁新聞、ノート、集会の記録ノート、メモなどを収集した<sup>11)</sup>。これらの活動は、いずれも被災者個々人の記憶をとどめる一次資料を収集・保存するものであった。

兵庫県は、これらの一次資料を展示として再構築することにより災害について国内外に伝えるという構想を震災直後から持っていた。1999年12月の補正予算により急きょ設置が決定し、その2年後の2002年4月に開

設されたのが「人と防災未来センター」である。

人と防災未来センターは、阪神・淡路大震災の記憶を語り継ぐことを目的に設置されたものの、その設置を巡っては様々な議論がみられた<sup>13)</sup>。ここでは、大きくセンター設置をめぐる設置に携わった関係者の議論と、センターの名称・展示に対する住民の議論を整理しておく。

まず、センター設置に携わった関係者の議論を整理する。センターの設置に際しては、阪神・淡路大震災の記憶を再現するという点が重視された<sup>14)</sup>。センターの建物外観は、水盤にガラスのキューブが浮いたデザインとなっている。ガラスのキューブは常に変化する結晶をイメージしており、ガラス面の中央から外に向かって広がるように段が設けられた。また、ガラスのキューブが水盤に浮かんでいるのは、大震災時に水に困ったことを象徴する。四面をガラスの被膜で覆い、周囲の風景を写しこむことで自身の姿を消し、一体となって助け合うことの重要性を表現した。また、水盤には、地震が起こった時間を記した記念碑がたてられ、被災者名簿が納められた。



(写真1) 人と防災未来センター外観 (著者撮影)

設置に際して議論となったのが、展示のなかに、地震を再現する映像を入れるか、という点である。被災地の有識者から構成される設置検討委員会の委員からは、「疑似とはいえ二度とあのような体験をしたくない」という意見がだされた。また、主管省庁である国土庁も否定的であった。ところが、2000年に行われたメモリアルセンター設置にかかる公開フォーラムで会場にいた参加者から「私は語り部をしている。子供たちにどんなに言葉を尽くしても、おそらく現実としては理解できて

いないだろう。あの揺れを体験させることが重要である。そのあと私たちの語ることを聞いてくれるならば、確かな教訓を必ず身につけてくれるはず」との発言がだされた。この発言をきっかけに、地震を再現する映像を展示に含めるという決断がなされた。

被災した市民から提供された一次資料により構成される展示室(3階)についても課題が浮上した。センター開設に際し、一次資料約17点、二次資料約3万4千点が収集され、これらの資料から選定された約800点が3階のフロアの壁面に展示されることになった。多数の市民から提供された資料であることを示すために、展示資料は多数の写真とともに展示することになった。しかしながら、資料収集時に、これらの資料の著作権・使用許諾などの確認を行っていなかったために、許諾をとるための作業が膨大なものとなった。



(写真2) 災害一次資料の展示 (著者撮影)

このような議論を経てセンターは設置されたが、開設されると、地域住民からさまざまな反発がよせられた。

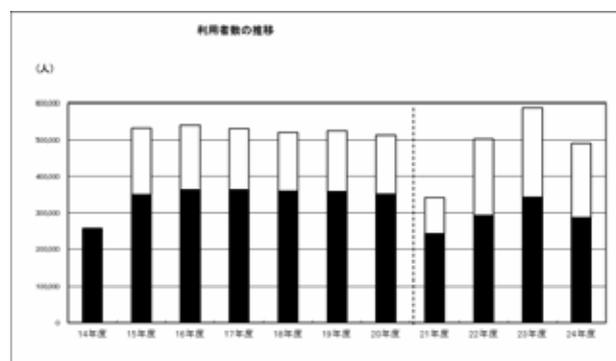
第一に、センターの名称を巡ってである。センターは当初、「阪神・淡路大震災メモリアルセンター」として建設がすすめられた。ところが、メモリアルセンターという名称に対して、予算を総括する大蔵省より「阪神・淡路大震災メモリアルセンターの名称だと地域が限定され、国費で整備する施設にふさわしくない。阪神・淡路大震災に限らず、トルコの北西部大地震や台湾大地震など外国の災害も対象に事業を行う施設であり国費を補助金として出すことになったことと矛盾する」との指摘が出された<sup>15)</sup>。名称は、最終的に公募され、県内外からの7,612通の応募のなかから決定された。人の命の大切さや生きることの喜びを「人」に集約し、「防災」と

いう阪神・淡路大震災を経験して認識された社会的合意に、さらに自然や社会な環境を創造するという新たな価値を付加して、これに関する様々な情報を未来へ発信するという意味が込められたのである<sup>13)</sup>。ところが、この名称に対して、市民からの強い反発が寄せられた。「当初、この施設は『阪神大震災メモリアルセンター』という名前で建設が進んでいた。だが、それがいざフタを開けてみると『防災』と『未来』を冠したネーミングとなっていた<sup>14)</sup>。「メモリアルには、記憶する、記念するという意味がある。仮称で推進された計画から、震災の記憶と記録を構成に伝えるための施設だと普通に解釈してきたが、正式名称から防災が突出し強化されたことは否めない<sup>15)</sup>。震災の記憶を「メモリアル」として伝えるものか、それを「防災」として伝えるのかで、市民のセンターに対する見解は大きく異なっていたのである。さらにいうならば、メモリアルとして伝えることに住民は期待を寄せていたにもかかわらず、それが防災に集約されたことに対する反発であった。

第二に、センターにおける記憶の展示についてである。「震災というできごとのすべてを展示しているようでありながら、実際には震災のごく一面を一方的に伝えるものでしかなかった」「震災一時資料の展示が総合的には『教訓』としてしか位置付けられていない<sup>16)</sup>との指摘がみられた。なぜ、記憶が「教訓としてしか位置付けられていない」と捉えられているのだろうか。3階フロアにおける記憶の展示から判断すると、以下の理由が考えられる。記憶の展示が行われている3階フロアは、4階で地震の映像、地震直後の街並みのジオラマ、復興していく町と少女の映像というように地震をはじめとする一連のストーリーが完結した後に訪れる。そのため4階フロアで映像を通して見たイメージを補完するものとして記憶の展示が位置付けられてしまう。また、3階の記憶を伝える資料が「避難生活」「ボランティア」というようなタイトルの下で、つまり、特定のストーリーの下に集約され、再構成された写真とともに展示されている点である。つまり、展示が、記憶の担い手である市民の視点からは再構築されておらず、かつ災害という出

来事の全体を浮かび上がらすものとしても位置付けられていない。

以上に述べた背景のもと、センターが開設して10年が経過した。図1はセンターへの来館者数(団体)を示したものであるが、来館者数は開館以来年間50万人以上みられる。図中の点線は、東館の展示改修により来館者数のカウント方法が変更されたことを示す。平成21年は、鳥インフルエンザの流行により、来館者数が一旦減少したが、その後も一定の人数の来館がみられる。特に、2011年3月11日の東日本大震災は、災害に対する関心を幅広く集め、設置以来最大の来館者数となった。また、来館者の47%は、小中学生であり、小中学生の修学旅行・研修先となっている。



(図1) 来館者の推移 (出所：人と防災未来センター)

#### 4. 地域の学校と人と防災未来センター

人と防災未来センターが設置されてから10年が、阪神・淡路大震災からは18年が経過した。現在、センターは、被災地神戸の小中学生にセンターはどのように活用されているのであろうか。いつごろから活用されているのであろうか。活用において何らかの葛藤はみられなかったのであろうか。地域の小中学校が、人と防災未来センターをどのように利用しているのか把握するために、人と防災未来センターの近くに位置する小中学校長にヒアリングを行った。

人と防災未来センターがある「HAT (Happy Active Town) 神戸」地域は、神戸市の中心部の三宮の東に隣接するエリアであり、阪神・淡路大震災後の復興過程において新しく整備された。震災で住まいを失った人のための復興公営住宅の建設とともに、神戸市立なぎさ小学校と神戸市立渚中学校が新設された。開設当初は、復興公営住宅の入居者の子供が多く就学していたが、その後、エリアに民間のマンション開発が進んだことから、現在では、被災していない家庭の子供も多く就学している。

(神戸市立なぎさ小学校)

なぎさ小学校では、開設当初より防災教育を重視しており、小学校1年～6年まで、年間を通じて防災教育を行っている。防災教育は、理科、社会などの単元授業の中に組み込まれているものと、総合学習の時間を活用しているものがある。人と防災未来センターとのかわりには、小学校4年～6年にみられる。小学校4年生では、人と防災未来センター研究員による講義、小学校5年生では、センター訪問、小学校6年では、センター研究員による講義、兵庫安全の日の行事への参加が行われている。特に1月17日前後には、阪神・淡路大震災の記憶を取り出して、忘れてはならないと伝えている。ただし、低学年は、映像に対して恐怖感を抱く可能性があること、歴史的な背景と映像とがつながるくらいの時期がよいと考え、小学校5年生で人と防災未来センターを訪問している。

人と防災未来センターへの訪問は、人と防災未来センター設置当初から行っている。ただし、震災直後は、児童の心理的事情に配慮して授業を行っていた。児童のなかには、家が壊れた子、おじいさんをなくした子などがいた。また、子供たちのみならず、教師のなかにも、被災した教師がいた。センターを訪問すると、当時の記憶と映像とが重なることが多々としてあった。そのため、これらの問題に自らが向き合えるようになってからでよいと判断し、映像については、観るのは生徒の自由にしていた。

震災から18年が経って、生徒・保護者のみならず、若い教員も震災を知らない世代になっている。若い教員は、阪神・淡路大震災についても断片的な記憶しかない。津波や東日本大震災の方が記憶としては新しい。児童のみならず、教師も一緒に勉強する必要があるため、授業を実施する前に人防に行くなど活用させてもらっている。

なぎさ小学校、渚中学校ともに、毎年1月17日に人

(神戸市立渚中学校)

渚中学校は、開校当初は生徒が25名だったが、現在は472名の生徒がいる。また、開校当初は生徒の大部分が復興住宅に住む被災者であったが、現在、復興住宅に住む生徒数はそれほど多くはない。開校当初より隣接する兵庫県立美術館とは連携した行事を行ってきた。その一方で、人と防災未来センターには、あえて行っていない。復興の街に位置することもあり、防災教育には力を入れている。1月17日の兵庫安全の日のイベントには参加しており、人と防災未来センターを訪れ、センターの前で歌を歌っている。1月17日は、朝のメモリアルウォーク、震災行事への参加、校長講話、避難訓練を行っている。しかし、センターの中には入っていない。

開校直後より、被災した生徒一人ひとりに配慮し、手厚い指導を実施してきた。授業の開始時と終了時にチャイムを鳴らさないのもひとつの取り組みである。学校開校時の生徒は、全員が被災者であり、家族を亡くした子、自宅が全壊した子がいた。激しい揺れを経験したためか、突然の音にパニックになる子がいたため、チャイムを廃止した。それ以来、ノーチャイムの伝統を継続している。また、保護者に対するアンケートを実施する際にも、震災を思い起こさせるような言葉は使わないように配慮している。授業のなかで、震災の話を書くという試みは行っている。防災教育自体を否定しているわけではない。学校内の防災設備も充実しており、避難所として活用できるように畳敷きの部屋もある。ただし、こういう悲惨なことがあったということ、あえて見せるのがよいのかという点はよくわからない。18年が経過し、現在の生徒は震災を経験していない。しかし、保護者のことを考えると、18年もたったという人と、18年たとうと変わらない人もいる。災害による教訓を活かす、ということは重要。とはいえ、悲惨な現場、ショッキングな現場を地域の人には目のあたりにしている。実際にそれを体験した人にそれを伝える必要があるのだろうか。家族には、親もいれば親戚もいる。悲惨な光景を子供が見たとして、それを親や家族にどう伝えるのか。子供の心の問題と親の心の問題がある。教育的な観点と保護者との間の葛藤がある。

と防災未来センターにて開催される阪神・淡路大震災の震災追悼式典には、地域を代表して参加し、震災に関する歌である「幸せ運べるように」を合唱している。なぎさ小学校と渚中学校の人と防災未来センター活用状況をみると、震災から18年が経過しても、人と防災未来センターへの訪問をあえて行っていない渚中学校に対して、なぎさ小学校では人と防災未来センターに関する授業を授業カリキュラムに取り入れているというように、状況は全く異なっていた。

人と防災未来センターについては、「記憶と映像とが重なる」「悲惨な現場」「ショッキングな現場」など、阪神・淡路大震災の記憶を想起させる映像・展示があると認識されていた。センターの展示は記憶を想起させるという意味では機能しているといえる。ただし、それが故に、センター訪問を通し、災害を経験したこども・保護者・教師のなかで災害の記憶が想起され、心理的苦痛をもたらされるという課題もある。災害というできごとを経験した人の記憶の想起は、時間の経過により解消される性質のものではない。

なぎさ小学校へのヒアリングからは、防災教育の対象が、震災を知らない世代へと移りつつあることも明らかである。18年という時の流れのなかで、こどものみならず、保護者、教師ともに災害を知らない世代になっている。今のこどもたちにとって、阪神・淡路大震災は、本や学校の授業で学ぶ、あるいは、両親からの話などを通して知るできごと、いわば「歴史」の中のできごとであり、そのできごとが起こった瞬間を（例えそれがテレビなどを通してであったにせよ）自らの身をもって体験した東日本大震災に対する記憶とは異なる。これらの世代に対して、展示は阪神・淡路大震災というできごとの追想を促す場として活用されている。人と防災未来センターは、阪神・淡路大震災の災害像を提供する役割を果たしている。人と防災未来センターは、誰でも訪れることができる、つまりアクセスが自由である。小学生であっても、教員であっても、阪神・淡路大震災について知りたい人が、知りたいときに気軽に訪れることができ、映像、展示、語りなどを通して知ることができる。このようなアクセスの自由さも、災害に関する記憶継承に貢献している。

## 5. 「おわりに」に代えて

本論では、記憶のメディアとしての災害ミュージアムに着目し、災害ミュージアムを通じた記憶の想起について、人と防災未来センターの事例から検討した。

災害の記憶継承の重要性が認識される一方で、記憶のメディアとしての災害ミュージアムは、災害像を提示し、記憶の想起を促すが故に、災害を経験した人には苦痛をもたらす。それは、時が経過したとしても解消される問題ではない。その一方で、時の経過とともに、災害を知らない世代は着実に増えていく。この新しい世代は、記憶を追想することによってのみ、災害というものを記憶に刻むことができる。私たちが、災害の記憶を伝えようとするのは、過去を悼むためなのだろうか。それとも、災害を知らない世代が同じ失敗を繰り返さないためなのだろうか。もし、後者であるとするならば、災害ミュージアムは、記憶継承をめぐる葛藤と対峙しつつも、記憶を伝えるという役割を担わなければならない。

人と防災未来センターは、記憶を想起させる空間としては機能しているといえるが、展示に変化の余地があるのか、展示を創り出す側と展示を見る側とが積極的に議論を交わし、それをふまえた展示の変革が図られているのであろうか。本論で議論した視点から人と防災未来センターを振り返ると、十分な取り組みが行われているとはいえない。

そのような問題意識のもとで、災害ミュージアムのあり方を検討するために、人と防災未来センターの開設10年という節目において、実践的な研究の取り組みとして行ったのが、本報告に掲載されている「災害ミュージアム塾 2012」である。災害ミュージアム塾の実施による成果は、今後の研究課題であるものの、フォーラムとしてのミュージアムを目指した一歩を踏み出した段階であるということで、本論を終えておく。

## 補注

- (1) 朝日新聞「骨組みだけの防災庁舎、保存を断念 南三陸、遺族に配慮」2011年9月20日。
- (2) 読売新聞「南三陸町の防災庁舎『保存議論する場を』」2012年8月7日。
- (3) 読売新聞「『災害遺構』保存で協議、慎重論も屋根の上の船」2011年4月28日。
- (4) 大槌町は「災害の記憶を風化させない事業寄付金」を設け、はまゆり再建のために必要な寄付を呼びかけている。
- (5) 人と防災未来センター内部資料による。

- 14) 〔記憶・歴史・表現〕フォーラム：いつかの、だれかの、2005.
- 15) 季村範江：メモリアルと防災，瓦版なまず13，2002.
- 16) 笠原一人他編：記憶表現論，昭和堂，2009.

## 参考文献

- 1) ミヒヤエル・パーモンティエ（真壁宏幹訳）：ミュージアム・エデュケーション—感性と知性を拓く想起空間，慶應義塾大学出版会，2012.
- 2) Cameron, Duncan: The Museum, a Temple or the Forum, Curator, XIV/1,,p11-24, 1971.
- 3) モーリス・アルヴァックス（小関藤一郎訳）集会的記憶（第3刷），行路社，2006.
- 4) ピエール・ノラ（谷川稔監訳）：記憶の場1，岩波書店，2002.
- 5) スーザン・A・クレイン編著（伊藤博昭監訳）：ミュージアムと記憶—知識の集積／展示の構造学，ありな書房，2009.
- 6) ジュリア・アデニー・トマス：歴史と反歴史—写真展と日本のナショナル・アイデンティティ，ミュージアムと記憶—知識の集積／展示の構造学（スーザン・A・クレイン編著），ありな書房，p119-147，2009.
- 7) 橋本裕之：過去を知る方法，博物館史研究，No.12, p12-14, 2002.
- 8) 布谷知夫・安田常雄：人々の記憶と博物館展示，歴博，No152, p6-11, 2009.
- 9) ダイアナ・ドレイク・ウィルソン：記憶の現実化，歴史の変容化—ユーロ／アメリカ／インディアンズ，ミュージアムと記憶—知識の集積／展示の構造学（スーザン・A・クレイン編著），ありな書房，p149-185，2009.
- 10) 阪神淡路大震災を記録し続ける会，1995.
- 11) 佐々木和子：アーカイブズが生まれる，アーカイブズ学研究，No4, 日本アーカイブズ学会，p21-372，2006.
- 12) 稲葉洋子：阪神・淡路大震災と図書活動-神戸大学「震災文庫」の挑戦—，人を情報を結ぶWEプロデュース，2005.
- 13) ひょうご震災記念21世紀研究機構：翔べフェニックス 創造的復興への群像，2010.



## 地域における災害・防災情報拠点としての災害ミュージアム

～災害ミュージアムアンケート調査の結果より～

宇田川真之（人と防災未来センター・主任研究員）

阪本真由美（人と防災未来センター・主任研究員）

定池祐季（北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター・助教）

### 1. はじめに

多種類の自然災害が発生するわが国では、各地に自然災害・防災をテーマとしたミュージアムが存在する。こうした自然災害の災害・防災をテーマとした地域におけるミュージアム特有の存在意義・目的は何か。地域における、災害という出来事を伝えること、メモリアル、今後の防災・減災に資することなどが目的であるならば、一般的な歴史系博物館とは異なる特有の手法論が求められると考えられる。そこで、わが国の災害ミュージアムの概要、設立や活動の目的、展示の特徴、収藏品や活用状況、地域との連携状況などに関する基礎的なデータを収集することを目的にアンケート調査を実施した。

### 2. 調査の方法

自然災害を主要テーマとするミュージアムについて、わが国には、災害因を横断した協会などは存在せず、その範疇は明確ではない。そこで、災害の資料収集・保存・展示を行っていると考えられる施設を、資料・インターネットなどを通じて調査し、複数の災害要因にまたがる43施設を抽出した。抽出した施設に対し、平成23年1月に郵送による質問票の送付と回収を行った結果、36施設から有効回答を得た。有効回答票となったミュージアムを災害要因別に整理すると、火山が12施設、洪水が5施設、地滑り・土砂災害が8施設、地震が5施設、津波が6施設であった。

### 3. 調査の結果

#### 3. 1 施設の概要

ミュージアムの設立年を尋ねた結果を整理した図1をみると、災害因によらず大半の施設は、1990年以降に設立されていた。

また、施設面積（駐車場を除く）を尋ねた結果をみる

と、洪水と砂防は比較的小規模な回答施設が多いのに対して、地震、津波、火山では比較的大規模な回答施設が多い傾向であった。また、年間の来館者数を尋ねた結果である図3をみると、施設規模と同様の傾向で、洪水と砂防はやや来館者数が少ないのに対して、地震、津波、火山ではやや多い回答施設の割合が高い傾向がある。

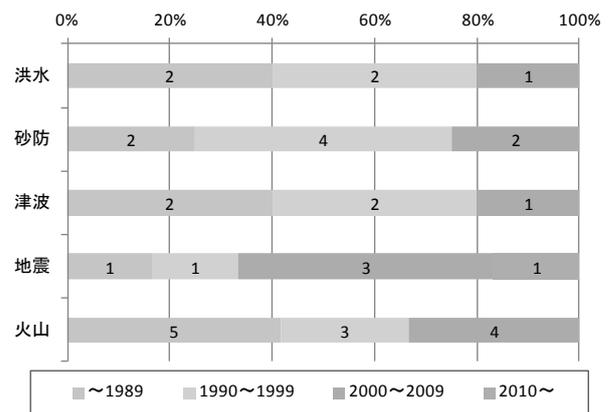


図1 施設の設立年

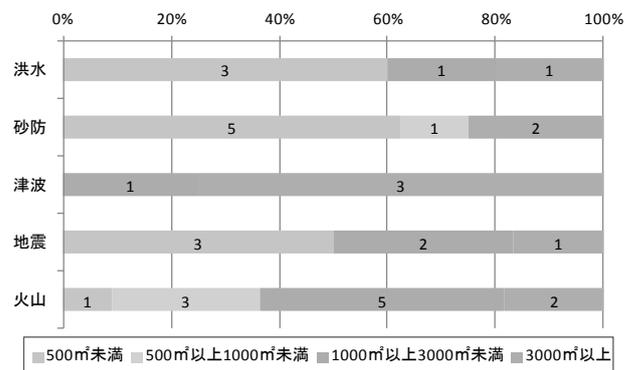


図2 施設の現在の面積（駐車場を除く）

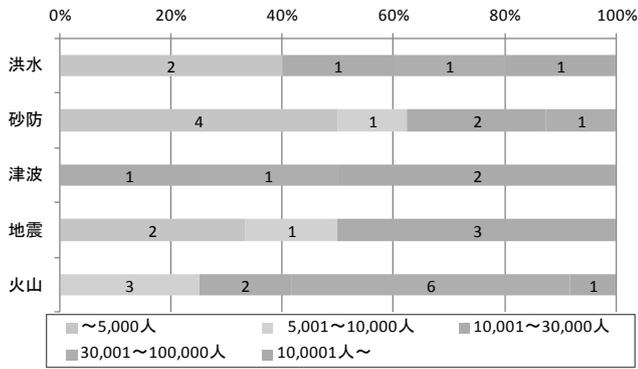


図3 年間の来館者数

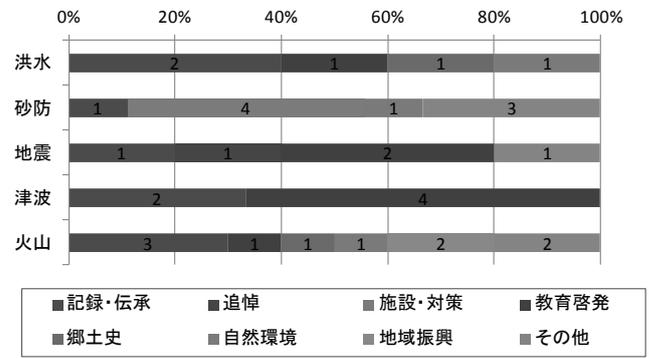


図5 施設の一歩の設立目的

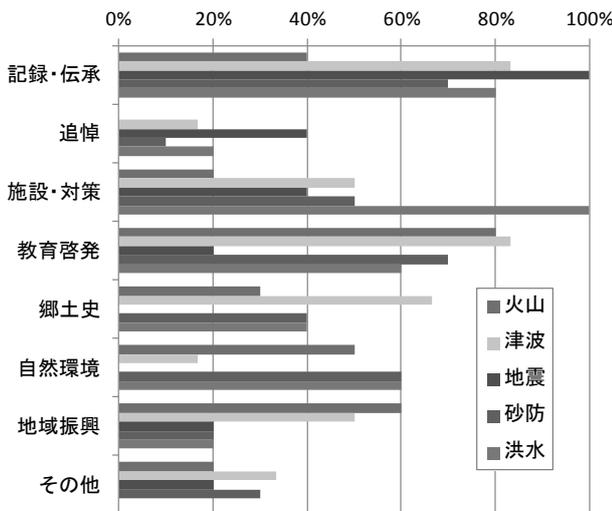


図4 施設の設立目的（複数回答）

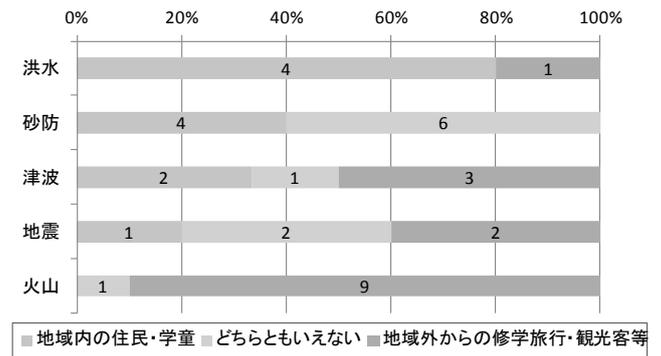


図6 主な施設の対象者

### 3.2 施設の設立目的・対象

施設の設立目的を尋ねた結果を図4に、そのなかで一番の目的を尋ねた結果を図5に示す。また、誰を主な来館者として企画・設置したかを尋ねた結果の図6に示した。これらの結果を見ると、災害因による顕著な違いが確認される。

洪水と砂防に関する回答施設では、地域内の住民・学童を主たる対象としている施設が多く、砂防えんてい、堤防や砂防事業などの防災「施設・対策」の解説を重視しているとともに、山林や河川環境などの「自然環境」の解説にも力点をおいている傾向が見られる。

これに対して、火山に関する回答施設では、地域外からの観光客等を対象として重視している傾向がみられる。設立目的は多岐にわたるが、観光産業と結びついた「地域振興」や、多様な火山噴火現象の解説を行う「教育啓発」に重点をおいている様子が伺える。

地震と津波に関する回答施設は、地域住民と外部からの来訪者の双方を意識している傾向が見られる。そして、地震に関する施設では、「記録・伝承」とともに、「追悼」にも重点を置いている傾向がある。関東大震災や阪神・淡路大震災など、20世紀以降に犠牲者が極めて大きい災害があったことが背景にあると考えられる。また、津波に関する施設では、発生頻度の少ない津波の恐ろしさを伝える「教育啓発」とともに、濱口梧陵の伝記など「郷土史」も重視している傾向がみられる。

### 3.3 展示の手法

展示手法等を整理した図7をみると、設立目的等の傾向に対応して、採用している展示手法等にも災害要因による違いが見られる。ただし、展示の入替え状況を尋ねた図8を見ると、災害因によらず入替えをしていない施設が過半数を占め、展示の入替えが難しい状況が伺える。

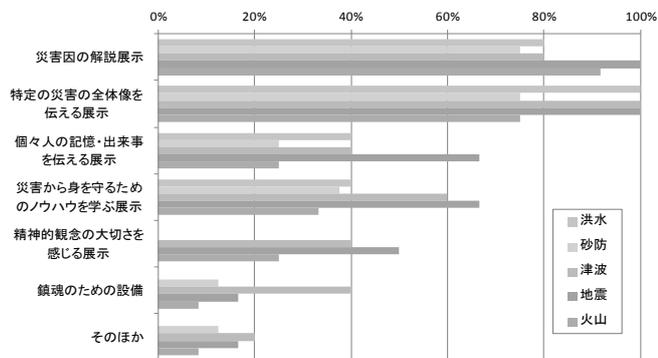


図7 設置している展示・設備

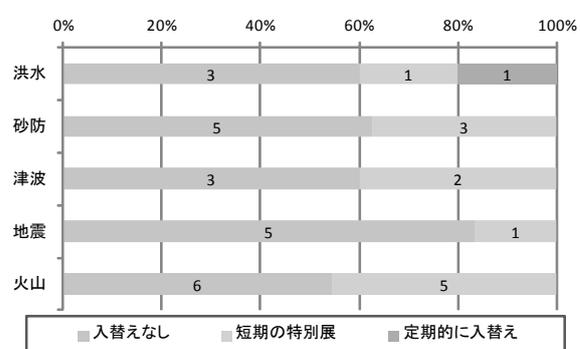


図8 展示の入替えの状況

#### 4. おわりに

本稿では、施設の規模や目的、展示の概要について整理した。今後、資料の収集・保管などの状況についても分析し報告を行いたい。



## Recent Disaster Museums and Monuments in the United States

### —9.11 Memorial in New York City and the Newseum in Washington D.C.—

Elizabeth Maly (Disaster Reduction and Human Renovation Inst. Researcher)

This paper introduces two recently created museums and monuments that preserve, memorialize, and exhibit information related to natural and man-made disasters in the United States. The National September 11 Memorial & Museum in New York City is still under construction, and while the Memorial is open to the public, the Museum is not yet open. This memorial is considered in the context of the Vietnam War Memorial in Washington D.C. The Newseum in Washington D.C. is a new kind of museum dedicated to news.

#### 1. The National September 11 Memorial & Museum

The National September 11 Memorial & Museum is located on the site of the World Trade Center in New York City. The 9/11 Memorial occupies about half of the 16 acre site, and includes two large waterfalls and reflecting pools in the footprints of the original WTC towers, and the Memorial Plaza with more than 400 trees, which is intended to become an

ecological park space in the city. The plaza is actually a green roof over the structure that houses the 9/11 Memorial Museum and other underground. The 9/11 Memorial Museum has 110,000 square feet of exhibition space underground, and intends to tell the story of 9/11 using multimedia, archives, narratives, and artifacts. The museum is not yet open to the public, but visitors can visit the Memorial, which was dedicated on 9/11 2011 (the 10th anniversary of the attacks), and open to the public on September 12, 2011. The Memorial includes two waterfalls and reflecting pools in the footprints of the twin towers. Instead of buildings that rise into the air, these pools are deeply inverted into the ground, and water pours down all four sides. Surrounding the pools is a wide bronze railing, with the names cut out of each victim of the attack on September 11, 2001 and also the 6 people who died in the attack on the WTC on February 26, 1993. The victims' names are carefully organized, as shown in Figure 1.



Figure 1. Map of the 9/11 Memorial (left) and Memorial Guide to locate names (right)



Figure 2. Left: the entrance to the 9/11 Museum, which is not yet open to the public. Most of the museum exhibition space is underground, under the Memorial Plaza. Right: the Museum as seen across the North Pool.

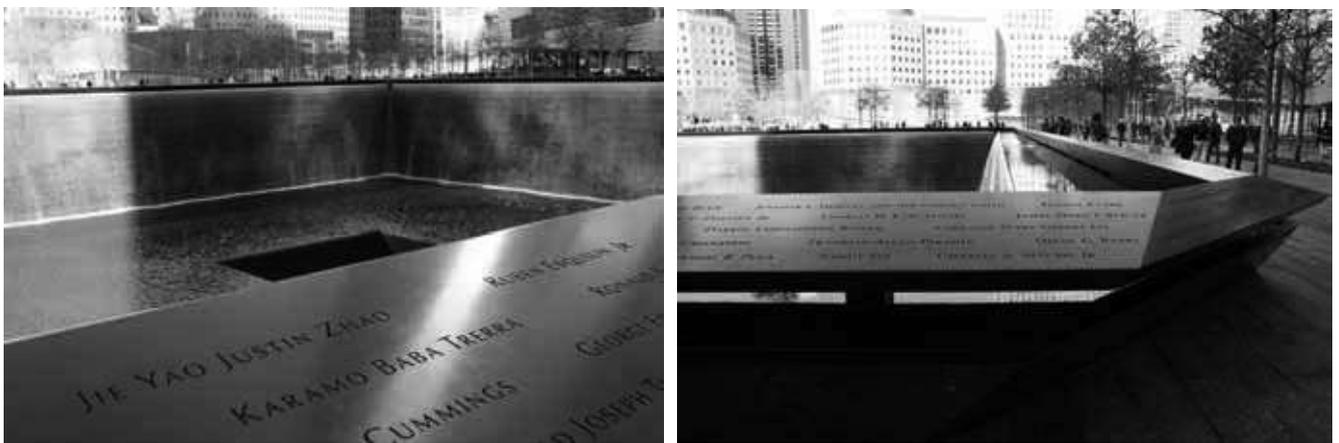


Figure 3. Names engraved in the bronze railing around the Pools.

The North Pool of the Memorial (in the footprint of the North Tower), includes the people who died in the North Tower, on Flight 11, and on February 26 1993. The South Pool includes the names of those who died in the South Tower, the first responders, those on Flight 175, at the Pentagon, and on Flight 77 and Flight 93. Family and friends can search for the

names of their loved ones using the touch screen monitors on site.

## 2. U. S. Memorial Precedent: Vietnam Veteran's Memorial Wall, designed by Maya Lin

The Vietnam Veteran's Memorial Wall, part of the Vietnam Veteran's Memorial in Washington D.C.



Figure 4. The Vietnam Wall

created a precedent for a memorial that is comprised of primarily an indexed list of names. The Vietnam War was very unpopular with much of the U.S. public, and the Memorial Wall was also extremely controversial at the time of its creation. Up until that time, war memorial monuments were usually figurative, for example depicting a soldier in battle.

Maya Lin was 21 year old architecture student at Yale University when she won the design competition for the Memorial Wall in 1981. Her design was simple and abstract-- a stone wall embedded in the earth, with the names of U.S. soldiers killed or missing in the Vietnam War engraved chronologically, in order of year.

The Wall is at a slight angle, so that in one direction it faces the Washington Monument (Figure 4, left) and in the other the Lincoln memorial. The top of the wall is at ground level, and the path for visitors descends gradually along with the wall, which is 10 feet high at the center. The wall is made of a reflective stone, so visitors see themselves reflected along with the names.

The wall was constructed in 1982, with more than 58,000 names. Organized by year, the Wall also includes a directory that friends and family can use to locate the name of their loved ones. In recent years, volunteers have also created websites that can be used to look up names. In the years since it was constructed, criticism of the wall has faded, and it is a

popular site for visitors, and has become somewhat of a shrine, with people leaving objects such as letters, flowers, etc. The Vietnam Wall signified a new direction in thinking about how to create a monument to honor the dead, and an emphasis on the primacy of the list of names.

### 3. The Newseum, Washington D. C.

The Newseum is a 250,000 square foot museum of news in Washington D.C., which presents news history, using a combination of artifacts and archival information and objects. (Figure 5)

Exhibits include archival newspapers, with headlines from each year, including disaster events (Figure 6), and an exhibit on reporting on conflict and disaster, and in the conflict and disaster exhibit, a handwritten newspaper from Ishinomaki after the Great East Japan Earthquake (Figure 6, right).

Throughout the exhibits, artifacts (objects as well as newspapers) are used to explain exhibits about news events, such as international coverage of the 9.11 attacks (Figure 7). While the Newseum is not exclusively a disaster museum, it includes various disaster-related exhibits, and creative ways of curating them as part of news history.

For more information about the museums discussed in this article, please visit the 9/11 Memorial Website [www.911memorial.org](http://www.911memorial.org) and the Newseum Website [www.newseum.org](http://www.newseum.org).



Figure 5. The exhibits at the Newseum combine artifacts and other media. Left: a watchtower from the Berlin Wall, middle: the truck and other objects used by reporters in war zones, and right: video footage of Hurricane Katrina.



Figure 6. The Newseum’s exhibit of news history displays front pages of world newspapers with historic headlines. Lower right: handwritten Ishinomaki newspaper



Figure 7. Exhibits related to 9/11. Left: wreckage of the World Trade Center, Center: artifacts that belonged to a camera man killed on the site, and Right: related photography and video exhibits.

## 阪神・淡路大震災の経験を伝える語り部活動とコミュニティ

高野尚子 (人と防災未来センター震災資料専門員)

### 1. はじめに

阪神・淡路大震災の被災地では、主に被災した市民たちによって自身の経験を語り伝える活動が展開されている。そして、語り部たちと聞き手たちの交流が被災地内外の架け橋になりつつある。これらの語り部活動には、淡路島の「野島断層保存館」や神戸市の「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」などの震災を継承する施設内で行われているものもあれば、被災地の地元コミュニティで学生たちを受け入れ、町並みの中で行われているものもある。また、被災地から飛び出し、全国各地で震災の経験を伝える活動も始まっている。本稿ではそれらの事例を紹介し、新たに生まれつつある交流から垣間見える被災地の復興の一つのありようを示したい。

### 2. 公的な施設における語り部活動

震災から7年後の2002(平成14)年4月にオープンした「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」は、公的な施設の中で市民が体験を語るという活動が行われている場所のひとつである。人と防災未来センターは、「阪神・淡路大震災の経験と教訓を後世に継承し、国内外の災害による被害の軽減に貢献すると共に、命の尊さや共に生きることの大切さなどを伝える」という目的のもとに開館した県立施設である。当センターは兵庫県神戸市の東部新都心(HAT神戸)にあり、展示施設を備える防災研究機関として国内外の多くの来館者に展示を公開している。年間来館者数はほぼ毎年50万人を超えている。また、施設の運営スタッフとして、語学、展示解説、手話、語り部など150名を超える登録ボランティアが参画しているのも大きな特徴である。以下では、展示を簡単に紹介し、次に語り部について紹介する。

施設は西館と東館の2館からなる。東館は主に国内外の風水害をテーマに、西館は阪神・淡路大震災をテーマに展示している。西館は2階から4階までが常設展示フロアで、5階が資料室となっている。

ここでは、特に震災をテーマとした西館展示フロアの概要を紹介する。西館4階は、「震災迫体験フロア」と題して、2つの映像が上映される。1つ目は、特殊撮影やコンピューターグラフィックなどを駆使して、被災地の建築物が崩壊する様子を再現した1.17シアターである。ここでは地震の破壊力を表現している。2つ目は、実際の報道映像を編集した映画を上映する大震災ホールである。前者とは対照的に、震災から復旧・復興するまちの様子を綴った映像が流れ、来館者の噁り泣きが漏れ聞こえることもある。

3階では、「震災の記録フロア」と題して、市民から寄せられた震災資料や震災当時のさまざまなデータを展示している。展示資料は、記録写真約500点、手記約260点、被災した実物約70点などである。そして、展示スペースに納めきれない震災資料約17万点は展示裏の収納スペースなどに保管されており、一部を除き、5階資料室にて閲覧申請できる。

2階では、「防災・減災体験フロア」と題して、主に今後のための防災情報を提供する展示を展開している。実験やゲームによって、災害や防災に関する知識を体験しながら学べる「防災・減災ワークショップ」や、各防災機関のハザードマップを検索することで自分の住む地域の災害情報を確認できる災害検索テーブルなどがある。

そして、語り部ボランティアは、この西館内で活動している。語り部ボランティアとは、阪神・淡路大震災の被災者であり、ボランティアで人と防災未来センターの来館者に体験談を語っている人々である。センターが開館する前年度から、毎年度末に募集されており、2011(平成23)年3月末現在では計44名(男性27名、女性17名)が登録し、活動している。現在在籍する語り部ボランティアはみな50代以上であり、仕事を退職した人や子育てを終えた人たちが多く参加している。また、ボランティアたちの被災時の住所は神戸市、西宮市、芦

屋市、明石市であり、被害が大きかった地域からの参加者が多い。

語り部ボランティアの主な活動内容は、西館1階のガイダンスルームにて行う、予約団体に対する30分間の講話と、3階の一角にある震災を語り継ぐコーナーにて行う、特に講話の予約をしていない来館者に対する10分間程度の講話である(写真1)。活動時間は、午前9時半から午後1時半、あるいは午後1時半から午後5時までであり、また、主に各自の決められた担当曜日に活動している。



写真1 震災を語り継ぐコーナーにて行われている講話の様子  
(人と防災未来センター提供)

彼らの講話は、それぞれの体験談や聞き手に伝えたいことなどからなり、彼ら一人ひとりの体験から紡ぎだされる言葉はさまざまである。特に、震災時の立場によって、当時の体験や目にした風景は異なり、体験談の内容は大きく「自身や自身の周囲の人の被災体験談」と「自身の救援体験談」に分かれる。前者は語り部の被災当時の体験談、避難所生活や被災後の生活に関する体験談などであり、後者は語り部が行政職員・ボランティアなどとして被災者を救援したという体験談である。もちろん言うまでもなく、前者の中にも後者の中にもそれぞれ多種多様な語りがある。

また、体験談から紡ぎだされるエッセンスは、防災の具体的な知恵に集約される場合と、命の大切さや助け合いの大切さなどの抽象的な知恵に集約される場合があることも筆者らの調査からわかった。具体的な防災の知恵とは、災害時の避難方法や常備すべき非常持ち出し品の種類などといった実践的な知恵であり、抽象的な知恵とは、震災の経験から身を持って知った、住民同士が互

いに助け合うことの大切さ、自分の命や人の命の大切さなどである。抽象的な知恵は、具体的な方法ではないが、語り部が震災体験から得たものとして重要視している知恵といえる。翻って聞き手である小学生の感想文をたどってみると、防災の具体的な知恵に対してはなぜって覚えようとする様子が見られ、命の大切さなどの抽象的な知恵に対しては語り部の話を受け止める際にとまどいや懐疑が見られた。

実例を挙げて紹介しよう。防災の具体的な知恵に対する感想の中には、次のような文章が見られた。

「[地震が起きて逃げるときには]はきものをはく。」  
(小学4年生男子、[]は筆者の加筆による)

「もし下敷きになったとき、どうすればよいかもおしえてくださいました。地しんがきても、どうすればいいかわかったので、もしきたときにおばあさんの話を生かしたい。」(小学4年生女子)

一例目の男子の感想文は、語り部が触れた「避難時に足をけがしないように、はきものをはきましょう」といった話に呼応し、そのまま復唱したものである。さらに、二例目の女子の感想文からも、語り部が話した地震から身を守るための具体的な方法をそのまま覚えようとする様子が見られる。この対話から言えることは、語り部と聞き手が同じ文脈を共有しており、聞き手はその知恵を当然覚えるべきものとして受け取っているということである。

他方、助け合いの大切さなどの抽象的な知恵に対する感想の中にはこのような文章がつけられていた。

「私にも直かんで人々を守れるのか。(中略)人のやさしさなどがいっぱい伝わってきた。」(小学6年生女子A)

「私は『いつか地震がきてのこしてあった最後の水を困っている人にあげられるのかな』と思った」(小学6年生女子B)

二人の小学6年生の感想文からは、語り部が語った、震災時に経験した助け合いの大切さを自分の中で受け

止め、咀嚼する際にとまどっている様子が見受けられる。これは、語り部と聞き手があらかじめ同じ文脈を共有しているわけではないため、聞き手はその知恵を受け入れる際に、良い意味で抵抗を覚えていることを表している。詳細については、高野・渥美（2007a）もあわせて参照されたい。

講話内容もさることながら、注目すべきは市民ボランティアが公的施設において私的な体験談を伝えていることである。先に述べたように、センターは「阪神・淡路大震災の経験と教訓を後世に継承し、国内外の災害による被害の軽減に貢献すると共に、命の尊さや共に生きることの大切さなどを伝える」という目的のもと、展示を展開している。その言葉からは、甚大な被害と犠牲者を生んだ震災の経験を決して無駄にしないという兵庫県の高い決意と、復興を支援してくれた国内外の人々への感謝の思いが感じ取れる。また同時に、裏を返せば、それは被災地内外に被災地の完全な復興を示すことにもつながっているだろう。もちろん、この言葉を胸に語り部活動に励んでいる人々もいるが、他方でこのスローガンを掲げるまでには、被災者にはさまざまな葛藤や感情の起伏があり、現在でも復興したとは言いきれない心境の人々がいることも筆者は承知している。復興という公のメッセージを発信する施設において、また、暗黙のうちに震災からの復興ストーリーが期待されている中において、44名の語り部たちがそういった側面ばかりではない震災体験談を語ることに語り部活動のひとつの意義を見出せるだろう。高野・渥美（2007b）では、期待されていたであろう「震災なるもの」に関する語り部と語り部の私的な体験談との齟齬からうまれる、語り部と聞き手との対話の綻びについて考察しているので参照されたい。

### 3. 地域コミュニティにおける語り部活動

公的な施設での活動以外にも、地域で若者たちを受け入れ、継承活動を続けている団体もある。「阪神・淡路大震災まち支援グループ まち・コミュニケーション（以下、まち・コミ）」は、1996（平成8）年4月に発足し、神戸市長田区御蔵通5・6丁目地区の復興まちづくりを支援してきた団体である。長田区御蔵通とその南にある菅原通地区は、地震による火災の被害が甚大だった地域で、128人の住民の命が失われている。

まち・コミの活動は、地元住民の有志が立ち上げたまちづくり協議会を復興まちづくりのハード面において支援するところから始まった。はじめは関東から駆けつけたボランティアたちが主体となっていたが、その後、住民や学生たちも活動に加わり、ハード面の支援に加えて、ソフト面からも御蔵地区を支えてきた。たとえば慰霊法要や盆踊り、餅つきを共に行うなどして、地域住民との親睦をより深めてきたのだ。

震災から6年が過ぎた2001（平成13）年10月には、地域活動の拠点となる集会所の建設事業が持ち上がる。そして、2002（平成14）年夏に、兵庫県の北側に位置する豊岡市の古民家を譲り受け、建築学を志す学生ボランティアらの協力を得て解体し、御蔵地区に移築することとなった。集会所建設には学生だけでなく地域住民も参加し、最終的には2000人以上が関わり、2004（平成16）年1月に完成した。現在は地域住民の集いの場として利用されている。

まち・コミは、その事業と並行して、2001（平成13）年より小中高校の修学旅行生を対象とした震災体験学習を始めた。最近では年間約2000人もの学生を受け入れている。

体験学習の基本プログラムは、スライドによる被災状況の説明（約25分）、語り部への質問（20～30分）、御蔵地区のまち歩き（約40分）の約2時間コースである。このコースに炊き出し体験を加えた4時間コースもある。まち歩き以外のこれらの内容は、まち・コミの事務所や長田区役所の一室を借りて行われている。

体験学習の受け入れメンバーとしては、まち・コミのスタッフ以外に、地域に住む17名の住民の語り部が参加している。そのなかでも特に10名が積極的に活動に関わっている。語り部は、ほとんどが60代から80代の女性である。

基本プログラムの概要を簡単に説明しよう。まず、まち・コミスタッフが写真を交えたスライドで御蔵地区の被害状況について説明する。説明の中では、この地域ではもともと長屋住宅や工場が多かったことや、それが火災被害の要因になったことなどにも触れられ、地域の歴史や文化的背景もよくわかる。震災後の区画整理事業で、町並みが震災前からどのように変わったのかも航空写真で見せてくれる。

次に、語り部への質問である。こちらは、学生の質問

に対し、その日に参加している語り部たちが応えていく。1団体に対し、参加する語り部の数は特に決められていない。避難所生活に関する質問であれば、避難所生活を体験した語り部が、水の大切さに関する質問であれば、そのことを一番伝えたいと思っている語り部が応える。語り部同士で、誰がその質問に一番よく応えられるかがだいたいわかっているため、その場で譲りあって応えていく（写真2）。



写真-2 学生の質問に応える、まち・コミの語り部たち  
(まち・コミュニケーション提供)

ここで、この形式を少し意外に感じる方もいるかもしれない。ここで行われる語り部は、一般に想像されるであろうものとは少々異なり、語り部が学生に対して自らから話すというよりは、学生の質問に対して応えるというスタイルを取っているのである。そのため、まち・コミから学校側に対して、学生が質問できるように事前学習をしてから震災体験学習に参加してほしい旨を伝える。

基本プログラムの最後には、語り部が先導して御蔵5・6丁目を中心にまち歩きを行う。震災後の区画整理により新しい町並みに生まれ変わった御蔵地区だが、まち歩きをしていると震災の爪あとを意図的に残していることがわかる。たとえば、御蔵北公園には震災時の火災で焼けた電柱がそのまま保存されていたり、御蔵南公園には火災の被害を食い止めたといわれる焼け残ったクスノキがそのまま立っている。学生たちは、黒く焼け焦げた跡の残るクスノキを見ながら、「わあ、焼けた跡がある」というような感想を挙げることもある。語り部はこれらのスポットを紹介しながら、特に復興後の現在

のことを説明するのだという（写真3）。どちらかというと、語り部への質問の際は震災時のことについて聞かれ、応えることが多いことに対し、まち歩きでは現在に焦点を当てて説明することが特徴的である。また、まち歩きでは被害の爪あとだけでなく、震災の教訓が形となった場所にも案内してくれる。たとえば、御蔵南公園の地面には、下水に直接つながる穴が等間隔に掘られている。これは、震災時にトイレの水が流れずに苦労したことから思いついたアイデアで、災害時のトイレ代わりとなるものだ。



写真-3 御蔵南公園の焼け残ったクスノキの周りに集まる学生たち  
(まち・コミュニケーション提供)

震災によって大きな被害を受け、その後多くの人たちが関わって作りあげてきたまちに立って、震災からの復興を語り、聞く。矢守 (e.g., 2009) は、被災地において、人々が指で指示しながら語る行為について言及しており、この場で語り合う人々は、主体と対象の深いトランザクションの〈場所〉へと誘われているという。つまり、被災した物の前にたたずみ、語る人々は、被災地神戸の中で主体（自己）と対象（環境）とが渾然一体となるような体験をしているというのだ。災害体験自体、主体と対象をはじめとした当たり前の日常世界を根底から覆すものであるため、このような震災の伝達方法により、人々は震災を疑似体験しているともいえるだろう。そして、学生からの質問に応えるという語り部スタイルも、あえて語り部と聞き手の役割、つまり主体と対象を入れ替えるという試みにより、疑似体験を演出させると取れる。

一方、語り部たちの中には、震災体験学習への参加により、震災後の第一歩を踏み出すことができた人々がいる。語り部の声をいくつか紹介しよう。

語り部をしていて私自身気持ちにゆとりができました。同じ震災でもみんな経験したことは違います。伝えていけるだけで幸せです。人との出会いを大切に思います。(語り部Mさん 月刊まち・コミ 2009年7・8月号より)

まち・コミの震災体験学習を見学に行ったとき、急にマイクを渡され、娘の話をとられたときに吹っ切れたと思います。それまではまだ、生徒達の前で娘のことを話そうという気持ちにはなっていませんでした。(語り部Tさん 月刊まち・コミ 2010年1月号より)

Mさんは震災で住む場所を失い、14人の知り合いたちと一つ屋根の下での共同生活を経験した女性で、Tさんは震災で娘を亡くした男性である。震災体験学習に語り部として参加することで、Mさんは震災を伝えていける幸せを感じると言い、Tさんはそれまでの気持ちが吹っ切れたと言う。語り部たちにとって、この活動への参加が、自身たちの復興へつながる術となっているといえるだろう。

#### 4. 新たな継承活動への取り組み-さらなるネットワークの広がり-

これまで紹介してきたような、ひとつの団体、組織が被災地に人々を迎える活動以外にも、語り部を全国のコミュニティに派遣する活動や世代を超えた共同実践も始まっている。最後にこれらの取り組みを紹介して本稿をとじることとする。

2004(平成16)年12月、震災から10年を迎えるに当たって、神戸市、市民、事業者が共に「震災10年 神戸からの発信ネットワーク」を立ち上げた。そして、これまでの支援への感謝を全国に伝え、震災の経験を発信していくことを目的として、市民スタッフが語り部として派遣されることとなった。この事業では2005(平成17)年5月までに42名の神戸市民の語り部が全国51都市を訪れたが、震災10年目を以降も活動は継続しており、語り部たちは全国の講演会や防災訓練の場に参加し、経験を伝え続けている。

メンバーの平均年齢が60歳以上である語り部グループ「語り部 KOBE1995」は、大学生との共同実践を始めている。防災教育の教材を開発している大学生たちは、語り部たちとの交流をとおして教材作りに励み、小学校で授業を実践しているのである(詳しくは、矢守, 2010を参照)。

語り部による継承活動は、このように新たな展開を見せている。語り部の語り部が、世代や地域を越えてさまざまなところで響き出し、応答の連鎖が始まっている。

#### 引用・参考文献

- 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 2010 人と防災未来センター平成21年度年次報告書
- 高野尚子・渥美公秀 2007a 語りによる阪神・淡路大震災の伝承に関する一考察-語り部と聞き手の協働想起に着目して-, ボランティア学研究 8, 97-119.
- 高野尚子・渥美公秀 2007b 阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察——対話の結びをめぐって, 実験社会心理学研究 46(2), 185-197.
- まち・コミュニケーション 2009 月刊まち・コミ 2009年12月号
- まち・コミュニケーション 2009 月刊まち・コミ 2009年7・8月号
- まち・コミュニケーション 2010 月刊まち・コミ 2010年1月号
- 宮定章 2008 震災復興まちづくりから、平時のまちづくりへ-まち・コミュニケーションの取り組み-, 減災 Vol.3, 86-88.
- 有限会社コラボねっと(編) 2007 阪神・淡路大震災まち支援グループ まち・コミュニケーション 被災者支援活動の徹底活用III よりそいコミュニティエンパワーメントサポーター編 特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワーク pp.15-25.
- 矢守克也 2009 防災人間科学 東京大学出版会
- 「震災10年 神戸からの発信」推進委員会 2005 震災10年 感謝と教訓を手に 市民のかけ橋 神戸から全国へ 「震災10年 神戸からの発信」推進委員会
- 矢守克也 2010 アクションリサーチ-実践する人間科学- 新曜社
- ※ 本稿は『復興と支援の災害心理学』(藤森立男・矢守克也編著)に掲載された拙著「第8章 復興のためのネットワーク・コミュニティ」(p171-192)を修正したものである。



## 地域に暮らす人々を主体とした「災害ミュージアム」のあり方

—被災を面的に見せる「中越メモリアル回廊」の事例を手がかりに—

高森順子 (人と防災未来センター震災資料専門員)

### 1. はじめに

一番見てほしいのは、物ではなくて、そこに住んでいる人たちなんですね。中越はもう過疎高齢化がとてもし進んでいるところで、中越地震のためにその過疎高齢化が一気に加速したとも言われているところなんです。なんですけど、外部からの支援をたくさんいただきまして、今とてもこの地域は元気になりました。

(中略)

今までは知らない人が道を通っていたら、あの人どこの人だ、と言って、こう見ているだけだったのが、今では声を掛けられれば、ああここはこうでね、ああでね、誰にでも話せるようなそんな地域になったんですね。なので、もちろんその施設の展示ですとか、「中越メモリアル回廊」の現地の被害のあった家だとか道路も見ていただきたいんですが、そこに住んでいる人たちとのふれあいというのをぜひ体験していただきたいなというふうに思います。

2004年(平成16年)10月23日に発生した新潟県中越大地震<sup>1</sup>。その約7年後にオープンした長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」の山崎麻里子研究員は、「きおくみらい」を含む、4施設・3公園で構成されている「中越メモリアル回廊」を巡る人々に一番見て欲しいものは何か、という筆者の問いに対して、冒頭のように述べた<sup>2</sup>。

山崎氏の「一番見てほしいのは、物ではなくて、そこに住んでいる人たち」という言葉は、新潟県中越大地震で被災した人々が、復旧・復興へと歩みを進めてきたこと、そして、いまも歩みを続けている事に対する敬意を感じることができる言葉である。それと同時に、「中越

メモリアル回廊」にとっての核は、「展示」という言葉から想起するような、静態として陳列された物ではなく、動態としての「そこに住んでいる人たち」であるという、災害展示のあり方を考える上で示唆に富んだ言葉でもある。

本稿では、新潟県中越大地震の展示施設群である「中越メモリアル回廊」を、同じ地震災害の展示施設である「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」を比較対象として用いて、「災害ミュージアム<sup>3</sup>」のあり方を考えてみる。なお、本論では、この2つの「災害ミュージアム」の展示内容の詳細については触れない。展示内容ではなく、展示内容を決定し、創り出すにあたり、その基盤となる(1)「災害ミュージアム」の設立理念、(2)「災害ミュージアム」を訪れる者の位置づけ、(3)災害体験者の位置づけ、の3つから考察を試みる。「災害ミュージアム」を論じるにあたり、具体的な展示内容を分析することが重要なのは言うまでもない。しかし、その展示内容がどのような意義をもとに作られているか(設立理念)、展示を誰に、どのように見て欲しいか(来訪者の位置づけ)、展示内容のストーリーテラー、つまり、展示内容を自らの物語として語るができる、災害を体験した人々をどのように表現するか(災害体験者の位置づけ)という点を見ることは、展示内容を分析する以上に、「災害ミュージアム」が目指している方向が浮き彫りになると考える。

本論では、「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」と「中越メモリアル回廊」を、展示内容を決定づける3つの観点から比較し、2つの「災害ミュージアム」のあり方の違いを明らかにする。そして、その比較をもとに、地域に暮らす人々を主体とした「災害ミュージアム」のあり方を考える。最後に、人と防災未来センターが今後果たすべき「災害ミュージアム」としての役

<sup>1</sup> 気象庁はこの地震災害を「新潟県中越地震」と命名しているが、本稿では、新潟県、および中越メモリアル回廊が使用している「新潟県中越大地震」という表記を用いる。

<sup>2</sup> 詳しい内容は、本書の「第2回 被災経験継承のために複数の展示拠点とネットワークづくり」を参照のこと。

<sup>3</sup> 「災害ミュージアム」とは、災害に関する展示を全部、または一部行っている博物館や展示施設の総称として、本論で定義するものである。これは「災害ミュージアム研究塾」における「災害ミュージアム」の定義にならっている。

割を示す。

## 2. 二つの「災害ミュージアム」概要と関連研究

「阪神・淡路大震災 人と防災未来センター」と「中越メモリアル回廊」について、施設の概要および、当該施設の展示に関連する研究について、以下に説明する。

### (1) 人と防災未来センター

「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター（以下、人と防災未来センター）は、震災から約7年後の2002年（平成14年）4月に、阪神・淡路大震災とそれによる教訓を伝えるという目的で、日本政府と兵庫県により設置され、公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構が運営を行っている施設である。人と防災未来センターは、複数の機能を持つ施設であり、その機能とは、展示、実践的な防災研究と若手防災専門家の育成、災害対応の現地支援、交流・ネットワーク、災害対策専門職員の育成、資料収集・保存の6つに分類されている<sup>4</sup>。本稿では、人と防災未来センターの展示について論じるため、以下、展示部門の概要を示す。

人と防災未来センターの展示部門には、年間50万人以上の来訪者が訪れている。展示は、阪神・淡路大震災の地震破壊のすさまじさを大型映像と音響で体感する

「1. 17シアター」、震災直後のまち並みをジオラマ模型で再現した「震災直後のまち」、復興に至るまでのまちと人を、直面する課題とともにドラマで紹介する「大震災ホール」の3つによって構成された「震災迫体験フロア」、センターで収集・保存した資料を提供者の体験談とともに展示する「震災の記憶を残すコーナー」、地震直後や復興過程の生活・まちの姿を解説する「震災からの復興をたどるコーナー」、ビデオや語り部から震災体験を知る「震災を語り継ぐコーナー」の3つによって構成された「震災の記憶フロア」、世界での自然災害を学習する「災害情報ステーション」、実験やゲームを通して、防災・減災に関する知識を学ぶ「防災・減災ワークショップ」、防災に関する様々な企画展を開催する「防災未来ギャラリー」の3つによって構成された「防災・減災体験フロア」から構成されている。来館者は、各フロアの展示を順路に沿って見ていくことで、阪神・

淡路大震災の全容を知ることができるという仕組みになっている。

人と防災未来センターの展示に関する研究としては、人と防災未来センターを含む、国内外の地震災害に関する災害ミュージアムの展示を記憶の継承という観点から比較検討した研究（阪本・矢守，2010）や、センターの展示部門で活躍する語り部ボランティアを、聞き手との関係から考察した研究（高野・渥美，2007）などがある。

### (2) 中越メモリアル回廊

「中越メモリアル回廊」は、長岡市、小千谷市、社団法人中越防災安全推進機構が共同で立ち上げた「中越メモリアル回廊推進協議会」によって整備が行われた、4施設3公園によって構成されたエリア全体を指す。中越メモリアル回廊の目的は、被災地である中越地域をそのまま情報の保管庫と捉え、それぞれの拠点を巡り、震災の記憶と復興の軌跡にふれることで、新潟県中越大震災の実像を浮き彫りにすることである。2013年3月現在、長岡市山古志地区に整備される「やまこし復興交流館」を除く、3施設3公園が、新潟県中越大震災から約7年後の2011年（平成23年）10月にオープンしている。オープンから1年間で中越メモリアル回廊を訪れた人は、約6万2千人である。

2013年（平成25年）10月にオープン予定の「やまこし復興交流館」を含む、4施設3公園の各概要を以下に示す。施設として設置されているのは、「長岡震災アーカイブセンター きおくみらい」（以下、「きおくみらい」）、「おぢや震災ミュージアム そなえ館」（以下、「そなえ館」）、「川口きずな館」、「やまこし復興交流館」の4つである。「きおくみらい」は、中越メモリアル回廊の中核であり、窓口となる施設である。災害に関する情報検索や、書籍閲覧、中越大震災の記録などを視聴できるシアターがある。「そなえ館」は、中越大震災の伝承と防災学習を目的として設置され、被災地の復興までの月日を3時間後、3日後、3か月後、3年後を節目にたどり、地震被害の体験から得た教訓を学ぶことができる。「川口きずな館」は、前述した2施設とは趣が異なり、川口地域の市民活動の拠点として、地域づくりのサポートをする目的で設立された。川口きずな館を訪れた人を各地区のイベント等へ案内するなど、川口地区の窓口と

<sup>4</sup> 人と防災未来センターHPより、センターミッションを抜粋。

しての役割が期待されている。「やまこし復興交流館」は、山古志の原風景の再生と創出を目的として設置予定であり、山の暮らしを再生するための支援拠点としての役割が期待されている。

公園として設置されているのは、「妙見メモリアルパーク」、「震央メモリアルパーク」、「木籠メモリアルパーク」の3公園である。妙見メモリアルパークは、中越大震災によって山腹が崩落し、その脇の県道を走行していた車4台が巻き込まれ、母娘2名が犠牲となり、男児1名が奇跡的に救出された場所である。この崩落現場を中越大震災の象徴と捉え、犠牲者の慰霊の場として整備し、献花台を設けている。「震央メモリアルパーク」は、中越大震災の震源地である。震災から1年後に開催された「本震・震央探索ハイキング」で特定された震央を保存し、伝承するために、遊歩道や東屋も整備されている。最後に、「木籠メモリアルパーク」は、中越大震災の影響により、河川閉塞が発生し、木籠集落が水没した場所である。現在も水没した家屋が存置されており、その傍には地元食材の直売所と、震災に関する資料館である「郷見庵」が併設されている。

中越メモリアル回廊について論じたものは、メモリアル回廊自身がオープンして1年半足らずであるため、数は少ないが、その1施設である「長岡震災アーカイブセンター きおくみらい」の情報端末を利用した教育現場での活用方法に関する研究(樋口, 2012)がある。

### 3. 2つの「災害ミュージアム」の比較

では、人と防災未来センターと中越メモリアル回廊を、展示内容の詳細を決めるための指針となり、「災害ミュージアム」としての方向性を示す、(1)「災害ミュージアム」の設立理念、(2)「災害ミュージアム」を訪れる者の位置づけ、(3)災害体験者の位置づけ、の3つの観点から比較する。

#### (1)「災害ミュージアム」の設立理念：2つの災害ミュージアムが目指す「中心」「中核」の意味

人と防災未来センターは、「見学者が阪神・淡路大震災の経験とそこから得た教訓を容易に理解し、受け止めることができる展示空間を実現することにより、震災学習や防災教育、さらには心の教育のための中心施設とし

ての評価を確立する<sup>5)</sup>」ことを、2006年(平成18年)からの中期目標として掲げている。

中越メモリアル回廊は、回廊そのものについてのミッションや意味の説明において、「中心」「中核」といった言葉は見受けられない。代わりに、「来訪者がネットワークで結ばれた各施設を巡ることで、中越大震災の被害状況や復興への足跡など多くの情報を知ることができます。震災関係の施設だけでなく、既存の文化・交流施設等との連携や活用を図り、地域住民による語り部やフィールドワークなど面的な広がり形成を目指し<sup>6)</sup>」と記述されており、そこには「中心」「中核」という言葉の対極の意味にも取れる「ネットワーク」「面的」「広がり」といった言葉が並んでいる。

では、中越メモリアル回廊の1施設である、長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」はどうだろうか。「きおくみらい」については、「中越メモリアル回廊の中核となる施設。震災の知見や教訓を蓄積・発信する拠点<sup>7)</sup>」と位置付けており、人と防災未来センターにおける「中心施設」と同様の印象を与える「中核」という言葉が使われている。しかし、ここで用いている「中核」という言葉は、あくまで、中越メモリアル回廊という、4施設3公園のネットワークに限定した枠組みのなかでの「中核」としての意味で使われている。

人と防災未来センターと中越メモリアル回廊の設立理念に関わる文面からわかることは、人と防災未来センターは、阪神・淡路大震災の被災地域の中心としてだけではなく、震災学習や防災教育、心の教育といった、ユニバーサルな「中心」としての役割が目指されているということである。これは、人と防災未来センターが、展示施設としてだけでなく、防災研究の拠点としての一面を持つことも理由のひとつだともいえる。

一方、中越メモリアル回廊は、ローカルな複数施設のネットワークを可視化したものである。その設立理念は、複数施設をネットワークで結んだという事実そのものにあるといえるのではないだろうか。4施設、3公園のローカルな施設群には、それぞれに特色があり、その特色は、ネットワークとして結びつけることを可能にする

<sup>5)</sup>阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター「ビジョン(中期目標)とガイドライン(中期事業計画)平成18年6月」より、展示に関する中間目標を抜粋。

<sup>6)</sup>「中越メモリアル回廊情報誌 corridor no.5」より抜粋。

<sup>7)</sup>「中越メモリアル回廊情報誌 corridor no.5」より抜粋。

「中越大地震の想起」という共通性を持ちながらも、異なる部分もある設立理念から生み出されている。そして、各施設がその役割を担い、補完し合うことではじめて、中越メモリアル回廊としての意味が生み出されるのである。言い換えれば、中越メモリアル回廊自身が、何らかの設立理念や意義を持っている、というよりむしろ、4施設3公園が個々の役割を全うすることで、中越メモリアル回廊全体の意義が立ち現われるのである。

## （２）訪れる者の位置付け：来訪者の行為の表現としての「見学・来館」と「周遊・巡る」

次に、「災害ミュージアム」を訪れる者の行為を表現する動詞から、2つの「災害ミュージアム」における、ミュージアムを訪れる者の捉え方を考える。

施設を訪れるという行為そのものについての動詞表現を見てみると、人と防災未来センターでは、そのような動詞表現はほとんど見られない。むしろ、人と防災未来センターを主語として、「(広く市民に)訴える」「(効果的に)情報発信する<sup>8</sup>」といった表現が使われている。代わりに、施設を訪れることを示す表現として、訪れる者を「見学者<sup>9</sup>」や「来館者<sup>10</sup>」という名詞で表現している。つまり、人と防災未来センターを訪れる者は、「災害ミュージアム」を「見学する」、ないしは「来館する」者として想定している。

一方、中越メモリアル回廊は、「回廊」という名から想像するように、「周遊する<sup>11</sup>」「巡る<sup>12</sup>」という表現が使われている。また、訪れる者は、「来訪者<sup>13</sup>」と表現している。

以上のことから、2つの「災害ミュージアム」が、訪れる者をどのように意味づけているかを考察してみる。まず、人と防災未来センターは、そもそも、訪れる者を主語にした動詞がほとんど見られず、人と防災未来センターを主語にした動詞が目立っている。これは、人と防災未来センターは、災害に関わる情報を集約し、それを発信するということが、センターの役割において、まず

もって優先されるべき事項だということの裏付けだといえる。その上で、情報の受け手として、訪れる者が位置付けられているのである。

一方、中越メモリアル回廊は、訪れる者を主語にした動詞表現が多用されていることから、中越メモリアル回廊にとって、訪れるという行為そのもの、そして、訪れる人々の存在がまずもって優先される。その上で、彼らにどのような情報を提供するか、ということが付随してくるのである。

また、訪れる者に対する表現から、被災地の空間をどのように提示しているかも垣間見ることができる。人と防災未来センターは、その立地条件からも言うまでもないが、「来館者」という言葉通り、情報を集約した「館」、つまり、「点」として「災害ミュージアム」を捉えている。一方、中越メモリアル回廊は、「周遊する」「巡る」という動詞から、4施設、3公園で構成された7つの拠点を結ぶ「線」、そして、施設と公園の点を線で結んだときに立ち現れる「面」として、「災害ミュージアム」を捉えていることがわかる。

## （３）災害体験者の位置づけ：「被災者・市民」と「地域住民」

では、2つの「災害ミュージアム」では、展示内容のストーリーテラーでもある、災害を体験した人々をどのように表現しているだろうか。人と防災未来センターでは、センターの6つの機能のうち、展示部門の説明の冒頭において、「被災者、市民、ボランティアなどの多くの人々の連携と協力のもと、阪神・淡路大震災の経験と教訓をわかりやすく展示<sup>14</sup>」と、展示を構成する上で重要な要素を占める人々を、3つの名称で表現している。

一方、中越メモリアル回廊では、「被災」「被災経験」という言葉は使われているが、「被災者」という言葉はほとんど出てこない。代わりに使われているのは、「地域住民」という言葉である。

災害を体験した人々を「被災者」と呼ぶか、災害を体験した人々を「地域住民」と呼ぶかという違いは、2つの「災害ミュージアム」が、彼らに期待する役割の違いを表している。人と防災未来センターにとって、災害を体験した人々に期待することは、文字通り、災害の体験

<sup>8</sup> 阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター「平成23年度年次報告書」より、センターのミッション、サブミッションから抜粋。

<sup>9</sup> 阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター「ビジョン（中期目標）とガイドライン（中期事業計画）平成18年6月」より抜粋。

<sup>10</sup> 人と防災未来センターホームページより抜粋。

<sup>11</sup> 「中越メモリアル回廊情報誌 corridor no.4」より抜粋。

<sup>12</sup> 「中越メモリアル回廊情報誌 corridor no.5」より抜粋。

<sup>13</sup> 「中越メモリアル回廊情報誌 corridor no.5」より抜粋。

<sup>14</sup> 人と防災未来センターHP内「センターのミッション」より抜粋。

を伝えることである。そのため、「災を被った者」として、つまり、被災者としての役割が期待される。一方、中越メモリアル回廊にとって、災害を体験した人々へ期待する役割とは、災害の経験を伝えることであることはもちろんだが、それ以上に、この地域で生活してきた者として、中越の魅力伝えることであることが伺える。

また、災害を体験した人々を指し示す名称の違いは、「災害ミュージアム」が展示しようとする出来事（阪神・淡路大震災や新潟県中越大震災）を描写するための、起点の違いも表している。人と防災未来センターでは、「被災者」という言葉が使われている。つまり、展示しようとする出来事である「阪神・淡路大震災」を描写するにあたり、「被災者」と人々が呼ばれることになった時点、つまり、1995年（平成7年）1月17日を起点とし、その後「被災者」として生活した時間が展示されている。

一方、中越メモリアル回廊では、災害を体験した人々を「被災者」と表現せず、「地域住民」と表現している。このことは、新潟県中越大震災を描写するために起点としているのが、新潟県中越大震災が起こる2004年（平成16年）10月23日より前を起点としていることを示唆している。これを裏付けるように、中越メモリアル回廊の展示の1施設である「川口きずな館」には、川口の美しい風景や食べ物などを案内する「絆カウンター」があり、中越大震災以前から連綿と続いてきた、集落の風土を知ることができる。また、オープンが予定されている「やまこし復興交流館」の案内文<sup>15</sup>にも、「原風景」「秋の味覚」といった、地域の風土を表す言葉が並んでいる。つまり、中越メモリアル回廊では、中越大震災をテーマとした「災害ミュージアム」でありながらも、ミュージアムが起点としている時間は、中越大地震以前の、まさに「原風景」と呼ぶべき時点まで遡っていると解釈することができる。

#### 4. 地域に暮らす人々を主体とした「災害ミュージアム」

人と防災未来センターと中越メモリアル回廊を比較した結果を（1）「災害ミュージアム」の設立理念、（2）「災害ミュージアム」を訪れる者の位置づけ、（3）災

害体験者の位置づけから比較した。

その結果、（1）「災害ミュージアム」の設立理念から、人と防災未来センターはユニバーサルな防災拠点として「災害ミュージアム」を捉えており、中越メモリアル回廊は、災害を想起するローカルな拠点を結んだネットワークとして「災害ミュージアム」を捉えていることがわかった。また、（2）「災害ミュージアム」を訪れる者の位置づけから、人と防災未来センターは、「災害ミュージアム」を点として捉えており、展示情報の発信は、訪れる者に先立って優先されていることが明らかになった。一方、中越メモリアル回廊は、「災害ミュージアム」を面的に捉えており、展示情報の発信は、訪れる者の存在がまずもって優先された上に成立していることがわかった。最後に、（3）災害体験者の位置づけから、人と防災未来センターは、災害を体験した人々に、文字通り災害体験を伝える役割を期待しており、展示の起点は、災害が発生した日を想定していることがわかった。一方、中越メモリアル回廊は、災害を体験した人々に、災害体験を伝える役割とともに、地域の魅力を伝える役割を期待しており、展示の起点となる日は、災害が発生する以前の、「原風景」ともいえるような起点まで遡っていることが明らかになった。以上のように、同じ地震災害を扱った「災害ミュージアム」であっても、展示内容を決定するにあたり、その基底となる事項によって、「災害ミュージアム」として目指す方向は大きく変化するのである。

これまで述べてきた2つの「災害ミュージアム」の基底と、そこから考察される「災害ミュージアム」のあり方を参照すると、冒頭に引用した山崎氏の「（中越メモリアル回廊で見たいものは）物ではなくて、そこに住んでいる人たち」という発言が、中越メモリアル回廊の基底に沿ったものであることが理解できる。上述した比較結果から述べるならば、中越メモリアル回廊における「災害ミュージアム」とは、（1）ローカルな拠点を結んだネットワークとして、（2）被災地を面的に捉え、（3）被災経験だけではなく、地域の魅力を伝える場である。山崎氏が、中越メモリアル回廊にとって「住んでいる人たち」が最も大切な要素だと認識しているのは、彼らの生きた言葉、そして、彼らの生活そのものを見ることが、中越メモリアル回廊の目指す「災害ミュージアム」を創り上げるために、最も重要なことだからでは

<sup>15</sup> 「中越メモリアル回廊情報誌 corridor no. 5」より抜粋。

ないだろうか。つまり、中越メモリアル回廊が目指しているのは、地域に暮らす人々を主体とした「災害ミュージアム」であるといえる。

## 5. 人と防災未来センターが今後果たすべき「災害ミュージアム」としての役割

人と防災未来センターは、前述した比較結果に依るならば、(1)ユニバーサルな防災拠点として、(2)被災地の情報を一カ所に集約して見せ、(3)あくまでも被災経験を伝える場、として「災害ミュージアム」を捉えていると解釈できる。しかし、人と防災未来センターに対しては、センターが描く「災害ミュージアム」のあり方に対して、批判的な意見もある。阪神・淡路大震災の資料を歴史学の観点から研究し、また、自身も災害資料の収集・保存の実践に関わってきた奥村(2012)は、阪神・淡路大震災において、災害にまつわる記憶が市民によって自発的に記録されたことを挙げ、災害についての集団的な記憶を集積し、社会全体が記憶を喚起する装置となるような「災害文化」ともいふべき状況が醸成されつつあると述べている。そのような社会的状況のなかで、人と防災未来センターは、「従来型の総合防災センターから一步踏みだし、新たな災害文化形成に寄与できるメモリアルセンターが求められている」(奥村, 2012; p. 99)と指摘している。

では、人と防災未来センターが「従来型の総合防災センター」から一步踏み出すには、どのような方法が考えられるだろうか。本論では、中越メモリアル回廊が、震災遺構や、地域の人々が寄り合う場といった、災害想起を促すことになりうる場所を、展示施設から切り離すのではなく、ネットワーク化し、「災害ミュージアム」という集合体の一部として来訪者に提示していることを述べた。そして、中越メモリアル回廊が目指しているのは、地域に暮らす人々を主体とした「災害ミュージアム」であることが明らかとなった。この事例は、人と防災未来センターが「災害文化形成に寄与」する「災害ミュージアム」になるための手掛かりになるのではないだろうか。それは、「災害文化」というものが、地域に暮らす人々を主体とするからこそ生まれ、根付くものだからである。

人と防災未来センターが、地域に暮らす人々を主体とした「災害ミュージアム」としての機能を高めるために

は、センターの外に広がる、災害についての記憶を呼び起こす数々の場所と、センター自身を明確に結びつけることが必要である。つまり、センターが地域に根ざした展示施設としての意義をより強く持つためには、センター自身が、阪神・淡路大震災にまつわる「災害ミュージアム」の全体を担うのではなく、あくまでも、阪神・淡路大震災を想起する様々な場をネットワーク化した、集合体としての「災害ミュージアム」の一部として、訪れる人々に提示される必要がある。そして、人と防災未来センターは、自身も含まれる「災害ミュージアム」という集合体を構成する、災害を想起する場所の一つひとつに、センターを訪れる者を導いていく役割を求められているのではないだろうか。

では、人と防災未来センターが阪神・淡路大震災の「災害ミュージアム」の集合体の一部となるための、ネットワーク先はどのようなものが考えられるだろうか。人々が災害を想起する方法は、記念式典や黙祷をはじめとした儀式や、記念碑、震災遺構などがあり、その形は多様である(Eyre, 2006)。阪神・淡路大震災に関するモニュメントだけでも、震災から10年目において約230カ所が確認されている(NPO 法人阪神淡路大震災1. 17 希望の灯り・毎日新聞震災取材班編, 2004)。これらの点と点を繋ぐことで、被災という出来事を面的に提示することができるのではないだろうか。人と防災未来センターは、災害想起の場をネットワーク化することで、阪神・淡路大震災の「災害ミュージアム」の一部として、そのローカルな中心としての役割を果たす第一歩を踏み出すことができると考える。その上で、ユニバーサルな防災拠点としての役割を目指すことが求められているのではないだろうか。

### 謝辞

本稿は、長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」の山崎麻里子研究員の「災害ミュージアム研究塾2012」での発表から、多大な示唆を受けた。また、中越メモリアル回廊視察にあたっては、山の暮らし再生機構の脇田妙子氏、長岡市木沢集落の皆様のご協力を頂いた。ここに記して感謝申し上げます。

### 参考文献

1) Eyre, A. (2006). Remembering: Community commemoration after disaster. Havidan Rodriguez, Enrico L. Quarantelli, & Russell

R.Dynes. (eds.) Handbook of Disaster Research. p.441-455.

NewYork:Springer.

2) 樋口 勲 (2012). iPad 等を用いた中越大震災の記憶と記録の教育活用, 日本教育情報学会第 28 回年会論文集, 28, 22-25.

3)NPO 法人阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り・毎日新聞震災取材班編 (2004). 思い刻んで—震災 10 年のモニュメント— どりむ社

3) 奥村弘(2012). 大震災と歴史資料保存 —阪神・淡路大震災から東日本大震災へ— 吉川弘文館

4) 阪本真由美・矢守克也 (2010). 災害ミュージアムを通じた記憶の継承に関する一考察 —地震災害のミュージアムを中心に— 自然災害科学, 29, 179-188.

5) 高野尚子・渥美公秀 (2007). 阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察 —対話の綻びをめぐる— 実験社会心理学研究, 46, 185-197.



# 記憶の継承に向けた災害遺構の保存と維持管理に関する研究

## —雲仙普賢岳被災地・中越地震被災地の災害遺構を事例として—

石原凌河 (人と防災未来センター震災資料専門員)

### 1. 序章

#### (1) 研究の背景・目的

近年、災害の記憶を継承する方法の一つに災害遺構の保存が注目されており、国内外を問わず、災害遺構を保存しようとする地域が増えつつある。災害遺構を保存する意義として、自然災害の恐ろしさについてリアリティを持って訴えること、鎮魂の場や亡くなった方を偲ぶ場として機能すること、復興のシンボルになること、そこにあった生活の記憶を継承することが言われている<sup>1)</sup>。この他にも、多くの観光客や修学旅行生が災害遺構を見学、学習するために訪れるため、災害遺構の保存と活用を通して地域活性化につながる可能性があると考えられる。実際、「第2回・第6回災害ミュージアム研究塾2012」の報告によると、雲仙普賢岳被災地・中越地震被災地では災害遺構を積極的に保存し、それを基盤として防災教育やツーリズムに活用していることが紹介された。

東日本大震災で被災した多くの地域においても、震災の遺構の保存が検討されていて、保存について既に復興計画で位置づけられている自治体も見られる<sup>2)</sup>。しかし、東日本大震災の被災地に現存する災害遺構の多くが急激に消えつつある。その理由の一つに、財源の確保を含めた維持管理の方法が十分に検討なされてないことが指摘されている<sup>2)</sup>。例えば、約18万点もの阪神・淡路大震災に関する原物資料を保存している人と防災未来センターでは、原物資料の劣化を防ぎ、後世へ資料を残していくために、新聞の脱酸処理や、一定の温湿度下での資料の保存等のように、資料の保存環境管理が行われている。これと同様に、災害遺構についても記憶の継承に向けて、維持管理や修繕を行っていき、遺構の劣化を防いでいく措置を講ずる必要があるだろう。そのため、事業者・管理者の選定や、維持管理の方法、費用の捻出等の詳細についてあらかじめ決めておく必要があると考える。そのため、東日本大震災の以前から保存されている地域での災害遺構の保存方法や維持管理の方法を把握することで、東日本大震災の被災地だけでなく、今後

の被災地における災害遺構の保存や維持管理を検討する上での重要な知見として還元できると考える。

そこで本稿では、雲仙普賢岳噴火災害被災地と中越地震被災地で保存されている災害遺構を事例として、維持管理の観点から災害遺構の保存実態を把握することで、災害遺構を保存・維持管理する上での知見を得る。なお、本稿で扱う災害遺構については、自然災害の被害の痕跡をとどめる実物資料のうち、特に不動産的建造物の遺構を対象とする。その理由として、東日本大震災の被災地の多くで、不動産的建造物の遺構の保存が検討されているものの、これらの保存や維持管理に関する制度的枠組みが存在しない<sup>2)</sup>からである。

#### (2) 既往研究の概観と本研究の位置づけ

本稿に関連する先行研究として、災害遺構や戦災遺構に関する研究をレビューした結果、災害遺構や戦災遺構の保存に至るまでの経緯や課題を明らかにした研究、災害遺構や戦災遺構を活用するための課題や方策に関する研究に大きく分類することができた。

保存に至るまでの経緯や課題を明らかにした研究として、例えば、島川<sup>3)</sup>は、スマトラ沖地震による大津波で被害を受けた災害遺構を事例として、災害遺構の保存に至るまでの政策プロセスを明らかにし、これらの知見から東日本大震災の被災地での保存への提言を行っている。顯原<sup>4)</sup>は、戦災遺構としての原爆ドームにおける戦災復興都市計画や広島平和記念公園の中での位置づけについて明らかにしている。高橋ら<sup>5)</sup>は、雲仙普賢岳の噴火災害の火砕流によって焼失した被災校舎の保存プロセスとその課題について明らかにしている。

活用するための課題や方策に関する研究として、例えば、石川<sup>6)</sup>は、洞爺湖有珠山ジオパークに保存されている災害遺構を事例に、行政と地元組織との協働で運営されているミュージアム活動による防災教育に災害遺構を活用するための条件として、地域内の災害遺構や防災教育施設のネットワーク化、中間組織による運営と財源

の確保の必要性を示している。清水ら<sup>7)</sup>は、沖縄本島南部・八重山地域における戦争遺跡の残存状況や市町村の保存・活用状況の実態から、保存と活用の両立の困難性を示している。井出<sup>8)</sup>は、人々の死や哀しみを対象とし、災害遺構や戦災遺構、防災教育施設等を活用した観光であるダークツーリズムを提唱し、日本での適用可能性について示している。

このように、本稿と関連する既往研究を概観すると、遺構の保存に至るまでの経緯や課題、活用するための課題や方策については検討されているものの、維持管理の観点から災害遺構の保存方策については十分に検討がなされていない。そのため、本稿は維持管理の観点から災害遺構の実態を把握している点に特徴がある。

### (3) 本稿の構成

本稿の構成として、第2章では、研究の方法について述べるとともに、研究対象として選定した災害遺構の概要と保存経緯について文献やヒアリング調査から明らかにする。第3章では、前章で選定した災害遺構の維持管理実態をヒアリング調査と文献・行政資料により明らかにする。第4章では、第2章・第3章で得られた知見をまとめるとともに、災害遺構を保存・維持管理していく上での提言を述べる。また、本稿で残された課題についても述べる。

## 2. 調査の概要

### (1) 調査事例の選定と研究の方法

日本国内で災害遺構が保存されている施設を抽出するために、国内外の過去の戦災、自然災害等からの復興を祈念又は記念する施設の概要が網羅的に掲載されている報告書<sup>9)</sup>を基礎資料とした。同報告書では、84施設の概要が掲載されているが、これらのうち、日本国内において災害遺構が保存されている施設は6ヶ所である。その中でも、不動産的建造物が保存されている3施設（旧大野木場小学校被災校舎、土石流家屋保存公園、木籠メモリアルパーク）を選定した。この他にも、例えば、2000年の有珠山噴火災害の遺構が保存されている施設の事例もあるが、この報告書に記載されていないため、今回は調査の対象から外した。

次に、維持管理の観点からの災害遺構の保存実態を把握するために、災害遺構の管理者へヒアリング調査を実

施した（表-1）。ヒアリング調査では、管理している災害遺構についての、①公開に至るまでの経緯、②事業者・管理者の主体、③管理・修繕費、④修繕内容、⑤管理・修繕上の課題について聞きとった。

また、報告書の内容に加え、事務事業評価調査や災害メモリアル施設の構想についてまとめられている行政資料や遺構の保存についてまとめられている文献を参照し、これらの施設における維持管理や保存の方法について把握していった（表-1）。

### (2) 土石流被災家屋保存公園の概要と保存経緯

土石流被災家屋保存公園は、1992年8月8日～14日の雲仙普賢岳噴火の土石流によって被害を受けた家屋11棟が保存・展示（一部移設）されている。図-1に土石流被災家屋保存公園の地図、図-2にその写真を示している。土石流被災家屋保存公園が整備された経緯について、管理者である南島原市地域振興部へのヒアリング調査の結果からまとめていく。土石流被災家屋保存公園が立地している地区は約50世帯程の集落であったが、1992年8月8日～14日の土石流によって集落が壊

表-1 ヒアリング調査と行政資料・文献の概要

|     | ヒアリング先   | 実施日              |
|-----|--|------------------|
| (1) | 国土交通省九州地方整備局<br>雲仙復興事務所                                  | 2013年2月1日        |
| (2) | 南島原市地域振興部  | 2013年2月2日        |
| (3) | 公益社団法人中越防災安全推進機構   | 2013年3月13日       |
|     | 資料・文献名称  | 発行元              |
| (4) | 東日本大震災に係る鎮魂及び復興の象徴となる都市公園のあり方検討業務報告書 <sup>9)</sup>       | 国土交通省都市局公園・緑地景観課 |
| (5) | 平成22年度～平成24年度・事務事業評価調査：旧大野木場小学校被災校舎保存対策事業 <sup>10)</sup> | 南島原市             |
| (6) | 平成23年度～平成24年度・事務事業評価調査：土石流被災家屋保存公園事業 <sup>11)</sup>      | 南島原市             |
| (7) | 災害メモリアル拠点整備基本構想 <sup>12)</sup>                           | 長岡市・小千谷市・川口町     |
| (8) | 雲仙普賢岳の火砕流で被災した大野木場小学校被災校舎保存構想の策定に関する調査 <sup>5)</sup>     | 土木学会論文集          |



図-1 土石流被災家屋保存公園・旧大野木場小学校被災校舎の地図



図－2 土石流被災家屋保存公園の様子



図－3 道の駅「みずなし本陣ふかえ」の様子

滅状態となった。幸い集落に住む地域住民は事前に避難していたため、死傷者はいなかった。そして、復旧・復興過程が進むにつれて、長崎県では「地域再生行動計画（がまだす計画）」が策定された。これは、復興計画とは異なり、噴火被害からの地域の再生を目的としたもので、地域再生に資する構想と具体的な事業が盛り込まれた。この計画の中で、道の駅の整備と、火山災害の記憶の継承についての計画が立案された。被災した集落の将来像を住民間で話し合う時に、県が土地を買い取るか、かさ上げして現地で再建するかの二択の選択を迫られた。そして、賛否両論があったものの、自治会組織は現地再建ではなく、買い上げを望むという意見を出した。また、この集落は土石流の被害が甚大であったことから、道の駅の整備と、火山災害の記憶を継承するために被災した集落の家屋を保存する構想について、この地区で事業を実施するという計画が持ち上がった。そのため、長崎県と深江町の職員は、地域住民に説明を行った。地域住民は、被災家屋をそのまま保存することに対して、当初は反対があったものの、県や町の職員の説得により、最終的には、県が土地を買い取って、その土地をかさ上げして、被災家屋を保存した公園と、道の駅「みずなし本陣ふかえ」（図－3）を整備することを決定した。また、2009年には、島原半島ジオパークが世界ジオパーク・ネットワークに加盟され、ジオパークの見どころとなるジオサイトの1つに指定されたことにより、施設の維持管理の後押しとなった。



図－4 旧大野木場小学校被災校舎の様子

### （3）旧大野木場小学校被災校舎の概要と保存経緯

旧大野木場小学校被災校舎は、平成3年9月15日の火砕流によって焼失した深江町立大野木場小学校の被災校舎を災害遺構として保存したものである。図－1に旧大野木場小学校被災校舎の地図、図－3にその様子を示している。明治15年に開校したという伝統を持つこの小学校（当時の児童129人、職員12人、校舎面積2,069㎡）は、雲仙普賢岳の噴火災害で唯一の被災校となった。旧大野木場小学校被災校舎における小学校の被災校舎の保存経緯について、文献<sup>5)</sup>と整備に関わった国土交通省九州地方整備局雲仙復興事務所へのヒアリング調査の結果からまとめていく。被災直後から地域住民や被災者団体から、火砕流で焼失した被災校舎の現状保存を望む声が出てきた。そして、平成5年2月22日には、大野木場地区の全住民を対象に集めた署名1,087人分を添えた「大野木場小学校の現状保存に関する要望」を深江町長に提出した。その結果、平成5年5月に公表された深江町復興計画には、被災校舎の保存を災害メモリアル拠点構想として位置づけられた。平成6年5月末に深江町大野木場地区の地権者などを中心とするメンバーによって普賢観光協会が設立され、大野木場小学校被災校舎の保存を目玉とした観光と農業を軸とした開発計画を策定した。深江町復興計画にも、被災校舎の現況保存と周辺部の観光公園化が位置づけられた。

大野木場小学校被災校舎の現地保存の要望は深江町から建設省の本省、九州地方建設局、現地の雲仙復興工事事務所及び長崎県に対してなされた。しかし、小学校の敷地はすべて砂防指定地に含まれた。そのため、通常の場合、小学校の敷地が建設省によって事業用地として買収され、被災校舎は取り壊され撤去されることになる。また、建設省が砂防指定地内に買収した建物を保存して維持管理した前例がなく、建設省雲仙復興事務所には維持管理の部署および経費を持っていなかった。そこで、

建設省雲仙復興事務所は雲仙普賢岳砂防指定地利活用方策検討委員会を1995年11月に設置し、砂防指定地内における災害遺構の保存の課題について整理していった。しかし、深江町は「現地での保存や、建設省が災害遺構の維持管理をすること」や、長崎県は「移転して保存することも検討したい」といったように各関係機関のスタンスが揃うことはなかった。また、保存の実現に向けては、砂防事業内での保存の方策、校舎本体の保存方策と利活用形態、周辺部の整備、事業主体、維持管理主体などを詳細に詰めていく必要があった。そこで、砂防指定地利活用方策検討委員会内に「大野木場小学校保存問題専門部会」を設けて、保存に向けてのより詳細な内容について検討がなされた。この部会は後に深江町教育委員会が主体となって「深江町立大野木場小学校「被災校舎」現地保存構想検討委員会」が引き継いでいった。この委員会で、大まかな保存目的・基本方針・計画が1997年3月に策定された。そして、現地保存実現への具体的な検討が委員会で行われ、1999年4月30日に公開されることになった。土石流被災家屋保存公園と同様に、旧大野木場小学校被災校舎もジオサイトに指定され、維持管理の後押しとなった。

#### (4) 木籠メモリアルパークの概要と保存経緯

2004年に発生した中越地震の災害遺構として保存されている木籠集落は、地震による地滑りで、集落を流れていた芋川が堰き止められて河岸閉塞になり、全21世帯のうち14世帯の家が水没し、水没を免れた10世帯も全半壊の被害を受けたため、木籠集落は集団移転を行った。元の集落の家屋のうちの8棟は、中越メモリアル回廊の1拠点「木籠メモリアルパーク」として整備することとなり、地震発生後から7年経過した2011年10月21日に公開された。図-5に木籠メモリアルパ

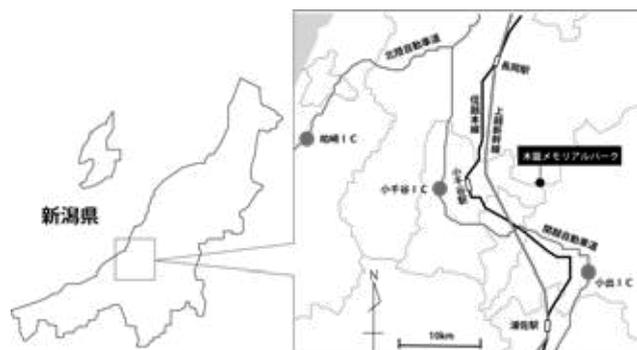


図-5 木籠メモリアルパークの地図

ークの災害遺構の地図、図-6にその写真を示している。中越地震による土砂崩れにより水没した家屋が保存されている木籠集落の保存経緯について、木籠メモリアルパークの管理者である中越防災安全推進機構へのヒアリング調査の結果からまとめていく。木籠集落は、前述の通り中越地震により土砂が崩落し、集落内を流れる芋川が堰き止められ、河道閉塞が起り、14世帯の建物が水没した。そのため、河道閉塞が崩壊して下流への被害が発生しないよう、芋川河道閉塞対策事業を実施する運びとなった。そもそも、木籠集落がある山古志村における砂防事業は新潟県の管轄であったが、新潟県知事からの要請により、国土交通省湯沢砂防事務所が直轄砂防災害関連救急事業として対策工事を実施した。通常の砂防事業であれば、土地の権利者へ事業計画の説明や土地の売買契約の締結を行い工事に着手するが、緊急性があり、権利者全員の合意を得ずに着手した。水没した集落の土地と家屋は、国有地として買収した。買収する際には、所有者が建物を解体し更地にして土地を引き渡すことが基本であるが、水没地及び土砂が堆積する危険箇所での解体となることから、起業者である湯沢事務所が解体することとなった。

ちょうど、中越地震で被災した長岡市、小千谷市、川口町（現、長岡市）とその事務局である公益社団法人中越防災安全推進機構から構成される中越メモリアル回廊推進協議会が、中越地震の記憶を継承することを目的とした「災害メモリアル拠点整備基本構想」が検討され、水没した木籠集落がメモリアルポイントの1つとして検討されていた。そこで、構想を推進する協議会は水没した集落を保存するよう、地元住民に要請した。当初は、木籠集落の地域のリーダーを中心とする地域住民の多くが保存に対して反対していたものの、説得により賛成へ方針を転換した。また、起業者である湯沢砂防事務所にも被災集落の保存を働きかけた。

そして、2008年11月に湯沢砂防事務所は、建物21棟のうち13棟を撤去することを決めたものの、残り



図-6 木籠メモリアルパークの様子

8棟の解体は、撤去するための重機が入れないこともあり、災害メモリアル構想や地元住民によって保存の要望の意見があったことから、保存という方針ではなく、存置という形で当面は現状維持することを決定した。その後、水没した木籠集落は、中越メモリアル回廊の1拠点「木籠メモリアルパーク」として整備することとなり、2011年10月21日に公開された。

### 3. 災害遺構の維持管理実態

#### (1) 維持管理に関わる事業主体

災害遺構の維持管理実態を把握するために、まずは、3施設における維持管理に関わる主体とその役割分担について把握していった(表-2)。表-2の出典の数値については、前章の表-1のヒアリング先と資料の番号と対応している。表中の周辺部とは、土石流被災家屋保存公園については被災家屋が保存されている公園用地、旧大野木場小学校被災校舎については遺構が保存されている学校用地、木籠メモリアルパークについては遺構を見学するスペースや駐車場を指す。

土石流被災家屋保存公園は、「土石流被災家屋保存公園条例」に基づく県の公園として位置づけられているため、遺構と公園部ともに事業者は長崎県であるが、指定管理者制度によって南島原市が、隣接する道の駅と道路施設と一体となって管理している。

旧大野木場小学校被災校舎について、この被災校舎の保存について関係機関の間で議論してきた「深江町立大野木場小学校「被災校舎」現地保存構想検討委員会」の場で、建設省、深江町(現、南島原市)、長崎県が合意を得て覚書を交わし、整備や維持管理の役割分担が公開前に決定された。その中で、小学校用地を建設省が買収後、被災校舎は建設省と深江町が協定を結んで、深江町が管理することが決められた。そのため、被災校舎の維持管理と財源負担については南島原市であるが、被災校舎や学校用地の所有は国土交通省となっている。事業者である南島原市は、敷地内の除草等の学校用地の日常的な管理については地元のシルバー人材センターへ委託している。また、地元小学校や老人会などがボランティアで学校用地の除草等を実施している。

木籠メモリアルパークについて、存置によって災害遺構を暫定的に保存しているため、災害遺構の直接的に維持管理されておらず、管理者は不在である。周辺部であ

る遺構を見学するスペースや駐車場の事業主体は中越メモリアル回廊推進協議会であるが、実際の管理は協議会の事務局である公益社団法人中越防災安全推進機構が請け負っている。駐車場の除草等の日常的な管理については、地元団体である「山古志木籠ふるさとの会」に委託している。以上の内容から、これら3施設ともに、一つの主体だけで維持管理を行っているのではなく、複数の主体が役割分担を行って保存や維持管理に関わっていることが把握できた。このことで、一つの主体に全てを強いることなく、費用負担者や管理者等の役割分担ができるため、保存への可能性がより広がったのではないかと考えられる。

#### (2) 災害遺構の維持管理の内容

ヒアリング調査と文献・行政資料の結果から明らかになった災害遺構の概要と維持管理の内容について表-3にまとめる。表-3の出典の数値については、表-2と同様に、前章の表-1のヒアリング先と資料の番号と対応している。

まず、土石流被災家屋保存公園の維持管理の内容について述べていく。土石流被災家屋保存公園は、噴火が終息した4年後に開設されたことから、遺構が公開されるまで4年の時間を要していることになる。被災家屋は公園内に整備され、大型テント内に3棟、屋外に8棟、合計11棟の家屋を見学することができる。被災家屋は、外から見学することは可能であるものの、家屋に触れたり、家屋の中に侵入することはできない。隣接する道の駅では、地元の特産品や土産品の購入や飲食ができる。このことで、災害遺構の見学者が、道の駅に立ち寄り、地元の食材や土産物を飲食・購入することができるため、地域活性化にも寄与していると考えられる。管理・

表-2 維持管理に関わる主体と役割分担

| 施設名          | 出典     | 関係機関           | 維持管理(ランニング)   |               |
|--------------|--------|----------------|---------------|---------------|
|              |        |                | 遺構            | 周辺部           |
| 土石流被災家屋保存公園  | (2)    | 長崎県            | 事業者(財源のみ負担)   | 事業者(財源のみ負担)   |
|              |        | 深江町(現、南島原市)    | 指定管理者         | 指定管理者         |
| 旧大野木場小学校被災校舎 | (2)(8) | 建設省(現、国土交通省)   | 土地所有者         | 土地所有者         |
|              |        | 深江町(現、南島原市)    | 事業者(財源負担+管理者) | 事業者(財源負担+管理者) |
|              |        | シルバー人材センター     | -             | 一部委託管理        |
| 木籠メモリアルパーク   | (3)(7) | 中越メモリアル回廊推進協議会 | -             | 財源のみ負担        |
|              |        | 中越防災安全推進機構     | -             | 管理者           |
|              |        | 山古志木籠ふるさとの会    | -             | 一部委託管理        |

修繕費については、平成 22 年度は 1,972,000 円が、平成 24 年度は 3,897,000 円が計上され、その額が 2 年で約 2 倍程度に増額していることがわかる。これは被災家屋が風化していくにつれて、なるべく被災当時の状況に留めるために必要な修繕内容や、安全に保存するための修繕内容が年々増えてきているからだと考えられる。具体的な修繕内容について、平成 23 年度は、家屋の屋根の破損修繕、平成 24 年度は、非常用照明灯の修繕、テント棟ドアの取替え修繕があげられる。また指定管理者である南島原市地域振興部へのヒアリング調査の結果によると、災害遺構への定期的な修繕を行っているものの、年月が経つにつれて、遺構そのものの劣化が避けられないことが把握できた。

次に、旧大野木場小学校被災校舎の維持管理の内容について述べていく。保存されている被災校舎は、土石流被災家屋保存公園と同様に、噴火の終息から 4 年後に公開された。被災校舎は建設省によって買収され公有地となっているものの、特に施設の位置づけはなされていない。

被災校舎の修繕については、公開前に保存対策工事が実施されている。公開後は、保存対策にかかる追跡調査を平成 20 年度に実施したところ、経年劣化していることが判明した。そのため、平成 22 年度に、屋上防水やバルコニー防水等の各種修繕工事を実施している。その後も、平成 24 年度には保存対策の追跡調査を実施している。管理者である南島原市地域振興部へのヒアリング調査の結果によると、土石流被災家屋保存公園と同様に、年月が経過するにつれて修繕工事が増えていき、修繕費も増額していく見込みである一方で、遺構そのものの劣化が避けられないことが伺えた。

最後に、木籠メモリアルパークの維持管理の内容について述べていく。保存されている水没した家屋は、震災から約 7 年経過して公開された。建設費は約 300 万円かかり、その費用は新潟県中越地震復興基金によって賄われた。管理者によって災害遺構の直接的に維持管理されていないため、修繕費用も発生していない。管理者によるヒアリング調査の結果によると、災害遺構の直接的な

表-3 3施設の災害遺構の概要と維持管理の内容

|         | 雲仙普賢岳噴火災害（1991年11月～1995年3月）の災害遺構  |  | 中越地震（2004年10月23日）の災害遺構  |
|---------|---|--|---|
|         | 土石流被災家屋保存公園   | 旧大野木場小学校被災校舎   | 木籠メモリアルパーク  |
| 公開開始日   | ・1999年4月1日<br>[出典：(4)]  | ・1999年4月30日<br>[出典：(4)]  | ・2011年10月21日<br>[出典：(4)]  |
| 入場者数    | ・458,355人（平成23年度）<br>[出典：(6)]   | ・不明  | ・不明   |
| 面積      | ・約62,000㎡<br>[出典：(4)]   | ・被災校舎敷地面積：約4,050㎡<br>・建築面積：約600㎡<br>[出典：(4)]   | ・約600㎡<br>[出典：(4)]  |
| 施設の位置づけ | ・「土石流被災家屋保存公園条例」に基づく公園<br>[出典：(2)(6)]   | ・公有地（国土交通省、南島原市）<br>[出典：(1)(2)(8)]   | ・公有地（国土交通省）<br>（「中越メモリアル回廊」の1公園）<br>[出典：(3)]  |
| 展示内容    | ・1999年8月8日～14日に発生した土石流で被災した家屋11棟（そのうち、1棟は移築、8棟はテント内に保存）<br>[出典：(4)]             | ・1999年9月15日に発生した火砕流により全焼した小学校校舎<br>[出典：(4)]  | ・地震による地滑りで河道閉塞となって水没した被災家屋8棟<br>[出典：(3)(4)]   |
| 事業主体    | ・長崎県<br>[出典：(6)]  | ・国土交通省、長崎県、南島原市<br>[出典：(1)(2)(8)]  | ・中越メモリアル回廊推進協議会<br>[出典：(3)(7)]  |
| 管理者     | ・南島原市（指定管理者）<br>[出典：(6)]  | ・被災校舎の所有は国土交通省、実際の維持管理は南島原市<br>[出典：(1)(2)(8)]  | ・公益社団法人中越防災安全推進機構（「山古志木籠ふるさとの会」に管理の一部を委託）<br>[出典：(3)]                                     |
| 建設費     | ・480,000,000円<br>[出典：(2)]   | ・調査費：765,700,000円（強度や耐久性等の調査を実施）<br>・保存工事費：45,375,000円<br>[出典：(5)]                         | ・約300万円（新潟県中越地震復興基金によるもの）<br>[出典：(3)]   |
| 管理・修繕費  | ・3,897,000円（平成24年度）<br>・2,327,000円（平成23年度）<br>・1,972,000円（平成22年度）<br>[出典：(6)]   | ・859,000円（平成24年度）<br>・0円（平成23年度）<br>・21,183,000円（平成22年度）<br>[出典：(5)]                       | ・災害遺構の直接的な修繕費用は発生していない<br>・周辺部の委託管理料は非公開<br>[出典：(3)]                                      |
| 修繕内容    | [平成24年度]<br>・非常照明等の設置修繕<br>・テントドアの取り換え修繕<br>[平成23年度]<br>・家屋の屋根の破損修繕<br>[出典：(6)] | [平成22年度]<br>・屋上防水<br>・鋼材処理<br>・浮き注入<br>・防鳥ネット保護（平成21年度・平成24年度は保存対策にかかる追跡調査を実施）<br>[出典：(5)] | ・バルコニー防水<br>・コンクリート保護<br>・ひび割れ処理<br>・災害遺構については直接的な修繕はなし<br>・周辺部の管理と除草は地元団体に委託<br>[出典：(3)] |
| 隣接施設    | ・道の駅「みずなし本陣ふかえ」<br>[出典：(2)(4)]  | ・大野木場砂防監視所（砂防みらい館）<br>[出典：(2)(4)]  | ・郷見庵<br>[出典：(3)(4)]   |

維持管理がなされていないため、中越地震から8年経過したことにより、冬季の積雪や土砂の堆積によって被災家屋の自然劣化が助長され、家屋の消滅も懸念されている。そのため、遺構が消滅しないように、維持管理の財源確保やその主体を明確に位置づける必要があると考える。また、木籠メモリアルパークには、郷見庵という直売所機能を有する地域の集会所が隣接し、地元で採れた野菜や土産物が販売されている。この施設は、日常的な管理を委託している「山古志木籠ふるさとの会」があわせて管理を行っている。このことで、土石流被災家屋保存公園と同様に、災害遺構の見学者が、地元の食材や土産物を購入することができ、地域活性化にも寄与していると考えられる。

#### 4. 終章

本稿では、雲仙普賢岳噴火災害・中越地震の被災地で保存されている災害遺構を事例として、維持管理の観点から災害遺構の実態を把握していった。以下に、本稿で得られた知見をまとめるとともに、災害遺構の保存や維持管理していく上での提言を述べる。

・災害遺構を維持管理する費用を見ると、定期的に修繕している土石流被災家屋保存公園、旧大野木場小学校被災校舎は、年月が経過するにつれて維持管理費が増額する傾向にあることが示唆された。土石流被災家屋保存公園は2年で約2倍の費用が計上され、旧大野木場小学校被災校舎についても、維持管理費が今後増額していくことが伺えた。しかし、この2施設ともに、維持管理を行っていても、災害遺構の劣化は避けられず、災害当時の様子を伝えることが難しいという課題がある。そのため、単に遺構のみを保存・維持管理するのではなく、災害当時の様子から現在までの時系列による変化を記録した写真や映像も合わせて展示することで、より鮮明に災害当時の様子や記憶を伝えることができると考えられる。その一方で、木籠メモリアルパークについては、遺構への直接的な維持管理がなされていないため、遺構に対する維持管理費は計上されないものの、自然劣化が助長され、消滅が懸念されていることが把握できた。そのため、遺構が消滅しないように、早急に維持管理の財源確保やその主体を位置づける必要がある。

・災害遺構の維持管理に関わる主体を見ると、3施設ともに、行政機関や所有者等の複数の主体が役割分担を行って、保存や維持管理に関わっていることが把握できた。このことで、一つの主体に全てを強いることなく、費用負担者や管理者等の役割分担ができるため、保存への可能性がより広がると考えられる。また、地域の多様な主体が災害遺構の維持管理を行っていることから、災害遺構を残すことは、単に災害の記憶を残すことや、教訓を伝える意味だけでなく、多様な主体に関わる地域資源になり得る可能性があることが示唆された。

・土石流被災家屋保存公園と木籠メモリアルパークは、道の駅や直売所等の施設とあわせて管理していることが把握できた。このことで、遺構の見学者が土産物等を購入することができるため、地域活性化につながると考えられる。また、遺構の見学者による土産物や飲食等の売り上げを維持管理や修繕費に充てられることも期待できる。そのため、道の駅と一体となって遺構を保存・管理するといったように、地域活性化を見据えた保存・管理の方法を検討する必要がある。

・災害遺構が公開されるまでの経緯を見ると、3施設ともに保存に向けての合意だけでなく、維持管理の方法や整備計画について、地域住民、行政機関、土地の所有者等の関係機関と長い間協議した上で公開に至っていることが把握できた。このことで、合意形成だけでなく、保存に向けての方法や課題等について時間をかけて協議しながら課題を克服してきたことで、公開につながったと考えられる。そのため、保存が検討されている災害遺構については、早急に保存か撤去の答えを出さずに、関係者間で合意形成を重ねると同時に、保存方法や維持管理を見据えた議論を長期的に重ねていく必要がある。

・維持管理を行っている2施設は、ジオパークのジオサイトに指定されていることが、維持管理の後押しになっていることが示唆された。そのため、ジオパークに認定されない地域でも災害遺構がスムーズに維持管理できるよう、維持管理のための制度を設ける必要があるだろう。

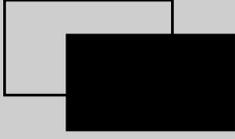
今後の研究課題として、東日本大震災で災害遺構の保存について具体的な検討がなされていることから、東日本大震災の被災地における災害遺構の保存経緯や維持管理の方法とその課題について把握していく必要があると考える。また、語り部や写真等による災害記憶の継承と比較した上で、災害遺構を通して記憶を伝える方法についても検討する必要があると考える。

#### 謝辞

ヒアリング調査にご協力いただいた、国土交通省雲仙復興事務所の目床順司氏、道の駅みずなし本陣ふかえ支配人の川田喜伝治氏、公益財団法人中越防災安全推進機構研究員の山崎麻里子氏には多大なご協力を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 女川町(2011), 「女川町復興計画」
- 2) 3.11 震災伝承研究会(2012), 「3・11 震災伝承研究会」第一次報告」
- 3) 島川崇(2012), 「地域資源として被災者からも受け入れられる被災惨禍の保存手法の考察」, 都市計画論文集, No.47, Vol.3, pp.619-624.
- 4) 穎原澄子(2005), 「原爆ドーム保存の過程に関する考察 1945 年ー1952 年」, 日本建築学会計画系論文集, 第 596 号, P.229-234
- 5) 高橋和夫, 木村拓郎, 西村寛史, 藤井真(1999), 「雲仙普賢岳の火砕流で被災した大野木場小学校被災校舎保存構想の策定に関する調査」, 土木学会論文集, No.612, I-46, pp.359-371
- 6) 石川宏之(2010), 「防災教育に災害遺構を活かすためのミュージアム活動によるエリアマネジメントに関する研究」, 日本建築学会東北支部研究報告集, 計画系, No.73, pp.195-200
- 7) 清水肇, 高橋弘治(2009), 「歴史的環境における「負の遺産」のあり方について」, 都市計画論文集, No.44, Vol.3, pp.835-840
- 8) 井出明(2012), 「日本におけるダークツーリズム研究の可能性」, 進化経済学会論集, No.16
- 9) 国土交通省都市局公園・緑地景觀課(2012), 「東日本大震災に係る鎮魂及び復興の象徴となる都市公園のあり方検討業務報告書」
- 10) 南島原市(2010-2012), 「平成 22 年度～平成 24 年度・事務事業評価調査：旧大野木場小学校被災校舎保存対策事業」
- 11) 南島原市(2011-2012), 「平成 23 年度～平成 24 年度・事務事業評価調査：土石流被災家屋保存公園事業」
- 12) 長岡市・小千谷市・川口町(2007), 「災害メモリアル拠点整備基本構想」



# 付録





焼け跡（神戸市長田区）  
兵庫県企画管理部知事室広報課 寄贈写真

# 記憶を残す、 見せる、 伝える。



5時46分で止まった掛時計  
鈴木邦宏氏 寄贈

## 開設 10周年記念

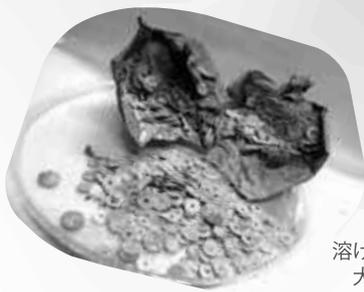
### 人と防災未来センター 災害ミュージアム研究塾 2012

人と防災未来センターでは、設立以来10年にわたり、国内外の災害・防災の資料収集や展示に取り組んでいる施設・団体とのネットワークづくりを通じ、災害の資料展示のあり方を探ってきました。

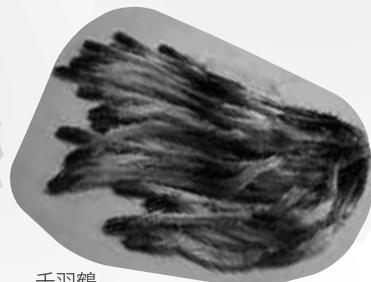
これまでの取り組みの成果を皆様と共有するため、6回シリーズの公開セミナーを開催します。

全国各地のミュージアムから講師をお招きし、災害の記憶の伝え方や、それにおけるミュージアムの役割について学びます。

災害資料の展示・活用の最前線を学ぶ貴重な機会です。ぜひご参加ください。



溶けた硬貨（缶入）  
大貫計一氏 寄贈



千羽鶴  
ポर्टアイランド第2仮設住宅ふれあいセンター 寄贈

※人と防災未来センターに  
寄贈されている震災資料より

主催：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 研究部・資料室

## 開設から10年、 ひとぼう資料室のこれまでと、これから。

参加費無料  
先着順

お申し込み方法は  
裏面参照

シリーズ  
第1回

theme 『阪神・淡路大震災 震災資料の17年』

presenter 人と防災未来センター 震災資料専門員 高野 尚子

阪神・淡路大震災（1995年）から17年、そして、人と防災未来センターの設立から10年を迎えました。センター資料室では、震災資料専門員が震災資料の収集・整理・保存・活用を行ってきました。この10年間の節目を機に、活動の成果を振り返り報告するとともに、現代に起きた災害の記憶・資料を保存収集することの意義と、しかしながらそこに生じ、これから解決しなければならない様々な課題についても提議しながら、これからの10年、そしてさらに未来へと、阪神・淡路の経験を語り継いでいく上で大切なことを、みなさんと一緒に考えたいと思います。

日時：2012年 10月20日（土）14:00～16:00

会場：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター ガイダンスルーム1

## 今後の予定

# 人と防災未来センター 災害ミュージアム研究塾 2012



### シリーズ 第2回

11月18日(日) 14:00～16:00

『被災経験継承のために—複数の展示拠点とネットワークづくり—』

長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」 研究員 山崎 麻里子 氏

新潟県中越地震(2004年)のメモリアル拠点として点在する4施設・3公園を指す名称『中越メモリアル回廊』。これらの拠点をめぐることによって災害の全体像を把握するという、地域全体を災害ミュージアム化させた事例です。その一施設から研究員をお迎えし、ひとつの施設に展示を集約して見せる人と防災未来センターとは異なる記憶継承の試みを紹介していただき、ミュージアム施設の場所と、地域との関係について考えます。

### シリーズ 第3回

12月16日(日) 14:00～16:00

『東日本大震災の文化財レスキューと展示活動』

遠野文化センター調査研究課 主査兼学芸員 前川 さおり 氏  
震災からよみがえった東北の文化財展実行委員 若月 憲夫 氏

東日本大震災では、複数の博物館・図書館などが被害を受け、収蔵されていた多数の文化財も被害を受けました。そのようななか、被災した文化財を一刻も早く救出するためのレスキュー活動が行われました。また、その成果と重要性を伝えるための企画展もいち早く開催されました。文化財レスキュー活動に携わり、この展示を企画・運営したお二人をお招きし、その経験と展示に込められた想いについてお話しいただきます。また、講演終了後に、講師による「震災からよみがえった東北の文化財展」(12/11～1/27 人と防災未来センター東館にて実施予定)の展示解説を行います。

### 第4回

2013年  
1月

『地域を拠点とした被災経験の継承—阪神・淡路大震災と東日本大震災—』

神戸市立地域人材支援センター、大槌震災復興館

### 第5回

2月

『長田区役所職員による阪神・淡路大震災の記憶継承の取り組み』

人・街・ながた震災資料室

### 第6回

3月

『地域の歴史・自然そして災害の記憶を語り継ぐ—雲仙岳災害記念館・ジオパークの挑戦—』

雲仙岳災害記念館・島原半島ジオパーク

※今後の予定については変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。

## お申し込み お問い合わせ

### ■お申込方法

WEB サイト <http://www.hitobou.com/kenkyu/> または E-mail [hitobou-shiryoushitsu@dri.ne.jp](mailto:hitobou-shiryoushitsu@dri.ne.jp) からお申込みください。  
下記の参加申込書により、FAX 078-262-5062 にてのお申し込みも可能です。

### ■お問い合わせ

公益財団法人ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 人と防災未来センター 資料室 担当：石原・高森  
Tel：078-262-5058 Fax：078-262-5062 〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

## 人と防災未来センター 災害ミュージアム研究塾 2012 参加申込書

|             |  |  |
|-------------|--|--|
| ふりがな<br>お名前 |  | <b>参加日程</b><br>※参加を希望する日程に全てチェックしてください。<br>第4回以降は後日募集をいたします。<br><input type="checkbox"/> 第1回：10月20日(土)<br><input type="checkbox"/> 第2回：11月18日(日)<br><input type="checkbox"/> 第3回：12月16日(日) |
| 所属          |  |  |
| 電話番号        |  |  |
| E-mail      |  |  |

申し込み受付後、受付確認および詳細を FAX またはメールにて返送します。  
お申し込み後、5日以上経過しても返信が届かない場合は、お手数ですが、お問い合わせ先までご連絡ください。

# 記憶を残す、 見せる、 伝える。



焼け跡（神戸市長田区）  
兵庫県企画管理部知事室広報課 寄贈写真

5時46分で止まった掛時計  
鈴木邦宏氏 寄贈



開設 10 周年記念

人と防災未来センター

災害ミュージアム研究塾

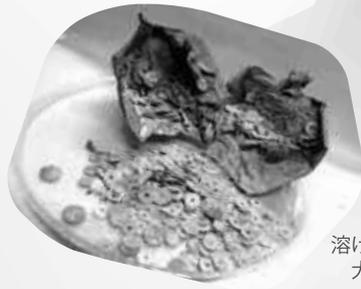
2012 年度 後期シリーズ

人と防災未来センターでは、設立以来10年にわたり、国内外の災害・防災の資料収集や展示に取り組んでいる施設・団体とのネットワークづくりを通し、災害の資料展示のあり方を探ってきました。

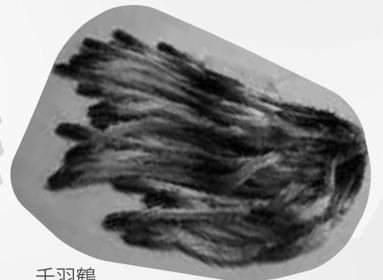
これまでの取り組みの成果を皆様と共有するための公開セミナー、6回シリーズの後半をご案内します。

全国各地のミュージアムから講師をお招きし、災害の記憶の伝え方や、それにおけるミュージアムの役割について学びます。

災害資料の展示・活用の最前線を学ぶ貴重な機会です。ぜひご参加ください。



溶けた硬貨（缶入）  
大貫計一氏 寄贈



千羽鶴  
ポर्टアイランド第2仮設住宅ふれあいセンター 寄贈

※人と防災未来センターに  
寄贈されている震災資料より

主催：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 研究部・資料室

お申し込み  
お問い合わせ

■お申込方法

WEB サイト <http://www.hitobou.com/kenkyu/> または E-mail [hitobou-shiryoushitsu@dri.ne.jp](mailto:hitobou-shiryoushitsu@dri.ne.jp) からお申込みください。  
下記の参加申込書により、FAX 078-262-5062 にてのお申し込みも可能です。

■お問い合わせ

公益財団法人ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 人と防災未来センター 資料室 担当：石原・高森  
Tel：078-262-5058 Fax：078-262-5062 〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2

## 人と防災未来センター 災害ミュージアム研究塾 参加申込書

|             |  |   |
|-------------|--|---|
| ふりがな<br>お名前 |  | <b>参加日程</b><br>※参加を希望する日程に全てチェックしてください。<br><br><input type="checkbox"/> 第4回：1月26日（土）<br><input type="checkbox"/> 第5回：2月10日（日）<br><input type="checkbox"/> 第6回：3月9日（土） |
| 所属          |  |   |
| 電話番号        |  |   |
| E-mail      |  |   |

申し込み受付後、受付確認および詳細を FAX またはメールにて返送します。  
お申し込み後、5日以上経過しても返信が届かない場合は、お手数ですが、お問い合わせ先までご連絡ください。

# 人と防災未来センター 災害ミュージアム研究塾 2012年度 後期シリーズ

会場：西館1階  
ガイダンスルーム1  
参加費無料・先着順

シリーズ  
第4回

2013年1月26日(土) 13:00 ~ 16:00 \*13:00からの開催です!

## 地域を拠点とした被災経験の継承 — 阪神・淡路大震災と東日本大震災 —

講師 おらが大槌夢広場

野田北部・たかとり震災資料室 河合節二氏  
神戸市立地域人材支援センター 内屋敷保氏

阪神・淡路大震災の教訓を発信する団体のなかには、震災の記憶がよみがえるような、地域にとってかけがえのない場所で活動を行っている団体があります。東日本大震災においても、地元に着目した活動を行いながら、震災資料の保存・活用に取り組んでいる団体があります。

この回では、阪神・淡路大震災の教訓を発信を行っている二つの団体のスタッフをお招きし、震災当時にボランティア拠点や避難所となった場所で、震災を伝える活動について、活動の内容と想いをお話しいたします。また、東日本大震災の被災地からは、岩手県大槌町に新たに設置された NPO「おらが大槌夢広場」のスタッフをお招きし、仮設の復興館で資料展示や、リアルタイムで町内外に情報を発信する「大槌新聞」の取り組みをご紹介します。



シリーズ  
第5回

2013年2月10日(日) 14:00 ~ 16:00

## 長田区役所職員による阪神・淡路大震災の記憶継承の取り組み — 人・街・ながた震災資料室の事例 —

講師 人・街・ながた震災資料室

神戸市長田区は阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた地域のひとつです。長田区役所の職員は、経験したことのない災害対応業務に日夜従事しました。そのような経験を風化させず、後世へ活かすために、区役所内に職員のボランティアの運営による「人・街・ながた震災資料室」が開設されました。地域密着型の震災資料の収集・保存と、手作りの展示を企画・運営しているスタッフをお招きし、区役所職員のボランティアならではの経験と、地域に密着した震災資料に込められた想いについてお話しいたします。



シリーズ  
第6回

2013年3月9日(土) 14:00 ~ 16:00

## 災害記念館からジオミュージアムへ

講師 雲仙岳災害記念館副館長,

第5回ジオパーク国際ユネスコ会議事務局 杉本伸一氏

雲仙岳災害記念館は、1990年から95年の雲仙普賢岳の噴火活動を中心に、自然の脅威と災害の教訓を後世に残すために設立されました。見て触れて、リアルに体感しながら、わかりやすく学習できる日本で唯一の「火山体験ミュージアム」です。また、島原半島世界ジオパークの認定に伴い、ジオパークの中核施設としても位置付けられています。雲仙岳災害記念館は、開館から10年を迎え、災害の展示施設から、防災教育やジオパークを推進するためのジオミュージアムへと生まれ変わろうとしています。このような雲仙岳災害記念館の今日までの取り組みと、今後の展望を紹介します。

また、今回の公開セミナーシリーズの総括として、各界の発表内容を通して見えてきた災害ミュージアムの役割や、災害の記憶の伝え方について、参加者のみなさんと考えます。



阪神・淡路大震災記念  
人と防災未来センター

TEL 078-262-5050 FAX 078-262-5055 〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2 観覧案内

[www.dri.ne.jp](http://www.dri.ne.jp)



[www.facebook.com/hitobou.kikaku](https://www.facebook.com/hitobou.kikaku)



@hitobou\_event

お申し込み方法は表面にあります。  
ファックスのフォームもあります。  
ご利用ください!

<http://www.hitobou.com/kenkyu/>  
災害ミュージアム研究塾 特設サイト

DRI 調査研究レポート 2012-03  
DRI Technical Report Series [vol.29]

**災害の記憶・記録に関する調査報告**  
— 災害ミュージアム研究塾 —

Survey Report about Records and Memories of Disaster  
— Disaster Museum Research Study Group —

発行

2013年3月

阪神・淡路大震災記念 **人と防災未来センター**

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2  
tel (078)262-5060 fax (078)262-5082  
<http://www.dri.ne.jp>

印刷

**商工印刷株式会社**

〒651-0094 神戸市中央区琴ノ緒町4丁目5-7  
tel (078)221-1113

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

---

<http://www.dri.ne.jp>